扇状地に広がる人々の営み
―黒部市と入善町の調査記録―

地域社会の文化人類学的調査 31

2022

富山大学人文学部文化人類学研究室

は　じ　め　に

富山大学文化人類学研究室（富山大学人文学部社会文化コース文化人類学分野）では、1979 年の研究室創設以来、教育の一環として、北陸の一地域を選んで調査実習を行い、その成果を報告書『地域社会の文化人類学的調査』にまとめてきました。「文化人類学実習」という授業名で長く行ってきましたが、数年前に「文化人類学フィールド演習」という名称に変更されました。それでも 2 年間（4 半期）かけて積み上げ式に行っていく、その授業の基本はかわっていません。報告書はその成果であり、本報告書で第 31 巻になります。

この報告書では、昨年度の魚津市に続き、同じく富山県東部（呉東）に位置する黒部市と入善町をとりあげています。15 年前に発行した第 17 巻（『黒部市・入善町調査記録』）以来となります。本研究室でとりあげる調査地域は、県西部（呉西）が多い傾向がありましたが、ここ数年で偏りがほぼ解消されました。

すでに述べましたが、この授業は 2 年間かけて行っていくものです。学生たちが文化人類学分野に進み、この授業が始まったのは、彼らが 2 年生になった 2020 年春でした。ただご存じの通り、その直前からコロナ禍が始まり、全国の大学は授業どころではなくなりました。富山大学でも 2 週間授業開始が遅れたばかりでなく、4 月下旬の授業開始も遠隔方式での異例のスタートとなりました。対面での授業に戻ったのは 6 月、そして学外の調査候補地訪問を始められたのは 7 月になってからでした。訪れた候補地のなかから調査地域を黒部市と入善町に決めたのは 11 月でした。その後、各人の調査テーマを探しに年内に数回訪れましたが、例年より予備調査の回数は少なかったことは否めません。またその途中も何度かオンラインになったりしました。

2021 年度となり、学生たちもテーマを定め、本調査をいよいよ開始したかったのですが、またオンラインでのスタートとなりました。大型連休明けからフィールドワークを再開し、その後、おおむね順調に推移しましたが、例年であればフィールドワークの総仕上げを行う夏合宿は第 5 波の到来により実施できず、日帰りの調査を夏休みの前後にし、また 10 月の授業で補足調査に行く程度でした。その後、学生たちは調べたことをまとめ、本報告書を作成しましたが、いまだコロナ禍は続いています（これを記している 2022 年 2 月 3 日には一日の全国の新規感染者数が 10 万人を突破しました）。コロナ禍のなかで始まり、コロナ禍のなかで幕を閉じた実習（フィールド演習）となりました。調査中、例年にはないさまざまな緊張を強いられ、また学生たち自身も感染の不安を多少とも抱えながらの調査となり、容易でなかったことはまちがいありません。そうしたこともあり全員ではありませんが、9 名の学生たちは最後までやり遂げ、全体としては例年と比べて何ら遜色ない報告書を作成することができました。この困難な状況下で粘り強く頑張ったとほめてあげたいと思います。

とりあげたテーマはさまざまですが、いずれも学生たちがフィールドワークのなかから見出してきたものです。学生たちは現地の方々と出会い話を聞くことで、教室での授業のものとはまた別の驚きやインスピレーションを得つつ問いを育てていきます。今回も、学生たちがそうした本来の学びをする過程に伴走することができました。これはフィールドワーク教育の醍醐味といえるでしょう。またこれまでレポート数枚しか書いたことがなかった学生たちが自身の関心に従って調べたことをしっかりした報告文にまとめてくれました。指導に際して教員は何度も学生の原稿に目を通し、不明瞭な文章などないかチェックしてきました。1 月に学生たちはお世話になった地元の方に原稿を見ていただき、間違いがないか確認していただきました。つたない点はまだ多々あるかと思いますが、寛大に見ていただけると幸甚です。なお、不十分な点については指導する私たちに責任があることをあらかじめお伝えいたします。忌憚のないご批判・ご助言をお寄せいただければと思います。

本報告書は各章のタイトルはもちろん、報告書のタイトルや章立て、表紙など、いずれも学生たちが話し合って決めたものです。教員は議論を聞きながら意見を述べることはあっても、学生たちが判断して決定していきました。そうした意味で本報告書は学生たちの手作りのものといえます。彼らにとって学生時代のいい思い出になることでしょう。またそれに加えて本報告書が地域の活動を記録した資料的な価値をいずれもつことがあれば、研究室のスタッフとしてそれ以上の喜びはありません。

最後になりましたが、このたびの調査は数多くの地元の方々のご助力があってはじめて可能になりました。それぞれの学生がお世話になった方々のお名前は各章末の謝辞に記してありますが、この報告書はコロナ禍の困難ななか、皆様の多大なご理解・ご協力があってできたものです。誠にありがとうございました。

2022 年 2 月

富山大学人文学部　藤本　武（主担当）
野澤豊一（副担当）

追記

紙媒体の報告書は発行部数・頒布先ともに限られていますが、ここ 10 年あまりの実習報告書は富山大学学術情報リポジトリより閲覧可能です。関心のある方は「地域社会の文化人類学的調査」でご検索ください。

目次

はじめに（藤本武／野澤豊一）

地域概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第 1 部　信仰と文化を支える人々

第 1 章　下立地区の 6 月 21 日の民俗行事―御影様迎えと愛本姫社祭り―
（大畑萌夏）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31

第 2 章　じんじん祭りの変遷と祭りを支える人々の思い（橋本啓）・・・・・・・・・・・61

第 2 部　食文化をつくり、伝える人々

第 3 章　宇奈月町の伝統食であるトチの実について―内山地区に焦点を当てて―
（小川萌世）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・79

第 4 章　入善町における「食」を通じた地域おこし（笹川愛海）・・・・・・・・・・・101

第 5 章　黒部市の二組の若手農家の実態とこれから（小林愛奈）・・・・・・・・・・・129

第 3 部　移り変わる街とそこに暮らす人々

第 6 章　三日市商店街の変化と住民の思い（髙田玲）・・・・・・・・・・・・・・・・153

第 7 章　入善町の今と昔―駅前商店街と大型商売の形態と変遷―（栗田夏鈴）・・・・179

第 8 章　黒部市老人クラブ連合会の現状（大坪咲月）・・・・・・・・・・・・・・・・199

第 9 章　パッシブタウンの今―内の広がり、外の広がり―（臼木悠也）・・・・・・・217

地域概要

1. 自然・地理・気候

1-1. 黒部市

黒部市は、富山県北東部に位置しており、面積は 427.96 ㎢である（図 1)。北から東にかけて入善町・朝日町・長野県と境界をなし、南から西にかけて魚津市・上市町・立山町と接しており、富山県の約 10%の面積を占めている。

黒部市の地形は、北アルプスから富山湾まで約 3,000ｍの標高差があり、高山帯から低山帯、さらに黒部川の広大な扇状地、富山湾沿岸部など変化に富んでいる。

年間平均気温は 14 度、年間降水量は平野部で 2,277㎜、山岳部で 4,000㎜ 以上と、日本屈指の多雨多雪地帯となっている。

平成 18（2006）年に旧黒部市と旧宇奈月町が合併し、現在の黒部市となった。地区の総数は 16 で、生地（いくじ）・石田・田家・村椿・大布施・三日市・前沢・荻生・若栗・東布施・宇奈月・内山・音沢・愛本・下立・浦山である（図 2)。

図１　黒部市と入善町の位置（黒部市ホームページの図をもとに作成）

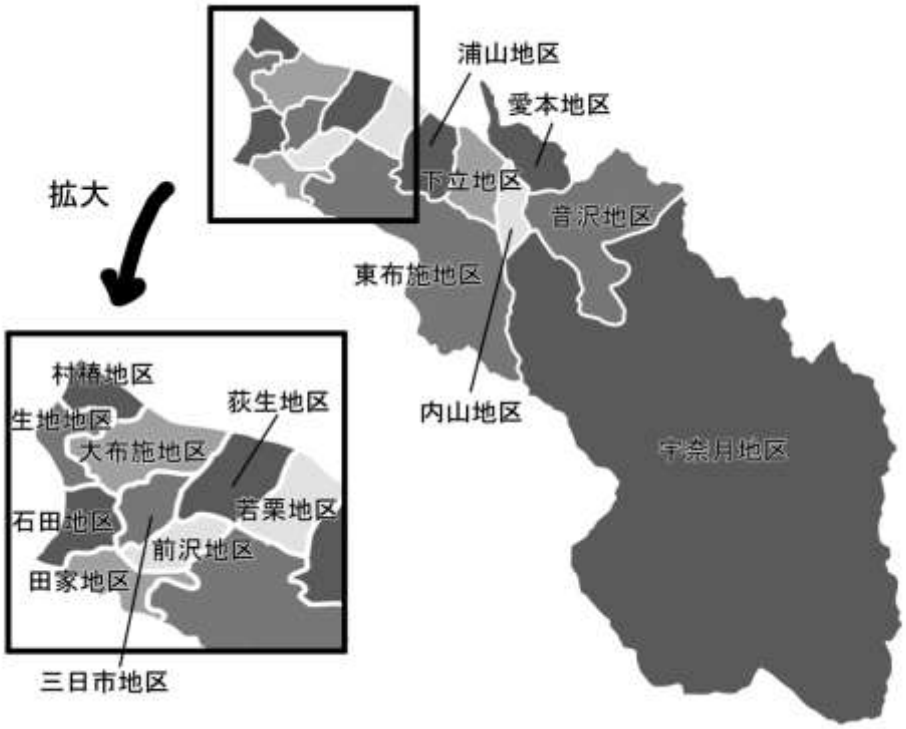


図２　黒部市の地区分布（「国勢調査町丁・字等境界データセット」より作成）

表１　各地区の名称と主な施設・特徴

地区名	主な施設や特徴
生地地区	清水、生地漁港
石田地区	石田浜海水浴場
田家地区	黒部市立田家公民館(中山間活性化センター)
村椿地区	黒部市立村椿公民館
大布施地区	黒部市立大布施公民館(大布施農村研修館)
三日市地区	三日市商店街、黒部市民会館
前沢地区	前沢ガーデン　桜花園(YKK株式会社)
荻生地区	黒部市農村景観活用交流センター「荻生の館」
若栗地区	黒部市立若栗公民館(若栗交流センター)
東布施地区	布施川、七夕流し・ニブ流し
宇奈月地区	宇奈月温泉、トロッコ、宇奈月国際会館・セレネ
内山地区	内山のとちの森
音沢地区	宇奈月ダム
愛本地区	ウラジロガシ林
下立地区	うなづき遊学館、大理石(オニックス・マーブル)
浦山地区	月訪の桜、浦山寺蔵遺跡

（黒部市ホームページ「公共施設一覧」より作成）

北アルプス中央部の鷲羽岳に源を発する黒部川は、八千八谷といわれる多くの渓流をあわせながら、富山湾へと続いている。高低差4,000mを一気に駆けくだり、日本で最も深いＶ字型の黒部峡谷を作り上げた。谷の深さは、最大で 1,500mある。黒部峡谷の沿線には、数多くの温泉が湧き出ている。黒薙、鐘釣、名剣、祖母谷などのほか、上流の奥山にも温泉が沸いている。

また、黒部川は典型的な扇状地としても有名であり、愛本を扇の要にして扇頂から扇端までの距離は13.5㎞、扇頂角は60度である。そして、その大地の地下深く浸透した清冽な水は、天然のミネラルウォーターとして海岸に近い湧水地帯に自噴し、人々の暮らしに使われている。

特に有名なのが、海岸沿いの町・生地を中心に数多く湧き出している「清水（しょうず）」である。生地地区には地域住民が管理する共同洗い場が10か所ある。また、各家庭の掘りぬき井戸が約600か所もあり、昭和60（1985）年には、黒部川扇状地湧水群として当時の環境庁から「全国名水百選」に選ばれた。

富山湾は沿岸から急激に深くなり、海底には多くの谷が入り組んだ「藍がめ」といわれる海底谷があり、そこに四季を通じて多くの魚が集まる。また黒部川によって、3,000m 級の北アルプスから豊かな大地の栄養分が海に届けられる。富山湾は「天然のいけす」と呼ばれ、黒部市の漁業は魚の種類が多様で、また一年を通じて操業できることから、富山湾で獲れるほとんどの魚種が水揚げされる。

写真１　黒部川扇状地（「国土交通省」より引用）

1-2. 入善町

入善町は、富山県北東部に位置しており総面積は 72.29 ㎢である（図 1）。東側で朝日町、南側で黒部市と隣り合っており、北から西には富山湾が広がり南には飛騨山脈が連なる。入善町は昭和 28（1953）年に 1 町 7 か村が合併、昭和 34（1959）年に舟見町と野中村が加わって、入善・上原・青木・飯野・小摺戸（こすりど）・新屋・椚山（くぬぎやま）・横山・舟見・野中の 10 地区となった（図 3）。

図 3　入善町の地区の名称と位置関係
（入善町 HP　居住用空き家情報『空き家バンク』をもとに作成）

表 2　各地区の名称と主な施設・特徴

地区名	主な施設や特徴
入善地区	水の小径(こみち)、コスモホール
上原地区	杉沢の沢スギ、沢スギ自然館
青木地区	青木公園
飯野地区	海洋深層水活用施設、入善漁港
小摺戸地区	小水力発電、舟小屋
新屋地区	下山八幡社、発電所美術館
椚山地区	チューリップ、椚山いろり館
横山地区	じょうのべま遺跡
舟見地区	舟川ダム、舟見城址館、七夕まつり
野中地区	野中地区交流センター

入善町は対馬海流の影響を受ける日本海気候区に属している。特徴は、冬季に西高東低の気圧配置になると北西の季節風が吹き、雪がよく降る。しかし気温が高いためみぞれとなる。冬の気温は安定しており、雪のまじった曇った天気が続くため日照時間は短い。

入善町は黒部川の右岸、扇状に広がる黒部川扇状地上に位置している。黒部川扇状地は、舟見・野中地区がある旧扇状地と入善町の大部分がある低い新扇状地に分かれている。この二つの扇状地の間を区切る崖を「はば」（河岸段丘崖）と呼ぶ。この「はば」の高さは愛本地区あたりで約 40mあり、新屋地区下山へ来ると約 20mになる。朝日町の窪田地区で二つの扇状地が重なりなくなる。

入善町の人々が利用する水は上水道ではなく、すべて地下水である。黒部川扇状地の地下を流れる伏流水は地下で浄化され昭和 60（1985）年全国名水百選にも選ばれている。水温は 1 年を通して約 13℃と冷たく、水質は硬い岩の間を流れるためカルシウムや鉄などの成分が少ないまろやかな軟水である。扇状地の湧き水には自然に湧き出る地表湧水と井戸による自噴水があり、家庭のあらゆる場面で利用される。

上原地区の吉原にある国の天然記念物「杉沢の沢スギ」は平地の湧水地域にスギが生育している日本唯一の場所である。沢スギは昭和 44（1969）年頃までは海岸沿いに約 45 ヘクタールあり建築材料や葉は燃料として利用されていた。かつての黒部川の浅い流れのあとに生育し石が多く根が深くならないため成長が遅く年輪が細かいのが特徴である。昭和 37（1962）年の圃場整備事業でほとんどが水田となり、現在では 2.7 ヘクタールのみが保存されている。

黒部川扇状地に位置する入善町は水との関わりも深く、圃場事業を行ったことで、県内有数の穀倉地帯となった。コシヒカリ、入善ジャンボ西瓜、チューリップなどの特産品があり、繊維、飲料などの豊かな水を必要とする企業が多く立地する。農工のバランス良く発展し、海洋深層水の活用なども進展している。

2. 歴史

2-1. 黒部市

まず、黒部市の名前の由来から説明する。黒部の地名の由来には諸説あり、「黒部は山高く、立の真黒に生い茂る日の目も見えない辺りを指して言う言葉から出た。」という説、「黒部奥山にはネズコと呼ばれる常緑針葉樹が生えており、この別名が黒檜（くろび）と言われていた為である。」という説、「アイヌ語のクンネベツ（黒い川・暗い川）またはクルベツ（魔の川）から来ている。」という説などある。

次に、黒部市の歴史について説明する。江戸時代の慶長 5（1600）年に関ケ原の合戦の功により、前田氏に加賀国・越中国・能登国の三国が与えられ、寛永 16（1639）年には加賀前

田家 3 代利常が富山藩と大聖寺藩に分封[1]し、3 藩に分立した。分封当初黒部地区の一部は富山藩に属していたが、万治 3（1660）年知行換え[2]が行われて加賀藩に属することになり、明治に至った。当時の出来事としては、江戸時代全般を通して開拓と洪水による荒廃を繰り返してきた黒部川流域に、寛文 2（1662）年には狭口相本に初めて橋（愛本橋）が架けられた。また、嘉永 4（1852）年、加賀藩は幕府の命に依り外国船警戒のために生地に「台場」を築いて海岸の防備に務めた。江戸時代の三日市は宿駅となっており、加賀藩などが参勤交代で利用した。また、三日市は北陸街道の上街道（愛本橋を利用して黒部川を渡るルート）と下街道（黒部川下流域を直接渡るルート）の分岐点でもあり、多くの人で賑わった。当時の名産品には、幕末からは新川地方一帯で盛んに生産された新川木綿があり、大阪や信州方面へも売られていた。

明治時代の新川郡は、明治 2（1869）年の版籍奉還から、加賀藩、金沢藩、金沢県、新川県、石川県、と行政区画が変遷していき、明治 16（1883）年に富山県に入る。明治 22（1889）年には市制・町村制が実施され、「三日市町」、「生地町」、「石田村」など 2 町 12 村が誕生した。

大正時代は、高岡市出身の薬学博士・高峰譲吉が黒部川の電源開発に目を付け、大正 6（1917）年にアメリカのアルミニウム会社と合併で東洋アルミナム株式会社を設立し、その電源を黒部川に求めた。その後、高峰の死去でアルミ生産事業から電力事業へと変更された。この東洋アルミナムによって、大正 12（1923）年には、北陸本線三日市駅から内山村桃原（現宇奈月）までの黒部鉄道（現在の富山地方鉄道株式会社黒部線）が開通した。黒部川の電源開発に伴って資材運搬用に計画されたが、沿線住民の強い要望で旅客列車に変更して敷設された。

昭和初期は、昭和 4（1929）年の世界恐慌の影響で、繭価や米価の暴落に繋がり「豊作飢饉」となり、農民が打撃を受けた。これに追い打ちをかけるように昭和 9（1934）年には不作となり、黒部川の大洪水も起こり苦しめられた。さらに昭和 10（1935）年には生地町で大火が起こった。水産加工場から出火し、強風に煽られて周辺の村にも広がり、損害額約 89 万円、被災者数は 1145 人となった。市町村の変化としては、まず昭和 15（1940）年に 1 町 7 村が合併して「桜井町」に、「浦山村」と「下立村」が合併して「東山村」になった。さらに昭和 28（1953）年には「桜井町」に「東布施村」が編入し、昭和 29（1954）年 4 月には「桜井町」と「生地町」が合併して「黒部市」に、同年 7 月には「東山村」、「内山村」、「愛本村」が合併して「宇奈月町」になった。

戦後、日本の急速な経済成長により、関西の電力不足が社会問題となったことから、昭和 31 年（1956 年）に関西電力が「くろよん」（黒部ダム・黒部川第四発電所）の建設を開始した。そして、昭和 38（1963）年 6 月 5 日に、171 名の犠牲がありながらも、7 年の歳月と 513

---

[1] 封地（大名の領地）を分け与えること。

[2] 支配地域の変更。

億円の工費、延べ１千万人の人手により完成した。その後、関西への電力供給を始め、日本の経済成長を支えた。黒部ダムは現在観光スポットにもなっている。

商業の側面では、経済の発展と技術革新の結果、商品が大量生産されるようになり、黒部市でも大型化店舗が進出してきた。スーパーマーケットとチェーン店の開店の他、地元中小商店も近隣市町の地域間競争に対応するため協調して参入し、寄合百貨店的な大型化店舗が出現してきた。黒部市における大規模小売店舗の出店を見ると、第 2 種[3]のうち寄合百貨店的なものでは、昭和 51（1976）年開店のスパー生地店（オレンジタウン）、スーパーでは昭和 63（1988）年開店のカーマホームセンター（元オスカー）黒部店などがあり、第１種[4]では昭和 57（1982）年開店の寄合百貨店的な黒部ショッピングセンター（メルシー）がある。

平成期には、平成 18（2006）年 3 月に「黒部市」と「宇奈月町」が合併して新しい「黒部市」が誕生した。平成 27（2015）年には北陸新幹線が開業し、黒部市の新市庁舎も完成した。現在、旧市庁舎跡地には図書館を核にした「くろべ市民交流センター（仮）」が建設される予定となっている。また、令和 4（2022）年春に、市内で最も交通量の多い国道 8 号線に面する交通の利便性に優れた場所において、「道の駅 KOKO くろべ」がオープン予定である。道路利用者に癒しと快適な休憩の場を提供するとともに、地元生産物等の販売や地元の素材を活かした飲食等の提供を通じて、地産地消の促進と地域ブランドの確立を図り、地域振興に貢献する拠点が目指されている。

2-2. 入善町

ついで、入善町の名前の由来について説明する。「入善」の由来は諸説ある。1 つ目は『入善宿由来記』（1786（天明 6）年）による。入善小太郎という人物が居住していた入善郷（これの起こりには触れられていない）に金沢村があり、加賀の城下である金沢と紛れるため下金沢に改め、そこから入前、入膳へと変遷したとされる説である。2 つ目は、仏教用語の「善に入る」や「入禅」などが転じたという説である。3 つ目は黒部市の新布施（にいふせ）地区「丹生瀬（にふせ）」や、大昔は「入善」を「ニフセ」と読んでいたのが、「ニフゼン」「ニュウゼン」に変化していったのではないかという説だ。

次に入善町の歴史について説明する。

入善町北方に位置する「じょうべのま遺跡」は、平安時代前期の初期荘園跡ではないかと推定されている。昭和 45（1970）年に圃場整備に伴い、17 回に渡って発掘調査が行われた。「西庄」の文字を記す墨書土器と、「丈部吉椎丸」名を示す木簡を検出したと言うことで歴史・考古学の分野で高い評価を得ており、昭和 54（1979）年 5 月 14 日には国指定の史跡となった。12 世紀前半には東大寺の荘園「入善荘」が成立し、やがてこの地は、椎名、上杉、

---

[3] 売り場面積 500 平方メートル以上 1500 平方メートル未満。

[4] 売り場面積 1500 平方メートル以上。

佐々、豊臣、前田氏らによって支配され、万治元（1658）年の領地換えでは全域が加賀藩領となった。

入善町を含む新川郡の行政は、加賀の前田氏によって廃藩まで行われていた。新川郡を所有するようになった前田利家は、天正 15（1587）年から魚津城に魚津城代を置き、軍事や政務を取り仕切らせた。魚津城が一国一城の令により寛永 15（1638）に廃城になると、寛永 17（1640）年からは魚津奉行を兼ねた郡代が派遣されるようになった。万治 3（1660）年に領地替えがなされ、魚津には郡代の他に町奉行が置かれるようになった。魚津以外の村々が郡奉行・改作奉行によって支配されているようになると、郡代の権限は小さくなった。

明治になり、版籍奉還により加賀藩は金沢藩となった。明治 2（1869）年になると、明治維新や北越戦争での農民の意識の変化やその年に発生した凶作が原因で、新川郡で「ばんどり騒動」と呼ばれる大規模な農民一揆が起こった。全国でも同様に一揆が多発しており、諸藩の弱体化が現れ、政府か統治権を一手にするために明治 4（1871）年に廃藩置県が行われた。廃藩置県により、入善町は新川県に属すこととなった。その後明治 9（1876）年に新川県は石川県に吸収合併された。しかし、現在でいうところの石川県側と富山県側の地形の違いによって富山県側は水害に悩まされており、河川の改修を早期に進めるため、入善町出身の米沢紋三郎らが中心となって分県運動を行い、明治 16（1883）年に石川県から分県して富山県となった。

町域の変遷は、明治 22（1889）年 3 月の町村制施行により、入善町・上原村・青木村・飯野村・小摺戸村・新屋村・椚山村・横山村となり、昭和 28（1959）年 10 月、この 1 町 7 村が合併して入善町が発足した。しかし、旧町村から引き継がれた赤字や、合併条件を履行するための投資的事業が強行されたため、莫大な赤字が発生した。さらに昭和 34 年 1 月に台地部に属する舟見町を編入合併し、人口 3 万人以上となし市制に踏み切ろうとしたが、地方自治法の改正により、市と認められる条件が人口 3 万人から 5 万人に引き上げられたため、市になることはなかった。

戦後の混乱の中で、未亡人や子供達を助けるために、昭和 22（1947）年に県下初の入善町母子寮が設置された。これまで産婦人科もなかった入善地域に昭和 34（1959）年に「入善町母子健康センター」が県下で初めて設立された。こうした功績から、昭和 36（1961）年に富山市で開かれた第五回全国母子衛生大会で「母子衛生優良市町村」として入善町が厚生大臣表彰を受けた。この影響で、全県市町村が母子健康センターを設けるようになった。

3. 人口

3-1. 黒部市

令和 3（2021）年 12 月末時点の黒部市の人口は 40,497 人、世帯数は 15,780 世帯である。性別人口は男性 19,959 人、女性 20,538 人となっている。以下に示すのは、大正 9（1920）年から平成 27（2015）年までの人口推移を表わしたグラフ（図 4）と、平成 27（2015）年

10 月 1 日時点の年齢別人口を表わしたグラフ（図 5）である。

図 4 を見ると、昭和 5（1930）年から昭和 10（1935）年にかけて人口が急激に増加し、昭和 10（1935）から昭和 15（1940）年にかけて急激に減少している。昭和 45（1970）年から緩やかに増加し始めた黒部市の人口は平成 2(1990)年にピークを迎え、当時の人口は 43,754 人である。しかし、平成 2（1990）年を境に、現在まで緩やかな減少傾向にある。

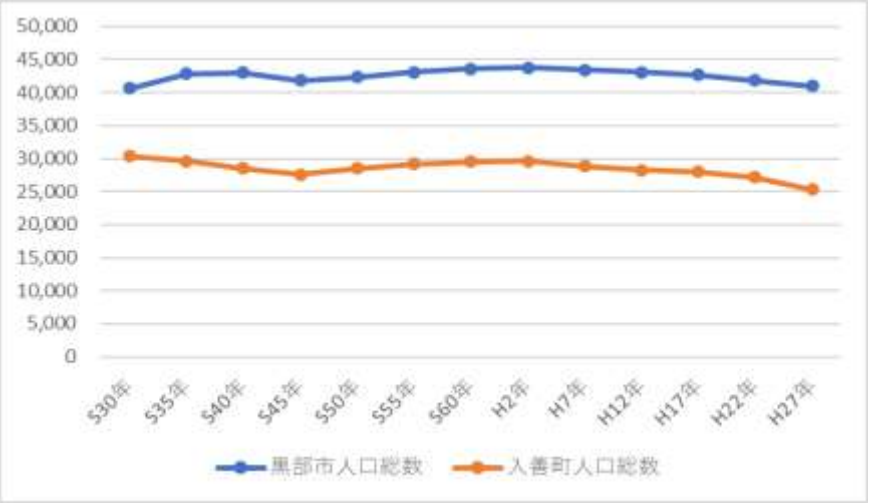


図 4　黒部市・入善町の人口推移

（統計黒部令和 2 年版および統計にゅうぜん令和元年版を元に作成）

黒部市の年少年齢人口は 5,117 人、生産年齢人口は 22,855 人、老齢人口は 12,266 人であり、老齢人口の割合は 30%を占めている。これは、WHO や国連が定める超高齢社会の基準である 21%を大きく超えており、黒部市は超高齢社会であると言える。

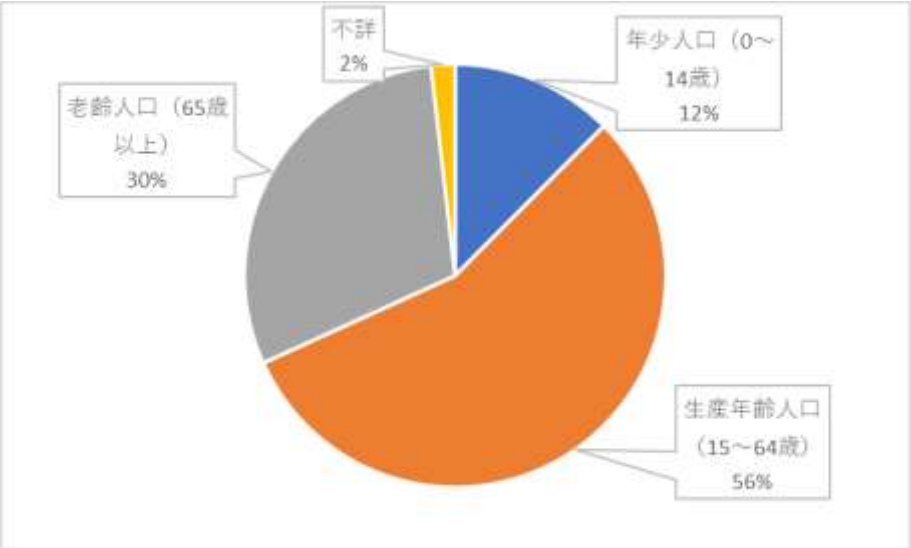


図 5　黒部市の年齢別人口割合

（平成 27 年 10 月 1 日時点：「統計黒部」令和 2 年版を元に作成）

次に示すのは、平成 22（2010）年から令和元（2019）年における黒部市の転入・転出者数を表わしたグラフである図 6)。直近 2 年では転出者数が転入者数を上回っているものの、過去には転入者数が転出者数を上回っている年が少なくない。平成 22（2010）年から令和元（2019）年の間に転入者数・転出者数はともに増加しており、人の移動は激しくなっている。

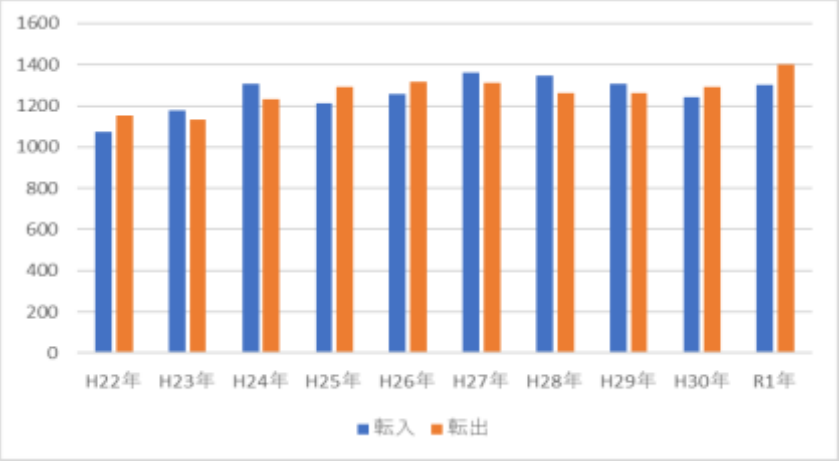


図 6　黒部市の転入・転出者

（令和元年 12 月 31 日時点：「統計黒部」令和 2 年版を元に作成）

次に示すのは、平成 4（1992）年から令和 3（2021）年の 30 年間の地区別人口の推移（図 7）を 10 年おきに表わした。平成 27（2015）年時点では、黒部市の中で最も人口が多い地区は大布施で 6,073 人、最も少ない地区は音沢で 222 人である。旧黒部市の地区は旧宇奈月町の地区に比べて全体的に人口が多く、また、海側の地区から山側の地区に向かうにしたがって人口が少なくなっていく傾向にある。地区ごとの人口推移を見ると、生地、村椿、三日市、東布施、愛本、下立、内山、音沢、宇奈月の人口は年々減少しているが、大布施、田家、浦山といった地域の人口は年々増加している。

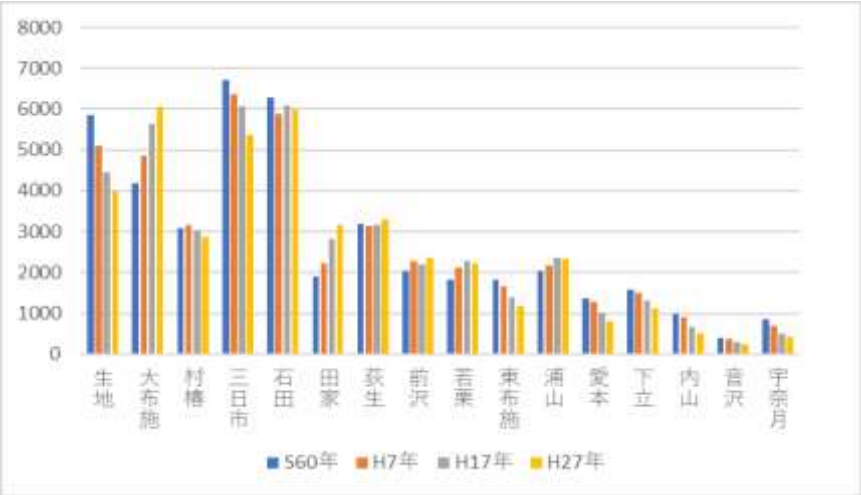


図 7　黒部市の地区別人口推移（黒部市ホームページを元に作成）

3-2. 入善町

令和 3（2021）年 12 月末時点の入善町全体の人口は 23,576 人、世帯数は 8,906 世帯である(外国人を含む)。性別人口は男性 11,325 人、女性 12,251 人となっている。過去 60 年分(昭和 30（1955）年から平成 27（2015）年)の入善町の人口推移を 5 年ごとグラフに表し、令和 3 年（2021）年度時点の年齢別人口(図 8)を以下に示した。

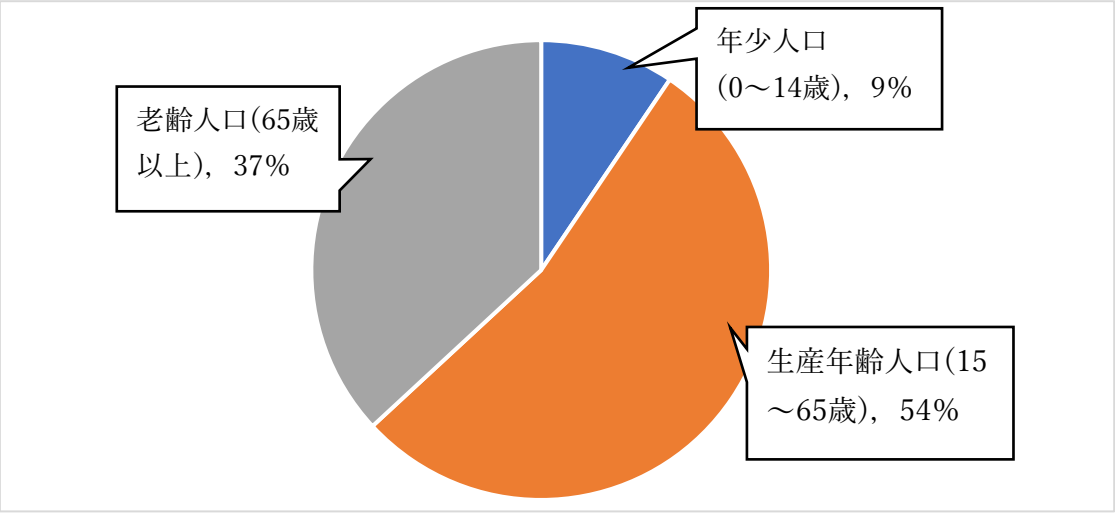


図 8　入善町の年齢別人口割合
（令和 3 年 12 月時点、入善町ホームページ「地区別・年齢別人口」より作成）

入善町の人口(図 4)は、昭和 45（1970）年から平成 2（1990）年までは増加傾向にあったが、平成 7（1995）年からは減少傾向にある。特に平成 20（2008）年頃を境に減少幅が大きくなっている。入善町の人口のピークは平成 2(1990)年の 29625 人であるが、令和 3(2021)年までのおよそ 30 年間で、6049 人減少している。

年齢別人口(図 8)をみると、令和 3 年時点では老齢人口(65 歳以上)が占める割合が 37%で、この数値は WHO や国連が定める定義によると超高齢社会に位置づけられる。一方で子供を産んで育てる世代の人口は減少しているため、今後さらに少子高齢化は進むと懸念される。

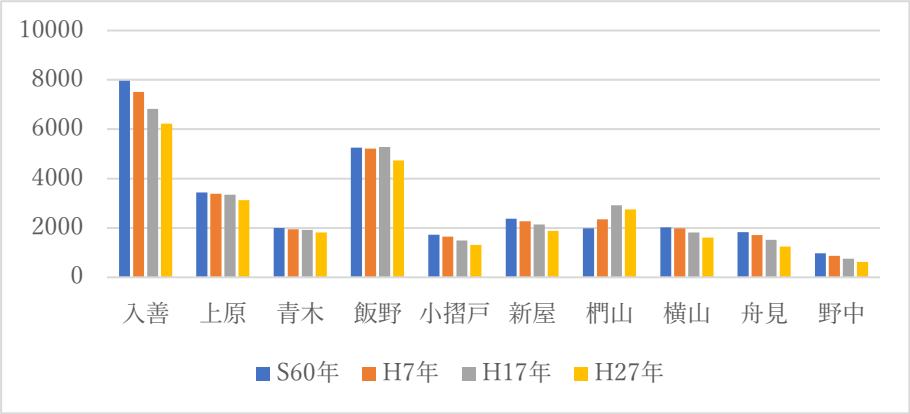


図 9　入善町の地区別人口推移(令和元年版「統計にゅうぜん」より作成)

次に、昭和 60（1985）年から平成 27（2015）年の 30 年間の地区別人口の推移(図 9)を、10 年おきに表した。このグラフから特に入善と飯野に人口が集中していることが読み取れる。また、どの地区も人口が減少傾向にあり、昭和 60（1985）年から平成 27（2015）年の 30 年間で入善、小摺戸、新屋、横山、舟見、野中の各地区では約 2～3 割の人口が減少している。しかしその一方で椚山地区は、昭和 60（1985）年から平成 17（2005）年にかけて、935 人増加していることもわかった。

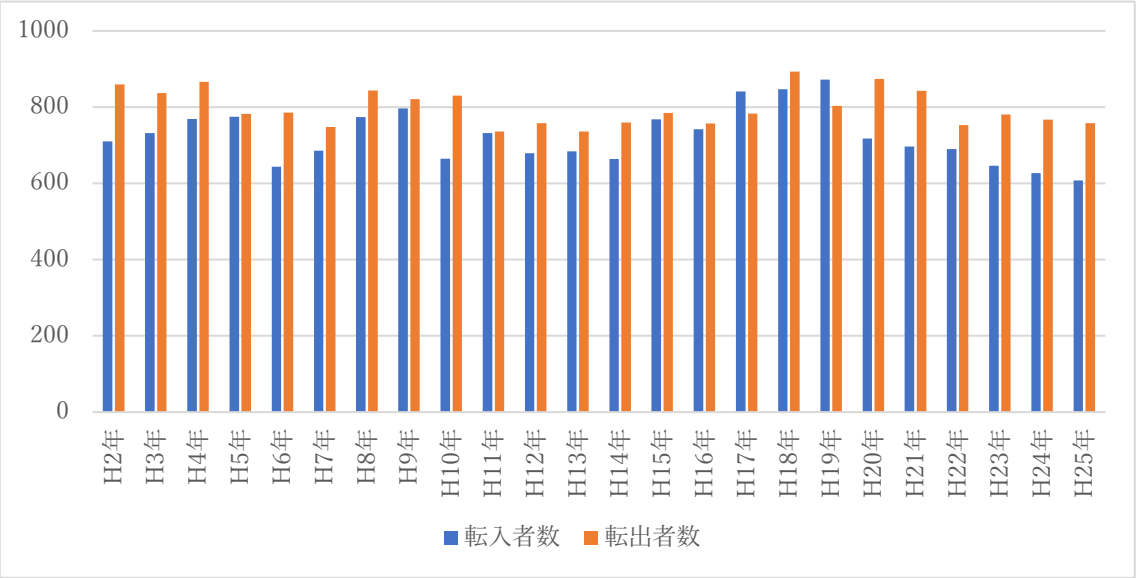


図 10　入善市の転入・転出者数(平成 27 年版「人口ビジョンにゅうぜん」より作成)

過去 23 年間の入善町における転入・転出者数(図 10)を見ると、入善町では平成 17(2005)年と平成 19（2007）年を除き、転出者が転入者を上回っている。転入者は、平成 14（2002）年あたりから増加傾向にあると思われたが、リーマンショック以降の平成 20（2008）年から再び減少が続き、近年は転入者数と転出者数の差が開く傾向にある。

平成 27 年度版人口ビジョンにゅうぜんを参照し、平成 17（2005）年から平成 26（2014）年の入善町と県内の他都市との移動状況をみると、富山市へ 136 人、魚津市へ 36 人の転出超過となっている。しかし、朝日町からは 68 人転入していた。次に県外との移動状況をみると、石川県や東京都、愛知県への転出者数が統計上多いとされている。県外への転出は大学進学に伴うものが多く占めていると考えられている。

4. 産業

4-1. 黒部市

平成 27（2015）年の黒部市の産業別就業人口の割合を示したのが図 11 である。就業人口

の総数は 20811 人となっている。割合では第 3 次産業が最も大きく約 52%。第 3 次産業のうち、サービス業[5]に就いている人は 3256 人で、次いで医療・福祉が 2494 人となっている。次いで第 2 次産業の割合が約 44%である。第２次産業の中では製造業の就業人口が最も多い。第 1 次産業の割合が最も低く約 4%である。第 1 次産業の就業人口は農業が 787 人、漁業水産養殖業が 54 人とあり、業種による差がある。

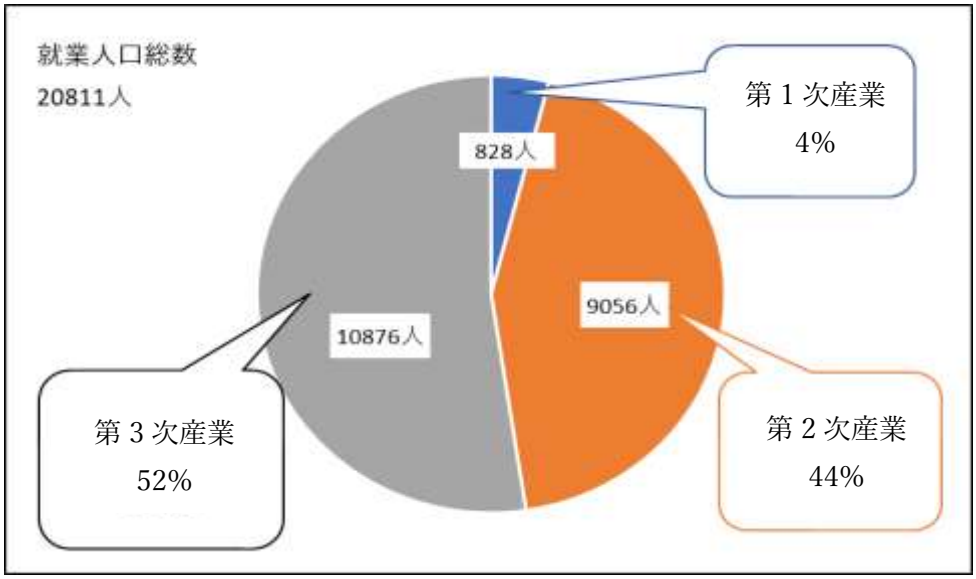


図 11　平成 27 年 10 月 1 日黒部市産業別就業数（令和 2 年版「統計黒部」をもとに作成）

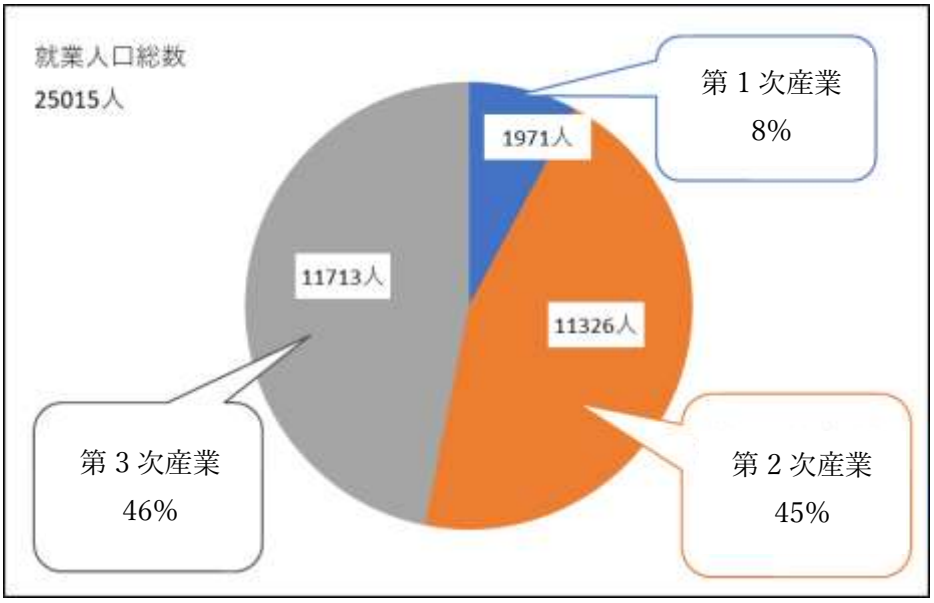


図 12　平成 7 年黒部市産業別就業数　（平成 7 年国勢調査「小地域集計」をもとに作成）

[5] 学術研究，専門・技術サービス業/宿泊業飲食サービス業/生活関連サービス業，娯楽業/複 合サービス事業/サービス業（他に分類されないもの）をまとめてサービス業とする。

図 12 では平成 7（1995）年の黒部市の産業人口割合[6]を示した。就業人口の総数は 25015 人である。平成 27（2015）年と異なり、第 3 次産業と第 2 次産業の割合が約 45%とほぼ同じである。また第 1 次産業の割合は平成 27（2015）年の２倍で、就業人口も 1000 人以上多かった。平成 27（2015）年と平成 7（1995）年を比較すると、20 年間で第 1 次産業の就業人口が減少し、第 3 次の就業人口が増加していることが見て取れる。また就業人口総数も 4000 人ほど減少している。

黒部市は愛本橋を扇頂とした扇状地である。黒部川からの水が地下水として流れ、黒部各地で湧水として地表に出てくる。黒部市は古来より扇状地や黒部川の水を活かした水田農業が盛んな土地であった。昭和 27（1952）年後半には流水客土事業[7]が行われたことで水稲の収穫高が著しく向上した。平成 19（2007）年にはブランド米「黒部米」が地域団体商標として認定された。生地地区では湧水を「清水（しょうず）」と呼び、昔から生活用水として利用してきた。産業でも利用され、生地の「皇国晴酒造（みくにはれしゅぞう）」では湧水を酒造りのための仕込み水に使われている。富山湾に面した黒部市には石田漁港、黒部漁港（かつては生地漁港と呼ばれていた）の２つの漁港がある。生地地区では北前船や北洋漁業の影響から北海道で採れた昆布の加工・販売が盛んである。

黒部駅近くの三日市地区には三日市大町商店街がある。また、黒部はファスナーなどの製造を行う YKK 株式会社の生産拠点でもある。黒部における YKK の事業は、魚津にあった YKK の前身である「吉田工業株式会社」が黒部市に移転し昭和 30（1955）年に黒部工業が稼働したことを起点としている。北陸新幹線の開業に合わせて平成 26（2014）年には本社機能の移転も行われた。

平成 27（2015）年に北陸新幹線の開通したことで宇奈月温泉などの従来は足の届きにくかった観光地に首都圏や海外の観光客を呼び込もうとする動きがある。

4-2. 入善町

平成 27（2015）年の入善町の産業別就業人口の割合を示したものが図 13 である。就業人口の総数は 13099 人となっている。割合では第 3 次産業が最も大きく約 52%。第 3 次産業のうちサービス業[8]に就いている人は 2040 人で、次いで医療・福祉が 1710 人となっている。次いで第 2 次産業の割合が約 41%である。第２次産業の中では製造業の就業人口が最も多い。第 1 次産業の割合が最も低く約 7%で、就業人口は農業・林業が 840 人、漁業が 43 人とあり、業種による差がある。

---

[6] 値は旧黒部市・旧宇奈月町の値の合算である。

[7] 流水客土は周辺台地の赤土を水と混合し用水路を通して水田に引き入れる工法で、昭和 26 年度から昭和 35 年度にかけて黒部川扇状地・小川扇状地の 5,522 ヘクタールで実施された。

[8] 学術研究，専門・技術サービス業/宿泊業飲食サービス業/生活関連サービス業，娯楽業/複 合サービス事業/サービス業（他に分類されないもの）をまとめてサービス業とする。

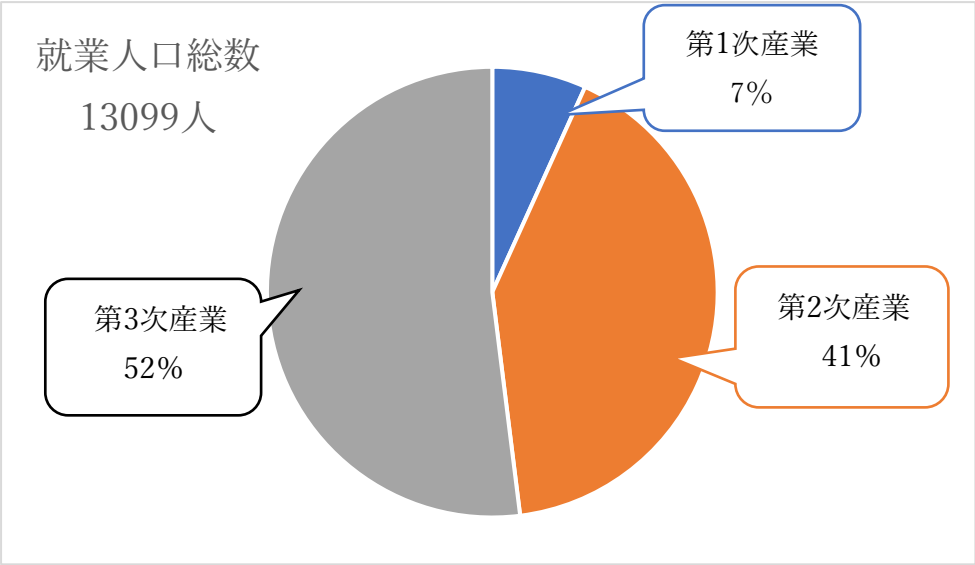


図 13　平成 27 年度入善町産業別就業者数（令和元年版「統計にゅうぜん」より作成）

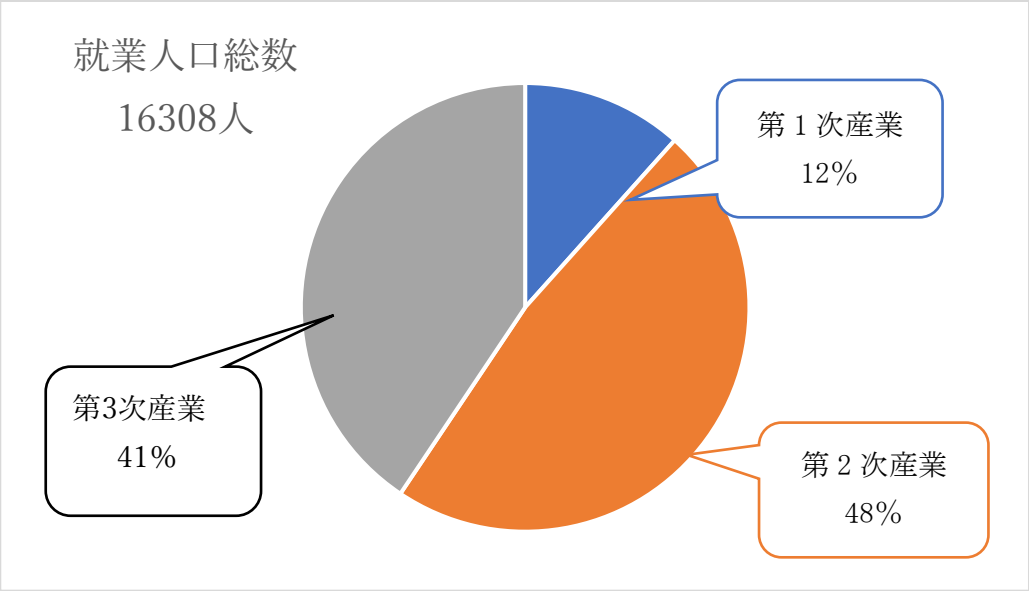


図 14　平成 7 年入善町産業別就業者数　（平成 26 年版「統計にゅうぜん」より作成）

その 20 年前の平成 7（1995）年の入善町の産業人口割合を示したものが図 14 である。就業人口の総数は 16308 人である。平成 27（2015）年と異なり、第 2 次産業の割合が約 48%で最も高い。また第 1 次産業の割合は平成 27 年のほぼ 2 倍の 12%であり、就業人口も 1000 人以上多かった。平成 27 年（2015）と平成 7 年を比較すると、20 年間で第 1 次産業の就業人口が減少し、第 3 次の就業人口が増加していることがわかる。また就業人口総数も 3209 人減少している。

入善町は黒部川の水資源に恵まれており、自然条件を活かした特産品が数多くある。また、地下数百メートルにわたり蓄えられた地下水は、人々の生活用水や産業に活用されている。入善町の町の花であるチューリップの球根生産もその一つである。入善町では昭和 12（1937）年に、水田の裏作としてチューリップ球根の生産が本格的に始まった。戦時中に生産が一時中断したこともあったが、昭和 22（1947）年に砺波から球根を導入し、栽培を再開。黒部川扇状地は、砂質の土壌で水はけが良く、冬になると雪が積もることによって温度と湿度が一定に保たれ球根を霜の被害から守ることができるため、球根栽培の好適地であった。
そのため、昭和 35（1960）年前後には生産者が 300 人を超えた。平成 9（1997）年には球根を出荷するだけでなく観賞用としても楽しんでもらうために、「第 1 回にゅうぜんフラワーロード」が開催され、令和 3（2021）年で 25 年目を迎えた。面積も本数も日本最大級で、あたり一面に色とりどりのチューリップが広がる絶景は訪れる人々に感動を与えている。また、現在(2021 年)は約 20 戸弱の農家が年間約 300 万球の球根などを生産しており、新品種もこれまでに数多くこの入善町で誕生している。厳しい検査を通過した高品種の球根は、日本各地の市場で出荷されている。

他にも、コシヒカリ米や日本一大きいとされる入善ジャンボ西瓜などの特産品も、名水を活かして栽培されている。

日本海の水深 384 メートルの深さから汲み上げる海洋深層水も、清浄性や低温安定性、富栄養性などの特性を活かし、新たな資源として産業に活用されている。「入善海洋深層水パーク」の周辺には日本で初めて深層水での養殖に成功したアワビの養殖施設がある。全国から集まった旬の牡蠣も、深層水を使用する世界初の特許技術で浄化されることによって、町内の飲食店で生食でも安全に味わうことができる。近年は健康意識の向上に伴い、ミネラルを多く含む海洋深層水が消費者に注目され、食品だけでなく医療品など様々な分野で商品化が進んでいる。

5. 祭りとイベント

5-1. 黒部市

ここでは、黒部市で行われている祭りやイベントをまとめていく。黒部市では以下のような様々な年中行事が行われる。本報告書の調査をおこなった令和 3(2021)年は令和 2(2022)年に引き続き、新型コロナウイルスの影響を受け、中止となったイベントが多いが、令和元（2019）年の年間スケジュールなども参考にして、表にまとめた。

表 3　黒部市の主な祭りとイベント

日にち	イベント名
1 月 1 日	黒部元旦健康スポーツマラソン大会
2 月第 1 土曜日	宇奈月温泉　雪のカーニバル
2 月中旬	スノーフェスタ
4 月上旬	宮野山桜まつり
〃	桜花園　桜まつり
4 月中旬	SPA マラソン in うなづき
4 月 21 日	明日の稚児舞
4 月下旬	花まつりマルシェ
5 月 5 日	黒部峡谷こどもフェスタ
5 月 18 日	宇奈月平和の像観音祭
5 月下旬土曜日	生地まち歩きフェスティバル
〃	黒部名水マラソン
6 月 21 日	愛本姫社祭り
6 月 24、25 日	じんじん祭り
7 月下旬（最終土曜日）	生地えびすまつり
7 月下旬（最終日曜日）	中陣のニブ流し
8 月上旬	黒部納涼楽市
8 月 7 日	尾山の七夕流し
8 月中旬	石田納涼夏祭り
10 月 5 日	愛本新用水天満宮松明祭り
10 月 26、27 日	生地のたいまつ祭り
11 月上旬	布施谷祭り
1～4 月の第 2 週までの毎週土曜日	宇奈月温泉　雪上花火大会
毎月第 3 日曜日（8 月は第 2 土曜日）	いくじ魚まつり朝市

（「黒部・宇奈月温泉観光局公式サイト」より一部修正のうえ、作成）

「明日（あけび）の稚児舞」は黒部市宇奈月町明日の高野山真言宗法福寺に伝わる郷土舞楽であり、国の無形民俗文化財に指定されている。毎年４月の観音会では、境内に仮設された舞台で稚児舞を奉じている。稚児は 4 月初めから法福寺に集まり稽古するが、稽古の間は魚や肉を食べない・土を踏まないよう下駄を履くなど厳しい定めがある。舞は笛と太鼓で奏楽され、矛の舞・太平楽・臨河の舞・万歳楽・千秋楽の 5 曲が演じられる。

「黒部名水マラソン」は昭和 59 年（1984）年 5 月 22 日、YKK の創立 50 周年記念式典に

出席の第 39 代アメリカ合衆国大統領ジミー・カーター閣下の来市を記念し、宮野運動公園陸上競技場をスタート・ゴールに設定し、ジョギング大会を開催したことがきっかけのマラソンである。黒部市宇奈月温泉駅、生地の湧水群、黒部川の水辺公園などを通過するマラソンであり、名水を利用した給水所があり、終了後には名水ポークやズワイガニを利用した鍋や名水だんご、ます寿司を味わうことができる。

写真 2　生地えびす祭りの様子（「富山県観光公式サイト」より引用）

「生地えびす祭り」は黒部市生地で開催されており、漁業者たちが大漁と海難無事故を海の神に祈るための祭りとなっている。生地えびす祭りでは、本祭りの前夜に黒部市生地阿弥陀堂浜の「西の宮」に安置されているえびす、大黒の像を満艦飾にした漁船に乗せ、供船に前後を守られながら、笛や太鼓の音とともににぎやかに黒部市生地地区の海を一周する。以前は毎年 5 月と 8 月の年 2 回行われていたが、昭和 26（1951）年からは年 1 回となっている。

「中陣のニブ流し」とは黒部市の中陣集落の前を流れる尾山大谷川で行われる水の祭典である。夕方になると、子供たちは麦藁で作った舟をもって公民館に集まり、青年会が地区の住民に、ニブ流しの歌や笛・太鼓を鳴らして参加を呼び掛ける。みんなが揃ったところで、舟を掲げた子供たちは列を組んで青年団の笛や太鼓の囃子に合わせて地区内を練り歩く。地区内を一巡したところで、最後に尾山大谷川の淀んだ場所に入り、舟を浮かべて淀みのところを行き来して楽しむ。この行事は罪や穢れ、悪霊を舟に乗せて地区から追放しようとして行う行事だといわれている。

「尾山の七夕流し」とは黒部市尾山地区で 100 年以上途絶えることなく行われている。紙で作られた姉様人形、杉葉舟や行灯などを小川に流しやる行事であり、尾山地区の七夕流しは、七夕行事の禊払いとしての性格や形態を知る上で貴重な行事となっている。

「生地のたいまつ祭り」とは黒部市生地の新治神社で行われる祭りである。毎年 10 月 26

日の夜から神社境内でたいまつ約 300 本に火をつけ神様を待ち、えびす、大黒を乗せた屋形、御神輿が子供たちの祭囃子の演奏のなか町を練り歩き神社に到着する。午前 0 時過ぎになると 42 歳厄年の男性が神輿を担ぎ境内の炎と煙の中を一気に駆け抜けお宮に入る祭りとなっている。この祭りの起源は、暴風に襲われた漁船が遭難しかけた時に、闇夜の海上で一筋の明かり（新治神社のご神火と言われている）を見つけ、それを頼りに生地浜へ無事生還することができたという伝承が由来となっている。

また、毎月第 3 日曜日（8 月は第 2 日曜日）には、黒部市水産地方卸売市場で朝市が開催され、地元の生地沖で獲れた新鮮な魚介類を味わうことができ、干物や寿司、お菓子なども購入することができる。朝市で提供される「たら汁定食」は大変人気であり、数量限定となっている。

5-2. 入善町

ここでは、入善町で行われている祭りやイベントをまとめる。入善町では以下のような様々な年中行事が行われる。本報告書の調査を行なった令和 3 年（2021）年は、にゅうぜんフラワーロードやまつりんぴっくなどが行われたが、新屋大磐祭りや墓ノ木タイマツまつりなどは新型コロナウイルスの影響を受けて中止になった。

表 4　入善町の主な年中行事

日にち	イベント名
1 月第 2 日曜日	塞の神祭り
2 月 9 日、11 月 15 日	舟見山神社 山神様祭り
2 月中旬の土・日	入善ラーメンまつり
4 月上旬～中旬	入善桜まつり
4 月上旬～下旬	にゅうぜんフラワーロード
4 月下旬	芦崎えびす祭り
6 月 18、19、20 日	観音祭り
7 月 1 日	下山八幡社滝開き
7 月第 1 土曜日・日曜日	舟見七夕まつり
7 月 24 日	新屋大磐祭り
8 月第 1 金・土・日	入善ふるさと七夕まつり
8 月 26 日・27 日	吉原恵比須祭り
10 月	まつりんぴっく
10 月の第 2 土曜日	墓ノ木タイマツ祭り
10 月中旬	秋祭り奉納獅子舞

（「入善町の公式ホームページ」「入善町観光物産協会」より一部修正のうえ、作成）

以下では、その一部について概略を示す。

「塞の神祭り」は、上原地区の上野邑町で行われる厄払いや無病息災、五穀豊穣を祈願する小正月の火祭りの行事で、国の重要無形民俗文化財に指定されている。かつては小正月にあたる1月15日に行われていたが、令和3年（2021）年現在は1月第2日曜日に催行されている。早朝より、子どもたちが、家々を訪問して正月飾りを集め、菓子や米などをもらう。このときオヤカタと呼ばれる最年長の子どもはデクという男女一対の木製の人形をもち、他の子どもは玄関先で塞の神の唄を歌う。子どもたちが各家を回っている間、地区の境では竹と藁で円錐形の作り物が作られる。子どもたちが回り終えた後、デクを正月飾りとともに作り物の中に納めて火をつける。このとき竹の節のはじける音が大きいほど災厄が払われるという。火が下火になると、燃え残ったデクを探し出して完全に灰になるまで燃やす。

「にゅうぜんフラワーロード」は毎年4月上旬から下旬にかけて開催される。入善町の特産品であり、町の花でもあるチューリップが自然の中で絨毯のように広がるこのイベントは、平成9（1997）年に第1回目が開催され、令和3年（2021）年で25回目となった。令和3年（2021）年には、約7.3ヘクタールの面積に300万本のチューリップ他、球根の美しい花々が咲き並び、その面積・本数は国内最大級となっている。色とりどりの鮮やかなチューリップが残雪の北アルプスを背景に広がる光景を楽しむことができ、会場に併設されているフラワーショップでは、入善町で産まれた新品種のチューリップをはじめとする様々な花や苗等を購入することもできる。

写真3　にゅうぜんフラワーロード（笹川愛海撮影）

「舟見七夕まつり」は、7月第1土曜日・日曜日に開催される。町内の若衆は、七夕の数日前から上・中・下町の七夕宿に集まり、歴史上の人物や世情を移した主人公などを模した人形をつくり、町内の店先に並べて披露する。祭り当日は、家ごとに七夕竹が立ち、成長を願う子供の名を記した短冊や、夏野菜を描いたもの、赤提灯、5色のテープ等をつるす。夜

になると提灯に灯が入り町並みがいっそう華やぐ。土曜日の夜は、花火も打ち上げられ、他町村からの人出も加わって町通りは賑わう。昔は、7 日の夜の 12 時を過ぎると七夕飾りや人形を大八車に積んで愛本橋のたもとへ運び、燃やして黒部川へ流した。人々の罪や汚れを人形に託して焼くことで身が清められるという願いからであり、また七夕笹はお盆の精霊がよりつくという意味を持つ。この二つの習俗が合致したのが七夕まつりであり、舟見七夕まつりは本来の意義をよく残している。

「新屋大磐祭り」は、毎年 7 月 24 日の夜に、新屋の住吉社の境内で行われる。主催は住吉社で、協賛は新屋商工会である。かつては県内の至る所で行われていた石盤持ちだが、現在も続いているのはここだけである。伝承によると、約 400 年前に上杉謙信に攻め込まれた際に町や神社仏閣が焼き払われたが、住吉社境内にあった神石が近くの池に投げ込まると、ようやく火が消えた。その後、村人がその神石を引き上げ、農作物を守る厄よけ神として崇め、力試しの石にしたという。石盤持ちに用いられる盤持石は、約 120kg の青石と約 95kg の御影石で、どこまで持ち上げられるのかによって出場者に景品が出る。昔の男は、これを担がなければ一人前でないといわれ、ほとんどの人が担いだというが、力仕事が無くなった今日、御影石でも担げる者が少なくなった。祭り当日には、最初に神主が除蝗祭[9]を行い、その際に磐持石も一緒にお祓いしてもらう。そのあとに磐持ち大会やお楽しみ抽選会、盆踊り、住吉太鼓の披露があり、それら全てを含めて大磐祭りと呼んでいる。

写真 4　大磐祭りで使う盤持石（笹川愛海撮影）

「まつりんぴっく」は、秋の入善町中心市街地の活性化を目的として、20 年以上にわたって毎年 10 月に行われているイベントである。地元の飲食店がカレーを提供する「カレー

[9] 害虫による作物の被害がなく、豊作を祈願する行事。

まつり」がメインとなっており、その他にも地元企業が自社製品やサービスを紹介する産業展示や親子ワークショップなどがある。

ここまで、入善町の主な年中行事を取り上げてきたが、それ以外にも様々なイベントがある。入善町では、街中を中心とする飲食店で入善海洋深層水で浄化されたカキを味わうことができる。街中に店舗が集中することから、「にゅうぜん街中オイスターロード」と呼ばれ、町民をはじめ多くの人で賑わっている。また、日ごろのご愛顧への感謝と入善海洋深層水に親しんでもらうため、毎月第 3 日曜日は深層水活用施設にて深層水を無料で分水する「深層水無料デー」となっている。このように、入善町では魅力的な祭りやイベントがたくさん開催されている。

5. 観光名所

5-1. 黒部市

ここでは黒部市の観光名所をいくつか紹介していく。

「黒部峡谷トロッコ電車」とは日本一深いＶ字峡谷である黒部峡谷を走る、トロッコ電車である。このトロッコ電車は元々、電源開発に伴うダムの建築資材や作業員を運ぶための鉄道として誕生した経緯を持ち、昭和 28（1953）年から地方鉄道業法から許可を得て「黒部鉄道」としての営業を開始した。トロッコは普通客車、リラックス客車、特別客車の三つに分かれる。始発の宇奈月駅から終点の欅平（けやきだいら）駅まで全長 20.1 ㎞であり 41 のトンネルと 21 の橋を通り、片道約 1 時間 20 分かけて走る。

写真 5　黒部峡谷トロッコ電車（「黒部・宇奈月温泉観光局　公式サイト」より引用）

「魚の駅生地」は黒部市生地にある、魚介類の直販施設である。設立のきっかけは黒部市の漁業者が、漁業の高齢化と後継者不足の問題を憂慮したことがきっかけで、漁業者自らが魚や漁業の情報を発信し、「もっと魚を食べてもらいたい」という思いから平成 16（2004）

年にオープンした。魚の駅「生地」は「できたて館」と「とれたて館」の二棟からなり、できたて館では、新鮮な魚介を用いた料理を味わうことができ、とれたて館では鮮魚や水産加工品を購入することができる。

写真 6　　魚の駅「生地」(「黒部・宇奈月温泉観光局　公式サイト」より引用)

「くろべ牧場まきばの風」とは黒部市宇奈月町にある牧場で、標高 240～425mの高台に位置しているため、牧場からは黒部川扇状地や富山湾、能登半島までを一望することができる。くろべ牧場には約 250 頭の乳牛やポニー、羊やウサギが飼育されている。また、牧場では地元で生産された新鮮な肉や野菜を使ったバーベキューや牧場スイーツを楽しむことができる。

写真 7　くろべ牧場まきばの風(「黒部・宇奈月温泉観光局　公式サイト」より引用)

5-2. 入善町

ここでは、入善町の観光名所をいくつか紹介していく。

国指定天然記念物である「杉沢の沢スギ」とは、成長した木の枝が雪の重みで地表に着地し、そこから根が出て、一株から何本もの幹ができるという伏条現象と呼ばれる珍しい生育形態が特徴の杉林である。広さは2.7haあり、この一帯は清澄な水が湧き出ている。扇状地の末端部でこのような自然林が残っているのは全国でここだけであり、観察・学習施設も整っている。

写真8　杉沢の沢スギ（「入善町ホームページ」より引用）

写真9　下山芸術の森・発電所美術館（「入善町ホームページ」より引用）

「下山芸術の森・発電所美術館」とは、大正14（1925）年に建設された赤レンガの水力発電所を美術館として再生したユニークな建築物である。内部には当時の発電機が残され、展

示空間もひとつの作品とした独特の展覧会を開催している。また、アトリエ、彫刻広場、展望台、レストランがオープンし、国内外のアート作品や芸術家とのふれ合いの場所となっている。自然と調和し、長い歳月を経た歴史建造物として、国の登録有形文化財に指定されている。

「舟見城址館」とは、中世の頃にあった山城をイメージし、舟見山山頂の自然公園内に建てられたお城の形の資料館である。歴史をテーマとした展示会などが催されており、天守閣からは黒部川扇状地と日本海が一望できる。

写真 10　舟見城址館（小川萌世撮影）

参考文献

黒部市史編纂委員会、1992 年『黒部市史　歴史民俗編』黒部市
黒部市、1982 年『黒部市誌』大和学芸図書株式会社
入善町史編纂室、1990 年『入善町史 通史編』
入善町誌編纂委員会、1967 年『入善町誌』
入善町教育センター、1984 年『わたしたちの入善町　地理編』

参考 WEB サイト

黒部市「市の概要」
<https://www.city.kurobe.toyama.jp/category/page.aspx?servno=3256>
(2022/1/23 閲覧)
国勢調査町丁・字等別境界データセット「富山県黒部市」
<https://geoshape.ex.nii.ac.jp/ka/resource/16207.html>
(2022/1/29 閲覧)

国土交通省「日本の川―北陸－黒部川」
<https://www.mlit.go.jp/river/toukei_chousa/kasen/jiten/nihon_kawa/0409_kurobe/0409_kurobe_01.html>
(2022/1/23 閲覧)
入善町　居住用空き家情報「空き家バンク」町勢要覧 2013（写真情報誌編）
<https://www.town.nyuzen.toyama.jp/>
(2021/12/30 閲覧)
関西電力「世紀の大工事～くろよん建設ヒストリー」
<https://www.kepco.co.jp/brand/kuroyon_history/>
(2022/１/16 閲覧)
入善町「入善町/概要」
<https://www.town.nyuzen.toyama.jp/gyosei/chosei/gaiyo/2/2629.html>
(2021/12/23 閲覧)
入善町 統計にゅうぜん「令和元年版統計にゅうぜん」
<https://www.town.nyuzen.toyama.jp/material/files/group/2/toukeinyuuzen19.Pdf>
(2022/01/07 閲覧)
黒部市「産業」
<https://www.city.kurobe.toyama.jp/category/page.aspx?prev=1&servno=3261>
(2022/01/10 閲覧)
四十物昆布情報館「四十物こんぶ」
<http://www.aimono.com/info/index.html#part02>
(2022/01/10 閲覧)
JA くろべ　黒部米「特産品」
<http://www.ja-kurobe.jp/4speciality/rice-kurobe/>
(2022/01/10 閲覧)
皇国晴酒造「幻の瀧」
<http://www.mabotaki.co.jp/?lang=ja>
(2022/01/10 閲覧)
長谷川豊　「コンパクトシティと公共交通――富山県黒部市のまちづくりを事例として――」　富山大学人文学部平成 30 年度卒業論文
<https://www.hmt.u-toyama.ac.jp/socio/lab/sotsuron/18/hasegawa.pdf>
(2022/01/10 閲覧)
国勢調査 平成７年国勢調査　小地域集計 「小地域集計 16 富山県」
<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00200521&tstat=000001064072&cycle=0

&tclass1=000001064137&tclass2=000001064125&result_page=1&tclass3val=0>
(2022/01/17 日閲覧)
「流水客土」
<http://www.niikawa.or.jp/mizuhaku/library/archive/daityou/aci_kyaku.html>
(2022/01/17 閲覧)
入善町観光物産協会　にゅうぜんマニア「入善町について」
<http://www.nyuzen-kanko.jp/about/>
(2022/01/24 閲覧)
「富山県観光公式サイト　とやま観光ナビ」
<https://www.info-toyama.com>
(2022/1/5 閲覧)
「黒部・宇奈月温泉観光局　公式サイト　黒部めぐり」
<https://www.kurobe-unazuki.jp>
(2021/12/29 閲覧)
「とやまの文化遺産」
<https://toyama-bunkaisan.jp>
(2021/12/29 閲覧)
「カーター記念　黒部名水マラソン」
<http://www.kurobe-taikyo.jp/road>
(2021/12/29 閲覧)
「黒部の里山　リフレッシュガーデン布施谷」
<http://fusentan.net>
(2021 年 12 月 29 日閲覧)
「くろべ牧場まきばの風　〈くろぼく〉公式サイト」
<http://www.kurobe-bokujyo.jp>
(2022/1/16 閲覧)
入善町「観光スポット」
<https://www.town.nyuzen.toyama.jp/gyosei/soshiki/somu/4/4/1741.html>
(2022/1/23 閲覧)

第１部

信仰と文化を支える人々

第 1 章　下立地区の 6 月 21 日の民俗行事
―御影様迎えと愛本姫社祭り―

大畑　萌夏

はじめに

黒部市東側に位置する下立（おりたて）地区の愛本橋に伝わる「お光（みつ）伝説[10]」に興味を持ったところから調査は始まった。私の地元（福井県あわら市）にも「肉付（にくづ）きの面[11]」という伝説があり、どこにでも地域特有の伝説が存在するのだと感じ、親近感のようなものを抱いた。

また、お光伝説のことを調べるうちに、伝説にちなんだ大蛇お光行列[12]などを行う「愛本姫社祭り」という祭りがあることを知った。元々幼いころから地元の祭りにも積極的に参加しており、お祭りに関する調査に興味があったので、お光伝説と愛本姫社祭りについて調べることにした。

そうして地元の方からの聞き取り調査を始めたが、愛本姫社祭りと同じ日に「御影様迎え」という全く別の行事が行われていたことを知った。愛本姫社祭りは下立 1 区で行われる、お光伝説にちなんだ祭りである一方で、御影様迎えは富山県全域を巡回するうえで下立でも行われていた宗教行事である。内容も特徴も全く異なり、共通していることは同じ日に行われるということだった。しかし、同じ日に大きな行事が重なって行われていたからには、何かしら他に共通することや互いに影響していることがあるかもしれないと感じ、お光伝説・愛本姫社祭りと共に御影様迎え（御影巡回）についても調べることにした。

本章では、第 1 節に下立地区の概要、第 2 節に御影様迎えについて、第 3 節にお光伝説・愛本姫社祭りについて、そして第 4 節に御影様迎えと愛本姫社祭りの関係について、地元の方々の聞き取り調査、過去の歴史書・論文などを基に記述する。

1.　下立地区の概要

下立地区は黒部市（旧宇奈月町）の旧北陸街道の上街道（後述）沿いに位置し、令和 3（2021）年 11 月現在、380 世帯 947 人の住民が暮らしている。また、黒部川の左岸側に位置し、西

---

[10] 詳しくは 3-1 で触れる。

[11] 信仰の篤い嫁のことを気に入らなかった意地の悪い姑が、嫁のことを驚かそうとしてつけた鬼女の面が姑の顔から外れなくなった、という伝説。福井県あわら市の吉崎御坊の願慶寺には、実際にその時につけていたと言われている肉付きの面がある。

[12] 詳しくは 3-2 で触れる。

隣には浦山地区、黒部川を渡った右岸側(北隣)は中ノ口地区に接している。下立１区、下立２区、というように、下立は１区から５区まであり、下立１区は地元の住民から「愛本」とも呼ばれている。下立１区には黒部川を渡る愛本橋が架かっている。

図１　下立地区の地図(国土地理院地図より作成)

愛本橋は黒部川に架かる橋で、現在でこそ赤い鋼ニールセンセローゼ橋となっているが、元々江戸時代に最初に作られたものは木造の刎橋(はねばし)であった[13]。時代の流れと共に架けなおされ、昭和 44(1969)年の黒部川の氾濫による水害で愛本橋が流されそれ以降に作られたものが現在の愛本橋である。黒部川の流れが速いので川に橋脚をたてることができず、橋脚のない刎橋という形で架けられた愛本橋は、かつては形状の独創性から山梨県甲府市の「猿橋(さるはし)」、山口県岩国市の「錦帯橋(きんたいきょう)」と共に「日本の三大奇橋」と呼ばれた。また、愛本橋はかつての北陸街道のバイパスでもあった。北陸街道は、現在の魚津市から黒部市三日市町を通り、入善町から朝日町の泊(とまり)へと続いていた。黒部川は特に夏季は下流域の増水が著しく、海沿いの地域では頻繁に洪水が発生した。そこで参勤交代が始まると、加賀藩が夏でも安全に旅ができるようにと、黒部川の山沿いに橋をかけ、下流域の洪水を避けて山側を通れるようにした。よって、北陸街道は２つのルートに分かれ、海沿いの道に対してこの愛本橋を通り山沿いを行く道は夏季に多く利用されたので、「夏往来(なつおうらい)」「上街道(かみかいどう)」などと呼ばれた。

[13] 黒部市歴史民俗資料館の資料より参照。

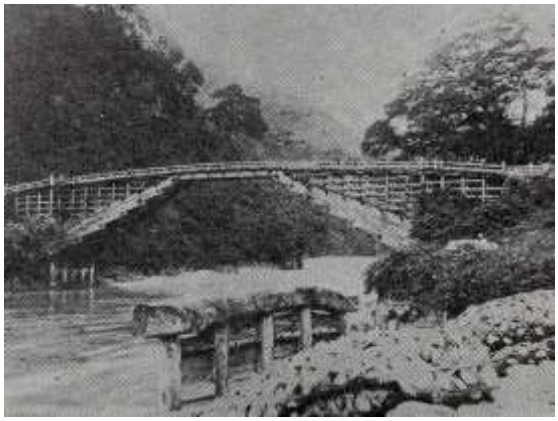


写真 1（左）　木造で刎橋である、架けられた当時の愛本橋（『宇奈月町史』より引用）
写真 2（右）　現在の愛本橋（筆者撮影）

2. 御影（ごえい）巡回ついて

2-1. 概要[14]

御影巡回とは、東本願寺第 19 代門首（もんしゅ）である乗如上人（じょうにょしょうにん）（1744～1792）の御影像と御消息（ごしょうそく）[15]を、西から東へと各地域の門徒へ次々と回し、講を結ぶ行事である。御影像の上の方に書いてある讃文は第 20 代門首の達如（たつにょ）上人（1780～1865）によって書かれたものである。通常の法会のように、初めに御影に向かって法要を営み、次に乗如上人の孫にあたる第 21 代門首・厳如（ごんにょ）上人（1817～1894）の「御消息」を朗読し、最後に布教法話があって終わる。

一般的に、御影巡回が行われるようになった経緯は次のように伝えられている。

天明 8（1788）年、京都に大火があり東本願寺も類焼した。乗如上人は全国の門徒から寄付を受けて再建に着手したが、途中で世を去った。その子である、第 20 代門首・達如上人が後を引き継ぎ、享和元（1801）年に完成した。そこで達如上人は絵師に命じ、父である乗如上人の御影像を 36 幅描かせたと伝え、自らそれに讃文を書き、再建のために特に功労のあった人々に授

写真 3　乗如上人の御影像
（『暮らしの歳時記』2012 年 8 月号より引用）

---

[14] 『宇奈月町史』、『下立民俗誌』、加藤享子『越中（富山県）の御影巡回－下新川地方を中心として―』より作成。

[15] 手紙。

けた。越中では、大門町[16]の権四郎が 1 幅もらった。この時門首は、「国へ帰ったらたくさんの人に拝観させるように」と伝えた。

また、弘化 4（1847）年に御影像の表装の傷みが激しく本山へ修復を願い出た時に、かえって越中門徒は取り扱いが悪いといわれ取り上げられたそうだが、第 21 代法主の厳如上人は傷みの激しいのは越中門徒の篤い信仰心ゆえとし、修復し自ら御消息を書き添えた。それが、御影像と御消息が一緒に回るようになった経緯だと言われている。

御影像と御消息は、いつのころからか井波の瑞泉寺（南砺市）で保管されるようになり、毎年 1 月 2 日に瑞泉寺を出て西から東へ朝日町を折り返し地点として富山県を巡回し、12 月 29 日に帰るようになった。

御影巡回は富山県だけでなく石川県、滋賀県、新潟県、愛知県でも行われている。昭和 50（1975）年頃までは、富山県内各地を一年中休みなく巡回していた。しかし、今も行われているのは富山県の東部に位置する下新川地方（魚津市・黒部市・入善町・朝日町）だけであり、それらの地域でも近年急速に廃れつつある。加藤享子『越中（富山県）の御影巡回－下新川地方を中心として―』によると、平成 2（1990）年に比べると現在、魚津市は元々26 か所の地区で行っていたのが全て無くなり、黒部市も 35 か所の地区で行っていたのが 5 か所となり、入善町と朝日町は合わせて 97 か所の地区で行っていたが 61 か所となっている。調査地である黒部市宇奈月町下立も、平成 21（2009）年 6 月 21 日をもって廃止になり、令和 3（2021）年現在は御影様迎えを行っていない。しかし、魚津市について黒部市浦山にある願蓮寺の住職長崎香英（こうえい）さんは、40 年ほど前から御影様は魚津市の託法寺（たくほうじ）から各地区を巡回していると話している。実際のところ、本当に魚津市で御影巡回が行われているかどうかは定かではない。

越中の「御影巡回」は、「越中国門末中」宛であり、昭和 50 年頃まで年間を通じて富山県全域の村の個人宅を巡回していた。かつては一日に十か所以上を巡回する日もあったが、それは広い地区を決められた期間内に巡回するため、日程が詰まっていたからである。黒部川扇状地の扇頂に位置する黒部川左岸の農村集落の下立では、毎年 6 月 21 日が「御影様迎え」の法要を勤める日であった[17]。下立地区では、村に巡回してくる、いわゆる村お講の「御影様迎え」と、黒部川左岸から右岸へ渡す地域の「御影様渡し」が行われてきた。それらの日程は早くから（おそらく 100 年以上前から）決められていた[18]。また、『下立民俗誌』には「下立は二回御影を迎え入れていた」と書かれているが、これは「御影様迎え」と「御影様渡し」を合わせて二回と解釈したものだと考えられる。「御影様迎え」は主に 2～5 区が世話をし、「御影様渡し」は 1 区が世話をしていた。

---

[16] かつて富山県射水郡にあった町で、現在の射水市西部に位置する。

[17] 下立では地区に迎え入れるという意味で「御影様迎え」と呼んだ。

[18] 岡崎京子『真言の遊行仏－富山県の歓喜光院「御影様渡し」を中心にして―』によると、御影巡回は享和 2（1802）年あたりから始まったのではないかと推測されている。

2-2. 巡路と役割

2-2-1. 御影様の巡回

前述したように、御影様はかつては富山県全域を一年かけて巡回していた。しかし、時が進むにつれて御影巡回が行われる地域は縮小していった。

元々は井波別院から御影巡回がスタートしていたが、岡崎京子『真言の遊行仏－富山県の歓喜光院「御影様渡し」を中心にして―』によると、平成 2(1990)年時点では 2 月～3 月に福野町・井波町、5 月～6 月に富山市・滑川市、6 月～7 月に下新川地方、というようにエリアごとに分かれて巡回していた。

図 2　平成 2 年度の御影巡回経路略図
（岡崎京子『真言の遊行仏－富山県の歓喜光院「御影様渡し」を中心にして―』参照）

そして、浦山にある願蓮寺の住職である長崎香英（こうえい）さんによると、40 年前くらい(1980 年頃)から令和 3(2021)年現在は下新川地方のみ巡回しており、魚津の託法寺からスタートして、魚津の山側→黒部の山側→舟見→朝日町の山側から海沿いに進んで入善→黒部の海側→魚津の海側を巡回して最終的にまた託法寺に戻る、というルートで行われている(図 3)。実際、井波別院の瑞泉寺に確認したところ、「もう誰も御影巡回のことはわからない」と輪

番[19]に言われ、現在の瑞泉寺にはかつての御影巡回を知っている人はいないようだった。ちなみに託法寺の住職自身もなぜ託法寺からなのかは分からず、自分が住職になった時には既にそのようになっていたらしく、不思議に感じているそうだ。しかし、新型コロナウイルスの影響で令和 2(2020)年、令和 3(2021)年は御影巡回がなく、黒部市若栗にある長安寺で令和 2(2020)年を最後に御影巡回が行われ、その先から中止になってしまったため、2021 年末時点では長安寺に御影の掛け軸など巡回法宝物(じゅんかいほうほうもつ)が一式ある。

図 3　下新川地方の御影巡回経路と代表地区
（下立と生地は現在御影巡回を行っていない）

巡回日程は御影巡回が始まった当初から決まっており、下立では毎年決まって 6 月 21 日に御影様迎えが行われる。巡回日程が変わることはなく、どの地区も毎年同じ日に行われる。今は車で移動しているが、昔は巡回法宝物を入れた唐櫃(からびつ)をみこしのように担いで回っていた。その後リヤカーなどを使うようにもなったらしい。

[19] 寺役を順番に交替して務める役制。

それぞれの地区を徒歩 30 分以内で移動し、おおよそ一日 4 か所（距離が遠いと 2 か所）回っていた。しかし、一日に 10 か所ほど巡回地区が割り当てられていた日もあり、昔は歩いて移動していたので実際のところどのような日程で巡回していたのかは不明である。

写真 4　かつては富山県でもこのように歩いて巡回していた。写真は石川県小松市で、現在も歩いて巡回している。
（『月刊　同朋』2018 年 7 月号より引用）

2-2-2. 6 月 21 日の御影巡回の一連の流れ[20]

かつて下立で御影様迎えを行っていた当時、下記のように巡回していた（図 4）。

図 4　6 月 21 日の巡回経路
赤枠は令和 3（2021）年現在も行われている地区で、点線枠は現在行われていない地区である。（国土地理院地図より作成）

[20] 加藤享子『越中（富山県）の御影巡回－下新川地方を中心として―』より作成。

① 若栗(黒部市)に6月20日到着(宿泊)。6月21日の朝若栗を出発。
② 栃屋(黒部市宇奈月町)に到着。
③ 浦山(黒部市宇奈月町)の願蓮寺に到着。
④ 下立(黒部市宇奈月町)到着(ちょうどお昼ごろ)。
⑤ 内山(黒部市宇奈月町)に到着。
⑥ 再び下立に到着。愛本橋を渡り(「御影様渡し」)、黒部川を越えて舟見方面へ出発。
⑦ 愛本新(黒部市宇奈月町)に到着。
⑧ 墓ノ木(入善町)に到着。
⑨ 舟見(入善町)に到着(宿泊)。6月22日の朝に再び愛本新へ出発。

しかし、下立は平成 21(2009)年を最後に御影巡回から抜けた他、内山、愛本新、墓ノ木もどの時点からかは分からないが御影巡回を抜けており、現在御影巡回が行われているのは、若栗、栃屋、浦山、舟見の4か所である。調査地である下立が御影巡回から抜けた理由については後述する。

このように御影巡回を行っている地区も減り、現在も巡回の日程は変わらないが、時間は昔とずれてきている。

現在浦山の次は舟見だが、浦山は昼ごろに法要が終わってしまい、舟見はかつての日程だとその日の終わりに到着して次の日に出発になるので時間が大幅に空くことになる。現在の日程では浦山が終わった後タイミングをみてその日のうちに巡回法宝物は舟見へと向かうことになっている。しかし、実際のところは巡回法宝物が次にいつどこへ行くのかをそれぞれの地区は把握していない。自分の地区のことしか知らない。その理由は、廃止したわけではないが「今年はやりません」という地区も年によってあるからという。また、地区が広いところは地区の中でもさらにエリアを2つ3つに分け、年ごとに交代で当番制にしているところもあるため、毎年引き渡す相手が異なり、分からないらしい。地区が広いところの例として舟見があるが、舟見も地区を2つに分けており、毎年舟見から浦山に巡回法宝物を迎えに来る相手も時間も異なる。

2-2-3.御影様の巡回に関わる役割

御影巡回は寺の行事ではなく「同行(どうぎょう)」によって行われる行事である。「同行」とは神仏を信仰する者、つまり信者のことであり、僧だけでなく一般人も「同行」である。同行が主催して御影像と御消息をありがたく拝見・拝聴し、富山全域を巡回させて伝えていくのである。

御影巡回に携わる人の役割としては、巡回をお供する「付人(つきびと・つけびと)」と呼ばれる人が一人と、巡回する各地区それぞれに「世話役」と呼ばれる人が複数人いる。

2-2-3-1.付人

付人は巡回法宝物と共に行動し、巡回日程などを把握する。御影様に関する全責任をもっ

ており、各地区の世話役や住民は付人の指示に従う。

毎年付人は同じ人が担っている。下立で世話役を最後に務めていた長谷川久雄さん(88 歳)に聞くと、下立が御影様をしていた時は魚津(もしくは滑川)から朝日町まで御影巡回についていった[21]。また、『下立民俗誌』によると入善町・朝日町では別の人が付人となったと書かれている。

付人は井波別院から指名されており、黒部市内で付人になった人はいない。付人は毎日御影巡回についていくが、御影様が一泊している間は付人は自宅に戻り、また次の日御影様のところに出向いて再びついていく。付人は大変だから、家の仕事は全部ほったらかしていたそうだ。

2-2-3-2. 世話役

各地区には御影様迎えの世話役がおり、下立には 6 人いた。真宗大谷派の門徒が下立に 60 軒あり、その中から世話役を決めた。お講の準備や当日の運営、会計などを行う。『下立民俗誌』には、「下立にある大谷派(東本願寺)門徒は六〇軒であり、手次寺(てつぎでら)[22]は朝日町大家庄の光栄寺、黒部市宇奈月町浦山の願蓮寺、入善町上野の持専寺、黒部市山新の専念寺である。この四カ寺の内、専念寺は門徒が三軒と少ないので、あとの三カ寺の世話役が、手次寺の世話の一環として、下立の御影様の世話もした。村として御影様迎えの特別な組織はなかった。」(40 ページ)と書かれている。

現在のように公民館ではなく、個人の家で宿(やど)をしていた時代から世話役は存在し、家の人が世話役として世話をするとは限らなかった。また、長谷川さんは世話役を 10 年やっており、任期制ではなく有志が世話役をしていた。

2-3. 下立の御影巡回

平成 21(2009)年に下立で最後に行われた御影様迎えの流れを、当時も世話役をしていた長谷川久雄さん(88 歳)に聞いた。

2-3-1. 下立の御影様迎えの流れ

長谷川さんは下立 4 区在住である。最後に御影様迎えが行われた平成 21 年(2009 年)は個人宅ではなく、4 区の集会所で御影様迎えが行われた。

御影様を迎える時に、御影となっているお坊様の名前が書かれたのぼり旗を立てた。御影像である乗如上人の院号(いんごう)[23]が歓喜光院だったので、のぼりには「歓喜光院御形見御影」と書

---

[21] 長谷川さんが世話役をしていた当初の付人は滑川の人だったが、病気のため途中で魚津の人に変わった。

[22] 真宗大谷派。

[23] 生前に寺院に貢献した人が亡くなった時に、法名の上位としてつけるもの。

かれている。下立や遠く朝日町からの参拝者の目印になるよう、下立地区の見やすいところに集会所までのぼり旗を立てた。

写真 5　下立地区の御影様迎えを知らせるのぼり旗
（『暮らしの歳時記』2012 年 8 月号より引用）

お迎えする準備物や供え物は、紅白の御華束[24]を大体 70 個ほど用意した。昔は紅白の鏡餅を用意して法要が終わった後に切り分けて参拝者に配っていたが、切り分けるのに手間がかかるので平成 10(1998)年頃から御華束に変わった。他にもちょっとした果物やお菓子を準備した。これらは世話役 6 人で役割分担してやる。

6 月 21 日、御影様は若栗を出発して栃屋、浦山と巡回し、昼頃に下立に到着した。

浦山から「○時に終わります」という連絡が入るので、「○時に迎えに行きます」といって巡回法宝物を浦山まで下立の世話役が受け取りに行く。浦山で法要が終わるのを待ち、巡回法宝物を一式受けて下立まで運び、4 区の集会所に御影様を飾る。そして御影巡回の経費として付人に 1 万円余りの謝礼を支払う。巡回の時間割は予め決められており、付人から「次は内山から○時に迎えに来るからそれまでに(法要を終わらせてください)。」と伝えられる。

12 時頃だと参拝者たちは昼食の時間なので、下立で一時間余り休憩し、13 時頃から法要を始める。その間に、付人から御影様迎えの状況などの話を聞いたりする。

2-3-2. 法要の流れ

下立には東本願寺に属する寺がないので、浦山から僧侶を呼んで法要を行う。法要の流れは以下の通りである。

① 僧侶の読経
② 御影様の裏書・達如上人の讃文・厳如上人の御消息の拝読
③ 僧侶の布教法話

これで法要はお開きとなり、次の内山の世話役の人に巡回法宝物を渡す。御影様を迎え入れてから送り出すまで、世話役は昼食抜きでお参りする人の世話を焼いたり、お供えしたものを参拝者に配ったりした。

御影様迎えの下立での滞在時間は 1 時間半程度で、長くても 2 時間だった。昔の個人宅では内山に御影様を送った後に内輪でのお斎[25]があったのでもっと長時間だったが、集会所ではお斎はなくそうということで集会所では一切飲食しなかった。

---

[24] 浄土真宗の宗教行事などで、丸餅を重ねて仏壇の前に飾るもの。
[25] 法要が終わった後に行われる会食。

2-3-3. 下立 1 区の御影様渡し

富山県の御影巡回の中でもとりわけ有名だったのが、愛本橋を渡って黒部川の左岸から右岸へ御影様を送る下立 1 区の「御影様渡し」である。黒部川は大変な暴れ川であり、ちょうど御影様迎えが行われる 6 月 21 日は氾濫期であった。そこで、巡回法宝物が無事に渡ることができるようにと多くの人々が集まった。加藤享子「越中(富山県)の御影巡回－下新川地方を中心として」では、「いわゆる「御影様」といえば、この「御影様渡し」のことを指すことも多い。とりわけ唐櫃を担うことに熱烈な思いがあった。」(123～124 ページ)とあるように、唐櫃を担ぐことにはご利益があるとされ、こぞって人が集まった。少なくとも 1980 年代からは車で巡回法宝物は渡っていたが、昔は唐櫃をみこしのように担いで橋を渡っており、御影様が橋を渡ることへの安全祈願をする人と、担いでご利益を得ようとする人でたくさんの人が集まった。御影様渡しは遅くとも明治中期からは行われており、富山県全体の御影巡回の中でも代表的行事となっていた。また、「晩は、性の解放日で若い男女の自由恋愛が許されたという。」(124 ページ)とも書かれている。ここではお盆の時と同じように、御影様渡しの時も自由恋愛が許され、出会いの場となった。

それらの理由により、下立 1 区には多くの人が集まって賑わい、露店商やサーカスなども狭い道の両脇に立ち並んだ。地元の人はこの様子から「御影様祭り」とも呼んでいた。

御影様渡しは昭和 40 年代初め頃までにぎわっていたが、その後は衰退していき、平成 7(1995)年に「御影様渡し」はなくなった。また、御影様祭りも同じ昭和 40 年代初め頃が最盛期であった。衰退の理由としては、人々の信仰心が薄れ、関心が後述の愛本姫社祭りに傾いていったことや、昭和 44(1969)年の黒部川洪水によって下立 1 区で御影様迎えを行っていた橋爪家が移転したことなどが考えられる。

2-4. 宿・費用

2-4-1. 宿について

法要は宿(やど)と呼ばれる場所で行われた。下新川地方では、宿は平成 10 年代(1998～2007)まで門徒の個人宅で行われた。令和 3(2021)年時点で、御影巡回の宿はほとんどが公民館や集会所となり、二か所ほどが寺院である。旧街道(今は市道)沿いに御影様の宿があり、集まるのは親戚や近所の人々で、熱心な信者だと他の地区からでもお参りに来た。

2-4-2. 下立の宿の移り変わり

下立 2 区在住の滝川修さん(84 歳)によると、下立では「御影様迎え」の宿は毎年移っており、「御影様渡し」の宿は昭和 40 年代後半(1971 年～1975 年頃)までは基本的に下立一区の橋爪家が常宿だった。当時この辺りの中で特に大きくて立派な家であった。

そして、橋爪家の当主が変わった時に「他の家も(宿を)やってはどうか」と希望制になっ

た。御影像は乗如上人そのものであり、その年の宿となって家に御影様を迎え入れることは大変めでたいこととされたため、自ら宿に立候補する家が多かったらしい。基本的にはお東門徒が宿となるが、新築や慶事などめでたいことがあった場合はお東門徒でなくても御影様迎えが行われることもあった。

しかし、宿をすることは名誉なことではあるが、費用の負担が大きかった。橋爪家が常宿でなく希望制にしたのも費用面の負担が大きな理由ではないかと言われている。接待も大変であった。

そこで、個人宅で宿をするのは大変なので(当時新しく 4 区にできた)集会所でやろう、という話になった。おそらくこの時には「御影様渡し」は行われておらず、「御影様迎え」のみの宿となっている。しかし、集会所では世話役が費用の負担や付人・参拝者の接待をしなければならないため、世話役の負担が大きくなった。聞くところによると、この頃には世話役をやる人も減り、1～2 人で全ての世話をしていたと考えられる。そして参拝者も減り、世話役をする人もいなくなってしまったため、集会所でやるのも大変になった。集会所では 4～5 年くらいやっていたが、平成 21(2009)年をもって下立では御影巡回を抜けた。

写真 6　下立 4 区の集会所。当時は新築で平屋建てということもあり、ここなら利用しやすいだろうということで宿となった。(筆者撮影)

2-4-3. 会計・費用について

下立 4 区在住の長谷川久雄さん(88 歳)によると、御影様迎えが大変だった理由はやはり費用面が大きい。主な出費としては、付人に支払う謝礼、御影様へのお供え物、参拝者へのお茶やお菓子、個人宅で宿をしていた時はそれに加えてお斎(とき)といって、法要の後の会食が振舞われた。食事は宿の家だけでなく近所からも手伝いに来てもらって作っていた。

世話人から宿代として当時 1 万円ほどを渡していたが、宿を提供する側からすれば微々たるものだったかもしれない。この 1 万円は、平成 10 年代当時 60 軒余りあった家から 1 軒につき 200 円集めたものに加え、参拝した時のお焼香 300 円やお布施などで宿の費用をまかなっていた。その他お供え物などの費用など含めどうにか 25000 円ほど集めたが、それでも足りない場合は世話人が負担していた。また、この 25000 円にお斎の費用は含まれておら

ず、宿の負担だった。

また、個人宅だけでなく、集会所にも多少の負担費用があった。集会所の利用料金は２時間以上で 2000 円、半日で 5000 円、１日で１万円であった。

実際、朝から掃除をしたり準備をしたりなど世話人が出入りしていたので、半日分の 5000 円を払っていた。信仰心の衰退や仕事を優先する世話役・参拝者の減少に加え、地区の人口減少により集金もなかなか集まらず、さらに費用の確保が大変になっていった。

2-5. 離脱の流れと現在

2-5-1. 下立の御影巡回離脱

時代の流れと共に仕事を優先して地区の行事に参加しない人や、高齢化に伴って行事への参加やめていく家も多く、世話役の引き受け手も信仰心からの参拝者もいなくなっていった。

また、御影様迎えと同じ６月 21 日に１区の愛本橋の下で愛本姫社祭りが行われている。元々は御影様迎えが最優先で、法要を終え御影様を送り出した後に祭りが行われていた。しかし、昭和 63(1988)年から商工会主催の大蛇お光行列が始まったことにより、祭りがより一層盛り上がりを見せるようになった。そのなかで、多くの人々は御影様迎えよりも愛本姫社祭りの方に関心がいってしまい、本来は御影様迎えが優先だったのが、中途半端な気持ちで参拝する人が増えた。実際、下立の御影様迎えの時には、付人と地元の人々との話に、「祭りに心移りして真剣に参拝する人が減っていった。」「だんだん御影様は大蛇に食われていった。」といった話題も上がっていた。

これらの事情により、世話役であった長谷川さんは「これ以上の続行は厳しいため脱会できないか」と付人に相談していた。付人では判断できないので井波別院の理事会[26]にも相談し、「(御影巡回からの)離脱申請書」を付人に提出した。付人は理事会に諮り、離脱申請書は 2～3 年後に承諾されることになった。これは、既に一年間のスケジュールが決められているので、急に申請されてもすぐには対応できなかったことによる。よって、離脱申請書を提出した後でも、承諾されるまでの 2、3 年間は迎え入れていた。その後承諾された時点で付人に連絡が入り、付人から下立の代表世話役である長谷川さんに伝えられた。こうして、平成 21(2009)年をもって下立は御影巡回を抜けた。

下立では享和元(1801)年以来 200 年以上続いていた行事であり、特に御影様渡しは御影巡回を代表すると言っていいほど賑わいを見せていたので、脱会を惜しむ声もあった。しかし、中途半端な信仰心でまともに世話もできない状況の中御影様迎えを行うことは、御影様に対して粗末な扱いをすることでありかえって忍び難いということで、離脱となった。

---

[26] 富山県内の御影巡回の総括的存在。

2-5-2. 下立の御影巡回の現在

現在では、下立の隣の地区である浦山の願蓮寺が下立の意志を継いで御影巡回を行っている。願蓮寺では他に、御影巡回を抜けた中新・植木・内山の分も受け持っている。下立の今までの積立金を願蓮寺が引き継いで、現在は寺の事業として法要を行っているため、願蓮寺では集金は一切行っていない。寺の予算＋参拝者からのお布施でまかなっている。

「これは東本願寺再建に携わった門徒に感謝を伝えるために書いた厳如上人の御消息を、門徒はありがたく思って地区の門徒中に聞かせまわる行事である。御影の掛け軸ではなくそのお言葉に対して崇拝することに意味がある。行事の形式も大切だが、行事の背景・意味を後世に伝えていくことがより大切だ」と願蓮寺の住職は話していた。

しかし、現状としては下立に住む願蓮寺の門徒には毎年御影様迎えが行われる声かけを行っているが、下立の人が浦山での御影様迎えに来ることは滅多にない(過去に一度だけ来たことがあるらしい)。いつでも下立の人が来ることができるようにはなっているが、やはり願蓮寺では浦山に住む人の参加が一番多い。ここにも下立の人々の信仰心が衰退してしまったことが強く表れている。

写真 7　浦山願蓮寺での法要の様子
(『暮らしの歳時記　富山編』2012 年 8 月号より引用)

3. お光(みつ)伝説・愛本姫社祭りについて

3-1. お光伝説について

3-1-1. 伝説紹介

下立 1 区には昔から「お光伝説」という黒部川にまつわる伝説が言い伝えられている。この伝説は、おそらく江戸時代に作られたと言われている。愛本姫社祭りの大蛇お光行列はこの伝説に沿って行われている。伝説の内容は以下の通りである[27]。

---

[27] 『下立民俗誌』「黒部市歴史民俗資料館配布資料」などより作成。

愛本橋のたもとに一軒の茶店があった。その茶店を営む平三郎夫婦にはお光という美しく親孝行で気立てのよい娘がいた。お光には近郷近在の若者から多くの結婚の申し込みがあったが断っていた。ある晩のこと、木戸を叩く音が聞こえ平三郎が表へ出ても誰もいないということが三晩も続き、その後お光が突然消えた。

やがてお光が消えて三年が経った夜、お光が粽（ちまき）を土産に帰ってきた。そして翌朝、お光は母に「これから子供を産みに納戸へ入るので絶対に来ないでください」と言って一人納戸に行った。母は心配のあまり我慢できずに納戸をのぞいてしまった。するとそこには娘の姿ではなく大蛇の姿があった。

人間の姿に戻ったお光は悲しそうに、「私は黒部川に住む大蛇の元へ嫁いだのです。これからも時々帰ってこようと思っていましたが、変わった姿を見られては親子の縁もこれまでです。今生の別れに土産に持ってきた粽を置いていきます。これは幾年になっても腐ることのないものです。」と言い、粽の作り方を教えて黒部川の水底深くに姿を消していった。

その後、茶店で粽を出したところ商売繁盛し、生涯お金に苦しむことなく暮らしたそうだ。

これは愛本の人々[28]の多くが語り伝えられてきた、一般的なお光伝説の内容である。

他にも、伝説に出てくる茶屋の店主の名前が徳左衛門である説[29]があったり、実はお光は死んでいたのではないかという説[30]もあったりする。また、お光伝説以外にも蛇にまつわる話が黒部市にはたくさんある。

3-1-2. 愛本姫社

愛本姫社は伝説に出てくるお光の悲しみを伝えるために建てられた宮である。地元の人々からは「大蛇の宮」と呼ばれることが多く、以前は愛本橋の近くに建てられていたが、今の位置は三か所目である（昭和５、６年頃移築）。一番最初は愛本橋のすぐ下の位置にあった。一番初めのものがいつ建てられたかは分かっていない。

---

[28] 正式には下立１区だが、「愛本」という名前で通っている。以後、愛本とする。

[29] 『下新川郡史稿』のなかに採録されている「小川温泉誌」。

[30] 『越の下草』に記載されている話。

写真 8　愛本姫社
（筆者撮影）

図 5　2021 年現在の愛本姫社の位置
（国土地理院地図より作成）

3-1-3. 御神体である花魁の浮世絵

愛本姫社のご神体は、花魁の浮世絵である。

浮世絵が神社のご神体であるのは珍しいが、花魁の浮世絵がどうして愛本姫社のご神体になっているのか、今のところわかっていない。ご神体である浮世絵の作者は江戸時代の浮世絵師、渓斎英泉（1791-1848）とされる。

このご神体は伝説に出てくるお光に見立てられており、その由来として言われている話がある。

> お光がいなくなって嘆き悲しんでいたある日、平三郎の茶屋で一服休んで身の上話を聞いた旅人の画家が、「それではお光の絵を画いて置いていくから、それをお光と思って心強く暮らしなさい。」と言って、絵を置いていった。その後、平三郎家が絶えたので、三ケ（魚津市）の高木の婆さん（平三郎の親戚筋）が預かっていた。しかし、この家も当地を離れることになったので、草野武平氏に後を託したが、当家も関東の方へ転居したので村で預かることになり、社屋（愛本姫社）を造ってそこに安置し、今日に至っている（『下立村史（平成 16 年発行）』より引用）。

写真 9　花魁の浮世絵（実物）
（筆者撮影）

また、この花魁の浮世絵を画家であるゴッホが惚れ込んで模写している。

明治時代にパリ万博で、日本の版画を宣伝するために雑誌の表紙に花魁の版画を使ったところ、それを見たゴッホがこの浮世絵を見様見真似で描いた。しかし、雑誌に掲載されているものは左右逆版だったため、ゴッホが描いた花魁は実際の作品とは左右逆になってしまった。ゴッホの写した作品は、オランダのアムステルダムにあるゴッホ美術館に収蔵されている。

愛本姫社のご神体である花魁の浮世絵は、6 月 21 日だけ見ることができる。普段は黒い扉に閉ざされていて見ることができなくなっており、この日以外に浮世絵を見ようとすると災いが起こると言われている。下立 1 区在住の男性(70 代)から聞いた話によると、ある時ある男性が 6 月 21 日以外の日にその扉を開けた。その後、正月あたりの時期に事故に遭ったそうだ。この出来事について、地区の人は「6 月 21 日以外の日に扉を開けたから罰が当たったんだ。だから、この扉は開けられない。」と言っていた。しかし例外として、テレビの取材のために一度だけ扉を開けて花魁の浮世絵を見せたことがある。この時は地区で会議を開き、開けるかどうか審議を行った。それほど地元の方々にとって、ご神体の花魁の浮世絵は特別なものである。

3-2. 愛本姫社祭り・大蛇お光行列の成り立ち

毎年曜日に関係なく 6 月 21 日に祭りが開催される。別名「大蛇の宮の祭り」などといい、むしろ地元の人々はよく別名の方で呼んでいる。

愛本姫社祭りの歴史は古く、詳細は分からないが江戸時代から行われていたと言われている。終戦直後は一時期途絶えたものの、昭和 30(1955)年に再開された。しかし、令和 2(2020)年、令和 3(2021)年は新型コロナウイルスの影響により中止となった。元々の愛本姫社祭りは、神事とちまきの販売だけの簡素な祭りであったが、昭和 63(1988)年から大蛇お光行列が始まり、愛本姫社祭りの目玉となった。

当日の祭りの流れとしては、午前中に神事を行い、午後から大蛇お光行列が行われる。また、ちまきの販売に加え、露店商も立ち並び、祭り当日は盛大な賑わいを見せている。

3-2-1. 大蛇お光行列

昭和 63(1988)年から大蛇お光行列が行われているが、その成り立ちについて愛本姫社祭り大蛇お光行列保存会会長の魚谷進さん(74 歳)から話を聞いた。

写真 10　第 1 回大蛇お光行列の様子。また、大蛇の模型もおもちゃのようなつくりに見える。(地元の方からの提供)

昭和 62(1987)年、富山県から当時宇奈月町の商工会に「補助金を出すので地域活性化のために何かイベントをしてはどうか」と依頼がきた。そこで、町内会や青年団、壮年会などが立ち上がってこの地区に伝わるお光伝説を題材として仮装行列をやることになり、始まったのが「大蛇お光行列』である。大蛇お光行列は、愛本橋から愛本姫社までお光を中心に、母親やその他大勢が練り歩く行列である。

1 年目は何もないところからのスタートで最初は苦労した。大蛇の模型一つにしても最初は予算が無く、とりあえず地元の企業に頼んだ。衣装はこの地区で秋にやっている獅子舞で使用しているものを借りた。2 年目からは地元の協賛金を得られるようになった。

元々はおもしろおかしく始めた仮装行列だったので、最初の頃はお光の母親役を男性がやっていた。魚谷さんも第 3 回の大蛇お光行列で着物を着てかつらをつけて、お光の母親役をした。ちなみに初代お光役をしていた女の子は当時高校二年生の愛本の子である。

写真 11　第 3 回大蛇お光行列の様子。お光の母親役は男性で、この時の母親役は魚谷氏。(地元の方からの提供)

こうして最初は地元の人がおもしろおかしく仮装をして練り歩く行列だったが、回を重ねるごとにお光行列も変わっていった。最初は大蛇の模型がお光の旦那という設定だったはずなのに、第 4～5 回頃から大蛇の模型とは別に、大蛇が人間の姿に化けた若侍役が現れた。若侍役は地元の青年団の人がやる。実質大蛇が 2 人いる状態になっているのでおかしな話である。2021 年現在使われている大蛇の模型は 3 代目で、初代とはかなり見た目が違っている。また、だんだんと伝説を忠実に再現するようになり、ほとんどのお光の母親役を実際のお光役をしている女の子の実の母親が務めるようになった。若侍役も最初は年寄りの仮装だったが、次第に伝説に沿って若い男性が役になるようになった。

他にも、元々大蛇お光行列に小学生は参加していなかったが、ちまきおどりに加わったタイミングで小学生の男の子が行列にも加わるようになった。今では横断幕やちょうちん、太鼓などを持って歩く大切な役を任されている。

このような流れになった理由としては、ふざけずに伝説の再現をした方がいいという考えが大きくなったことと、男性が女性の仮装をするのが恥ずかしいという気持ちがあったことが挙げられる。また、愛本姫社祭り・大蛇お光行列は「とやまの祭り百選[31]」にも選ばれており、正式な祭りとしての自覚を持ったことも考えられる。

写真 12　一番最近行われた 2019 年の集合写真。
最初の頃とは雰囲気が変わり、おもしろおかしい要素はほとんど見られない。また、大蛇の模型はかなりリアルになっている。（地元の方からの提供）

3-2-2. ちまきおどり

大蛇お光行列が始まって 4 回目から、小学 5，6 年生の女子児童によるちまきおどりが祭りで行われるようになった。元々は愛本小学校の運動会の昼に踊っていたもので、曲自体は昭和 47(1972)年に各地区にある盆踊りの曲をベースに愛本姫社をモチーフにして少しアレンジしたものが作られた。運動会で踊るきっかけは、いつからかは分かっていないが愛本小学校の当時の校長先生が言い出したことにより、先生方が振り付けも考えて子供たちに教えていた。2021 年現在、愛本小学校は当時のその他の小学校と統合し、今の宇奈月小学校となっている(統合は 2006 年)。しかし、統合される以前におどりを教えられる先生が異動していったなどで伝え手がいなくなり、具体的な年代は不明だが途中から学校でおどりは行われなくなった。

---

[31] 富山県教育委員会が平成 16 年度から「とやま文化財百選」事業を行っており、平成 18 年度は郷土色豊かな「祭り」をテーマに、「とやまの祭り百選」として選定を行った。「下立の御影様」も平成 20 年に「とやまの年中行事百選」に選定されている(富山県教育委員会「とやまの祭り」より参照)。

こうしてしばらく途絶えていたおどりだが、愛本姫社祭りで大蛇お光行列が行われるようになった時に、さらに祭りを盛り上げようという考えから当時の役員が、「こんなおどり(愛本小学校で踊られていたおどり)があるのだが、祭りで踊ってはどうか」という提案がなされ現在のちまきおどりとなった。ちまきおどりが小学校高学年の子によって踊られるのは、元々の愛本小学校の時からの名残である。

3-2-3. 大蛇お光行列のルート

大蛇お光行列のルートは、橋の下にある黒部川神社の鳥居をくぐってスタートし、集会所でお光を迎えに行って、愛本姫社まで行く。昔は大蛇とお光の新婚旅行だと言ってさらにその先の粕塚(かすづか)まで行っていたが、具体的にいつごろまでかはわからない。粕塚については直接的にお光伝説に関わるエピソードがあるわけではないが、一部嫁入りに関する話があるのでそこに関連させているのかもしれない。

図 6　大蛇お光行列は始まった当初からこのルートで行われている。
また、祭りの日に立ち並ぶ露店商も同じ道に並ぶ。(国土地理院地図より作成)

写真 13　粕塚。左が全体像。右がエピソードの書かれた掲示板。(筆者撮影)

3-3. 愛本ちまきについて

下立１区の集会所にはちまき加工生産工場が併設されており、毎年愛本姫社祭りの時に、お光伝説にちなんで作られる愛本名物のちまきを販売している。ちまきは縁起物として祭りの時だけに作られる特別なものであり、普段から作られるものではない。

写真 14　下立１区の集会所の看板。（筆者撮影）

3-3-1. ちまきの歴史

地区内の人から「ちまきの主的存在」と言われている草野サツ子さん(92 歳)から話を聞いた。

ちまき作りには 100 年以上の歴史があり、戦前までは婦人会の方 5～6 名がどこか 1 軒の家に集まってちまきを作っていた。ちまきをいつから作っていたかなどの正確な年代は分かっていないが、加賀藩の絵師が画いた「下道中絵巻」中に愛本刎橋と「此村マキノ名物」と特記していることから、おそらく江戸時代から作られていたと考えられる。

それから第二次世界大戦が始まり、戦後しばらくはちまき作りをしていなかった。しかし、昭和 30(1955)年の 5 月過ぎ頃に、当時の下立青年団長が当時婦人会の会長だった草野さんに「ちまきを作ってみないか」と声をかけ、他にも 5～6 人ほどの後押しがあったことをきっかけにちまき作りが復活した。戦後復活したばかりの当時は、食糧難のためにちまきの団子の材料となる米粉がなく、材料の確保に大変な思いをしたと話された。それから令和元(2019)年まで[32]毎年作り続けている。

その後、昭和 51(1976)年にちまき保存会が設立された。そして、昭和 63(1988)年に下立１区にちまき加工生産工場が建てられた。その時に、ちまき保存会に変わってちまき生産組合が立ち上がり、下立１区の集会所でちまき作りを始めた。当時は男女合わせて 15～16 人ほどで作っていた。この頃くらいから食品衛生に対する基準が厳しくなり、個人で作ったものを販売することができなくなってしまったため、組織として販売する必要があったとも推測される。令和 3(2021)年現在はちまき生産組合が中心となってちまき作りを行っている。

今ではちまき作りの人数も 50～60 人ほどとなったが、婦人会の方は少なく、ほとんどがボランティアである。昭和 30(1955)年にちまき作りを始めた時は、婦人会として始めたものだったが、今となっては愛本のひとつの年中行事のようになっている。

---

[32]令和 2(2020)年、令和 3(2021)年は新型コロナウイルスの影響で愛本姫社祭りが中止だったため、ちまき作りも行われなかった。

3-3-2. ちまき作りと販売の流れ

最近行われた令和元(2019)年のちまき作りと販売の一連の流れは以下の通りである。

6 月 19 日　笹採り。男性がちまきを包む笹を朝にとる。取ってきた笹は水洗いしておく。

6 月 20 日　朝 5 時から総出でちまき作り。集会所の畳を全部はがしてビニールを敷いて作る。米粉から団子を作る。ちまきにはコシヒカリの粉を使用する。米を粉にして使っている。団子は大人の親指の爪ほどの大きさで、大蛇の鱗に見立てている。4 枚の笹の葉にくるんで、しげという草を乾燥させた紐でしばって大きな釜で茹でる。ちまきの形は昔はもっと簡単で、一枚の笹にくるんだような形をしていた。今の形になったのは昭和 63(1988)年からだそう。こうして半日がかりで、年にもよるが多い時だと最大 150 束(本数にしておよそ 1500 本)くらい作る。それを常温で冷めるまで保管する。

写真 15(左)　ちまき加工生産工場の中。作業台に刃がついており、ここでしげをカットする。
写真 16(右)　この大きな釜で一度にたくさんのちまきを茹でる。
(写真 15、16 共に 筆者撮影)

6 月 21 日　愛本姫社祭り当日。8 本一束 500 円で、午前８時からと午後１時からの二回に分けて販売する。地元の方々が「縁起物」として自宅用や、県外にいる子どもや親戚に送るために買いに来たり、県内外からお土産に買いに来たりする。ちまきの販売は行列を作り、すぐに完売してしまう。大蛇お光行列が午後 2 時くらいから始まるので、行列を見るために午後２時くらいに来る人も多いそうだが、その時にはもうちまきは売り切れている。一度運営に、ちまきの販売の時間を調整できないかと相談したことがあるそうだが、結局時間は変わらずに販売している。

このちまきを作っているのは愛本だけである。昭和 30(1955)年の時点で、既に販売目的でちまき作りが行われていた。それより前にちまきを販売していたかはわからない。また、過去には集会所で作ったちまきの他に、個人で作ったちまきを販売していた人がいたこともあった。

他に、ちまきの販売とは別に自分用にちまきを作る人が 4～5 人ほどおり、サツ子さんもその一人である。これはそれぞれの自分の家で個人で作っており、主に親戚に渡すためである。

3-3-3. 愛本ちまき

愛本ちまきは甘くなく、米粉の小さな団子で素朴な味である。ちまきは「縁起物」であって菓子的感覚ではないので、好んでちまきを食べる若い人はあまり見ない。食べ方は特になく、そのまま食べる。

ちまきは笹の葉にくるまれていて日持ちするし、かびないので長期保存が可能である。しかし、販売される前日に作り始めて固くなり始めているため、買ったその日のうちに食べた方がいい。

写真 17　愛本ちまきと笹茶
（「黒部市移住サポートサイト」より引用）

3-4. 愛本姫社祭りの現在

大蛇お光行列が始まった当初と様子が変わったように、愛本姫社祭りも昔と現在では傾向の違いや変化が現れている。

3-4-1. 大蛇お光行列・愛本ちまき踊りについて

大蛇お光行列のお光役は愛本に住む高校 1 年生の女の子である。現在はお光役をやりたい傾向にあるらしいが、始めた当初は恥ずかしいからと誰もあまりやりたがらなかった。また、それが本人の意志であるならともかく、家族が「娘を(または孫を)そんな辱めに晒すな」と強く反対していた年もある。実際、本人も祭りが平日だった場合は当日学校を休まなければならず、祭りの日以外にも事前の打ち合わせなどで放課後の部活動に数回だが出られないことを懸念してやりたがらない子が多かった。よって、大蛇お光行列を始めた当初は、候補となる女の子がいる家に夜に一軒ずつ回って頼み込みに行っていた。

しかし、大蛇お光行列が始まってから 20 回目くらい以降からは、なぜかお光役になりたいという傾向が強くなった。年によっては 2 人やりたい人が出た場合は「今年はあなたがやって、来年私がやるわ」というように相談して年を分けてやっていた。

また、お光役が決まっても祭り当日まで誰がお光役なのかを公表してはいけないという暗黙のルールもある。お光役の子の母親などは「うちの子が今年のお光役よ」と言いたくても言えないのでうずうずしているそうである。

しかし、最近は人口減少や少子高齢化により、愛本にお光役をできる女の子がいない時もしばしばある。そんな時は下立の他の地区、もしくは親戚伝いからお願いする。実際、愛本に住んでいる最年少の女の子は中学 3 年生なので、数年後のお光役は愛本以外の女の子が務めることになる。

人口減少の問題は愛本ちまき踊りにも影響を与えている。この踊りは小学 5、6 年生の生徒によって行われる。平成 27(2015)年ほどまでは下立地区の子どもたちだけで踊っていたが、児童も少なくなったため最近は宇奈月小学校の生徒を一般募集して人を集めている。

3-4-2. ちまき作りについて

長年続いているちまき作りも問題を抱えている。ちまき作りに参加する人は年々減ってきており、若者がいないだけでなくお年寄りさえも少なくなってきている。平成 17 (2005)年当時は、下立 1 区(40 世帯)の住民約 60 人がちまき生産加工工場に集まり、約 1500 本のちまきを作った。しかし、令和元(2019)年の時は、36 世帯とあまり世帯数は変わっていないのに対し、ちまき作りに参加した人数は 30～40 人ほどであった。また、この時作られたちまきの本数はおよそ 1200 本であった。

また、このような人手不足だけでなく、ちまきを巻く笹が取れないため、十分な笹を確保できなくなっているという問題もある。

3-4-3. 露店商について

大蛇お光行列の影響により、露店商も立ち並び愛本姫社祭りはかなりの賑わいを見せていた。

この露店商は、元々は下立の愛本橋を渡って川の向こう側に巡回法宝物を渡す御影様渡しに伴って行われていた「御影様祭り」で来ていたものが、次第に愛本姫社祭りのためへと移り変わっていった。露店商や野菜売りが並んでいた道は御影様渡しの時から変わっていない。昭和 40(1965)年までは道の両側にびっしりと露店商らが並んでいた。しかし、今ではすたれてきて最盛期の 3 分の 1 以下になっている。また、現在では道路の警備上の都合で片側にしか露店が出せない。

御影様祭りとして行われていた当時から、「こんな平日の半日だけで人が来るのか？露店商の売り上げもないだろう。」と懸念する声があったが、実際のところは平日休日問わず人がたくさんでサーカスなどの見世物小屋も来ていた。しかし、交通ルールが変わり道の片側だけしか露店商を並べることができなくなってしまった。そして昭和 44 年(1969 年)に黒部川が氾濫し、橋も流される大惨事が起きた。その年から急激に露店商も減ってしまった。元々懸念の声もあったが、「こんな災害も起きてますます半日だけで商売になるか？」と拍

車がかかったのが理由と思われる。そして、大蛇お光行列が始まってからは再び露店商が立ち並ぶも、やはり人口減少などや交通規制によって露店商の数は減少傾向にある。

このように、全体として人口減少が愛本姫社祭りにかなり影響を与えている。祭りの後継者不足に加えて、祭りの衰退傾向も見られるように感じた。

4. 御影様迎えと愛本姫社祭りの関係

6 月 21 日という同じ日に、下立では御影様迎えと愛本姫社祭りが行われていた。しかし、御影様迎えは仏教行事であるのに対し、愛本姫社祭りは神道の祭りであるという違いがある。実際のところ御影様迎えと愛本姫社祭りの 2 つの行事には直接には何も関係がなく、偶然日付が同じだっただけである。

4-1. なぜ同じ日に開催されていたのか

なぜ同じ日に開催されていたのか、正確には分からないが、御影様迎えの方が早くから行われており、その日に合わせて愛本姫社祭りが行われるようになった、と地元の方々の多くは考えている。

また、浦山の願蓮寺の住職である長崎香英さんは、歴史的に御影巡回の後に愛本姫社祭りが始まったので、むしろ 6 月 21 日以外の日はありえないのでは、と考えている。特に、巡回法宝物の橋渡しである「御影様渡し」が大きな影響を与えている。その理由は、黒部川は大変な暴れ川であり、ちょうど御影様迎え及び御影様渡しが行われる 6 月 21 日は黒部川の氾濫期であった。実際に、黒部川が氾濫して愛本橋や堤防が決壊し、向こう岸に巡回法宝物を渡せなかった年もあった。よって、大切な巡回法宝物を渡せなかったことがきっかけで、黒部川の氾濫を鎮めるためにお光伝説が生まれ、愛本姫社祭りが行われるようになったのではないか、と推測している。

これに関する証拠があるわけではないが、この推測はかなり筋が通っているように感じる。6 月は梅雨で黒部川の水量も増す時期である。また、黒部川は暴れ川で昔から氾濫に悩まされてきた事実は、様々な資料にも残されている。お光伝説に関しても、黒部川の主である大蛇の下へ嫁いだお光は、黒部川を鎮めるためのいけにえ的存在だったのかもしれない。

一方で、愛本姫社祭りの運営面から見て、6 月 21 日に御影様迎えと愛本姫社祭りが行われている理由は、それぞれを別日にして二回に分けて行うのが大変だったからだ。過去に具体的にいつかは分からないが、一度だけどちらかの日をずらしたことがある。このどちらかに関しては、御影巡回は日程が決まっているので、おそらく愛本姫社祭りの方の日程をずらしたと思われる。その後に地区内でぼや[33]が起きたため「これは祭りの日をずらしたから天罰がくだったのではないか」と地元住民は考え、それ以降また同じ日に御影様迎えと愛本姫

[33] 小さな火災。

社祭りを行うようになった。

4-2. 地元住民の認知度

下立が御影巡回を脱会したため、若い人たちは御影様迎えのことを知らない人がほとんどである。しかし、「御影様」という言葉は皆聞いたことがあるようだ。御影様迎えと愛本姫社祭りが同じ日に行われていたため、両者は本来別々の行事であるにもかかわらず、同一のもので愛本姫社祭りのことを指していると理解している人が多い。若者はお光＝御影様だと思っている人が多いようだ。1 区在住の男性(40 代)に「御影様迎えについて知っていますか？」と聞いたところ、真っ先にお光伝説のことを話した。また、若者だけでなく高齢者さえもお光が御影様だと思っている人もいる。

理由として、御影様迎えは信仰心の強い同行による行事であり、積極的に参加する地元民は多くなかったことが挙げられる。

下立公民館に勤めている女性(70 代)によると、平成 2 年頃(1990 年頃)に一度だけ御影様迎えに参加したことがあった。この方は、生まれも育ちも下立地区で当時は 3 区に住んでいた。この時は女性の家の向かい側に建っていた家が宿をしており、当時はもの珍しさに近所から大勢の人が集まった。実際に女性が御影様迎えに参加したのはこの一回きりである。下立地区内でも「今年はどの家なんやろか」といったように、宿をする家のことを知らない人がほとんどだった。また、下立 1 区の御影様渡しがかなり印象的なようで、他の地区の人々にとって御影様迎えはあまりなじみのない行事のようだった。そして、下立が平成 21(2009)年に御影巡回から抜けたこともご存知なかった。抜けてから数年後に 1 区の人に、「もう誰も世話ができないから下立は飛ばしてもらっている。」と言われて初めて知ったそうだ。

それに加え、認知度の高い愛本姫社祭りの広告に、おそらく日付が同じだったから表記したのであろう、「御影様迎えと大蛇の姫迎え」とあるので、同一の行事だと勘違いしやすかったのかもしれない。愛本姫社祭りの大蛇お光行列は平成元(1989)年から始まり、開催から約 30 年以上が経っている。よって、現在は 40 代の男性も当初は小学生～中学生と推測できる。子供の頃の祭りのイメージや御影様とお光の認識の勘違いが今もそのままになっていることは、十分に考えられる。

高齢者がお光と御影様をちぐはぐに捉えている理由についてはあまり考えつきにくいが、1 区の人よりも 1 区以外の他の地区の方がそのように考えている人の割合が多いように感じた。また、「愛本姫社には御影様という神様がおってね」と新たにそれらしく結び付けて理解している人もいた。しかし、一方的にこれが正しい、これが間違っていると断定するのではなく、こうした人たちの解釈から新しい伝説が生じつつあるのかもしれない。

いずれにしても、愛本姫社祭りの大蛇お光行列が始まってからは、下立の住民は御影様迎えよりもそちらの方に関心がいってしまい、その結果このような理解が生まれたと考えられる。

写真 18　愛本姫社祭りの広告。これは令和元(2019)年に開催された時のもの。
（筆者撮影）

おわりに

時代の流れや人の心の移り変わりと共に、新しく生まれる行事もあれば廃れていく行事もある。伝統的な宗教行事に関しては、昔に比べて人々の信仰心が薄れたことや、昔は農民社会だったのに対し、現在は兼業農家になって勤めに出ていて行事の世話をする人がいないことなどが原因として考えられる。

一方で、現在の祭りの多くは町おこしなどの注目を集める要素を含んでおり、神事など本来の祭りに加えてそれぞれ独特のイベントや行事を新たに作り、人々の関心を引きつけている。

今回の調査では御影様迎えと愛本姫社祭りという 2 つの行事について取り上げた。この 2 つは全く趣旨の違うものであり、共通することは同じ日に開催されているということだけであった。しかし、調べていくにつれてそれぞれの行事について深く知ると同時に、互いに影響を与えていることなどが明らかになった。かつて賑わいを見せていた御影様迎えと御影様渡しは廃れて脱会に至った。原因は、信仰心の薄れや祭りへの関心や経済的事情などに

よるものだった。御影様迎えに代わって賑わいを見せた愛本姫社祭りも、今はかつてほど盛んでなくなっているのが現状である。下立地区の少子高齢化や継承者不足などが挙げられる。

しかし、何事も行事が消えていってしまうことは実に悲しく感じる。地域や人々にはそれぞれの事情があることはもちろん承知だが、それでも下立地区の御影様迎えのことを忘れずに記憶を伝承し、今ある愛本姫社祭りはこれからも続いていってほしいと思う。

謝辞

今回の調査にあたって協力していただいた方々に心よりお礼申し上げます。突然の連絡や訪問だったにも関わらず、真摯に調査に協力してくださいました。また、長期間にわたって何度も訪問したり、電話やメール、SNS などでのやり取りをしばしば行ったりしました。

それだけでなく、こちらが調査を依頼して訪問させていただいているのに、丁重にもてなしてくださり、「むしろ学生さんにこのような行事に興味を持ってもらえたことが嬉しいです。調査をしてくれてありがとうございます。」と感謝されることもありました。

たくさんの素敵な方々にこの調査を通じて出会えたことが幸せでした。皆さんの協力があったからこそ、こうして原稿を無事完成させられました。改めてお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

参考文献

宇奈月町役場、1969 年『宇奈月町史』
下立地区自治振興会、2004 年『下立村史』
富山民俗の会、2018 年『下立民俗誌』
加藤享子、2019 年「越中(富山県)の御影巡回―下新川地方を中心として―」
日本宗教民俗学会　『宗教民俗研究』第 29 号
岡崎京子、1990 年「真宗の遊行仏―富山県の歓喜光院「御影様渡し」を中心にして―」
1990 年度修士論文　富山大学大学院人文科学研究科
宇奈月町教育センター、1990 年「愛本橋周辺―その見どころ―」
富山県教育委員会、2007 年「とやまの祭り」
宇奈月町歴史民俗資料館、2005 年「浦山宿と参勤交代」
宇奈月町、2005 年 7 月号「広報うなづき」
富山新聞社、富山編　2012 年 8 月号「暮らしの歳時記」
京都・東本願寺、2018 年 7 月号「月刊　同朋」
黒部市、2021 年 6 月号「広報くろべ」
黒部市歴史民俗資料館　資料

参考ウェブサイト

日本伝承大艦「愛本姫社」
〈http://japanmystery.com/toyama/aimoto.html〉
(2021/7/18 閲覧)
とやま学遊ネット「愛本ちまき保存会」
〈https://www2.tkc.pref.toyama.jp/general/stdydtl.aspx?stdycd=D0000371〉
(2021/7/18 閲覧)
黒部市移住サポートサイト「【下立】愛本ちまき作りが行われました」
〈https://www.kurobeiju.com/〉
(2021/12/20 閲覧)

第 2 章　じんじん祭りの変遷と祭りを支える人々の思い

橋本　啓

はじめに

今回、私がじんじん祭りを調査しようと思ったきっかけは、小学生の頃に、父親の仕事の関係で黒部市に 5 年ほど住んでいたことがあったからだ。当時の私は、じんじん祭りのことを「かなり大きな祭り」と認識しており、友人たちと一緒に露店を見て回り、射的や金魚すくいなどを楽しんでいた記憶がある。

調査地が黒部市・入善町に決定したときに、私は、当時楽しんでいたじんじん祭りが「どのようにして始まった祭りなのか」、「誰が祭りに関わっているのか」を調査してみようと考えた。そして、コロナ禍で、様々な祭りが中止される中で、じんじん祭りに関わる人たちは現在の状況をどのように考えているかについても伺ってみたいと考えた。

調査では、じんじん祭りの神事を執り行っている八心大市比古神社の方々や祭りの運営に携わっているじんじん祭り実行委員会の方々、三日市の三島町商店街の方から聞き取り調査を行った。本来ならば、じんじん祭り当日に露店が出ている様子も調査したかったが、コロナ禍により、それは叶わなかった。しかし、祭りの神事を見学させていただくことはできた。これらの現地調査に加えて、複数の資料や文献による、じんじん祭りに関する歴史についての調査も行った。

本章ではまず、第 1 節で、じんじん祭りの由来と歴史、神事を執り仕切る八心大市比古神社などを紹介し、第 2 節では、祭りの起源となった屋敷神の信仰を記述していく。第 3 節では、祭りの神事に参加した様子を記述し、第 4 節では、過去から現在に至るまでの祭りの変化を聞き取りや資料をもとにして記述していく。第 5 節では祭りの発端となった八心大市比古神社の方と、祭りの運営を担っているじんじん祭り実行委員会の方の語りをもとに、これからの祭りに対する考え方などを記述していく。最後に、本章での議論全体を振り返りつつ、私のじんじん祭りに対する考えを述べていく。

1. じんじん祭りについて

本節では、じんじん祭りの由来や起源について、聞き取り調査や資料をもとに紹介していく。また、じんじん祭りの発端となった八心大市比古神社についても、聞き取り調査や資料をもとに紹介していく。

1-1.　じんじん祭りの由来と歴史[34]

じんじん祭りとは、富山県黒部市において毎年 6 月 24 日と 25 日の二日間にわたって開催される祭りである。現在は、黒部市東三日市天神社から東三日市通りにかけて露店が多く立ち並んでいる。じんじん祭り実行委員会の島哲雄さんの話によると毎年、黒部市内外から約 2 万人が集まっており、黒部市最大級のお祭りとなっている。

図 1　神社と商店街の主な位置（国土地理院地図より作成）

この祭りの由来は今から 100 年前に遡る。大正 10（1921）年頃から、当時の八心大市比古神社の宮司だった桜井吉次郎さんが、黒部市の三日市周辺の個人宅に点在していた屋敷神（地神）の風化（祠の手入れがされていない・放置されているなど、扱いが粗末だった）に心を痛め、当時の三日市の町長・八心大市比古神社の氏子総代・三島町の会長らと相談して、風化している屋敷神を一か所に集め、合祀することとなった。4 年間の準備を経て、大正 14（1925）年に桜井吉次郎さんの初老記念を契機に 6 月 24 日に盛大に合祀することとな

[34]八木均　『地神さまとじんじん祭り』　平成 17（2005）年　p1～3

り、三日市地区周辺の 20 数家の屋敷神（地神）を八心大市比古神社の飛び地にある三島の大ケヤキの根元に江戸時代から存在する地神塚に合祀した。現在は、毎年 6 月 25 日に三島の大ケヤキの地神塚で神事が執り行われている。

梅雨の時期である 6 月に祭りを執り行う理由は、三日市町内の有志が集まって「祭りの日」を相談しているときに、「人が集まりやすい時期」を考え、「近隣の人たちが田畑や苗の田植え仕事がひと段落しており、町に出やすい」ことや「露天商の人たちの都合が良い時期（下立の御影さま[35]と入善町の観音祭[36]が終わるタイミング）」などを考えた結果、6 月 24 日、25 日となった。

ちなみに露天商を三日市に集めて、祭りをしようと企画したのは、当時の東三日市の町衆である中田次吉さん達だった。

写真１　三島の大ケヤキの地神塚（筆者撮影）

写真２　じんじん祭りの様子
（「とやま観光ナビ」より引用）

写真３　天神社境内（筆者撮影）

[35] 詳しくは第１章を参照

[36] 入善町で毎年 6 月 18～20 日に観音寺から入善中町商店街通りにおいて行われる祭り

八心大市比古神社の現宮司である桜井都嘉佐(つかさ)さんの奥様は、「言い方は悪いかもしれないけど、露天商が集まってきたのは(屋敷神の)合祀がきっかけだったと思う」と語っており、「屋敷神の合祀」と「露店」はあまり密接に結びついていないように窺えた。

昭和 25（1950）年頃には、サーカス小屋や見世物小屋が旧天神社（現在の黒部市市民会館）境内に集まっていたため、当時は、じんじん祭りのことを「サーカス祭り」と呼ぶ人もいたという。多くの露天商が店を並べるので、じんじん祭りは別名、「香具師(やし)[37]祭り」とも呼ばれている。

天神社に露店が多く集まっており、6 月 25 日が天神社の祭礼日だったことから、じんじん祭りの日も 24、25 日となっているが、天神社が起源の祭りではなく、起源は八心大市比古神社である。天神社に露店が多く集まる理由としては、「天神社のほうが、境内が広く、露店が出店しやすかった」という理由があり、じんじん祭り実行委員会の中田利次さんは「当時の八心大市比古神社の宮司と神様が、屋台が集まるような騒がしいことを嫌っていたと聞いたことがある」と語っている。

1-2. 八心大市比古神社の概要[38]

八心大市比古神社とは、黒部市三日市にある神社であり、延長 5（927）年の延喜式神明帳（神社の名前を記載した公簿）に記載されている式内社である。地域の人からは、「三島神社」と呼ばれることが多い。

元々はカヤンドウと呼ばれる場所(現在の黒部市栄町に当たり、YKK パッシブタウン付近)にあったが、戦国時代に上杉軍の兵火にかかり、社殿が消失した。その後、天正 8（1580）年に現在の場所である三島野に移転した。現在の社殿は昭和 17（1942）年に木曽の檜材を用いて建てられているが、令和 3（2021）年 10 月時点では、社殿は修繕工事中となっている。

八心大市比古神社の主神は大山祇命(おおやまつのみこと)・少名彦命(すくなひこのみこと)・軻遇突智命(かぐつちのみこと)で、昔から五穀豊穣の神様として親しまれており、町民はこの 3 神を「三島さま」と呼んで崇敬している。

また、この神様の使いは鶏とされており、昔から鶏肉・卵を食べると、血を吐く・死人が出るなど不幸が続くと信じられてきており、八心大市比古神社の方はもちろん、氏子の方も鶏は食べないようにしていた。戦後しばらくも三日市周辺のお店には鶏肉はおかれていなかった。その後、三日市にも県外からの人が多く来るようになったため、鶏肉が置かれるようになり、神社の境内で行われる地区の盆踊りでも焼き鳥の屋台を出すようになるなど、鶏肉を食べるという禁忌に対しての考えが緩和されてきている。ただ、神社の方は今でも鶏肉を食べないようにしているそうだ。

---

[37] 縁日における参道や境内で、露店や見世物を行う商売人を指す。

[38] 野島好二 『黒部市内の文化財　巡礼手帳』 昭和 53（1978）年　p19～20

写真４　八心大市比古神社の社殿（筆者撮影）　写真５　パッシブタウン内の神社跡地（筆者撮影）

2. 屋敷神（地神）信仰について

本節では、じんじん祭りの起源となった屋敷神（やしきがみ）の詳細について聞き取り調査や資料をもとに紹介していく。また、三日市で屋敷神を合祀した家と合祀しなかった家についても、聞き取り調査や資料をもとに紹介していく。

2-1. 屋敷神の概要

屋敷神とは、家の屋敷内や所有地内に祀る家の守護神を指し、屋敷神を祀る風習は祖先崇拝の原点だと言われている[39]。

富山県内でも屋敷神信仰は様々であり、入善町と朝日町を含む東部の下新川郡は、一様に屋敷神地帯となっているが、浄土真宗の信仰が盛んな西部の砺波地方では、屋敷神信仰はほとんど見られない[40]。魚津市の屋敷神で有名なものとしては県文化財となっている「大沢の地鎮杉」がある。

屋敷神の呼称は全国でも様々であり、東北地方～北関東では「ウチガミ・ウジガミ」、中部地方では「ジジン・ジヌシガミ」、中国地方～九州にかけては「コウジン」、南九州では「ウ

[39] 黒部市教育委員会　『黒部市史　歴史・民俗編』　平成４（1992）年　p1205

[40] ふるさと開発研究所　『富山写真語　万華鏡 132 号』　平成 14（2002）年 p1～7

ッガン」と呼ばれている[41]。ちなみに「じんじん祭り」とは、「地神(ちじん)様の祭り」という呼び方が訛っていったことに由来するとされる。

屋敷神の形態は様々であり、自然の巨木を依り代とする・祠を建てて祀ることが多く、三日市では、新しく家を建てるため、地ならしをしたときに、一番初めに出てきた石を家の鎮めとし、屋敷神として祀ることが多い。ちなみに、誰でも屋敷神を祀ることができるわけではなく、祀ることができるのは、分限者[42]や旧家、本家筋の家柄に限られていた。

屋敷神は主に、家の敷地の東北隅・西南隅・西北隅に祀られているが、方角を決めて祀るのにもきちんとした理由があり[43]、

・東北隅…東北側は鬼門（鬼が出入りするなど、縁起の悪い場所）に当たるため、そこに神様を置くことで悪魔の侵入を防ぎ、災難除けとするため。

・西南隅…西南側は、極楽浄土が近く、仏様が来るための道で縁起が良いとされているから。

・西北隅…戌亥の隅とも呼ばれ、犬は霊界から福徳をもたらす動物だと考えられているから。

三日市では、主に家の敷地の西北・西南隅に祀った祠が多かった。

2-2. 三日市の屋敷神[44]

三日市地区で大正 10（1921）年に、八心大市比古神社の三島の大ケヤキの根元にある合祀塚に屋敷神を合祀した家は、「関口誠治郎、辻太右衛門、菅野蕃、谷直次郎、寺島助之蒸、清水良治、熊野清次郎、大角重平、能登崎虎次郎、吉枝助次郎、女川文作、大島栄次郎、亀谷露太郎、植木覚助」の家となっている。同年に荻生村（1940 年に三日市町などと合併し桜井町となり消滅）では、「中島広作、福井重吉、泉悦郎」の家と不明の御神体数体が合祀されている。遅れて昭和 55（1980）年には、三日市大町の「麻地巳貴」が合祀している。三島の大ケヤキの合祀塚の前に置かれている鳥居と灯籠 2 基は、元々は麻地家のものであり、合祀するときに移転し設置している。

しかし、三日市地区で屋敷神を奉じていた全ての家が合祀したわけではなく、寺島仁兵衛、八木兵太郎、松倉久吉（現在は消滅）の家は合祀していない。合祀しなかった理由として、桜井都嘉佐さんの奥様は「自分たちの家できちんと屋敷神の祀りができていたから合祀しなくて大丈夫だったのかな。元々、合祀した理由も屋敷神の祀りが難しくなった家が多かったからっていう理由だから」と語っている。

合祀しなかった家の一つの八木兵太郎家の屋敷神は、現在三日市椚(くぬぎ)町の八木喬さんのお宅に祀られている。昔は旧宅で祀られており、その旧地には杉の大木が昭和 45（1970）年

---

41 野島好二　『對岳荘対話』　昭和 51（1976）年　p1～3

42 富豪や金持ちのこと。

43 野島好二　『對岳荘対話』　昭和 51（1976）年　p1～3

44 八木均　『兵太郎家：我が家の歴史』　昭和 56 年（1981）年　p78～79

頃まで存在しており、これが屋敷神の依り代となっていた。この杉の大木には伝承「地鎮杉と天狗」という話が伝えられており、「昔、杉の大木に住んでいた天狗が杉の根元で小便をした子をさらって、杉のてっぺんに寝かせていた」という伝承が残っている。

八木兵太郎家の屋敷神は男の神様であり、松倉久吉家の屋敷神は女の神様であったため、当時の住民からは「夫婦になったらいいのに」と言われることもあったという[45]。このような逸話が残っている屋敷神は、全国的に見てもかなり珍しいという。

八木さんのお宅の敷地の隅には祠があり、現在でも屋敷神の信仰が続いていることが窺えた。

写真６　八木家に祀られている屋敷神（筆者撮影）

3. じんじん祭りの当日の流れ

じんじん祭りが行われる６月 24､25 日には､毎年２日間にわたって多くの露店が並ぶが、神社で執り行われる神事は 25 日となっている。コロナ禍ということもあり、令和２(2020)年に引き続き、令和３(2021)年のじんじん祭りも露店は出ず、神事のみの斎行となったが、幸い、神事に参加させていただくことができた。

本節では今年の八心大市比古神社と天神社で行われた神事の様子を、観察および聞き取り調査をもとに紹介する。また、コロナ禍でないときの通常時の祭りの様子も、聞き取り調査や資料をもとに紹介していく。

3-1. 八心大市比古神社の神事

八心大市比古神社の神事は毎年６月 25 日の 13 時 30 分頃から行われる。本来ならば一般の方も参拝可能で、看板などを設置して神事を告知しているが、令和３（2021）年はコロナ禍ということもあり、令和２（2020）年に引き続き神社の関係者のみで執り行われた。

開始 15 分ほど前に､三島の大ケヤキの合祀塚に宮司の桜井都嘉佐さんと奥様が来られて、神事で使用するお供え物や太鼓の準備をされた。

---

[45] 八木均　『地神さまとじんじん祭り』　平成 17（2005）年　p1,2

お供え物は、野菜・果物・お神酒・塩・米・スルメイカ・饅頭・昆布などであった。以前は、屋敷神を合祀した家々からお供え物が届けられており、現在よりその数は多かったそうだ。しかし、家の代替わりなどにより合祀した家が徐々に参加しなくなっていき、現在では八心大市比古神社の氏子の一軒のみがお供え物（果物）を届けるだけとなっており、他のお供え物は神社で用意している。奥様は「屋敷神の信仰は、親から子に云われを受け継いでいかないと続かないからね」と語っており、合祀した家々に神事への参加を促すような連絡も特にしていないという。

写真 7　神事で使用するお供え物（筆者撮影）

準備が終わると都嘉佐さんが装束に着替えて神事が執り行われた。神事の一連の流れは以下のようになっており、およそ 20 分間行われた。

1. 太鼓を叩く（開始）。
2. 祝詞（祓言葉）を唱え、祓い具を使い神事の場を清める。
3. 水の入った瓶の蓋を開け、お供え物を屋敷神に捧げる。
4. 屋敷神を祀る祝詞を唱え、近隣の人々の加護と祭りの継続を屋敷神にお祈りする。
5 . 宮司が玉ぐしを奉納し、その後参加者（今回は奥様と自分）が玉ぐしを奉納する。
6. 太鼓を叩く（終了）。

写真 8　三島の大ケヤキでの神事の様子（筆者撮影）

神事が一通り終わると、そのあとは「お下がり」と言い、お供え物を参加者で分け合う（筆者はお供え物の饅頭をいただいた）。今回の神事では行われなかったが、お供え物であるお

神酒を神事の参加者にふるまう「直会（なおらい）」を開くこともある。直会は、神事終了の際に神饌（お供え物）を参列者が共にいただくことによって、神様の恩頼（恩恵・力）を頂戴する「神人共食」の意味が込められている。宴会を開くこともあり、都嘉佐さんは儀式だけでなく、「お下がりや直会も含めて」の神事だと考えているそうだ。

3-2. 天神社の神事

天神社の神事は毎年 6 月 25 日の 15 時頃から行われており、こちらの神事も八心大市比古神社宮司の都嘉佐さんが執り行っている。天神社で執り行う神事も、コロナの感染状況を考慮して、少人数のみで行うようにしている。

八心大市比古神社の神事は屋敷神の祭礼だが、天神社の神事は天神様の祭礼である。天神社に露店が多く集まっていることから「じんじん祭りは天神社のお祭り」と認識している人は黒部市在住の方でも多いという。

神事が行われる 30 分前には既に何人かの参列者が集まっていた。話を聞いてみると、天神社の中に集まって神事に参加するのは東三日市の町内会の神社委員とじんじん祭り実行委員だけで、一般の方は社の手前まで来て参拝するだけで、社の中までは入ることができないという。それでも通常は露店が多く出るため、境内は人でいっぱいになるらしく、神社委員の方は「やっぱり、露店が出てないと人も集まらないし味気ない」と語っていた。

以下は天神社の神事の一連の流れである。

1. 太鼓を叩く（開始）。
2. 宮司が祝詞（祓言葉）を唱え、祓い具で場を清める。
3. 神主がお神酒の蓋を開け、お供え物を捧げる。
4. 祝詞を唱える。
5. 宮司が玉ぐしを奉納し、その後参加者が順に宮司から玉ぐしを受け取り奉納していく。
6. 太鼓を叩く（終了）。

写真 9　天神社の神事の様子（筆者撮影）

神事の流れは先ほどの八心大市比古神社の神事とほぼ同じで 30 分ほどで神事が終了した後、参加者で直会が一時間ほど行われた。

本来なら室内に大量のオードブルを並べて直会が行われているというが、コロナ禍の状況を鑑みてお神酒と蒲鉾といったおつまみだけで質素に行われた。直会では参加者の方たちが身の上話で盛り上がるなど、終始和やかな雰囲気であった。

写真 10　天神社での直会の様子（筆者撮影）

3-3. 通常のじんじん祭りの当日の流れ

令和 3（2021）年のじんじん祭りでは令和 2（2020）年に引き続き露店は並ばなかったが、本来であれば 24、25 日ともに 100 を超える露店が集まり、老若男女問わず多くの人が集まる。

祭りの 10 日前になると、三日市地区にじんじん祭りを予告する立て看板が設置され、近隣の住民に祭りが知らされる。

毎年、祭り当日の正午になると花火（昼間なので見た目よりも音が重視されているのだという）が打ち上げられる。この花火は祭り開催の合図となる重要なものであり、子供たちに「祭りに参加してもいいよ」と知らせるための合図となっている。筆者が小学生の頃も、花火が打ち上げられると、それを皮切りに友人たちの間で「今日の夜、一緒にじんじん祭りに遊びに行こう」という話で盛り上がっていた。

露店は昼から 23 時頃まで営業しており、祭りの開催期間中は地域の見回り隊であるさくらえパトロール隊・小中学校ＰＴＡ・黒部署の方たちが協力して露店が並ぶ通りの周辺の防犯の見回りを行っている。そのかいもあってか、祭り最中のトラブルは近年ではほとんど起こっていない。

じんじん祭りが終了した次の日の 6 月 26 日の朝方にはゴミ（一般客のポイ捨てや露店が捨てたもの）が多く出る。そのため、6 月上旬に明峰中学校（旧桜井中学校）に協力依頼をしておき、当日には生徒 100 名ほどが集まり、三日市ボランティア部会（婦人会）と一緒にゴミの清掃を行う。東三日市の町民の方も参加してくれるため、250 名以上が午前 6 時からのゴミの仕分け活動・清掃活動に参加する。

4. じんじん祭りの過去から現在の変化

本節では、じんじん祭りで並ぶ露店の数や種類の変化を聞き取り調査や資料をもとに、地図を用いて紹介していく。

4-1. 露店の数の増減と種類の変化

じんじん祭りでは、昭和45(1970)年頃は露店が200ほど出ていたというが、令和元(2019)年では100～120ほどまで減少している。桜井都嘉佐さんが子供の頃は、天神社から黒部電鉄駅付近まで露店が並んでおり、黒部電鉄駅付近の三島町商店街では、商店街の方がお茶やかき氷を販売していたという。実際に、三島町商店街の和菓子屋の「くら田屋」で話を伺ってみると、「昔はじんじん祭り当日になると、店の前に机を出して夏菓子を販売していた」と語っている。ただ、三島町商店街の「中井酒店」では、「昔、じんじん祭り当日になると、他の店の方が出し物をしていたことは知っているけれど、自分たちは酒屋だし、お酒を出すわけにもいかなかったから、特に出し物もしていなかったね」と語っており、必ずしもすべての店が出し物をしていたわけではないことが窺えた。

図２　昭和45(1970)年頃の露店が並ぶ通り（国土地理院地図より作成）

↓

図３　令和元年(2019)年の露店が並ぶ通り（国土地理院地図より作成）

露天商が減少した理由として、様々な事が考えられるが、都嘉佐さんは「単純に露天商の跡継ぎがいないか、露天商と暴力団の繋がりが示唆されたときに、露天商の方は暴力団と繋

がりが無いと証明できなければ店を出せなくなった、という理由があるのかな」と語っている。

実行委員会の島さんは「(コロナ禍で) 露天商が店を出せなくて苦しい状況だから、コロナが収束して、これから祭りができたとしても、ここからさらに露店の数が減っていくかもしれない」と語っている。

また露店の種類も変化してきており、昔は亀やヒヨコ、金魚すくいといった生き物主体の露店が多かったというが、現在は飲食物が中心となっており、飲食物のほうが売り上げは良いという。

5. じんじん祭りに関わる人々の語り

本節では、じんじん祭りの起源となった八心大市比古神社の宮司である桜井都嘉佐さんと奥様、祭りの運営・企画に携わる実行委員会の島哲雄さんと中田利次さんのじんじん祭りに対する考えなどを聞き取り調査や資料をもとに紹介していく。

5-1. 八心大市比古神社の桜井都嘉佐さんと奥様の語り

桜井都嘉佐さんは現在 55 歳で、八心大市比古神社の宮司を務めるようになって 25 年以上になる。ちなみにじんじん祭りの発端となった桜井吉次郎さんは、都嘉佐さんの三代前の宮司に当たる。都嘉佐さんは、三島の大ケヤキでの神事も 25 年以上一人で執り行っているが、以前は都嘉佐さんと先代の宮司である都嘉佐さんの父親が交互に神事を執り行っていた。

じんじん祭りの名称の由来は八心大市比古神社で江戸時代より存在していた地神塚に氏子宅の屋敷神を合祀したことにあるが、神社の方たちは祭りの運営には一切関わっておらず、祭りに関わることといえば、露天商の方たちのために祭り当日の駐車場として境内の敷地を貸すくらいとなっている。露天商の方が境内の敷地を借りる理由としては「水道も通っているし、昔は近辺に銭湯もあり、寝泊まりする場所としてちょうどよかった」からだという。敷地を貸すお礼（あくまでお気持ち程度のもの）として神事のお供え物を露天商の方からいただくこともあった。

これまでの節でじんじん祭りの名称の由来が大正時代、大ケヤキの根元にあった地神塚に個人宅の屋敷神が合祀された神事にあり、現在も 6 月 25 日にその神事が行われていることを知っている人は少ないと分かった。都嘉佐さんはこの状況について、「じんじん祭りは露店もいっぱい出るし、騒ぎたいし、遊びたくなる気持ちもわかるけれど、本来は神様（屋敷神）を祀るためのお祭りだということを知ってもらいたい」と、露店が集う祭りの「にぎわい」という部分だけでなく、屋敷神の「信仰」に対して目を向けてみてほしいと語っている。都嘉佐さんと奥様には二人の子供がおり、長男の方は現在 20 歳で、神職の資格を取るために大学で勉強中だという。奥様は「将来、息子（長男）には宮司を継いでもらうことに

なるだろうし、じんじん祭りの神事も執り行ってもらうことになるかな」とこれからの八心大市比古神社の跡継ぎについて語っていた。

5-2. 実行委員会の島哲雄さんの語り

島さんは 40 年ほど前からじんじん祭り実行委員会に所属しており、書記会計を担当されている。入ったきっかけは、元々島さんは東三日市商盛会という会に入っていて、実行委員会が立ち上がる前に祭りを取り仕切っていた商工会議所に、「地域に詳しい」という理由で要請され、入ったという。「ぶっちゃけたところ、成り行きだったね」と島さんは笑いながら語っていた。

島さんは祭り当日に行う車両の通行止め等の許可申請も担当しており、毎年祭りを取り仕切ることに対してとてもプレッシャーを感じている。「大声じゃ言えないけど、コロナ禍で祭りが中止になったときは少し気が楽になった」と語っていた。

ちなみにじんじん祭り実行委員会設立のきっかけとして、大正 14（1925）年から祭り自体は始まっていたが、当時から多くの露店が出ていたわけではなく活気があったとは言えなかった。そこから露店が増えて活発になったのが昭和 29（1954）年頃からで、活発になればなるほど露店を取りまとめる（ゴミのポイ捨て、当日のトラブルの対応）役が必要になっていき、そこで発足したのがじんじん祭り実行委員会だった。

実行委員会に露店営業の許可を出す権限はなく、露店を出すためには富山県移動商業組合に許可を得なければならず、一時期は、三日市の商店街でも露店を出そうという話は出ていたものの、組合から価格調整で色々言われたため、断念してしまったそうだ。

じんじん祭り実行委員会の決算書を見せていただいたが、例年、じんじん祭りの費用は繰越金を含めて 40 万円程度である。黒部市がお金を出してくれるわけではないので、黒部・宇奈月温泉観光局や三日市の町内会、商盛会・商栄会などが費用を出している。ただコロナ禍でお金は完全にカットされた。

実行委員会のメンバーはほとんどが 60 代以上である。「この年齢にならないと時間に融通が利かない」と島さんは語っている。若い人はどうなのかと伺うと、「若い人はいるにはいるけど実行委員会の仕事はやりたがらない、（実行委員会の担っている仕事は）裏方というか事務系の仕事ばっかりだから。基本的には、力仕事のボランティアに若い人は行っている。」と実行委員会の役割の引継ぎの難しさを語っていた。

祭りの開催決定の判断を行うのも実行委員会の役割であり、地域の方からは、コロナ禍である令和 2（2020）年と令和 3（2021）年は「(祭りを）やらないでくれ」という意見がほとんどで、「開催してほしい」という意見はなかった。ただ、子持ちの親からは「子供にじんじん祭りを体験させてあげたいけど（コロナ禍ということもあるし)、しょうがない」という意見はあったという。

島さんは実行委員会として、じんじん祭りを運営していく事にプレッシャーを感じてはいるものの、「三日市に住む子供たちのためにもじんじん祭りは残したいと思っているし、

今まで続いてきた祭りを風化させたくない」と祭りを維持していきたい思いを語っている。

5-3. 実行委員会の中田利次さんの語り

これまでの節で、じんじん祭りが始まった際に、三日市地区に露天商を呼んだのは中田次吉さんをはじめ、当時の東三日市の町衆だったと述べたが、利次さんは次吉さんの孫に当たる。

以前は利次さんの母親である中田みよさんが、露天商の世話をしており、露天商と三日市の住民の仲介役を担っていた。露天商の方は祭りが始まる前には、みよさんに挨拶をしなければならなかったそうだ。露店とのつながりを持っているということで利次さんは祭り実行委員会に入っている。しかし、利次さんは、「金銭が発生することに関わりたくない」ということで、祭りの運営・企画にはあまり関わらないようにしているそうだ。

現在 80 代の利次さんが子供のころは露店の数も少なく、旧天神社（現黒部市市民会館）の周辺にちらほら露店が集まっていただけだったそうだ。現在は露店の数も 100 を超えるようになったが、「コロナ禍が終わったら、露天商がまた三日市に来てくれるか分からない」とこれからの祭りのことを語っていた。

おわりに

本章では、じんじん祭りの歴史や祭り当日の様子、祭りに対する人々の思いについての調査報告を行った。じんじん祭りが家の守護神である屋敷神の風化から始まったということ、過去から現在に至るまでの祭りにおける露店の種類や数の変化を知ることができた。

じんじん祭りについての聞き取り調査を行っていくなかで、話を伺っている時に、様々な人から缶コーヒーをいただくことが多かった。「何故こんなに缶コーヒーをいただく機会が多いのか」と疑問に思い、缶コーヒーをいただいた際に、そのことについて伺ってみると、「富山の方たちは家に缶コーヒーを箱ごと買っておいて常備しておき、来客が来たらそれを渡す」ことが多いという。じんじん祭りだけでなく、こうした富山の県民性を知ることもできた。

宮司の桜井都嘉佐さんは、現在のじんじん祭りについて「屋台だけでなく、神様の信仰の部分にも目を向けてみてほしい」と語っていた。その発言から、現在のじんじん祭りにおいて「露店」と「信仰」が切り離されているように感じられた。じんじん祭りの存続・盛り上げにおいて露店はもはや必須となっているが、露店を見て回り、楽しむことだけが祭りではないと考える。「何故祭りが始まったのか」を知ることは祭りを継続していく上でも重要なことではないだろうか。

聞き取り調査を行っている中で、誰もが「コロナ禍で、露天商の人が苦しい状況だから、これから祭りが開催できたとしても、以前のように露店が集まるか分からない」と口にしていた。令和 3（2021）年現在もコロナ禍の最中であるが、今後祭りが開催できたとしても、

コロナ禍以前と全く同じように開催していくことは難しいように感じられた。しかし、じんじん祭りは黒部市の名物ともいえる祭りであり、天神社の神社委員の方は「孫と一緒に遊びに行ける機会だし、毎年楽しみにしている」と語っているなど、人との繋がりの場としても機能していることが窺えた。そのようなじんじん祭りが風化していくのは、子供の頃に祭りを経験している私個人としても心苦しい。

この報告書が、多くの人にじんじん祭りを知ってもらい、祭りに対して考えるきっかけとなれば、幸いである。

謝辞

今回の調査にご協力いただいたすべてに皆様に心より御礼申し上げます。お忙しい中、度重なる訪問にも快く応じていただいた八心大市比古神社の桜井都嘉佐様と奥様、神事を見学できるように取り計らってくださった実行委員会の島哲雄様、過去のじんじん祭りの様子を語ってくださった実行委員会の中田利次様と天神社の神社委員の方々、三島町商店街の方々にはこの場を借りて再度御礼申し上げます。皆様のご厚意により、報告書を執筆することができました。誠にありがとうございました。

参考文献

八木均、2005 年『地神さまとじんじん祭り』私家版。
八木均、1981 年『兵太郎家：我が家の歴史』私家版。
野島好二、1978 年『黒部市内の文化財　巡礼手帳』越中文化研究所。
野島好二、1976 年『對岳荘対話』黒部市教育委員会・越中文化研究所。
野島好二、1980 年『じんじんまつり』私家版。
黒部市教育センター、1990 年『わたしたちのくろべ市にある行事や史跡』黒部市教育センター。
ふるさと開発研究所、2002 年『富山写真語　万華鏡 132 号』ふるさと開発研究所。
黒部市史編纂委員会、1992 年『黒部市史　歴史・民俗編』黒部市。

参考ウェブサイト

富山県「富山県観光公式サイト　とやま観光ナビ」
〈https://www.info-toyama.com/events/50020〉
（2021 年 12 月 10 日閲覧）

第２部

食文化をつくり、伝える人々

第 3 章　宇奈月町の伝統食であるトチの実について
―内山地区に焦点を当てて―

小川　萌世

はじめに

宇奈月町のトチの実について知ったのは、宇奈月温泉街で筆者の興味分野である食文化をテーマに聞き取り調査を行ったときだった。そこで「この地域ではトチの実がよく採れる」ということ、更に「トチの実はアクを抜かなければ苦くて食べることが出来ないが、加工方法が難しいため、現在宇奈月温泉街で加工が出来るのは数人しかいない」という話を伺った。短時間に簡単な調理で食べることができる加工済みの食品や、ファストフードが溢れている生活の中で、この話は非常に印象に残った。そして食生活が豊かになり、手間のかかるトチの実をわざわざ食べる必要がなくなった今日、この地域ではどんな時に、どのような方法や目的で食べられているのかを調べるために調査を進めた。

本章では、伝承・保存活動を活発にされている女性や団体がある内山地区に着目する。令和 3 年(2021 年)の夏にこの地区で主に聞き取り調査を行い、秋にはトチの実のアク抜き作業や公民館祭りに参加させていただいた。以下ではその現地調査と文献調査をまとめ、時代とともに移り変わるトチの実について述べる。

1. 内山地区について

本章で取り上げる内山地区は、宇奈月町の奥まったところに位置している。山間部の黒部川沿いに、細長く集落を形成しているため、非常に厳しい自然条件下に置かれてきた。水田はほとんどなく、大正 11 年(1922 年)に黒部川の電源開発が始まるまで、石灰製造[46]や炭焼き、狩猟、木挽き[47]などが生業となっていた。しかし、このような自然的にも経済的にも厳しい場所だからこそ、特色のある生活文化が生まれたと考えられる。

---

[46] 内山は、文政 9 年(1826 年)に現在の滋賀県から製造法を教わったことを機に、山から採れる石灰石をかまどで焼いて交易をしていた時代がある。

[47] 伐採した樹木を製材する職人。

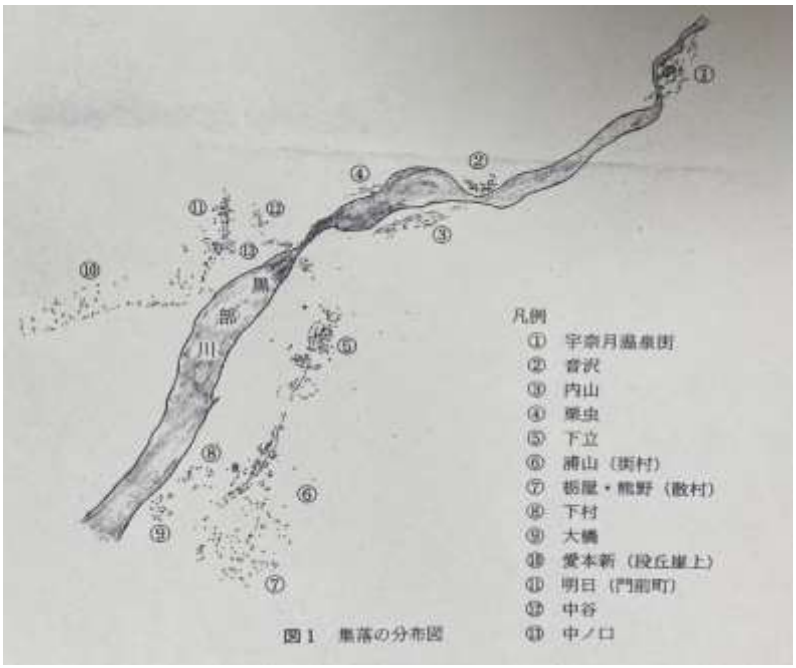


図 1 宇奈月町の集落の分布図（『追録 宇奈月町史 自然編』より引用）

2. トチの木について[48]

トチの木は掌のような七枚の大形の葉をつける落葉樹である。種子は梨に似た果皮に包まれているが、完熟したものの多くは、果皮が裂けたままの状態で落下する。その果皮の中に入っている実は、茶褐色でクリによく似ているが、非常に堅い皮を持っているため生のままではナイフでもこの皮を剥くことは難しい。

写真 1　トチの葉（内山公民館提供）

写真 2　果皮に包まれたトチの実（内山公民館提供）

[48] 松山利夫著『ものと人間の文化史　木の実』参照。

分布は、トチの木が水気を好むため山地斜面の沢すじに限られている。したがって採集の効率はいいが採集地が限定されている。このことからどこにでもある樹木ではないことがわかるが、本章で取り上げる内山地区には、昭和 40 年(1965 年)1 月 1 日に県の天然記念物に指定された「とちの森」がある。そこには、樹齢約 300 年、幹まわり 5.5 メートル、高さ 15 メートルの大木が 3 本ある。他にも、山一面がトチ林になっている地域もある。富山県内に残っているトチ林のほとんどは雪崩防止林であることが多いが、内山の「とちの森」は食用を主体として大切に保護されてきた。そのため、かつて地元ではトチの木が「トノサマノキ」という愛称で呼ばれていたこともあり、秋になるとこの実を採集していたようだ。特に乾燥させると長期間保存できることや、米や大麦よりもカロリーが高いことが注目され、食糧難の時代を支えたものの一つとされる。

しかしトチの実は、渋さの原因であるタンニンと共に、融血作用をもつサポニンという有毒な成分が含まれているため、生食することはできない。トチを食用にするためには、タンニンやサポニンを取り除き、デンプンを上手く取り出さなければならないのだ。そのため、非常に複雑で長い日数を要するアク抜きの技術を習得する必要がある。

3. トチの木にまつわる歴史

本節ではまず、トチの実の食用が始まったとされる縄文時代を取り上げ、トチの実が遙か昔から人びとの食生活に関わっていたということをまとめる。そして次に江戸時代を取り上げ、トチの実が食用だけでなく木地としても活用されてきた歴史の中で、村人がトチの木を大切に守っていたようすを振り返る。

3-1. 縄文時代の食生活のようす[49]

縄文時代は、主に狩猟・漁労・採集という三つの方法で食物を獲得していた。特に木の実の採集は、この時代の文化の基層となっており、埋没した遺跡の中から多量の種子が発見されている。宇奈月町でも、愛本新遺跡からトチやクルミの皮が出土しており、トチやカシ、シイ、クルミなど、自然豊かな恵みを活用した生活を人びとは営んでいたようだ。このうち生食できないトチの実やドングリが、縄文時代にどのようにアク抜きされ、どのように食べられていたのかを記す考古学上の資料はほとんどない。全国的に、生食できるクリやクルミの出土遺跡は縄文時代前期から認められている一方で、トチは晩期になってから増加しているため、この時期からアク抜き技術が確立されたと想定することができる。

また、黒部市宇奈月町の浦山字山越割（あざやまこしわり）にある浦山寺蔵遺跡では大形の土器や住居址内外で見つかった 57 個の穴が検出されていて、これらは加工したトチの実を一定の温度で貯蔵する際に使われていたと考えられる。縄文人も、現在と同じようなやり方でアク抜きをした

[49] 『追録 宇奈月町史 歴史編』，松山利夫著『ものと人間の文化史　木の実』参照。

トチの実を食用にしていたのだろう。そのため集落を構える際は、近くにアク抜きの工程に必要な湧き水や流れる小川があることが欠かせない条件だったということも考えられる。

これらを踏まえて、トチの実をはじめとする木の実は、縄文時代から重要な食糧資源の一つであったと言うことが出来る。

3-2. 江戸時代における黒部奥山の伐採事業とトチの木の保全[50]

黒部奥山は容易に人を寄せ付けない険しい地形であるが、多様な樹木が生育する豊かな森林地帯であるため、江戸時代その全域は加賀藩の御林山[51]の一つとなっていた。ここでは、雑木の伐採だけでなく下草や枯枝の採取も禁じられ、流木でさえも藩の管理下に置かれていた。加賀藩が、用材として利用するために黒部奥山で伐り出しの対象としていた樹木は、主にケヤキやヒメコマツ、モミ、ツガ、クリ、クロベ(ネズコ)であった。そして、黒部奥山一帯には「奥山廻り」を設け、国境の安全確保や森林保護にあたった。その際、内山や音沢の杣(そま)人[52]は「奥山廻り」の人夫として奥山を案内する役割を担っていたようだ。

材木は、寛政年間(1789 年～1801 年)になると江戸や大坂、金沢の町づくりのために、より需要が高まった。しかし、黒部奥山は人里離れた険阻な場所であるため、林産資源の開発は容易ではなく、収益をあげるまでには至らなかった。そのためこの時代は、黒部奥山産の材木が金沢まで運び出されることはなく、新川東部の宿駅の造成や、入善宿や舟見宿の修復・維持のために利用されることが多かった。

しかし明和元年(1765 年)になると、伐り出しと川下げの苦労を改善するために、材木を木呂(ころ)[53]にしてから川下げを行うようになった。そのことをきっかけに採算がとれるようになり、安政 4 年(1775 年)からは請負ではなく藩が直営で行う伐採事業が行われるようになる。その後も加賀藩に産物方という特産物を扱う役所ができたことで、黒部奥山でも大がかりな事業が行われるようになっていった。

一方で、このように大規模な伐採事業が行われるたびに、村人は「トチの実は食用の足しにしていて重要なものであるから、トチの木は伐採しないでほしい」と願い出て保全に努めていた。そのため、慶応 2 年(1866 年)にも魚津の木地職人が、トチの木とブナの木で腕木地を作りたいと願い出たが、「トチの実は食用として必要なものであるためトチの木が伐られたら食用に差し支える」ということを訴えている。このとき、「代わりに米を与えても良いが、トチの実は食糧としてどの程度用いられているのか」という質問を受けたようだ。これに対して音沢の村役人は以下のように述べている。

「音沢村には六八軒の家がある。このうち家族数の多い者は七、八俵から十俵程、小勢の

---

[50] 『追録 宇奈月町史 文化編』参照。

[51] 幕府や藩が直轄していた森林。

[52] 材木を伐ったり、運び出したりする職業。

[53] 短く伐った薪材。

者は二，三俵から四、五俵の栃の実を拾い採り、翌年まで貯えておいて、蕎麦粉を加えて団子にして食べている。仮に一軒につき三石ずつとすると、六軒では二〇八石になる。栃の実は皮が薄く三、四日水にひたし、臼で砕くと一石の栃の実は米六斗余りの代わりとなる。今もし栃の木を伐り倒し、代わりに米を渡せば、栃の木は次第になくなり、永久に米を渡さなければならなくなってしまう。元来、栃の木は山方の食糧であるが、若木は実がならず、老木になればなるほど実のよくなる木である。山方ではこの木を大切にし、万一心得違いの者があり、これを伐り取ったりすると厳重に詮議し、過怠銭[54]を徴収したりしている。特に穀物の凶作の年などは綿密に拾い上げるし、近在の者も拾い取っている。栃の木のうち男木は実がつかないというが、そうではなく、女木は一〇石ほど実り、男木は一斗ばかり実をつける。」（伊東「御用留」慶応二年十月）

以上の文言から、当時トチの実が日常的に食べられていたことや、いかに重要な食材であったのかがうかがえる。

明治になり、加賀藩が行ってきた伐採事業や奥山廻りが廃止されると、山稼ぎや石灰製造が盛んになるが、その影響で森林が濫伐されるなどの弊害も出てくる。村が不景気になり財政が苦しくなると、80 戸の住民が北海道へ移り住んだり共有林を売ったりしなければならなくなった。しかしこのときも村人は、トチの木だけは切らないことを条件にしている。

以上のことから、内山や音沢の村人が、トチの木の伐採を行わないよう強く要望してきたお陰で、今もトチの巨木が残っていることがわかる。つまり、現在富山県の天然記念物とされている内山の「とちの森」は、この頃から山里の人びとによって大切に守り育てられてきたのだと言うことが出来るだろう。

3-3. 音沢村における木材産業[55]

江戸時代、御有林である黒部奥山は人びとの立ち入りが禁止されていたが、杣人や木挽きだけは特別な保護を受けて椀木地の伐採が許されていた。内山地内や音沢地内でも、藩の許可を受けた薪木呂流しや椀木地伐採が行われてきた。特に音沢村では、黒部奥山に繁茂しているトチやケヤキを資材に、御膳や御椀の木地の産地として栄えていた。村の８割にものぼる人びとが木地職に携わっていたため、黒部峡谷鉄道関係の仕事に従事するまでは、村全体が木材産業に関する仕事をしていたといえる。

しかし、当時食糧源として重要だったとされるトチの木の伐採が、なぜ許されていたのかという疑問もあるため、それについて考察する必要がある。

一つは、木地職人[56]はもともと放浪者であることが多く、日本各地を放浪し、素材が豊富にある場所を探している中で、奥山の許可を得て定着するようになったと考えられる。そのため彼らは地元の人ほどトチの実に関心がなく、そのものの食糧としての価値を認識して

---

[54] 過失行為を償うために払う金銭。

[55] 『追録 宇奈月町史 文化編』参照。

[56] 木の加工を行う人のこと。

いなかったのかもしれない。実際、もともと愛本や栗虫方面で炭焼きや狩猟をして生活していた人たちが、さらに奥地に入り込んでそこに住み着いたことが音沢の始まりであるとも言われている。

二つ目は、トチ板が多額の収入になったからという説も考えられる。岐阜県の徳山村[57]でも大正 10 年(1921 年)頃から杣や木挽きと呼ばれる専業者によって、食糧として重要であるにも関わらず、トチ板の製造が始まっている。そのため、不足した食糧の移入代金に当ててもなお余るほどの収益が、トチ板によってもたらされたと考えることも出来る。

現在も、音沢地区では、昭和 22 年(1947 年)に見舞われた大火による焼失を免れた品を大切に残している家がある。そのため音沢村で聞き取り調査を行い、そこに住む 79 歳の佐々木さんという男性に現存するトチの木製品を見せて頂いた。その品は、100 年以上も前に流木を拾って作られたという伸し板で、蔵の二階から持って来て見せてくださった。かつては、ケヤキは硬く耐久性があるため主に家の柱や臼の木地などに使われて、トチは蕎麦や餅を作る際に使う伸し板やコネ鉢などに使われていたという話もしてくださった。また、トチの木は木目が美しい特徴もあるため、着物の裁ち台[58]にも使われることがあったようだ。

写真 3 トチの木で作られた伸し板
(筆者撮影)

このように木地屋として栄えていた名残のある音沢村だが、内山のように、公民館が開催する地域のお祭りでトチの実を使った料理を振る舞うといった伝承活動(後述)は特に行われていない。そのため、現在の音沢地区ではトチの木を木地として使われたものが残されていることはあっても、食用としての関わりは薄くなった地域であることもわかった。

4. 戦中戦後のトチの実に関する記憶[59]

宇奈月町の中でも内山地区と音沢地区は特に耕作地が少なく、山陰に遮られて日照時間も短い。そのため明治から昭和初期は、農家であっても米を十分に確保することができなかった。稲作だけでは食糧の自給が困難で、他町村から購入したり親戚から譲り受けたりしな

---

[57] 岐阜県揖斐郡にあった村で、日本最大の総貯水容量を誇る「徳山ダム」(2008 年完成)の建設によって村民が離村したことで知られている。現在は藤橋村に編入合併している。

[58] 着物などの布を裁つ際に用いる長方形の台のこと。

[59] 『宇奈月の社会と民俗』参照。

ければならなかった。したがって、白米を日常的に主食にすることはあまりに高価なため、できる限り節約するよう、トチの実などの食糧を米に混ぜて不足した分を補っていた。白米を日常的に食べるようになったのは裕福な家庭では大正中期で、一般的には昭和 4～6 年頃（1929～1931 年）であるが、終戦（昭和 20 年）前後も全国的に厳しい食生活を強いられた。本節では、戦中戦後しばらくの間食べられていたトチの実に関する幼少期の実体験について、内山地区に住む中西玉枝さん（93 歳）、竹山久枝さん（92 歳）たちから伺ったことをまとめる。

4-1. 戦時中の食事

まず戦時中の食事では、主食の米が不足していたため、米に大豆やヨモギ、さつまいもなどの芋類を混ぜて増量していた。

黒部川に沿って群生していたトチの木からとれるトチの実も、米の代用やかさ増しにする材料の一つとなっていて、稲作や焼畑を行ってもなお不足する分を補っていた。まだ冷蔵庫がなかった戦時中は、アク抜きしたトチの実を粉に挽いて長期保存し、その粉と水だけを混ぜて作った、雑炊のような「ゾロ」を食べることもあった。当時のこの地区ではトチ餅に加工されるよりも粥や「ゾロ」として調理されることが多かったようだ。そしてトチの実を使った料理を食べる頻度は、竹山さんの家庭ではほとんど毎日、中西さんの家庭では月に約 10 回食べられていたそうだ。このように、当時の食糧不足が、トチの実を食べる習慣を存続させていたことがわかった。

そもそも戦時中に食糧が少なかった理由については、「米を育てても配給によって都会に流れてしまったため食べるものが少なかったからだ」という話や「兄弟が多かったから」という話もあったが、「内山の地形が川と山に挟まれているため、戦時中に限らず作物を育てることができる土地面積が少なかった」ことがもっとも大きな理由と考えられている。

副菜については、冬の間に樽に沢山漬けておいた漬物や味噌汁を三食欠かさず食べていたそうだ。その際に使う野菜は自分の家の畑で育てた菜っ葉類や里芋などで、自給自足の生活を送っていた様子がわかった。煮物にしたり、キュウリに味噌を付けて食べたりすることもあった。また、トチの実の他に保存して食べていたものの一つに、ワラビやゼンマイなどの山菜がある。これらは、冬の間に塩漬けにして樽で保存しておいたり、乾燥させておいたものを水で戻したりして食べていたそうだ。

戦争が終わって、5~6 年後くらいまではまだ食糧が十分に手に入らなかったため、戦時中と同じような食生活が続いたが、内山に店[60]や農協が出来て近場で食糧が揃うようになると、次第にトチの実のような手間のかかる救荒食は食べられなくなっていった。その後冷蔵庫が普及してからは肉や魚も日常的に食べることができるようになり、竹山さんはその後の食生活について「季節がわからなくなった」とおっしゃっていた。そのことからも、それまでの食生活がいかに自然に寄り添ったものだったのか、いかに自然から採れる食糧を活用し

[60] 内山は、5～6 軒ほどの店が戦後出来たが、20 年ほど前までに全てなくなっている。

ていたのか、想像することが出来た。

他にも、戦後に生まれた公民館長の大橋清信さん(70 代)からは、「かます[61]に入れられた大量のトチの実が納屋に貯蔵されていて、母親が時々お粥などにして出してくれることがあった」ことや、当時大橋さんはまだ子供で、トチの実だということは知らずに、見た目が似ている栗と勘違いしていたという思い出話などを伺った。

4-2. 戦時中のトチの実加工について

当時は、中西さんや竹山さんの父親や母親の世代が、秋になると宇奈月にある村の共有山まで籠を担ぎ、約 4 ㎞の道のりを 40～50 分ほど歩いてトチの実を拾いに行っていた。一度の採集で、約 20 ㎏のトチの実を背負って持ち帰る。拾う山は共有山で村中の人びとがやってくる場所であることから、食糧が少ない戦時中は競うように拾っていた。そのため、他の村人と時間帯が重ならないよう、山に着くころにようやく明るくなるような、夜明けのまだ暗い時間を狙って家を出発していたそうだ。現在はトチの実を拾う人は減少しているため、そのように時間帯を考慮する必要はない。

その持ち帰ったトチの実を加工する役は高齢者で、中西さんや竹山さんの祖母にあたる人が各家庭で行っていた。このトチの実の処理は、冬期の女性の仕事となっていたようだ。子供たちも、学校から帰ってきたらトチの実の水を取り替える作業を任されていた人もいるようだが、加工は塩気が少しでも混ざってしまうと苦くなってしまう難しい作業であるため、子供が手伝うことはほとんどなかったそうだ。そのため、竹山さんは加工の経験はなく、中西さんも加工を教わったのは大人になってからである。中西さんは当時を振り返り、美味しく仕上げるのは難しく、頑張ってアク抜きをしても苦みが残ってしまったと話してくださった。現在（2021 年)、中西さんと竹山さんがトチの実を食べる機会は、近所の方がお裾分けをしてくれる時と公民館祭りの時に限られているが、年に 1、2 回はトチの実料理を食べている。竹山さんも、「トチの実を使った料理は美味しいため、近所の方が加工・調理して持ってきてくれると嬉しい」とおっしゃっていた。

ただ、戦時中はアク抜きの正しいやり方を知らない人が多く、また、行事や他人に振る舞うものではなく家庭内で日常的に食べるものであったため、時間をかけて丁寧にアク抜きをするようになったのは実は平成になってからだという。更に米の分量も少ないため、戦中戦後にトチの実を食べた記憶がある人は「トチの実は美味しくないものだ」というイメージを抱いていることも少なくない。そのため、今日に至るまでにトチの実に対するイメージが向上した理由には、次節で述べる山田恵美子さんや「こごみの会」の方達が、アク抜きの方法を学んで、行事を通して継続的にトチの実料理の普及や伝承活動を行ってきたことが影響しているといえる。

---

[61] 藁むしろを二つ折りにし、縁を縫い閉じた袋。

5. トチの実の伝承を担う「こごみの会」について

ここでは、戦後に食糧が豊かになり手軽に食べられるものも増えたことで、食べる機会が一度衰退してしまったトチの実が、再び内山で食べられるようになったきっかけを作った「こごみの会」について紹介する。

5-1. 山田恵美子さんについて

「こごみの会」について説明する前に、この会の発起人である山田恵美子さん（87 歳）について紹介する。

山田さんは下立から内山に嫁いだ方で、愛本の発電所で働きながら「こごみの会」の活動を牽引してきた。平成 31 年（2019 年）から娘さんが住む千葉県に移住されている。そのため、公民館長の大橋清信さんの仲介のおかげで、山田さんがお盆で内山に戻って来ている時に調査に協力して頂くことができた。

山田さんは書道や水墨画、山登りといった趣味や習い事など、多彩な経験もお持ちだ。私が調査に伺った際は、手作りの紫蘇ジュースを用意してもてなしてくださり、帰る時にはいつも一緒に作ったトチの実料理をたくさん持たせて見送ってくださった。そういったご厚意は私に限らず誰に対しても同様で、近所の方からトチの実の加工や調理を頼まれた際も快く引き受けている姿を見せて頂いた。

また、お話を通して内山だけでなく各地に知り合いがいる人脈の広い方だという印象も受けた。そのため山田さんのことは、お会いする前から耳にしていた。例えば宇奈月温泉街でフィールドワークを行った際も、お土産屋「柏や」や酒おみやげの店「いわさき」のお店の方とお客さんにトチの実について話を伺うと「加工のやり方はわからないしやったことはないが、公民館祭りの時や内山に住む山田さんからお裾分けしてもらった時にトチの実を食べることができた。」という話を聞いた。内山の方達も、トチの実の話をすると度々山田さんの話をしてくださる。この地域では、「トチの実と言えば山田さん」という印象が定着しているようだ。

写真 4　山本さん（右から二人目）と加工法を教わる山田さん（左から一人目）（山田恵美子さん提供）

そんな山田さんが生まれ育った下立にはトチの実を食べる風習はなかったため、山田さんは内山に嫁いでから初めてトチの実を使った料理を食べたそうだ。その時にトチの実のおいしさを知り、「自分でも作りたい」と思った山田さんは、近所に住んでいた山本あや

さん(平成 18 年(2006 年)に 90 歳で亡くなられた)という女性に一からトチの実のアク抜きを教わった。

山本さん自身も、山田さんと同じように内山に住んでいた年上の方から加工法を教わったそうなので、トチの実に関することは家族で教え伝えてきたものというよりは、地域のお年寄りから受け継いでいるものだということがわかった。山本さんは、「栃の花グループ」(次項参照)や「こごみの会」に参加していたわけではないが、山田さんの自宅で見せて頂いた過去の写真には、山本さんを数人の女性たちが囲み、作業をしながらトチの実加工のやり方を教わっている様子が映っている。

ただ、トチの実の加工の仕方は人や地域によって大きく異なる。そのため山本さんから何度も基本的な工程を学んだ後も、山田さんは自ら東礪波郡(ひがしとなみぐん)の利賀村[62]などさまざまな地域のセミナーに赴き、各地のやり方を学び続け、良いやり方を取り入れながら独自のやり方を編み出した。そして「こごみの会」を通して「郷土の料理を受け継いでもらいたい」という思いで、内山の郷土料理の PR やトチの実を次世代に伝える活動や、加工の技術指導などを長年行ってこられた。宇奈月公民館で働く富川理穂さんも、山田さんから一連の技術指導を受けたため、現在宇奈月温泉街は内山と全く同じ加工方法を取り入れている。

このような山田さんの熱心な活動は、度々新聞で取り上げられたり感謝状などで表彰されたり、評価を受けている。平成 24 年(2012 年)度には黒部市の伝承芸能・伝承技術士[63]にも認定されている。

5-2. 会が発足した経緯と活動内容

現在「こごみの会」と呼ばれている団体は、元をたどると非常に私的な集まりであり、山田恵美子さんを中心とした近所の仲良しグループが発展して出来たものである。しかし、グループに名前もついていなかった昭和 56 年(1981 年)頃から、トチの実加工の勉強や伝承活動を行っていたようだ。

平成 7 年(1995 年)頃になると、内山に婦人会がなくなったことなどをきっかけに、「栃の花グループ」という名前で本格的な活動が始まる。当時は主に、現在南砺市の一部となった平村の食生活改善推進協議会や黒部地区生活指導者連絡会が開催する郷土食の交流会に参加したり、夏は町内ふれあい祭りのために魚のつかみ取りを企画し、秋になると公民館祭り(後述)でトチ粥の試食コーナーを設けたりしていた。更に、保育園でヨモギ団子作りの実習をしたり、特別養護老人ホームおらはうす宇奈月に唄や踊りで慰問したり、正月にひとり暮らしの高齢者にトチ餅を配布したりするなど、幅広く数々のボランティアを行っていた。

---

[62] 現在は南砺市の一部となった。

[63] 黒部市の各地区に伝わる、芸能および伝統の保存・育成を図るとともに、それらの推進者・指導者として社会的評価を得て活動するよう定めた認定制度。他にも獅子舞や天狗の舞の保存会の代表者が認定制度の対象者となっている。黒部市教育委員会が施行している。

平成 15 年(2003 年)頃からは現在の「こごみの会」という名前に変更され、地区の若い世代にも声をかけてメンバーを改めた。現在その会は、内山の 40 名ほどの方々で構成されているが、任意で活動を行っているため実際に活動を行っている人数は半分ほどになる。70 代を中心に活動しているが、それより若い世代が会に所属していないため、このままでは自然消滅してしまうという懸念はあるものの、山田さんが移住をきっかけに会長を退いた後も、「こごみの会」の会長は松平孝子さんに、そのうちトチの実の伝承活動の部門は川内清子さんに引き継がれて活動は続けられている。特に、町内ふれあい祭りや公民館祭りなどのイベントでトチ粥を振る舞う活動は毎年開催されている。他にも、依頼があれば「布橋(ぬのばし)渡り」[64]や「SPA マラソン in うなづき」[65]というスポーツイベントなどで来場者にトチ粥を無料で提供している。活動ごとに参加するメンバーや数は異なるが、町内ふれあい祭りや公民館祭りには大体 15,6 人が参加してきた。

このように近年は、人びとが多く集まるイベントの中でトチの実料理が振る舞われてきた。そのため、2020 年のコロナ禍の影響によりイベント自体が開催できなくなってしまったことで、同時にトチの実を食べる数少ない機会もなくなってしまった。加えて、積極的に伝承・保存活動を続けていた山田さんが千葉へ行かれたことも、トチの実料理を振る舞う機会の減少に影響していくと考えられる。

しかしイベントで振る舞われるトチの実料理は、小さい子供もおかわりをしたり高齢者は懐かしいと喜んでくれたりするそうで、こういった行事でしか食べることができないトチの実料理を楽しみにしている方のためにも、また、山田さんを初めとする「こごみの会」が守ってきた内山の伝統食をこれからも大切にするためにも、今トチの実に再注目する必要があると考える。

6. 現在行われている加工方法

ここでは、山田恵美子さんと「こごみの会」の方達に教えて頂いた、現在のトチの実加工のやり方をまとめる。同時に、かつて行われていた加工方法と比較して異なる点についても述べていく。

---

[64]江戸時代に立山への登拝を許されなかった女性達が極楽往生を願った儀式である「布橋(ぬのばし)灌頂会(かんじょうえ)」にちなんで、平成 17(2005)年に立山町芦峅寺(あしくらじ)の布橋周辺で行われた。明治時代の廃仏毀釈で途絶えていたが、平成 8(1996)年の国民文化祭で 130 年振りに再現されて以来、9 年振りの復活であった。今では 3 年に 1 度の儀式行事で、仏教音楽を奏でる僧侶と、目隠しをしたり白装束を着たりした富山県内外の女性達が布橋に敷かれた布の上を渡り、心を癒やしている。

[65]宇奈月温泉街を、仮装しながら走ったり歩いたりして楽しむことを目的としたマラソン大会。

⑴採集

8～9 月中旬、内山の「とちの森」や朝日町の小川温泉近く、新潟県の糸魚川、魚津の大沢といった場所までトチの実を拾いに行く。現在内山地区の人びとが「とちの森」まで行く機会は減少してしまったが、かつてその森の近くであわや蕎麦などの焼畑をしていた時代は、その作業のついでにトチの実を拾って帰ることが多かったようだ。他人の土地で採集する際には、声をかけて許可を得る必要があった。

写真 5 トチの実の採集の様子（内山公民館提供）

現在はトチの実を拾う人は多くないため、競うように採ることはなくなったが、熊や猿が出るようになり、一人で山に拾いに行くことは危険だという話があった。そのため現在は近所の人と 2～5 人ほどで行くことが多く、車を使って遠方まで拾いに行くこともある。

⑵虫だし～乾燥

拾ってきたトチの実は、虫を出すためにすぐに水につける必要がある。そしてそのあとカビが生えないよう天日干しをして保存可能な状態にする。囲炉裏があった時代はその上で乾燥や保存が行われていたこともあったが、現在は行われていない。この囲炉裏の煙は、防虫効果も期待出来たようだ。

⑶トチの実の皮むき

アク抜きをする日が決まると、実を取り出しやすくする準備をする。乾燥させて乾ききったトチの実を 3～4 日ほど再び水につけてふやかし、水を捨て、今度は一時間ほどお湯につけて殻を柔らかくする。かつてはお湯につけるのではなく、石にトチの実を置いてハンマーや木槌で叩いて割っていた。しかしお湯に入れて殻を柔らかくしてからハサミを入れると、ハンマーで叩くよりも楽に殻が剥けることや、実が粉々にならないことがわかったため、現在はそのやり方が主流になっている。このようにお湯につけてから殻を剥く作業では、宇奈月温泉街の足湯を利用することもあるそうなので、この地域の環境が活かされているということもわかった。

他にも、「こごみの会」のトチの実に関する部門を引き継いだ川内さんが考案した手作りの殻を割る新しい道具も見せて頂いた。この道具は、川内さんがハサミで手を切ってしまったことをきっかけに、より安全にトチの実の殻を剥く方法はないかと考えられて考案されたものである。庭の木を切った際にいつか使えるだろうと取っておいた切り株に、切り込み

と穴が開いており、包丁を固定するための鉄が埋め込まれている。開けた穴に乾いたトチの実を置き、切り込みに包丁を入れると、テコの原理で簡単に割ることができるというものだ。

山田さんも川内さんも、ただ昔のやり方をそのまま引き継いでいくのではなく、日々工夫を凝らし、様々な方法を試みている様子を知ることができた。またそれを近所の人同士で情報を共有したり、道具を快く貸し借りしたり、トチの実の加工で上手くいかないときには相談し合ったりしていることがわかった。

写真６　金槌で割る様子
（山田恵美子さん提供）

写真７　ハサミでトチの実を割る様子
（内山公民館提供）

写真８包丁で割る様子（筆者撮影）

写真９　割ったトチの実を取り出す様子
（内山公民館提供）

⑷浸水

殻から実を取り出したら、再び 5〜6 日ほど水にさらす。この作業は水道水を使う場合もあれば、トチの実が入った袋を清水にそのまま入れて行うこともある。この際、少なくとも一日に 3 回はトチの入った水を手でよく混ぜなければならない。その理由は、混ぜた際にトチの実から流れ出る泡が、サポニンという有害な成分とみられているからで、この処理をすることで幾分かは苦みが取り除かれるそうだ。また、乾燥したままのトチの実は半分に割ると真ん中に空洞が出来るが、ここで水につけると再び実が詰まる様子も教わった。

写真 10　清水にトチの実を浸ける様子
（内山公民館提供）

⑸煮沸

煮る時間はトチの実を拾ってからどれくらい時間が経過しているかによって異なる。火を通しすぎてしまうとやわらかくなってしまうため、拾ってきてから時間が経っているものは約 3〜4 分、拾ってきてからすぐに使う場合は約 2 分煮る。特に山田さんは、近所の方が拾ってきたトチの実の加工や調理を頼まれることが多いため、作業をする場合は拾ってきてからどれくらい経ったトチの実なのか確認する必要があるとおっしゃっていた。

写真 11 トチの実を煮る様子
（筆者撮影）

⑹アク抜き

次に灰を入れて 15 分ほど煮るが、この段階でトチの味が決まると言われているほど重要な作業になっている。アクを取り過ぎてしまうと、トチの実の個性が失われてしまう。この時に使う灰は、豆木[66]や青杉葉を燃やして作ったものを使うと、苦みが取れて美味しく仕上がる。しかし平成 13 年(2001 年)頃から野焼きが法律で禁止されたため、個人的に灰を作ることが出来なくなってしまった。そもそも、枝豆を育てる人がいなくなったことや、杉の葉を取りに行くことが大変だという理由もある。稲藁を使う人もいたが、お米を育てる人も少なくなっている。

[66] 収穫した大豆の枝葉のこと。

その代わりに苛性ソーダを使っている地域もあるが、なるべく食べるものに薬品を使わないことが山田さんのこだわりの一つであるため、現在はナラなどの堅木を用いて作られた灰を新潟県から購入して使っている。またアク抜きの工程には、少しの塩気でさえも天敵であるため、トチの実のアクを抜く時にしか使わない専用の鍋や道具を持っている方もいる。他にも、IH ではなく火力の強いガスコンロの方が美味しくできるといった話もあり、少しの違いがトチの実を苦くしてしまいかねず、いかに繊細な作業であるのかが伝わった。

煮終わったら、苦みを取るために、厚い毛布を敷いた発泡スチロールのケースに鍋をそのまま入れ、更に上から毛布でくるみ 1～2 日保温する。保温が終わったら灰を綺麗に洗い流し、そのまま使ったり冷凍保存したりする。

写真 12　灰を加える様子（筆者撮影）

写真 13　毛布でくるみ保温する様子（筆者撮影）

⑺トチの実の食べ方

アク抜きが終わったら綺麗に洗い流して、ようやく食べられる状態になる。はじめて山田さんに会った時に、アクだけ抜いて調理はしていない状態のトチの実を一粒食べさせて頂いたが、苦みは感じずそれだけでも十分に美味しく食べることができた。

アク抜きをしたトチの実はおこわやお粥に混ぜたり、宇奈月温泉街にある「つぼや菓子舗」という和菓子屋に餅を作るために必要な材料と一緒に持って行ってトチ餅にしてもらったり、白玉粉と混ぜて団子にしたりして食べる。今では家庭に冷蔵庫があり、トチの実をそのままの形で冷凍してより長く保存出来るようになったため、一度加工すると必要なときに取り出して料理に用いることができる。冷蔵庫がなかった時代は挽いて粉にしていたが、こうすることによって粉を水に溶かすだけで食べられるといったように使い道が広がったり、5～6 年保存することができたり利点があったようだ。

実際に、山田さんの冷凍庫に保存されていたトチの実を使った、おこわと団子を作って頂いた。私は、山田さんが作ったおこわを笹に包み、団子はこねて丸めて茹でるところまでお手伝いをさせて頂いた。おこわを包む笹の葉はソフトクリームのコーンのような形の入れ物にして、その中におこわを詰めてゴマ塩をトッピングする。このように笹の葉で包むやり方は、山田さんオリジナルのものである。こうする理由には、抗菌作用があることやお客さんに振る舞う時にお皿や箸が無くてもおこわを押し出すと食べ易いといった、山田さんの知恵や心配りが行き届いている。団子は、白玉粉とトチの実を混ぜて作る。トチの実はあらかじめミキサーなどで潰す必要はない。そのまま入れてこねていくが、次第に自然に潰れて生地に馴染んでいく。砂糖がなくても甘く、かすかにトチの実特有のほろ苦さも残っていて美味しい。私が参加した団子作りは、中秋の名月に一度作って近所の方にお裾分けしたところ評判が良く、もう一度食べたいというリクエストがあったため行われたものだ。しかし、白玉粉は北海道のものをつかっていて一袋 1200 円と高いため、現在頻繁に作られているわけではない。

他にも「つぼや菓子舗」で作ってもらったトチ餅も頂いて食べてみると、トチの実が入るだけで普通のお餅よりも柔らかく甘みが強くなっているように感じた。また、美味しいだけでなくトチの実を入れた餅は普通の餅と比較すると堅くなりにくく、カビも生えにくく、長持ちするという特徴もある。アク抜き作業が大変ではあるが、食糧が豊富になった今でも、内山の方達が喜んで食べている理由を理解することができた。

写真 14　笹で作った入れ物
（筆者撮影）

写真 15　トチの実のおこわ
（筆者撮影）

写真 16　おこわの完成形
（筆者撮影）

7. 公民館祭りのようす

内山地区では毎年秋になると「内山公民館祭り」が開催される。この内山公民館は、平成 18 年(2006 年)に閉校した宇奈月小学校の跡地に創られたものであるが、小学校の体育館だけはそのまま残されたため、祭りは建て替え以前から、同じ体育館で行われてきた。始まった年は正確にはわからないが、平成 18 年(2006 年)に行われていた記録は残っている。

2021 年度は 11 月 6 日の土曜日に行われた。本来は、地区の方達が作った手芸や写真などの作品展示に加え、ステージでカラオケ大会や子供たちによる獅子舞などの発表が行われ、賑わいがある。体育館の中央には、人が集まって飲食をしながらステージ発表が見られるエリアも用意されていたそうだ。この祭りは、市からの委託金に加え、自治振興会からのお金で実施されている。しかし、2020 年度は新型コロナウイルスの感染拡大により中止となり、2021 年度は作品展示のみに縮小され、地区の人々の安全を考慮して行われた。そのため、毎年祭りの中で振る舞われていたトチの実料理も、その場でみんなで食べるのではなくテイクアウトという形で提供された。

私は祭り当日の朝から伺い、トチ粥の準備をする様子を見せていただいたが、こごみの会の方達は 9 月頃から祭りで使うトチの実拾いやアク抜き作業をされてきた。これまでは会のメンバー40 名のうち約半数が手伝いに参加してきたが、今回はコロナ対策のため役員 6 名で準備をした。ただ、地域全体の行事であるため、トチの実拾いや皮を剥くような力のいる工程は、壮年会の男性メンバーも 6 名ほど参加したそうだ。また、一回目のアク抜きでは苦みが強くなってしまったため、美味しいものを食べてほしいという思いから、一から作業をやり直したことも教えてくださった。そういった苦労を経てこの日に至ったのだということを知ることができた。

当日行われるトチ粥作りは 7 時 30 分から始まる。トチ粥と一緒に配るトチ餅は、餅をつく道具がなく、作る餅の数に対して人手も足りないという理由から、あらかじめ宇奈月温泉街の「つぼや製菓舗」に頼み、10 時の祭り開始時間までに届けられるようになっている。そのためそれまでにお粥を作り、来場者が持ち帰ることができるように、蓋つきのプラスチック製の容器に盛りつけ袋詰めの作業を協力して行った。また、「つぼや製菓舗」が内山の公民館祭りで提供するトチ餅を作るようになって 10 年ほどになるが、初めは「こごみの会」が材料とレシピを持って依頼をしたことがきっかけだそうだ。なお、普段はトチの実のアク抜き技術がないことや手間がかかるため、トチの実のお菓子は店頭にはでていない。「こごみの会」がアク抜きをしたトチの実を用意して依頼をした時だけ、限定で作られる商品化されていないトチ餅なのである。

また、潰したトチの実をお粥に入れてから 40 分ほどとろ火で煮ている時も、袋詰めをしている時も、終始役員の方達のユーモアの混ざったおしゃべりが絶えず、女性達の楽しそうな笑い声が溢れていた。

写真 17　トチ粥を盛り付ける様子（筆者撮影）

写真 18　公民館祭りで提供された
トチ餅とトチ粥（筆者撮影）

来場者は、祭りが始まる 10 時に近づくと続々とやってきた。特に午前中に多く来て、「昼ごはんに食べる」と言ってトチの実料理が入った袋を喜んで持ち帰って行かれた。友達の分も持ち帰ったり、「もらって行ってもいいか」と自ら訪ねて来たり、この時しか食べられないトチの実料理を楽しみにされていた方が多い印象を受けた。

来場者のほとんどは内山地区に住んでいる高齢者だったが、その方達の子供や孫にあたる親子や、内山に実家がある方も近隣地区から参加していた。来場者は、祭りが終わった 15 時ころには約 100 人に達していた。

伝統食を食べる機会でもあるが、公民館長の大橋清信さんが「コロナで家にこもりがちだった高齢者が外に出る機会が必要だった」とおっしゃっていたように、近所の友達を誘って祭りに訪れたり、久々に会う人と挨拶を交わしたり、互いの作品を見ながら会話をしたりしている様子から、人に会うことでより元気になっている姿も見ることができた。

写真 19　来場者にトチの実料理を配る様子
（筆者撮影）

写真 20　2021 年度の内山公民館祭りの
様子（筆者撮影）

8. まとめ

以上の調査で、内山ではトチの実がどのような存在で、どのように加工され、どのように食べられてきたのか、時代ごと見てきた。そして、様々な移り変わりに気づいた。

まずトチの実の採集については、家族間で行われ他の家庭と競い合うように拾っていたものが、今では近所の人同士誘い合って一緒に行う形になった。加工や調理を行うメンバーも採集と同じく、家族単位から隣近所に変化した。それに伴い加工法の継承も、地域間で行われるようになった。近所の人同士のつながりが薄くなっていることが社会的な問題になっている中で、トチの実の採集や加工を隣近所で手伝い合う様子や、出来上がったトチの実料理をおすそ分けし合う様子は非常に温かくて印象的だった。

ほかにも、かつてはアク抜きの際に使う灰を自然にあるものから作り出していたが、それが難しくなったため出来上がった灰を購入するようになった。さらに、車を持つようになってから、採集場所が近くの山に限らず遠方にも広がったり、冷蔵庫が出来たことによって、粉にして瓶に入れて保存されていたトチの実が、冷凍して保存されるようになったりした。このように、社会的な変化が、内山のトチの実の採集や加工、食べ方に影響を与えたケースもある。

また、様々な変化の中で特に大きいものとして挙げられるのは、トチの実の皮を剥く際に使う道具である。トンカチで叩いて割る方法だったものが、ハサミで割るやり方に移り変わり、今年(2021 年)も丸太と包丁を使う新しい道具が試されていた。伝承と聞くと昔のやり方をそのまま保存することをイメージしてしまいがちだ。しかし、決して楽ではないトチの実の一連の加工を、より簡単に安全にできる方法はないのか、よりおいしくトチの実を食べるにはどうしたらいいのか、今でも工夫や変化が続けられていることがわかった。これらから、伝統を守るためには新しいこともしなければならないのだということを感じた。

食べる目的やトチの実に対する印象にも大きな変化がある。戦中戦後しばらくの間トチの実は、米のカサを増やし、腹を満たすためのものでしかなかった。客人に出すのではなく、各家庭の中だけで日常的に食べられていたものであったため、アクが丁寧に抜かれておらず、また大量に食べられていたため、当時を知る人は「昔はトチの実は好きではなかった」「苦くておいしいものではなかった」と語る。しかし、現在は非日常的な公民館祭りや地域のイベントなどで、その大勢の来場者に向けて振舞われるようになっている。そのため、煮すぎないよう、塩気が入らないよう、注意深く丁寧にアク抜きをして、それでも苦みが強く出てしまった場合は作り直すほど、味に大変気を遣うようになっている。さらに「こごみの会」の方達が継続して食べる機会を設けてきたことで、おいしくないものだという固定観念を持っていた地元の方達のイメージを覆すことができたのだろう。その努力の結果、食糧が豊かになってトチの実を食べる必要性がなくなった今でも、当時を懐かしんで食べたり内山の伝統食と触れ合ったりする目的で、トチの実を食べる機会が残っ

ている。また、公民館祭りに参加した時も、トチの実はみんなで集まって交流する際の中心にあると感じた。

しかし現在、内山地区の住民の高齢化や「こごみの会」の担い手の減少が起きており、この伝承・保存活動が途絶える恐れがある。「こごみの会」の方達は活動を行うことで、トチの実に関する、記録には遺らないあらゆる知恵を、自然と引き継いでいる。他にも、全国的に見るとトチの実が採れる地域ではトチ餅を特産品として商品化しているところが多い中、内山地区のトチの実は、この地区の方達を結びつけ、懐古を楽しむきっかけの一つとして、大きな役割を果たしている。そのため、継承が途絶えてしまうと、そういった記録には残らない知恵や魅力は消えてしまうだろう。トチの実料理の伝承と地区の人々の交流が互いに良い効果を与えているからこそ、今後もトチの実が内山の伝統食として守られる存在であり続けてほしいと願う。また、救荒食としてトチの実が大切に食べられていたという時代を知らない世代の方達にも、トチの実料理は地元の新たな魅力の一つだということを知ってほしい。そのためにも、「こごみの会」のメンバーは現在、内山地区の方のみで構成されているが、内山に限らず他の地区の方でも、こうした地域の伝統や食文化に関心を持った方に広く継承されていく可能性を模索する必要があると考える。

謝辞

今回調査にあたって、内山地区の皆様には大変お世話になりました。聞き取りにご協力いただいた山田恵美子様や川内清子様をはじめとする「こごみの会」の皆様、内山公民館の皆様、竹山久枝様、中西玉枝様にはこの場をお借りして厚くお礼申し上げます。特に山田恵美子様には貴重なお話や写真、資料を提供していただきました。また、内山公民館祭りでは当日の準備の段階から皆様に温かく迎えていただき、貴重な体験をさせていただきました。皆様のおかげで報告書を無事書き終えることができました。誠にありがとうございました。

参考文献

宇奈月町史追録編集委員会、平成元年 3 月 25 日『追録 宇奈月町史 歴史編』宇奈月町。
宇奈月町史追録編集委員会、平成元年 3 月 25 日『追録 宇奈月町史 文化編』宇奈月町。
宇奈月町史追録編集委員会、平成元年 3 月 20 日『追録 宇奈月町史 自然編』, 宇奈月町。
宇奈月町史追録編集委員会、昭和 44 年 12 月 1 日『宇奈月町史』, 宇奈月町。
紙谷信雄編、2000 年 6 月 1 日『図説魚津・黒部・下新川の歴史』郷土出版社
宇奈月町教育委員会、平成 16 年 8 月 7 日『黒部川のあゆみ 流域の樹木と人のかかわり』
宮良高弘編、昭和 63 年 3 月 30 日『宇奈月の社会と民俗　内山・音沢の事例』
北海道みんぞく文化研究会。
松山利夫著、1982 年 10 月 1 日『ものと人間の文化史　木の実』法政大学出版局。
水野一晴・藤岡悠一郎編、2019 年 3 月 30 日『朽木谷の自然と社会の変容』海青社。

参考ウェブサイト

揖斐川町ホームページへようこそ「徳山ダム」
〈https://www.town.ibigawa.lg.jp/kankoujyouhou/0000006121.html〉
（2021 年 9 月 30 日更新）
黒部市「県指定文化財　天然記念物」
〈https://www.city.kurobe.toyama.jp/category/page.aspx?prev=1&servno=3320〉
（2015 年 4 月 1 日更新）
北日本新聞 北陸新幹線で行こう！北陸・信越観光ナビ「温泉街、仮装で快走 SPA マラソン in うなづき」
〈https://www.hokurikushinkansen-navi.jp/pc/news/article.php?id=NEWS0000019058〉
（2019 年 4 月 14 日）

第 4 章　入善町における「食」を通じた地域おこし

笹川　愛海

はじめに

本章では、入善町における地域おこし、特に食に関わるグループの活動や施設、人物に着目して調査したことを記述する。

このテーマにしようと思ったきっかけは、入善町の地域おこし協力隊の方にインタビューさせていただいたことである。話を聞いていくうちに、入善町にはたくさんの魅力があることを知ることができ、地域を活性化させるための活動への関心も高まった。また、入善町で野菜作りや加工品の製造などを行なっているグループや施設について調査してみると、入善町には美味しい食べ物があり、それを作る・発信することで地域の活性化に貢献しようとする取り組みが行われていることに気づいた。そのため、様々な活動があるなかで、食と地域おこしを組み合わせた活動に焦点を当てて調査を始めた。

調査の中心として行なったインタビューをもとに、第 1 節で入善町の特産品を取り上げて食の魅力について紹介した上で、第 2 節で生産、第 3 節で加工・販売、第 4 節で消費（生産者と消費者の交流）に関わる話題について記述する。

1. 入善町の特産品について

入善町の特産品には、入善海洋深層水、深層水仕込みカキ、ジャンボ～ル三世[67]、入善乙女キクザクラ[68]、入善ジャンボ西瓜、にゅうぜんフラワーロード[69]などがある。本節では、これらのうち、食に関わる入善海洋深層水、深層水仕込みカキ、入善ジャンボ西瓜について取り上げる。本章に登場する施設などの場所は地図で示した(図 1)。

---

[67] 入善町の PR マスコットキャラクター（ゆるキャラ）。 入善町の特産品である入善ジャンボ西瓜をモチーフとしている。

[68] 入善町にある国指定天然物の杉沢の沢スギ林の中に自生する菊咲き性のサクラのことで、花の色が白色からピンク色に変化するのが特徴である。

[69] 雄大な北アルプスを背景に、色とりどりのチューリップがじゅうたんのように広がる光景を見ることができる。

図１　本章で記述する店や施設を示した地図
（国土地理院地図より作成）

1-1. 入善海洋深層水と深層水仕込みカキ

まず、入善町のホームページと入善町役場キラキラ商工観光課（水産・深層水係）の濱西大介さんの話をもとに入善町の海洋深層水に関する取組みについて記述する。

入善町で取水している海洋深層水[70]は、富山湾の 300m 以深に存在する「日本海固有水[71]」と呼ばれている。海洋深層水の特徴の１つとして、表層水と比較し、一年を通じて低温で安定しているという低温安定性が挙げられるが、濱西さんによると、日本海の海洋深層水は太平洋側と比較してより低温であることが１番の特徴だという。低温安定性を利用し、パックごはん製造工場（株式会社ウーケ）では、機器の冷却や工場内の冷房に深層水を利用している。その後、海洋深層水の冷熱と工場の廃熱との熱交換により、電気や化石燃料を使わず、水産物の飼育に適した水温まで加温することができるため、水産分野において海洋深層水の２次利用を行っている。全国でオイスターバーを運営する株式会社ゼネラル・オイスターは、その加温深層水をカキの浄化・蓄養水として利用するほか、近畿大学と入善漁協は共同で、サクラマスの陸上養殖試験を行っている。このように、海洋深層水を使って業種の異な

---

[70] 海洋深層水とは、太陽光が届かず、表層の海水と混ざらない深さにある海水のことである。通常は 200m 以深の海水を海洋深層水と呼んでおり、低温安定性、清浄性、富栄養性、ミネラル特性、熟成性という特性がある。

[71] 日本海は流出入する海峡の水深が浅いため、その深層水は他の海域のものと交わることがない。そのため日本海には固有の海洋深層水が生じる。（入善町「入善町の海洋深層水」より）

る企業を結びつけることで二酸化炭素削減に役立て、環境問題に貢献している。2021 年現在、パックごはん製造工場が軌道に乗っており、工場に送る深層水が足りていない状況であるため、海洋深層水を取水するための施設を新たに 1 つ作っているそうだ。

海洋深層水は、水産、食品、医療、健康産業などの分野における研究や、食品、調味料、化粧品などの商品化[72]に向けた取り組みに活かされている。様々な取り組みの中で、地域おこしの観点から取り上げたいものは、海洋深層水を使ったカキの浄化である。入善町では全国の産地から旬のカキを集め、浄化したカキを各地に出荷しているほか、浄化施設の隣にカキのレストランが併設されているため、1 年を通して深層水仕込みカキを味わうことができる。入善海洋深層水パーク[73]内では、海洋深層水によるカキの浄化システムを使用したレストラン「入善 牡蠣ノ星」が 2015 年にオープンした。店内には、海洋深層水かけ流しの水槽が設けられており、オーダー後に水槽から取り出すため、新鮮なカキを味わうことができる。行楽シーズンや休日には、県外からも多くの観光客がこの店目当てに入善町を訪れており、入善町の観光拠点の 1 つとなっている。また、グループ企業が運営する全国各地のオイスターバーでは、浄化に利用する海洋深層水を通じて入善町を紹介しており、入善町の知名度向上とイメージアップに一役買っている。

写真 1　入善 牡蠣ノ星の外観
（入善 牡蠣ノ星 HP より）

入善町には、黒部川の表流水や地下水などのきれいな水が豊富にあり、もともと名水のまちとして活性化に取り組んでいた。そこで、「水」つながりで注目したのが海洋深層水であり、1999 年から地域活性化プランの策定が始まった。今後は「名水のまち・海洋深層水のまち」として更なるまちのイメージアップを図っていくという。

1-2. 入善ジャンボ西瓜

入善ジャンボ西瓜の特性や生産者の思いについては第 2 節で述べるため、ここでは入善ジャンボ西瓜の歴史について、入善ジャンボ西瓜生産者の高見薫さん（68 歳、男性）から聞いた話と入善町ジャンボ西瓜生産組合の資料をもとに記述する。

入善ジャンボ西瓜の栽培は 1887 年頃にさかのぼる。荻生村（現黒部市）の結城半助がアメリカの種苗店から導入した楕円形の大型西瓜「ラットルスネーク種」が黒部川扇状地の砂

---

[72] 2021 年現在、入善海洋深層水を利用して商品化されているものには、ボトルドウォーター、ラーメン、塩、美容液などがある。

[73] 第 3 節参照。

質浅耕土地帯に適したため、1897 年頃から入善町でも生産が行われるようになった。その後、1909 年に黒部川の清流にちなんで「黒部西瓜」と名付けられた西瓜は、1921 年に作付け面積 96ha にのぼり、朝鮮やロシアにも輸出された。入善地域は黒部西瓜生産の中心産地となり、日本屈指の西瓜の大産地を形成した。1940 年頃まで、黒部川流域一体は日本一の西瓜生産地として名声を高めていたが、戦時中の作付け転換や戦後の消費者の嗜好の変化により、1965 年には約 8ha まで生産が激減してしまった。そうしたなかで、1971 年に「入善町黒部西瓜生産組合」が設立され、試食会の開催や宣伝などの活動が始められた。1982 年、入善町特産品の位置付けを打ち出すために西瓜の名称が「入善ジャンボ西瓜」に改称され、組合名も「入善町ジャンボ西瓜生産組合」となった。そして、2017 年 12 月には、農林水産省により「入善ジャンボ西瓜」が地理的表示（GI）[74]に登録された。

このように歴史を振り返ると、色々な背景のなかで入善ジャンボ西瓜の生産が行われてきたことがわかる。現在（2021 年）に至るまで 124 年の歴史があるが、長い間生産が続けられてきたのは、決して圃場の条件が良かったというだけではないと高見さんはおっしゃっていた。第 3 節でも触れるが、入善ジャンボ西瓜の 1 番大きな特徴は栽培方法であり、過酷な作業も多い。それでも、生産者たちが西瓜本来の味にこだわり続けてきたのは、働き者で真面目な県民性も関係しているだろうと高見さんは考えている。

2. 生産に関わる人の思い

本節では、入善町の農家やグループで活動を行なっている方に行ったインタビューに基づき、生産段階において行われている取り組みと入善町の食の魅力を作り出す立場である人たちの思いについて述べる。

2-1. 入善ジャンボ西瓜の生産者

入善町の特産品である入善ジャンボ西瓜を生産している高見農産の高見薫さんにインタビューを行った。高見さんは、46 歳の時に入善ジャンボ西瓜の生産者でつくる入善町ジャンボ西瓜生産組合に加入し、それから入善ジャンボ西瓜の生産を開始した。2021 年からは生産組合の組合長も務めている。入善ジャンボ西瓜を作るには、作る場所が入善町であることに加え、品質を維持するために生産組合に加入することが条件となっている。

まず、入善ジャンボ西瓜の特徴についてお話を伺った。入善ジャンボ西瓜はラグビーボールのような長楕円形のユニークな形をしていて、重さが 9kg 以上でなければ出荷できない

---

[74] 地域には、伝統的な生産方法や気候・風土・土壌などの生産地等の特性が、品質等の特性に結びついている産品が多く存在している。これらの産品の名称（地理的表示）を知的財産として登録し、保護する制度が「地理的表示保護制度」である。（農林水産省「地理的表示（GI）保護制度」より）

という規格がある。平均重量は 17〜19kg で、年によっては 30kg 近いものが収穫できることもある。2021 年、高見農産で収穫したもので一番大きかったものは 27kg だった。他の大玉西瓜の平均重量が 7〜9kg 程度であることと比較すると、入善ジャンボ西瓜が極めて大きい西瓜であることは明らかである。ただ大きくて重い西瓜なら飼料用の品種もあるが、入善ジャンボ西瓜は大きさや重さだけではなく、おいしさも追求している。西瓜本来のサクサクとした歯ごたえである「シャリ感」も他の西瓜よりも強いという。

また、入善ジャンボ西瓜は栽培方法にも大きな特徴があることがわかった。それは、自根栽培ということである。日本全国の西瓜の産地ではほとんど接ぎ木栽培が行われていて、自根栽培を行っているところはわずか数パーセントしかない。ここで、接ぎ木栽培と自根栽培の違いについて述べる。接ぎ木栽培とは、育てたい品種の芽（穂木）を、別の病気に強い品種の根（台木）にくっつけて栽培する方法のことで、自根栽培に比べて病気に強いというメリットがある。一方で、接ぎ木をしない自根栽培は、病気に弱い。そのため、自根栽培で育てていた入善ジャンボ西瓜は、全滅に近い状態になってしまった農家も過去にあったようだ。また、つる割病などの連作障害が出ることを防ぐために一度栽培した畑は 10 年間使わないそうで、品質の管理も徹底されていることがわかった。このように、自根栽培は接ぎ木栽培よりも手間がかかるため、今までに接ぎ木栽培に変えたらどうかという提案もされてきた。それにも関わらず、高見さんを含めた入善ジャンボ西瓜の生産者が自根栽培にこだわってきた理由は、接ぎ木栽培だと味や食感が変わってしまい、入善ジャンボ西瓜の特徴を守れないからだという。そして、この自根栽培であることというのが他の西瓜と違う、入善ジャンボ西瓜の一番の特徴だと高見さんは強調していた。

入善ジャンボ西瓜の販売は、庭先販売（直売）と農協経由の大きく 2 つに分けられる。農協経由で出荷されたものは、あいさい広場[75]、スーパーなどに割り振られ、県外でも販売される。庭先販売は生産者自らが行うのに対し、農協に出荷してから先のことには関わらないが、個々に生産者がわかるため万一不良品が出た場合は対応している。庭先販売をすることは、直接購入してくださる方の顔を見たり言葉を交わしたりできるという点から、生産者の大きな喜びにつながっている。

客は地元の方だけではなく、県外の方も多い。県外の方向けに注文も受け付けているが、中には、大阪府や京都府、愛知県、岡山県などの遠いところから実際に直売所を訪れて購入する方もいる。贈答用として購入する方が多く、もらった人からまた違う人へ、というように、地元から県外まで、口コミで広がっていったのだとおっしゃっていた。こだわりを持って良いものを生産し、販売することによって、徐々にリピーターを増やし、入善町の特産品として多くの人に認識してもらえるようになったということがわかった。

高見さんは、購入してくださった方から「入善ジャンボ西瓜は、荷姿がユニークで見応えがある」という声をよく聞くそうだ。入善ジャンボ西瓜は、出荷時に「桟俵（さんだわら）」と呼ばれる

[75] 第 3 節参照。

稲わらの編み物で包まれるのである。その荷姿がユニークだからと、しばらくの間、玄関や床の間に飾っておく方もいる。桟俵は、農作業ができない冬の間に一つ一つ手作業で編まれる。傷がつかないようにするためと、持ち運びやすくするためという理由で西瓜の上下にわら縄で縛りつけられ、持ち手も作られるようになった。1969 年から現在のような片畝栽培が取り入れられ、それと同じくして桟俵で梱包されるようになったという。

写真 2　1971 年頃の黒部西瓜の荷姿
（入善町ジャンボ西瓜生産組合の資料より）

写真 3　現在の入善ジャンボ西瓜
の荷姿（筆者撮影）

入善ジャンボ西瓜は他の西瓜よりも重さがあり、桟俵で包まれていないと持ち上げることが困難なものもあるため、出荷の準備をする時などにはとても役に立っている。10 年程前に、作るのが大変であることから、発泡スチロールにしたらどうかという声もあったそうだが、桟俵は他にはないもので、入善ジャンボ西瓜の生産者として絶対に譲れないものであるため、これからもこだわって作っていきたいと高見さんはおっしゃっていた。高見さんのお話を聞いて、今では入善ジャンボ西瓜の大きな特徴とも言えるこの桟俵が、最初からあったわけではなく、途中から作り始められたものであることもわかった。桟俵で梱包されている見た目が他とは違うユニークなものとして消費者の目に映ったことは、入善ジャンボ西瓜が広まっていった理由の 1 つであると考えられるだろう。

入善ジャンボ西瓜の生産における今後の課題について尋ねると、一番深刻なのは後継者問題だと高見さんはおっしゃっていた。生産するには大きな労力を要するため、その大変さから後継者がなかなか現れないのだという。現在、生産組合に加入しているのは 12 軒（実際に活動しているのは 10 軒程）で、高見さんが加入した頃と比べると約半分になってしまった。新規生産者の掘り起こしには、町がんばる農政課が支援事業として取り組む「5 株チャレンジ」がある。生産組合員の指導を受けながら、試験的に苗 5 株の栽培に取り組むという制度で、今までに 4 人がこの制度をきっかけにして生産組合に新規参入した。そうして新たに入善ジャンボ西瓜の生産者になった人たちの育成や組合員全体の栽培技術の向上を目指すことも、今後の課題となる。そのため、組合員同士で情報を共有しながら常日頃の勉強会を大切にしていきたいとおっしゃっていた。

また、生産者としての思いについてお話を伺うと、高見さんは単に規模を大きくしていけばいいと考えているのではなく、目の行き届く範囲で、入善町ならではの特産品を作っているのだというブランド意識を持って、良いものを作り続けていきたいと強調していた。入善ジャンボ西瓜をきっかけに入善町に来てもらえるようにすること、そして、生産者一人一人にスポットが当たるような発信の仕方をすることを大切にしながら、124 年の伝統[76]ある西瓜が幻の西瓜にならないように守っていきたいとおっしゃっていた。

2-2. JA みな穂青壮年部

この組織は、全国組織である JA 青年組織[77]の目標をみな穂管内で達成するために立ち上げられたものである。108 人のメンバー（2021 年 3 月時点）で、安全・安心な農産物の供給や地産地消の推進、地域環境の保全に関する活動をしている。

主な活動を季節ごとに挙げると、春は学童農園（田植え）、田んぼアート[78]事業、唐辛子定植活動、農協職員交流事業（綱引き大会）、夏はウィラブリバー活動[79]、唐辛子草刈り、芽かき作業、秋は唐辛子の収穫・乾燥作業、農協収穫祭への参加、学童農園活動（稲刈り）、冬は入善町ラーメンまつり[80]や入善町カローリング[81]大会への協力などをしている。また、JA みな穂あいさい広場では、通年でそば販売（月 2 回程度）も行なっている。

様々な活動があるが、農商校福[82]が連携して行なっているトウガラシの栽培・加工・販売について取り上げ、JA みな穂青壮年部の事務局補佐を務めている七澤光宣さんに教えていただいたこと基に記述していく。まず、この連携事業の起こりについて説明する。JA みな穂青壮年部と商工会青年部に同時期に入会している人がいること、入善町農業委員会から舟見地区の耕作放棄地[83]解消の話がきたときに合同で活動したら面白いのではないかとなったことがきっかけとなり、耕作放棄地を再生させ、入善町の新たな特産品となるような作物を栽培するという「舟見地区耕作放棄地再生活用事業」が 2011 年に始まった。

---

[76] 入善ジャンボ西瓜の歴史については第 1 節参照。

[77] 日本農業の担い手として ＪＡをよりどころに地域農業の振興を図り、ＪＡ運動の先駆者として実践する自主的な組織。

[78] 田んぼをキャンバスに見立て、色の異なる稲を使って巨大な絵や文字を作り出すプロジェクト。

[79] 河川環境美化に努め、河川に恩返しをする活動。

[80] 入善ラーメンまつりについては第 7 章参照。

[81] カローリングについては第 8 章参照。

[82] 入善町における「農商校福連携」とは、JA みな穂青壮年部（農業）、入善町商工会青年部（商業）、県立入善高等学校（学校）、工房あおの丘（福祉）が連携する取り組みのことである。

[83] 長年、耕作がされずに荒れ果てた農地のこと。

写真 4　再生前の農地
（広報入善より）

写真 5　耕作が再開された農地
（広報入善より）

2010 年の 3 月に開墾され、1 年目は比較的手間が掛からず、痩せた土地でも作付け可能であることから放棄地再生後の主要作物として取り組まれているソバを栽培した。その際、イノシシや猿、熊などによる被害を多く受けたことから、2 年目はそうした被害を避けるためにソバの周りに忌避植物としてトウガラシ[84]を栽培することになった。

このようにして 2011 年からトウガラシ栽培を始めるとともに、入善高校農業科が連携に加わることになった。そのきっかけになったのは、入善高校の舟川智成先生が JA みな青壮年部のメンバーだったことだという。色々な話をしていくなかで、「地域において農業に関するアクションを起こし、未来の担い手を育成していくことに繋げていきたい」、「地域で育てる環境を高校任せにするのでなく、農家が生の声を伝え、育てる環境を目指したい」という思いが一致したことから、JA みな穂青壮年部と入善高校が連携した取り組みが始まった。それまでは、学校と連携した取り組みやイベントはほとんどなかったが、この取り組みを始めたおかげで農協職員交流事業である綱引き大会への参加や学童農園の手伝いなど、JA みな穂青壮年部としての活動が増えたそうだ。その後、特定非営利活動法人である「工房あおの丘[85]」も加わり、「農商校福連携事業」に発展した。

写真 6　商品化されている
一味唐辛子（筆者撮影）

「農商校福連携事業」で栽培したトウガラシは、一味唐辛子やラー油の製造に使用されている。一味唐辛子は2014

[84] トウガラシの品種は「げきから」である。

[85] 2006 年にＮＰＯ法人格の認証を受け、入善町に開所した事業所で障害福祉サービスや障害児通所支援サービスを実施している。

年 3 月、ラー油は 2016 年 3 月から販売を開始しており、最初は JA みな穂青壮年部だけで製造していた。2017 年頃から入善高校農業科の生徒が製造に加わり始め、高校生は播種、育苗、定植、わき芽かき[86]、追肥、収穫、乾燥、調整に関わるようになった。その過程で、生徒からいいアイデアが出た場合はすぐに実践できるようにしているという。現在（2021 年）は学校の授業の時間を多く使ってもらっており、生徒たちが活動の中心になりつつあるそうだ。今年（2021 年）には、新商品として従来の赤トウガラシに加え、黄色と青緑も取り入れた三色一味唐辛子「げきから兄弟」の開発・販売を行なった。販売場所はあいさい広場である。あいさい広場を利用することで消費者とのつながりが生まれるため、JA みな穂青壮年部の活動の幅を広げることにも結びついていくと七澤さんは考えている。ラベルのデザインは、もともと青壮年部で考えて作成していたが、現在（2021 年）商品のラベルとして用いられているのは入善高校農業科の生徒がデザインしたものである。生徒に出してもらったデザイン案の中から最優秀賞に選ばれたものが現在のラベルに採用されたのだという。

「農商校福連携事業」の活動について述べてきたが、ここからは七澤さんの活動に対する思いについて記述する。七澤さんによると、入善町が活気のある元気な町であり続けるには入善高校が必要なのだという。入善高校農業科には、地域の担い手になる人や農業関係で働く人を育成する大事な役割がある。だから、農業のある地域づくりの大切さをアピールする JA みな穂青壮年部は入善高校農業科とのつながりを作るに至った。また、そのつながりに町や地域の商工会などを連携させた活動をしていくことが、担い手不足という農業分野の不安要素を取り除いていくために必要な対策のひとつになるのではないか。入善高校農業科のため、未来の担い手を育むため、明日の農業のため、そして、入善町のために、今後もこのような取り組みを続けていきたいという。

2-3. おいしいやさい部

「おいしいやさい部」は、JA みな穂管内の農業女子[87]が野菜の栽培に特化し、基本的知識となる土作りやポイントを重視して勉強するなかで、毎年研究テーマを設けて野菜を栽培し、消費者に提供することを目的としているグループである。

富山県は主穀作（米、麦、大豆）が主だが、入善町のみな穂農協では、それにプラスで野菜や果物などの園芸作物を農家さんに導入してもらおうという「プラスワンアクション大作戦」事業が 2006 年から行われていたそうだ。その過程で、「米、麦、大豆よりも野菜について勉強したい」と思う女性たちが増えていったが、野菜の栽培方法などを教える人は主穀作に比べると少なかったという。また、野菜について勉強する場が十分にないことに加え、みな穂管内で農業者の高齢化が進んでいることを問題となっており、先輩農家の方々が将

---

[86] 葉や茎の付け根から出る余分な芽を取り除くこと。

[87] このグループができる前にあった「真樹の会」（入善町の女性農業者で主婦の方たちの集まり）の中から「おいしい野菜部」のメンバーが集まった。

来的に離農された場合でも自分たちがおいしい野菜を作り、客のニーズに応えたいという思いから、2016 年に 6 人のメンバーが「おいしいやさい部」を結成したそうだ。入善町の有限会社グリーン森下の森下さゆりさんが会長をつとめており、2021 年にはメンバーが 14 人（30 代前半から 50 代）まで増えた。SNS での情報共有や定期的に行う勉強会を大切にしながら、おいしい野菜を作るための研究に励んでいる。

結成以来、研究テーマとして栽培してきた野菜は、インゲン、エンドウ、カリフラワー、落花生、ニンジン、カラーニンジン、セロリ、大カブ、しそといろいろあり、2021 年は中玉トマトと大玉トマトだった。栽培の研究をする野菜としては、目にすることの多い一般的なものからあまり手に入れられないような珍しいものまで幅広く選定し、多種多様な野菜をおいしく育てることができる「野菜栽培のプロフェッショナル」をグループ全員で目指しているそうだ。このような野菜の栽培についての研究に加え、土作り講習会や種苗会社の視察・研修なども行なっている。また、県内で開催される様々なマルシェ[88]やイベントにも出店している。メンバーそれぞれが農業者であり、経営者である人もいる。そのため、繁忙期が異なり、全員が同時期に同じ野菜を育てることが難しいという問題もあるが、新たな種類の野菜の研究や視察などを通して、メンバーそれぞれの経営体系に合った栽培方法を探っていきたいという。

写真 7　土作り講習会の様子
（福島恵美さんより提供）

写真 8　あいさい広場で開催された
イベントの様子（福島恵美さんより提供）

会長である森下さんによると、新型コロナウイルスの影響を受けてグループでの活動は自粛しているため、研修会や圃場巡回はできていないそうだ。今後の思いとしては、新たな品種の野菜作りに挑戦するのはもちろんだが、にんじんやじゃがいもなどの定番野菜の基本的な栽培ポイントも勉強し、多種多様な野菜を作っていきたいという。また、将来的にはグループで作った野菜を学校給食用に出荷したいと考えていることを教えてくださった。この思いを持っているのは、メンバーの 1 人であるエゴマ農家の福島恵美さんも同じであ

[88] フランス語で「マーケット」や「市場」を指す言葉。

る。福島さんは、学校給食への出荷を行うことで、農家と子どもたちが関わる機会を増やしていきたいという。このように考えるのは、給食を通して入善町を含むみな穂管内にいる農家について子どもたちに知ってもらい、作っている野菜やそれを生かした活動に興味を持ってもらうことで、地産地消や次世代の後継者育成に繋げていきたいと考えているからだそうだ。

3. 地域で作られた産物の加工・販売

本節では、入善町にある飲食店や施設、グループについての話題を取り上げる。インタビューに基づき、入善町の活性化につなげるために加工・販売の段階ではどのような活動が行われているのかついて記述する。

3-1. GRATINER（グラティネ）

グラチネは、入善町の食材を使った料理を提供するカフェ兼レストランで、入善町健康交流プラザサンウェル内[89]にある。オーナーシェフの笹川利江さん（40 歳、女性）は入善町出身の方で、2015 年にグラチネをオープンした。笹川さんは、京都製菓専門学校に入学する際に富山を離れ、専門学校卒業後は京都や東京でケーキ開発や製造・販売などの仕事をしていた。製造・販売を経験することでカフェへの思いが強まり、カフェ兼レストランで菓子以外の料理についても修行を積み技術を磨いた。自分で店を開きたいという思いはもともとあったが、店を開く場所を地元である入善町に決めるきっかけになったのは、一度富山を離れたことだった。帰省するたびに、景色の良さや食材のおいしさ、新鮮さを実感し、今まで気付いていなかった入善町の良さを改めて認識していくなかで、入善町の魅力を生かした店を開きたいと思うようになったそうだ。母親からサンウェルの喫茶店の空きが出たという情報を聞いて下見に行った笹川さんは、天井が高く、開放感にあふれ、窓越しに見る青々とした芝とふるさとの山々を遠くに望むロケーションを気に入り、入善町健康交流プラザサンウェル内でお店を構えることにした。

店名の「グラチネ」とは、フランス語で料理の表面に焼き色をつける技法のことである。笹川さんが店で出したいメニューとして考えていたものがブリュレとドリアだったことから、「焼く」ということをコンセプトにしようと思い、店の名前にしたのだという。

店のメニューについて紹介すると、ランチタイムには月替わりの大人様ランチと数量限定メニュー、ティータイムにはスイーツメニュー、ディナータイムにはセットメニューやシェアコースがある。料理に使う食材にはこだわりがあり、入善町の農家から直接仕入れてい

---

[89] 保健センターや町社会福祉協議会、ケーブルテレビ施設等が同居する複合施設であり、IT 時代に対応したネットワーク拠点としての役割を担っている。（入善町「入善町健康交流プラザサンウェル」より）

る食材やあいさい広場で売られている食材が多く使われている。笹川さんが自分で訪ねたり、縁があって知り合いなどから紹介してもらったりした農家の方は、毎年その食材の季節になると店まで直接持ってきてくださるそうだ。食材を仕入れる農家は、ラズベリーや桃など、1 つのものに特化して作っているところが多いため、農家から手に入らない他の食材はあいさい広場で購入するようにしている。いつ行ってもたくさんの種類の食材があって、いろんな農家の野菜や果物を安心して買うことができるのが、あいさい広場のいいところだとおっしゃっていた。そして、食材そのものの良さを知ってもらうためには、実際に食べて感じてもらうことが必要であり、笹川さんはそれにつながるように、食材に付加価値をつけられるような料理を提供することを心がけている。ランチメニューは毎月変わるが、「入善産おやさいとえびの豆乳ソースドリア」など、メニューを見るだけで入善町の食材が使われていることがすぐにわかるようになっている。できるだけ入善町の食材にこだわった料理を提供しようとする姿勢から、入善町の魅力をより多くの人に知ってもらいたいという笹川さんの強い思いが感じられた。

写真 9　店で提供する入善産野菜を使ったドリア（筆者撮影）

写真 10　店内の窓から見える入善町の緑豊かな風景（筆者撮影）

お話を伺っているうちに、笹川さんはイベントの企画参加にも取り組んでいるということがわかった。まず、イベントの企画についてである。地域おこし協力隊前隊員の中嶋舞さんとは、中嶋さんの活動期間である 2017 年から 2020 年までの 3 年間、毎年入善ジャンボ西瓜を使ったフルーツポンチを販売していた。現在の地域おこし協力隊の方とも、入善ジャンボ西瓜を使ったコラボスイーツを企画し、今年の夏に実現したが、このことについては第 3 節で詳しく取り上げる。

店をオープンして以来、地域おこし協力隊の方と協力したイベント企画を積極的に行なっていることが印象的だったため、地域おこし協力隊の方とコラボするにあたって、どのような思いがあるのかを聞いた。笹川さんは、協力して取り組むことによって、たくさんの人を集めないとできないことを実現できたり、自分だけでは思いつかないようなことを企画できたりする点が大きなメリットだと話してくださった。また、農家の方を含め、入善町を

盛り上げたいという強い思いがある者同士で協力することで、その思いがより多くの人に伝わり、入善町の魅力をアピールするきっかけ作りができることが一番嬉しいとおっしゃっていた。

イベントへの参加も積極的で、入善町の商工会主催のイベントや入善深層水かき祭り、にゅうぜんフラワーロード、カレー祭りなど、入善町を盛り上げる目的のイベントにはできるだけ参加するようにしているそうだ。このようなイベントに参加するときは、メニューに「入善産」という言葉をなるべく入れるようにしており、入善町以外から来た人にも入善町の魅力をアピールできるように考えているとおしゃっていた。このことから、イベントがあるときだけ注目してもらえればいいというわけではなく、多くの人が入善町に興味を持ち、良さを知ることができるようなきっかけとして、笹川さんはイベントへの参加を考えており、様々な面において入善町との関わりを大切にしていることがわかった。

今後、グラチネをどのような場所にしていきたいかと尋ねると、入善町の良さが伝わるような空間、食事、時間を提供できる場所にしていくため、これからもロケーションは変えずに営業していきたいと話してくださった。

3-2. おはぎの半六

おはぎの半六は、入善町の食材（新大正糯（もち）米と入善海洋深層水）と北海道の食材（小豆と黒豆）を使ったおはぎとおこわを提供している店である。場所は、入善まちなか交流施設うるおい館[90]のそばである。

写真 11　店で提供するおはぎとおこわ
（筆者撮影）

写真 12　手作りの説明ボード
（筆者撮影）

店の経営者である今井泉さん（58 歳、女性）は、新潟県出身の方で、入善町に引っ越してきたのは高校生のときである。2020 年の 12 月まで医療関係の仕事をしていたが、2021 年の 3 月から店を始めたそうだ。料理をすることがもともと好きだった今井さんは、友人に作

[90] 入善まちなか交流施設うるおい館については第 7 章参照。

ったものを振る舞ったり、自宅で作ったご飯やお弁当、おはぎなどを7、8年前からInstagramで投稿したりしていた。数ある料理の中でも、今井さんが特に作ることが好きだったおはぎの味を友人に褒められ、「商品として販売したらどうか」と勧められたことが店を始めるきっかけになったと教えてくださった。店のレジ横には、食材のこだわりについて書かれた手作りのボードが置かれている。

商品に使っている食材のうち、入善町の食材についてお話を伺うと、新大正糯(もち)米は、知り合いから紹介があった入善町の農家（sunny day farm）から直接仕入れており、入善海洋深層水は、にゅうぜん浜マルシェ[91]で汲んでいるということがわかった。自宅で作るときは小豆に塩味を足すために能登の粗塩を使っていたが、代わりに入善海洋深層水を使って作ってみたところ、やさしい甘さと程よい塩加減になることに気づいたという。糯(もち)米も入善海洋深層水で炊くことで、水道水で炊いた時よりもつやつやでもちもちになるそうだ。店を始めるにあたり、入善町のものを使った商品を作りたいという考えを持っていたこともあり、入善海洋深層水を使ったおはぎを販売しようという発想に切り替えたと今井さんはおっしゃっていた。

店についてはSNS（Facebook、Instagram、LINE）で発信しており、入善町や黒部市、魚津市、朝日町からの客が多い。中には、高岡市や上市町などの遠いところから来られる方もいるという。

また、イベントの参加の有無について尋ねたところ、コロナウイルスの影響で中止になってしまったものの、2021年の8月に開催予定だった入善町商工会主催のイベントへの参加を決めていたとのことだった。こだわって作っているおはぎをより多くの人に知ってもらいたいという強い思いやイベントを通した町の活性化にも協力的な姿勢を持っている点が印象に残っている。先に述べた手作りのボードをはじめ、SNSでの発信の様子、おはぎやおこわに対するこだわりから、今井さんの入善町への愛着や入善町の食材の良さを生かしたいという思いが感じられた。

3-3. 入善海洋深層水活用施設

入善町では、海洋深層水の試飲や海洋深層水を使用した商品販売を行う「入善海洋深層水活用施設」、その他海洋深層水取水ポンプ、牡蠣浄化施設やレストランなど、周辺施設一帯を「海洋深層水パーク」と呼んでいる。

入善海洋深層水活用施設は、海洋深層水の分水や海洋深層水関連商品の販売を行う「にゅうぜん浜マルシェ」や入善町の海洋深層水を活用した取り組みを紹介する「展示・体験コーナー」が整備されている施設である。運営は入善漁業協同組合が行なっている。

「にゅうぜん浜マルシェ」は2016年にオープンした。ここでは、原水、濃縮水、脱塩水の3種類の海洋深層水の販売を行なっている。この施設は浜の観光交流施設としての役割

[91] 第3節参照。

を担っており、入善町の特産品などに触れてもらうことが目的の 1 つとなっているため、海洋深層水関連商品のほか、海洋深層水を利用して養殖を行ったサクラマスのフィレや牡蠣殻を肥料に使ったお米、キャラクターグッズなど、入善町のものを中心に販売しているという。「展示・体験コーナー」では、入善町の重要な資源である海洋深層水を利用した取り組みや多彩な商品の展示がされており、特色を活かして町の活性化を図るという役割も担っている施設であると考えた。

客について尋ねると、海洋深層水を汲みに来る方はほとんど入善町の方だが、自転車愛好家、観光客など、入善町以外の方が立ち寄ることも多いそうだ。このことから、地元の人に限定せず、多くの人々に向けて入善町の良さを発信する施設であることがわかった。

写真 13　にゅうぜん浜マルシェ
（筆者撮影）

写真 14　「展示・体験コーナー」
（筆者撮影）

3-4. 百笑一喜（ひゃくしょういっき）

「百笑一喜」は、2014 年に入善町の 30～40 代の女性農業者が立ち上げたグループで、入善町の株式会社 Staygold てらだファームの寺田晴美さんが代表をつとめている。立ち上げ時のメンバーは 7 人だったが、現在（2021 年）は 8 人で活動している。このグループは、JA みな穂管内[92]で栽培された里芋の規格外品や親芋を活用した「さとっころっ」という里芋コロッケを開発し、町内外のイベントやあいさい広場で販売を行なっている（1 個 120 円）。この活動が認められ、「百笑一喜」は 2017 年に富山県農業振興賞[93]を受賞している。

---

[92] 第 4 節参照。

[93] 日頃から農業技術の研鑽に努め、農産物の品質や単収の向上、低コスト化等を図るとともに、地域のリーダーとして優れた成果をあげた個人や団体を表彰するもの。「米」、「麦」、「大豆」、「園芸」、「畜産」、「環境にやさしい農業」、「農産加工」、「複合経営」、「指導者」の 9 部門で構成されている。

写真 15　イベントに出店している様子
（福島恵美さんより提供）

写真 16 「さとっころっ」
（福島恵美さんより提供）

JA みな穂管内では 2009 年から里芋が栽培されており、形や色が悪く市場で売れない B 品[94]や親芋は廃棄されていた。そこに目を向けたのが、「廃棄野菜ゼロ」をテーマとして活動している寺田さんである。農家目線では廃棄されるのが当たり前になっている規格外の里芋や親芋だが、主婦目線から見たときに「捨てるのはもったいない」、「活用して何か作れないか」と思ったことがきっかけで、「さとっころっ」が生まれたそうだ。「さとっころっ」には、入善町の里芋を使い、全てメンバーが手作りしているというこだわりがある。

知名度を上げるためにグループで取り組んできたこととしては、SNS での情報発信やイベントへの積極的な参加、県や農協、他組合との連携などがある。このような取り組みを通して、現在（2021 年）ではイベントに出店すると多くの人に買い求められるようになったそうだ。私があいさい広場で開催されていたお盆市[95]を訪れた際にも「さとっころっ」が販売されていた。お盆市自体は 9 時から 16 時までだったが、「さとっころっ」はとても人気があるため、お昼過ぎには完売してしまったとグループの方が教えてくださった。また、イベント以外では、入善町・朝日町の学校給食に年一回「さとっころっ」が登場していることを教えてくださった。「百笑一喜」の取り組みは、農家と消費者双方の目線を大切にしたことによって実現したものであり、食材をうまく活用した商品を作ることで多くの人に入善町の食材の良さを知ってもらう機会になると考えられる。

3-5. マンモス 6（シックス）

「マンモス 6」は、2011 年に発足した入善町 6 次産業[96]推進会議のことである。このグル

---

[94] 形・大きさ・キズの有無などから規格外となったもののこと。こうした B 品が日常的に出てしまう現状で、それをどのように活かすのかが課題となっている。

[95] 毎年あいさい広場でお盆の期間に開催されるイベント。2021 年の来場者数は約 3200 人だった。

[96] 農林水産省によると、6 次産業化とは、「1 次産業としての農林漁業と、2 次産業として

ープでは、農業者だけでなく、様々な分野の事業者が連携することで地域ブランドを創造することを目指した活動を行なっており、町からも応援されている。

2021 年の 7 月 1 日からは 9 年の試行錯誤を経て開発された「入善のこだわりおやさいジェラート」の販売が開始された（1 個 350 円）。あいさい広場やヤマザキＹショップ入善駅前店で販売されている。この商品は、味はいいが形が悪くて売り物にならない入善町の規格外の野菜（ミニトマト、とうもろこし、さつまいも、里芋、プチヴェール[97]）や町の主要作物である入善産米の米こうじを使った甘酒をペーストにしてジェラートにしたものである。捨てられてしまうもったいない農作物に付加価値をつけて商品化できないかという思いから開発されたそうだ。

実際に食べてみたところ、野菜本来の甘さや粒の食感が残されており、素材が生かされた商品だと感じた。ジェラートに入善の野菜の魅力が詰まっており、規格外の野菜に付加価値をつけて独自の連携で商品化したという点では、食品ロスの削減につながるだけでなく、地域資源をうまく活用した取り組みであると考えられる。また、ジェラートなら野菜が苦手な人も手に取りやすく、実際に食べることで入善町の野菜や食について興味を持つきっかけにもなり得ると考えた。

写真 17　入善のこだわりおやさいジェラート（筆者撮影）

写真 18　里芋のジェラート（左）ととうもろこしのジェラート（右）（筆者撮影）

4. 生産者と消費者の交流を活発化する活動

本節では、入善町の食の魅力を発信している施設や人物について記述していく。発信する立場から地域の活性化に貢献しようとしている方たちへのインタビューを通して、入善町

の製造業、3 次産業としての小売業等の事業との総合的かつ一体的な推進を図り、農山漁村の豊かな地域資源を活用した新たな付加価値を生み出す取組」だとされている。（農林水産省「農林漁業の 6 次産業化」より）

[97] アブラナの一種で、芽キャベツとケールの交配によって開発された野菜。

の外部の人に魅力を伝えたり、生産者と消費者の交流を活発化させたりするためにどのような工夫がされているのかを明らかにする。

4-1. JA みな穂あいさい広場

ここでは、あいさい広場の店長である松原康子さん（48 歳、女性）へのインタビューを基に記述する。あいさい広場は、2013 年の 5 月 23 日にオープンした、みな穂農業協同組合[98]農産物直売所であり、入善町役場の斜め向かいに位置する。「あいさい（愛菜）」には、JA みな穂管内の土壌で愛情を込めて育てた野菜を販売する場、地域住民に愛される集いの場となって欲しいという思いが込められており、特産品に加えて素材を活かした加工品も販売されている。組合員の指導や所得水準の向上を目指した取り組みを行なっている JA みな穂は、組合員を助ける一環で、「組合員の生産したものを販売し、やりがいと生きがいを創出できる場」として、あいさい広場をオープンさせたそうだ。

写真 19　あいさい広場の外観
（筆者撮影）

写真 20　あいさい広場の前段となった
直売所（松原康子さん提供）

松原さんによると、あいさい広場ができる前には、あいさい広場よりも規模[99]が小さい直売所があった。松原さんに提供していただいた写真から、「JA みな穂農産物直売所」という名前だったことがわかった。2006 年の 7 月にオープンした直売所で、この頃の客の年齢層は現在のあいさい広場よりも高かったそうだ。

あいさい広場は、JA みな穂の組合員を応援することを第一としているため、できる限りみな穂管内のものを中心に扱うことがこだわりになっている。しいたけやりんごなどのみな穂管内では生産していない農産物に限り、他の地域で生産されたのものを扱うことがあ

---

[98] みな穂農業協同組合（JA みな穂）は、2006 年 3 月に JA 入善町と JA あさひ野が合併して誕生した。富山県東部に位置する入善町と朝日町を区域とし、北アルプスから日本海に注ぐ清らかな水と稲穂たなびく水田地帯をイメージし「みな穂」と名づけられた。

[99] あいさい広場の建物面積は 491.60 ㎡、売場面積は 177.30 ㎡である。

るという。JA みな穂に登録している農家は約 500 人で、平均すると月に約 200 人が農産物や加工品を持ってくるそうだ。

商品の値段は生産者自身で決めている。あいさい広場側が値段設定について生産者側から相談を受けることはあるが、同じ種類の商品であっても生産者によってかかっている費用は異なり、あいさい広場側が一律に商品の値段を決めてしまうと生産者の意向を大切にできないため、生産者側に値段を決めてもらっているという。配置に関しては、「トマトはここ」、「キュウリはここ」というような大まかな区切りはあいさい広場側が決めているが、細かな配置は決まっていないため、生産者が自由に陳列していくそうだ。あいさい広場の営業時間は 9 時から 18 時だが、バックヤード[100]は 7 時半から開いており、生産者の方たちはその時間から閉店時間までの都合の良い時間に直接農産物を持ってくる。

写真 21．22　生産者直送野菜コーナー（筆者撮影）

あいさい広場を訪れた際、店内の商品を紹介する手作りのポップが掲示されていたので、ポップは誰が作っているのか松原さんに尋ねてみたところ、商品のこだわりやその商品を使ったレシピが書かれたポップは生産者自身が作っていることがわかった。野菜や加工品のこだわりを知ってもらいたい、美味しく食べてもらいたいという生産者の強い思いがそれぞれのポップに表れており、その独創性が客の注目を集めるための良い方法になっているのが印象的だった。こうした工夫があることが、生産者と客のつながりを強める理由の 1 つであると考えられる。

写真 23　店内にある生産者が自作したポップ（筆者撮影）

あいさい広場では季節に応じてイベントが開催されるが、その中でも 1 番大きなイベントは、JA みな穂フェスティバルである。出品者の多く

[100] 出荷者や従業員が出入りする場所のことで、利用客は立ち入ることができない。

は農家だが、加工グループや組合の方も参加し、地場農産物や加工品などを販売するイベントだという。毎年、米の収穫が終わった 10 月に行われており、2 日間の開催期間で 1 万 2 千人から 1 万 3 千人ほどの客が来る大イベントだが、2020 年と 2021 年はコロナウイルスの影響で行われなかった。JA みな穂フェスティバル以外で毎年行われるイベントとしては、お盆市や歳の市[101]というものもある。また、「おいしいやさい部」[102]や農業女子が主体となった不定期開催のイベントもあると教えてくださった。

このようなイベントを行うにあたって松原さんが大切にしているのは、入善町・朝日町で様々な活動を通して頑張ろうとしている人たちを応援したいという気持ちで、そうした人たちに生きがいとやりがいを見つけてもらうためにあいさい広場という場所を提供しているのだという。そして、イベントをきっかけにして、より多くの人々に入善町・朝日町の魅力を発信するあいさい広場について知ってもらうことと、客だけではなく農家や生産者の喜びにつなげることを目的にしているとおっしゃっていた。このことから、あいさい広場は生産者と客の消費者とのつながりを形成する役割を担う重要な場所なのではないかと考えた。

写真 24　JA みな穂フェスティバルの様子
（松原康子さん提供）

4-2. 地域おこし協力隊

町の活性化に関わる人として重要な存在である地域おこし協力隊[103]について記述していく。入善町では、千原史江さん（38 歳、女性）が 2021 年の 4 月から地域おこし協力隊として活躍している。千原さんは陶芸作家（「文絵（ふみえ）」）であり、器を使うことによる地域おこしを活動の軸としている。地域おこし協力隊としての主な活動は、入善町の魅力を見つけて発信することや入善町の良さを PR することである。入善町の広報紙である『広報入善』には、「ちおこ通信」という入善町地域おこし協力隊（ちおこ）の活動を紹介するコーナーがあり、千原さんの活動内容が毎月掲載されている。

---

[101] 毎年あいさい広場で年末に行われるイベント。野菜だけでなく、正月用の菊や切り花も販売される。2021 年の来場者は約 2400 人だった。

[102] 第３節参照。

[103] 地域おこし協力隊とは、「人口減少や高齢化等の進行が著しい地方において、地域外の人材を積極的に受け入れ、地域協力活動を行ってもらい、その定住・定着を図ることで、意欲ある都市住民のニーズに応えながら、地域力の維持・強化を図っていくことを目的とした」2009 年に総務省が創設した制度である。（入善町「地域おこし協力隊の紹介」より）

千原さんは福岡県出身で、学生時代にはデザインや日本画を学び、卒業後は旅行会社に就職した。しかし、学生時代から 15 年間ほど続けていたボランティア活動を通して、地域の人々とのつながりを大切にした仕事をしたいという気持ちが大きくなっていった。その際に、知り合いの方から「過疎地の観光業を推進する手伝いをすることはやりがいがあるよ」という話を聞き、陶芸を学んでいたことと観光業の経験があることを生かした活動をしたいと思うようになったことが地域おこし協力隊として活動しようと思ったきっかけだという。地域おこしの活動の場所として入善町を選んだ理由は、実際に入善町を訪れた際に、地元の福岡に似ていることや食べ物が美味しいことに気づいたからだとおっしゃっていた。美味しい食べ物がある場所にこだわるのは、陶芸は器を作って終わりではなく、食べ物を載せて食べてもらって完成するものだからだそうだ。千原さんは 2013 年から展示会出展を始め、地域おこし協力隊として入善町に来てからも多数の出展をされている。2021 年の 9 月 29 日から 10 月 5 日には、東京で開催されたイレブンガールズアートコレクション[104]展に出展された。

写真 25　個展の様子
（千原史江さん提供）

写真 26．27　出展作品
（千原史江さん提供）

千原さんは、入善町地域おこし協力隊に着任してから陶芸作家と地域おこしを組み合わせた活動を行なっており、作った器と入善町の飲食店とのコラボレーションによって町の魅力を発信することや、入善町を連想できるような釉薬（ゆうやく）[105]を開発することを目標にしている

[104] 2010 年に結成された日本初の女性アーティストユニット。普段は別々に活動しているが、展覧会を開催する時は全国から集結する。

[105] 陶磁器の表面に焼き付けて美観，強度，耐食性などを与え，吸湿性をなくすために用い

という。

まず、千原さんが作った器と入善町の飲食店とのコラボレーションについて述べる。2021年の夏、千原さんは第2節で取り上げたカフェ兼レストランの「グラチネ」とのコラボレーション企画を実現した。この企画で完成したのは、「大人のブランマンジェ ～バジル西瓜～」という名前のスイーツで、入善ジャンボ西瓜がメインとなっている。使用しているバジルや入善うま塩も入善産の食材というこだわりがある。2021年7月25日から8月15日までの期間限定で提供された。

この企画は、入善町の飲食店や農家を応援するために考えられたものである。グラチネのオーナーシェフである笹川さんとは、入善町の特産品である入善ジャンボ西瓜をPRし、食材そのものの良さを引き出すきっかけにしたいという思いが一致し、企画の実現に至ったと千原さんはおっしゃっていた。第2節で述べた高見農産の入善ジャンボ西瓜を使っており、事前に生産者から直接話を聞く場を設けたそうだ。そのため、生産者がどれだけ手間をかけてこだわっているかについても知った上で、入善ジャンボ西瓜の価値の高さを伝えたい思いが強くなったという。

写真28　千原さんとグラチネのコラボスイーツ（筆者撮影）

千原さんは、こうした価値を紹介するときに器が大きな役割を果たすことを教えてくださった。器が良ければ、器にのせた食材が相乗効果によってより一層美味しそうに見え、良さを引き立てることができるという。多くの人に食材の価値を再確認してもらうきっかけ作りとして、今後も器作りに取り組んでいきたいとおっしゃっていた。

コラボスイーツの提供が始まってからは、入善町以外のところからも多くの方が足を運んでくださったそうで、今回の企画が入善町の魅力について知ってもらえるきっかけになったことがうれしいとおっしゃっていた。陶芸と入善町の食材を組み合わせた地域振興に力を入れる千原さんの姿勢から、地域おこしに対する強い熱意が感じられた。千原さんが企画した飲食店とのコラボレーションは、陶芸家の視点からでないとできないような地域おこしであり、オリジナリティーがある方法であると考えられる。

次に、入善町の魅力を発信するために千原さんが企画した「ジャンボ～ル三世と乙女キクザクラと愉快な仲間たちの箸置きの500円ガチャ」について記述する。このイベントは、入善町の食べ物などをモチーフにして千原さんが作った箸置きをあいさい広場に設置されたガチャガチャ（カプセル自動販売機）で買うことができるというものである。箸置きは、2021年の9月から11月の3ヶ月の間、毎月20日に補充された。

られるガラス質の物質。

写真 29　イベントで使用されたガチャガチャ（筆者撮影）

最初はいつも応援してくださっている入善町の方のために箸置きを作っていたが、千原さんが SNS（Twitter、Instagram、Facebook）で箸置きの制作過程を発信していたところ、予想以上に大きな反響が得られた。そのため、9 月に行われた 1 回目のイベントの際には用意していたガチャガチャ 2 台分（箸置き約 90 個）が完売してしまい、ガチャガチャ 1 台分の箸置きを追加することになった。これを受け、10 月に行われた 2 回目のイベントからは、より多くの人に楽しんでもらうために 1 人 2 回までという回数制限が設けられた。

千原さんは、新型コロナウイルスの影響で外出を控えて自宅で過ごすことが増えていることから、陶芸品で「おうち時間」に彩りを添えてもらおうとこの企画を考えた。コロナ下でも食事は欠かせないものであり、誰でも食器に触れる機会がある。種類豊富な食器の中でより多くの人に身近に感じてもらえるものは何かと考え、箸置きを作ることを決めたという。このイベントで箸置きを手に入れた人が、「次は箸、その次は皿」というように彩りを増やしていこうと思えるきっかけにしたいともおっしゃっていた。

販売方法をガチャガチャにした理由は、陶芸というアートを楽しく、身近に感じてもらうために一番効果的だと考えたからだと教えてくださった。千原さんは様々な展示会出展の経験を踏まえて、陶芸というとどこか難しそうなイメージを持つ人が多く、展示会や百貨店で販売する方法では、もともと陶芸に興味のあった人たちにしか興味を持ってもらえないことを実感した。そのため、今回のイベントはもともと陶芸に興味のあった人たちに限らず、あまり知らなかった人たちにも気軽に陶芸に触れてもらえるきっかけにしてもらいたいという思いがあったという。

ガチャガチャに入れた箸置きは、ジャンボ～ル三世、入善乙女キクザクラ、深層水仕込みカキ、ホタルイカ、米、チューリップ、枝豆の全部で 7 つの型で作ったそうだ。千原さんが地域おこし協力隊として入善町に来てから「おいしい」「きれいだ」と感じたものがモチーフになっており、それぞれに使った釉薬や絵付けの仕方が異なるため 30 以上の種類がある。千原さんは、アートは言葉では表しづらいものであり、形にすることで初めて伝わることから、作品の形や色使いにはこだわりを持っている。細かいところを再現するため、実物をよく見て、モチーフに合わせて形に丸みや立体感を出すことを特に意識したとおっしゃっていた。

箸置きが完成するまでの工程はとても多いため、手順に沿って簡単に説明する。まず、荒練り[106]を約 150 回～200 回（写真 30）、菊練り[107]を約 150 回（写真 31）繰り返して土を練った後、原型を造形する（写真 32）。その原型を基にして石膏で型を作り（写真 33）、石膏型に粘土を詰めて成形する（写真 34）。成形した品物をしばらく乾かし、バリ[108]取りをして形を整える（写真 35）。この時に使うカンナやヘラなどの道具は千原さんが作ったものである。その後、水をつけたスポンジなどで角を滑らかにする。バリ取りが終わったものはしっかり乾燥させた後に素焼き[109]する（写真 36）。そして、絵付け（写真 37）や釉薬掛け（写真 38）を行う。釉薬は様々な色があり、優しい色合いのものが多い。釉薬掛けが終わったら釉処理[110]をする。本焼き[111]した後、品物の裏側をやすりがけして箸置きが完成する（写真 39）。

写真 30　荒練り（千原史江さん提供）

写真 31　菊練り（千原史江さん提供）

写真 32　原型の造形（千原史江さん提供）

写真 33　石膏型づくり（千原史江さん提供）

---

[106] 粘土の中の水分量と粒子を均等にする作業のこと。

[107] 粘土の中の空気を抜く作業のこと。

[108] 線の両側にはみ出した粘土のこと。

[109] 釉薬をかけやすくし、焼き色を安定させるために行う。温度は 700℃～800℃程度。

[110] 焼成時、棚板に釉薬が流れてくっつかないようにする作業のこと。窯元では第一弟子などがする一番大事な仕事で、この作業を雑にするとそれより前の工程が全て台無しになる。

[111] 焼き物作りの最終工程で、釉薬を溶かし、強度を増すために行う。温度は 1230℃～1270℃程度。

写真 34　粘土の成形（筆者撮影）

写真 35　成形した粘土のバリ取り
（筆者撮影）

写真 36　素焼き（筆者撮影）

写真 37　絵付け（筆者撮影）

写真 38　釉薬掛け（千原史江さん提供）

写真 39　本焼きして完成（千原史江さん提供）

このように、原型の造形、石膏型づくり、粘土の成形、成形した粘土のバリ取り、素焼き、絵付け、釉薬掛け、本焼きという多くの工程を経て箸置きが完成する。

9 月に行われた 1 回目のイベントの際には、約 40 人が千原さんの SNS を見たことをきっかけに来てくださったそうだ。30～40 代の女性や子供連れがほとんどで、入善町の方が最も多かったが、遠いところでは小矢部市から足を運んでくださった方もいたという。今回の

イベントを振り返り、入善町以外に住む人にも入善町に興味を持ってもらい、実際に来てもらうための足がかりになったのではないかと千原さんはおっしゃっていた。イベントで購入した箸置きを使っている様子を SNS で報告される方もおり、その報告によって楽しむ時間を作る企画になったことを実感できるのが一番嬉しいという。今後も、美味しく食べてもらえるような器作りを続け、器を通して器のまわりの生活空間もプロデュースしていきたいとおっしゃっていた。

ここまで、千原さんが地域おこし協力隊として行った活動について記述してきた。企画やイベントについても取り上げたが、千原さんはこうしたものを短期間で終わらせるのではなく、今後の地域おこしにもつなげていくことを大切にしていきたいという。そのためには、このような取り組みを入善町について知ってもらう入り口と捉え、持続的に行っていくことが重要であるとおっしゃっていた。

5.まとめ

ここまで、入善町の食を通じた地域おこしに取り組んでいる方やグループ、施設の活動内容についてまとめてきた。今回の調査を通して、入善町ではどのような活動が行われているのかということを知ることができただけでなく、そこに携わる人々が入善町の地域おこしにかける思いについても知ることができた。

農家、飲食店、グループの方へのインタビューからは、ものづくりの過程を知ることの大切さを実感した。野菜の収穫や商品の完成に至るまでに作り手の人たちはどのような工夫をし、どれだけの苦労をしてきたのかは知らなかったが、インタビューをしていくと徐々に分かってきた。活動の分野が異なれば苦労する点にも違いが出てくるが、「作り手」という大きなくくりの中で共通して見られたのは、「入善町の良さをもっと多くの人に知ってほしい」という思いだった。その思いが根底にあるからこそ、どんなに大変なことがあっても、歴史を守るため、良さを知ってもらえるようなきっかけを作るため、消費者に喜んでもらうために取り組み続ける姿があるように思う。入善町の食材やそれを使った商品の価値をより多くの人々に認識してもらうためには、苦労話などを含めた作り手の思いも一緒に発信していくことが大切なのではないかと考えた。

また、あいさい広場の調査を通して、生産者と消費者が直接つながる場を設けることは、生産者のやりがいや消費者の安心感を生み出すだけでなく、消費者に地域への愛着を深めてもらうための良い機会になっているのではないかと考えた。地産地消の推進やイベントの開催など、入善町の魅力を発信するとともに地域活性化につなげようとする取り組みが多く行われていることから、あいさい広場は入善町の中で重要な存在であると感じた。

いくつかのグループが行なっていた商品開発はとても印象的で、JA みな穂青壮年部のように、複数のところと連携を図りながら商品を生み出していくという取り組みは新しい展開を生み出しており、今後の可能性を感じさせる。また、地場産品の魅力を伝えるだけでな

く、消費者の購買意欲を高め、地域の認知度を向上させるという面でも大きな意味があると考えられる。一方で、「百笑一喜」や「マンモス 6」の活動の中には地域の農産物の廃棄を減らし、資源の有効活用を目指す取り組みが見られたことから、グループでの取り組みの目的は、入善町の外部の人に知ってもらい、入善町の活性化につなげようという発展志向が感じられるものから地域にあるものを活用して持続的な資源利用をすることを目指すものまで様々であることが分かった。

そして、食といっても、食材として使うだけではなく、食材をモチーフにしたものを作ることもできるため、関わり方は様々である。いかに地域の魅力を引き出し、アピールしていくかが大切であり、その点において地域おこし協力隊である千原さんの視点は鋭いと感じた。地元の人にとっては当たり前でも、他の地域の人には新しく、魅力的なものに映ることもあるため、地域の独自性を価値へと変えていくための活動は今後も求められていくだろう。

今回の調査は、特に女性に焦点を当てて行ったわけではないが、結果的に女性たちの活動が多く見られる結果となった。聞き取り調査を行うなかで「入善町で農業をしている女子は元気だ」という声もあったが、入善町を盛り上げたいという思いが強いからか、分野を問わず、活動的な女性が多いと感じた。また、地元の人だけで地域おこしが行われているのではなく、地元以外から入善町に来た人を交えながら食を通じた地域おこしが行われていることも分かった。一過性のものとして終わらせないような活動に熱意を込める姿勢にはとても感心した。これらのことは、入善町における地域おこしの特徴であると考えられる。
しかし、魅力ある町として入善町がさらに活性化していくためには、様々な課題を解決していく必要がある。農業分野の後継者不足は大きな問題であり、このままでは次の世代に技術を伝承することができなくなってしまう。特に第 2 節で述べた入善ジャンボ西瓜の後継者不足が懸念される。これまで守り抜いてきた伝統を絶やさないためにも、SNS を積極的に活用して若者向けに情報発信をしたり、新規生産者を獲得するための取り組みを増やしたりすると良いかもしれない。

食を通じた地域おこしには、生産から販売・加工、消費までいくつも段階があり、取り組みへの関わり方も個人やグループ、連携、行政のものまで様々である。その目的も一様ではないが、地域おこしは生産者や飲食店・施設の事業者だけで行うことはできず、消費者を巻き込んでいくことが重要であることは共通していると言えるだろう。あいさい広場や地域おこし協力隊の取り組みに限らず、入善ジャンボ西瓜の生産者の語りや飲食店の活動などからも、生産者と消費者がつながることが重要になってきていることを実感した。また、食を切り口とした取り組みは様々な視点から考えることができるため、地域活性化を図るために有力な手段であると言える。地場産品の開発やイベントの開催を含め、差別化を図りながら魅力を発信し続けている入善町の取り組みから、食を積極的に利用した地域おこしには大きな可能性があると考えた。

謝辞

今回の調査にあたって、ご協力いただいた皆様に御礼申し上げます。特に地域おこし協力隊の千原史江さんには何度も調査に協力していただき、大変お世話になりました。報告書を無事書き終えることができたのは、インタビューや資料の提供にご協力いただいた皆様のおかげです。本当にありがとうございました。

参考ウェブサイト

入善町「海洋深層水とは？」
〈https://www.town.nyuzen.toyama.jp/gyosei/soshiki/kirakira/2/4/1632.html〉
(2021/12/4 閲覧)

入善 牡蠣ノ星「牡蠣のレストラン」
〈https://www.kakinohoshi.com/nyuzen/restaurant.php〉
(2021/12/22 閲覧)

農林水産省「地理的表示（GI）保護制度」
〈https://www.maff.go.jp/j/shokusan/gi_act〉
(2021/12/5 閲覧)

農林水産省「農林漁業の 6 次産業化」
〈https://www.maff.go.jp/j/shokusan/sanki/6jika.html〉
(2021/10/30 閲覧)

入善町「海洋深層水パーク」
〈https://www.town.nyuzen.toyama.jp/gyosei/soshiki/kirakira/2/4/1633.html〉
(2021/11/9 閲覧)

JA みな穂「みな穂の概要」
〈https://www.ja-minaho.or.jp/about〉
(2021/11/6 閲覧)

入善町「地域おこし協力隊の紹介」
〈https://www.town.nyuzen.toyama.jp/gyosei/soshiki/kikaku_zaisei/1/6/610.html〉
(2021/11/6 閲覧)

第５章　黒部市の二組の若手農家の実態とこれから

小林　愛奈

はじめに

黒部市で調査を行うにあたり道の駅などを訪問した際に、農家が作った地元産の食材が販売されているところを何度か見かけた。黒部市には、黒部川をはじめとし、山や海などの豊富な自然環境が揃っている。有名な特産品として黒部名水ポークや宇奈月ビールなどが思い浮かぶが、調査を進めて行くにつれ、黒部市では兼業農家を含めお米農家が多いことが分かった。私自身、実家が兼業の米農家ということもあり、黒部市の米作りについて興味を持った。そこから黒部の農業に興味を持ち、米農家だけではなく、果樹などについても調べたいと思うようになった。色々な方からお話を伺ううちに、ただの農業のあり方ではなく、家族で営んでいる農家のあり方が、自分の想像する大規模で効率化されたような「農業」のあり方とは異なっていることに気がついた。

ここでは、お話を伺った米農家の濱田ファームさんとぶどう農家の bossa farm さんについて、それぞれの農業との向き合い方について記述していく。

第１節では、黒部市の現在の農業について述べる。第２節では、米の専業農家である濱田ファームについて紹介する。第３節では、ぶどうの直売を行っている bossa farm について紹介する。

図 1　濱田ファームと bossa farm の場所（地理院地図より作成）

1. 黒部市の農業について

ここでは、農林水産省の統計情報[112]をもとに、黒部市における農業の現状についてまとめる。農林水産省によると、2020 年の黒部市の総土地面積は 42631 ha であり、そのうち耕地面積が 2740 ha である。耕地面積のうち、田耕地面積は 2600 ha となっており、その中でも販売を目的とした水稲の作付面積は 1814ha である。

2020 年農林業センサスによると、黒部市における農業経営体[113]数は 556 であり、農家[114]の数は 764 戸である。作付け作物別に農業経営体数を見ていくと稲が 525 経営体と非常に多いことが分かる。果樹は 13 経営体であり、そのうちぶどうは 1 経営体である。農作物直売所は 14 施設ある。

2015 年の統計[115]によると、水田率（耕作地のうち何割が水田か）について、全国が 54.4%であるのに対し、富山県の水田率は 95.7%、黒部市では 95.3%と、極端に割合が高くなっている。

黒部市の農業が稲作に偏っていることには歴史的・地理的理由が大きい。『黒部川扇状地の文化地理』によると、黒部市ではその耕作の大部分が黒部川扇状地で行われている。黒部川扇状地は、黒部川の流れによって作られた扇状地のため、扇状地の中でも勾配が緩やかな緩勾配扇状地である。緩勾配扇状地の地表面は、掃流砂礫堆積[116]となっており、起伏も小さい。黒部川という流域の大きい河川があることで、豊富な水資源も利用できる。このように、黒部川扇状地は稲作に適した地形であり、古くからこの地に暮らす人々は稲作を行って暮らしてきた。

しかし、黒部川は「暴れ川」と言われているように、洪水や水害が多く発生した。十二貫野用水や、宮野・山田新等の用水などをつくり、安定した水の供給を確保しようとした。幾度となく水害により、水田や生活域が流されることもあったが、その度に新たな用水を作り出した。

江戸時代には、加賀前田藩の安定した政治支配のもとで新田開発が行われ、扇状地のほぼすべてが水田となった。用水の開発も進み、黒部の豊富な水資源は生活用水としても重

---

112 農林水産省　統計情報　わがマチわがムラ「市町村の姿　グラフと統計で見る農林水産業　詳細データ　黒部市」

113 農産物の生産を行うか又は委託を受けて農作業を行い、(1) 経営耕地面 積が 30a 以上、(2) 農作物の作付面積又は栽培面積、家畜の飼養頭羽数 又は出荷羽数等、一定の外形基準以上の規模（露地野菜 15a、施設野菜　350m2、搾乳牛 1 頭等)、(3) 農作業の受託を実施、のいずれかに該当するもののことをいう。(農林水産省「用語の解説」より）

114 経営耕地面積が 10a 以上の農業を営む世帯又は農産物販売金額が年間 15 万円以上ある世帯のこと。(農林水産省「用語の解説」より）

115 北陸農政局　平成 27 年～28 年 農林水産統計年報 富山県「IV 耕地の部」

116 川の流れにより、川底の土砂が移動し堆積したもののこと。

宝された。

その後、高度経済成長をきっかけに、専業農家が急減し、兼業農家が急増した。人口も流出し、過疎に繋がっていった。しかし、扇状地農村では、農業構造改善事業の実施過程で工場誘致を重視し、1971 年の「農村地域工業導入促進法」の制度化の具体化として「農工一体化」事業を勧め、就業機会を作るなどして、安定的な就業形態のある地域に変化した。このため、微増ながらも人口増加を促進し、農業も重要な産業とされている。だが、現在では、兼業農家は農業を辞め、農家は法人化し大規模化していく、といった傾向が強くなってきている。

現在黒部市は農業に関して農業委員会を設置したり、新規担い手を募集したり、農家への融資制度を制定するなどの取り組みを行っている。全国で取り組まれている「人・農地プラン」という将来予想される地域農業での問題解決に向けて農業者同士で話し合い、将来の農業のあり方などを明確化し市町村により公表するという取り組みも行っている。

2. 濱田ファームについて

2-1. 濱田ファームの概要

濱田ファームは、濱田智和さん（50 歳）と妻の律子さん（49 歳）によって経営されている、黒部市立野に事務所を構える専業の米農家である。無農薬・減農薬での米作りや直売に力を入れている。

元々は智和さんの実家が代々の米の兼業農家として、約 40 アールの田んぼを所有していた。しかし、道路建設のためにそのほとんどがなくなり父親は米作りを止めようとしていた。当時智和さんは東京でサラリーマンとして働いていたが、東京での暮らしに疲れを覚えたことなどをきっかけに 29 歳で退職し、2001 年から 1 年間、ワーキングホリデーを利用してカナダに滞在した。そこで智和さんは様々なカルチャーショックを受け、日本から離れることによって過去の自分や日本のことを客観的にみられるようになり、カナダでの生活での後で何をしようかと考えたときに真っ先に思い浮かんだのが農業だった。実家が兼業でコメ作りをしていたため昔から農業に馴染み深かったことや、大学の農学部で学んでいたことなども背景にあるという。帰国後、2 年間富山県内の大農家の下で米作りについて学んだ後、2004 年から濱田ファームとして独立した。

濱田ファームを発足して、はじめの 5 年ほどは大変なことの連続だったそうだ。米の専業農家は圧倒的に世襲が多いが、智和さんは専業農家としては自分が初代であったために、設備やノウハウのないところから始めなければならないという苦労があった。結婚してからは、妻の律子さんが経営面を担ってくれているので、大きな支えになっている。妻の律子さんは、愛知県生まれ千葉県育ちで、結婚するまではカナダの旅行会社に 10 年ほど勤めており、カナダの永住権も取得していた。しかし、結婚を機に黒部へと移り住み農家を始めることとなり、経営などに必要な知識はその都度勉強していったという。いまでも律子さんはジャンルを問わずに様々な勉強会などに参加している。

2-2. 夫婦での役割分担について

濱田ファームは大きく分けて生産を智和さんが、経営を律子さんが行っている。実際の農作業は基本的に年間を通して智和さんが一人で行っている。ただし、種まきや田植えなどの労力がかかる作業に関しては、律子さんやアルバイトの手伝いが入ることが多いという。智和さんは細かい年間スケジュールが書き込まれた自作の表を基に農作業を行っている。表計算ソフトで作成されたこの表は丁寧に作り込まれており、作成が大変そうに見えた。しかし、大変だったのは初めて作ったときだけで、それ以降は基本的に前年度のものを改良して使用しているからそんなに大変ではないという。多少天候などで前後することはあっても、スケジュール通りに作業を行うことでだいたいうまくいく、と話していた。

図 2　濱田さんの作成した実際の年間スケジュール表の一部

同様に、主要な作業の手順を記した自作のマニュアルも作られていた。種籾や田植えの手順が書かれているもので毎年使い回されており、必要なことには手書きのメモが足されている。このマニュアルは智和さん自身の作業の確認のためという役割が大きい。田植えの時期などには手伝いに来てもらうことが多いため、その際の作業の説明で使うこともあるが、実際には口頭で伝えたり実践したりする方が早いため、あまりマニュアルは使わないという。農作業以外の作業では、直売して出荷する際の精米や梱包なども、智和さんが担当している。

律子さんは、農作業以外の経営や経理、ホームページの運用、直売所での対応など、事務仕事を主に担当されている。智和さんは「ただ米を作るなら簡単で誰でもできるが、経営となると全く別の作業になるのでどうやっていくのかはその人次第。お米作りの場合、ノウハウはなくても、JA や県の支援機関にマニュアルがあるので、作るだけならすぐできる。現金化するのが一番難しい」と経営の難しさを語った。濱田ファームのお米はそのほぼ全てを直売している。智和さんが一人で管理できる作付面積でいかに売り上げを出すかが難しい

ところだが、ホームページや SNS を活用して販売している。

農作業が落ち着いている冬季には、富山県内や東京で開催されるイベントなどに中学 1 年生になる娘さんも含めた家族三人で積極的に参加し、イベントでの対面での直売や濱田ファームの宣伝に取り組んでいるという。

2-3. 稲作について

濱田ファームで生産されている米の品目は大きく 3 つに分けられる。コシヒカリ（3 種類）、ミルキークイーン、黒米だ。3 種のコシヒカリは「こだわり栽培」「減農薬」「無農薬」の 3 種類である。2021 年度の生産の割合はコシヒカリが 92%（内訳は、「こだわり栽培」72%、「減農薬」11%、「無農薬」9%）、ミルキークイーンが 8%、黒米は隔年栽培のため 2021 年は作っていない、作っていたとしてもごく少量、となる。

コシヒカリについて詳しく説明する。まず、「こだわり栽培」についてだ。こだわり栽培のお米は「慣行農法」という作物の収穫量の最大化を目指す手法を用いた上で、使用する農薬の量を減らした米である。農薬は散布回数を減らすのではなく、1 種類の農薬に含まれる成分数の種類を通常の 8 割減らす。また、通常は一反歩で苗箱 20 箱を植えるところを 15 箱程度しか植えていない、つまり少なく植えて間隔を開け、風通しをよくし、苗の一つ一つが大きくなるような植え方をしているということもこだわりの点である。お客さんに説明する際は、専門用語が多いため「農薬を 8 割減らしたもの」と説明している。

実際のところ「こだわり栽培コシヒカリ」というネーミングは、製法を説明したものではない。ただのコシヒカリという名前よりも、特に対面販売などではお客さんに興味を持ってもらうため、生産者である自分自身が売る際に「こだわりです」と自信を持ってアピールするためのネーミングであるという。「こだわり」の内容が詳しく分からずとも、こだわりだと言っている生産者の顔を直接見ながらだと、消費者も安心して購入できるし、よりおいしいと思って貰えるからだと語っていた。「減農薬」「無農薬」に関しては、農薬の使用回数が「減農薬」は 1 回、「無農薬」は 0 回と、有機栽培に取り組んでいる。害虫対策として、畦にミントを植えるなどの工夫も施されている。

ミルキークイーンや黒米は「こだわり栽培」と同じ手法がとられている。

2-4. 水田について

濱田ファームの水田は黒部入善バイパス、富山地方鉄道、あいの風とやま鉄道がちょうど交差する位置に存在している。水田の水は黒部川の上流の方から引いている。黒部は水資源が豊富であるため、ため池などを使わなくても水田に使う水がたくさんあるということが特徴的である。

水田にはそれぞれ名前が付いている。水田の名前は、水田の権利者の名前がつけられるこ

とが多い。水田の権利関係については後述するが、受託者[117]が権利者から借り受けて入る場合が多くある。その時に、1 人の権利者に対して複数の受託者がいる場合には、水田は「○○（権利者の名前）仲間」という名称となる。しかし、この名称は形式上のものであり実際にその名前で水田を呼ぶことは少ない。

水田の権利関係について詳しく説明する。濱田ファームの耕作しているほとんどの水田が受託しているものである。これは珍しいことで、大多数の米農家は大規模に耕作をする中で受託も行うが、ほとんどすべてが受託地ということはない。濱田さんがもともと所有していた水田が道路工事の際になくなってしまったということや、他の代々土地を受け継いでいる農家と違い、新しく事業を始めた農家であるということが理由である。

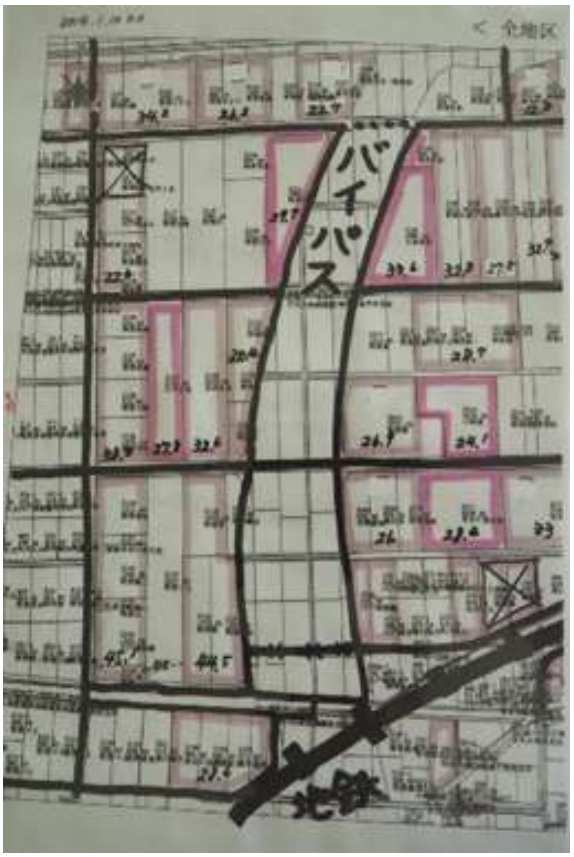


図 3　濱田ファームの水田（赤枠）

権利者と受託者の契約方法は大きく分けて「作業受託」と「全面受託」の二つがある。二つとも、水田の土地そのものの権利は権利者にあり、受託者は水田を借り受けている状態である。そのため、どちらの場合でも「年貢（賃借料）」と呼称されているレンタル料が発生する場合がある。この年貢は各市町村や地域で異なっており、金銭でやりとりする場合もあれば、お米などの現物でやりとりする場合もある。

では、二つの違いについて説明する。「作業受託」では、受託者が権利者の田んぼで米を作るという「作業」に対する作業代金が発生する。このとき、作業の成果物である米の権利は権利者にある。一方で「全面受託」では、農作業に対しては一切作業代金が発生しない。その代わり、成果物である米の権利を受託者が得ることになり、自由に売ることができる。

濱田ファームはすべて「全面受託」の形式で受託を行っている。理由は、「作業受託」だと一定の作業代金分しか収入にならないが、「全面受託」にして自分たちで米の販売を行うことができるので、より利益を得ることが可能になると考えられているからだ。

権利者と受託者の関係性も時代とともに変化してきた。昔は受託者の方が立場が弱く、人数も多かったため、権利者の方が自由に条件（例えば高い値段の「年貢」）を決めることが

[117] 水田の権利者から水田を借り受けている人のこと。

できた。しかし現在では、米を作る人も減ってきており、権利者と受託者の立場が対等、もしくは受託者の方が少し上になっている。受託者の方から受託条件について交渉を持ち掛けることができ、対等に話し合うことができるようになった。また、場合によっては権利者の方から受託者の方に米を作ってくれるよう頼むこともある。

2-5.濱田智和さんからのお話

智和さんは 2-1 で記述したような経緯から米作りを始めた。濱田ファームをはじめて大変だと思うことについて尋ねると、智和さんは、「自分で始めた」という点がやはり大変だという。米農家は圧倒的に世襲制が多く、その方が合理的であるが、智和さんはゼロから起業し、自分が初代になったため他の人にはない苦労があったという。大学では「農学」を学んだが「農業」は学んでこなかったために、実際に農業をやってみると分からないことが多くあったそうだ。特に、はじめは設備も土地もなにもなかったためにそこから用意する必要があり、始めて５年ほどまでは特につらかったと語っている。１年目は父親の手助けがあり、３年目からは結婚したことや慣れもあり段々と楽になっていったという。

現在、実際の農作業の大部分を１人で行っていることについて尋ねると、天気や時間の制約を受けることはあるけれども、自分が好きでやっていることだから特に大変だとは思わないと語っていたのが印象的だった。米を直売するときに届くお客さんからの「おいしい」の言葉をもらう度に嬉しく思うし、モチベーションにも繋がるとも話されていた。

2-6.販売方法・直売について

濱田ファームの大きな特徴として直売があげられる。濱田ファームでは、生産したお米のほぼ全てをインターネットやイベントで直接販売している。一部、富山市の野菜をたくさん食べることができる「食堂 nogi」や東京の産地にこだわった食材が魅力の「魚と日本酒 uchi」という飲食店にお米を卸しているが、それは例外的であり、基本的には全て直売である。

通常、農家は生産したお米を農協などに卸して販売することが一般的である。濱田ファームも、会社を始めてすぐの頃は農協にお米を卸していた。しかしながら今は直売へとシフトしている。それにはいくつかの理由がある。その一つとして、金銭的な理由が挙げられる。農協へお米を卸すと、販売などは農協が全て請け負ってくれ、手間は少ないが、その代わり自分たちで値段を決めることができないため、望んでいた利益を上げられないことがある。直売の場合は、在庫管理から受注、販売まで全てを自分たちで行う必要があるが、その分自分たちで値段を決めることができるので、利益を上げることができる。

もう一つの大きな理由としてモチベーションに関わる部分がある。前述したように直売では、受注や発送までを全て自分たちで行う必要がある。しかし濱田ファームではこの一手間こそがモチベーションになると話す。注文のメールのやりとりや、実際に販売したとき、なによりもお客様からの直接の声が届くと言うところが直売の魅力だそうだ。

実際の直売の方法について説明する。まず、販売方法は大きくインターネットと電話注文

がある。インターネットでの注文が 6 割、電話での注文が 4 割である。

インターネット販売に関しては、濱田ファームの公式ホームページから購入することができる。しかし、濱田ファームのホームページにはいわゆる「買い物カゴ」がない。これは、律子さんが意図的に行っていることである。「買い物カゴ」がないので、カゴからワンクリックで商品を購入することはできず、問い合わせフォームかメール、または電話で注文しなければならない。つまり、「言葉」でのやりとりが必ず発生する。例えば、メールの場合だと、基本的に「前置き」がうまれる。時候の挨拶や、購入に至った経緯を書く人が多いという。濱田ファームでは自動返信は行っておらず、注文メールにはすべて律子さんが手動で返信を行っている。ここでお客様との双方向のコミュニケーションが生まれ、繋がりができる。こういったやりとりのおかげか、リピーターになってくれる人がとても多いという。

一方で、メールや電話でのやりとりを苦手に思い、注文できない人々がいるであろうことも律子さんは認識している。そういった人たちは、それぞれの買いやすいところで買ってもらえばいい、自分たちはお客さんとの繋がりを大切にしていきたいと律子さんは語った。

図 4　濱田ファームのホームページ

このようなオンラインでの販売は、濱田ファームの知名度が上がり、固定のお客様ができた今だから成立している方法である。濱田ファームができたばかりのころは、近くの団地などを一軒一軒訪ねて回る営業をしていたという。今となっては、営業に行くこともなくなったが、変わらず買い続けてくれる地元の人もいるという。

濱田ファームは、イベントでもお米の直売を行っている。富山県内では「KAYADO フリー」[118]や護国神社で開催されているのみの市、そのほかにも東京で開催されているファーマーズマーケットやヒルズマルシェによく出店していた。現在は新型コロナウイルスの影響もあり、イベント自体がなくなり参加できていないが、情勢が良くなり次第参加したいと語った。イベントに参加する目的はたくさんある。イベントだと、濱田ファームを知らない人でも見つけて知ってもらうきっかけになることが多い。オンラインとは異なり、実際にお客様と会話することで、直接商品を届けられる。そして何よりも、お客様の直接の「おいしい」の反応をもらえることが嬉しく、「またおいしいお米をつくろう」というモチベーションに繋がるという。このように濱田ファームでは人と人との繋がりを大切にしている。

客層について、イベントでは初見で立ち寄ってくれる人が多いが、基本的にはリピーターの人が多いという。ホームページで購入してくれる人も、初見の人はほとんどおらず、だいたいは口コミや他の方から紹介されて購入しに来る人が多いという。東京や大阪などの都市圏の人が多く、その割合も年々増加しているという。

2-7.HP・SNS の運用について

濱田ファームでは、HP や SNS を運用している。ホームページではブログを、SNS では Twitter、Facebook、Instagram を運用している。

具体的な内容としては、稲作の様子や日々の食卓の様子をアップロードしている。稲作は「タンボマスターへの裏道」と題して、現在の農作業の様子などを写真付きで詳しく書いている。日々の食卓は「ハマダ食堂」として、濱田ファームのお米や、地元の食材などを使った料理の写真を掲載している。

これらの運用目的は、宣伝という面もあるが、それ以上に米作りをより多くの人に知って欲しい、身近に感じて欲しいという思いが大きい。ブログや SNS を通じて日々の生活を掲載することで、米作りを身近に感じてもらい、お米をよりおいしく食べて欲しいからだという。

このような取り組みを始めたのには、主に SNS の更新を担当している律子さんの生い立ちが関係する。律子さんは千葉県富里市の出身で、富山に来るまで、身近に田んぼがあまりなかったという。律子さんは米作りをするようになってから、「小さいときから毎日お米を食べてきたはずなのに、米作りのことを全然知らない」ということに気付いたという。自分が農家出身ではなかったからこそ気付けたことだという。

濱田ファームのお米の大半は、田んぼが身近ではない人のところに届けられる。そこで律

---

[118] 詳しくは第 9 章を参照。

子さんは、SNS を通して、米作りの過程について知ってもらうことで、米に愛着をもってもらおうとしている。律子さんは「何も考えずにスーパーのお米を買って食べるのも良いけど、こうやって作っている様子が見えて分かる方が、安心できるだろうし、よりおいしく食べられると思う」と話していた。

こういった SNS やインターネット販売をうまく活用していることもあってか、購入者の 8 割ほどは関東や首都圏の人だと言っていた。残りの 2 割は富山の人が多いが、富山の人は首都圏の人とは違い「値段ありき」らしい。注文の電話を受けた際も、地元の人の方が値段を重視するらしい。対して、首都圏の人は値段より品質を気にする人が多いとのことだ。

品質を気にする人にとってみると、自分たちの口に入るお米が、SNS などでどのように作られているのかを随時確認できるのは、とても嬉しいことであるのかもしれない。

また、SNS だと、投稿の文面などから、濱田さんの人柄も窺い知れるように思う。米だけでなく、生産者の人となりも伝わって来るのは、消費者にとって大きな安心材料になるだろう。

2-8. そのほかの取り組みについて

濱田ファームでは、「農業体験」をすることができる。ホームページの応募フォームから申し込むことで、やりたい作業などを相談のうえ、体験することができる。ただ現在は、新型コロナウイルスのこともあるため、農業体験はほとんど行っていないそうだ。体験に来るのはやはり都市圏の人が多い。都市圏の人は、草刈りや手での田植えなどの人が嫌がる、面倒くさがる作業を喜んでやるそうだ。トラクターやコンバインなど、農業用の機械を使ったりするのはあまり喜ばない。

一方で、都市圏の人が喜ぶ、草刈りや手での田植えなどの「いかにも農作業っぽいこと」は、経営的に考えても効率的に考えても、最善とは言えない。そのため、無駄な手間は極力やらないようにしている。その手間をかけることで、お米のおいしさに繋がることならやるけれど、そうでないのならばやらずに、少しでも生産性を上げることに努めると律子さんは語っていた。「地道にしっかりやるべきことはやるけれど、やらなくていいことはやらないでしっかりと分けてやる。バランスが大切。日々の仕事の中で改善すべき事があれば順次改善もしていく。」といったことを話していた。

2-7 で、ホームページや SNS について述べた。律子さんは、それ以外にも小学館の web メディア「kufura」で連載を持っている。「kufura」は、子育て世代に向けたメディアで、主に女性に向けて「仕事」や「家事」についての記事を更新している。律子さんは「お米農家のヨメごはん」と言うタイトルで、主に食卓の献立などについて書いている。これは、律子さんがプランニングの勉強のために東京の研修会に参加した際に、小学館の編集長と知り合いになり、それが仕事に繋がったのだという。小学館の編集長だけではなく、他にもいろんな業種の人と知り合いになったという。何が仕事に繋がるか分からないので何でもやってみることが大切だと話した。

2-9.律子さんのお話

前項までで記述したように、律子さんはいろいろな勉強会などに参加したり、そのほかにも色々なところに出かけ、繋がりを作ったりしている。そこで生まれた縁で、web メディアでのコラム連載のように、新たな仕事に繋がることもある。

律子さんに聞き取り調査を行っているときから、その前向きな明るい人柄や、何事にも挑戦するという姿勢がとても印象に残った。話を伺うと、律子さんが永住権を獲得したカナダでの生活が大きく関係しているように感じた。

カナダでの生活はとても楽しかったという。だが、カナダ人はすごくいい加減な部分が多く、日本人である律子さんは馴染めない部分もあった。だが、カナダ人の仕事は仕事、遊びやプライベートはそれとしてしっかりわけてどちらも全力で楽しんでいる姿にとても感銘を受けた。カナダ人は年齢や環境を言い訳にせず、例えばおじいさんになってから大学に入る人も多いし、子供がいても旅行に行く人も多い。律子さんは「私は４９歳だけど、何を始めるにも全然遅くはないし、勉強したいことや、やりたいことがあったらやる。年齢や子供がいることを言い訳にはしたくない」と話した。

今は、インターネットが発達して、世界中どことでも連絡が取れるし、自ら情報を発信することができる。律子さんが大学を卒業した頃にちょうどインターネットやメールが登場したが、その素晴らしさに感動したと思い出を語っていた。またインターネットやホームページについて興味深い話もしてくれた。それは、「小さい農家でもインターネットのおかげで大企業と同じ土俵にたてる」という話だ。もちろん、小さな農家であるし、ノウハウや労働力の数、知名度の差など埋められない点もあるが、それでもホームページをもち、誰でもアクセスできる、見つけて貰えるという点においては、インターネット上では大企業ともおなじスタートラインに立てている、そのことはとてもすごいことだし、挑戦のしがいがあることだと語ってくれた。

3.bossa farm について

3-1.bossa farm の概要

bossa farm[119]は、御囲（おかこい）大介さん（41 歳）と妻の香苗さん（36 歳）が営む、黒部市沓掛に事務所を構えるぶどう農家である。「草生栽培」（詳しくは後述）という栽培方法で育てたぶどうを、8 月中旬～10 月下旬までの間直売している。また、少しだが米の直売も行っている。

大介さんは、山梨県の大学で農学を学んだ。その後、富山市婦中町にある「山藤ぶどう園」で 6 年間農場長を務めていた。しかし、家庭の事情で実家のある黒部市に戻ってくることに

[119] bossa farm の bossa は、御囲さんの屋号からきている。屋号とは、その家族や家そのものにつけられている呼称である。

なった。元々、御囲さんの家は兼業の米農家だったため、米作りを行っていた。お米農家として 2008 年から米の直売を始めた。

図 5　bossa farm のホームページ

このように米の直売をしていたが、大介さんは、せっかく自分がぶどう作りのノウハウを持っているのにいかさないのはもったいないと感じていた。また、当時黒部市にぶどう農家はなく、直売所にぶどうを買いに行くという文化もなかった。そこで大介さんは、2008 年より bossa farm という会社として発足し、2009 年よりぶどうの栽培と直売を始めた。直売所の位置を、山中ではなく来やすいところに作ったが、それには直売の文化が根付いて欲しいという思いもあった。

写真 1　ネヘレスコール
（右の女性が御囲香苗さん）

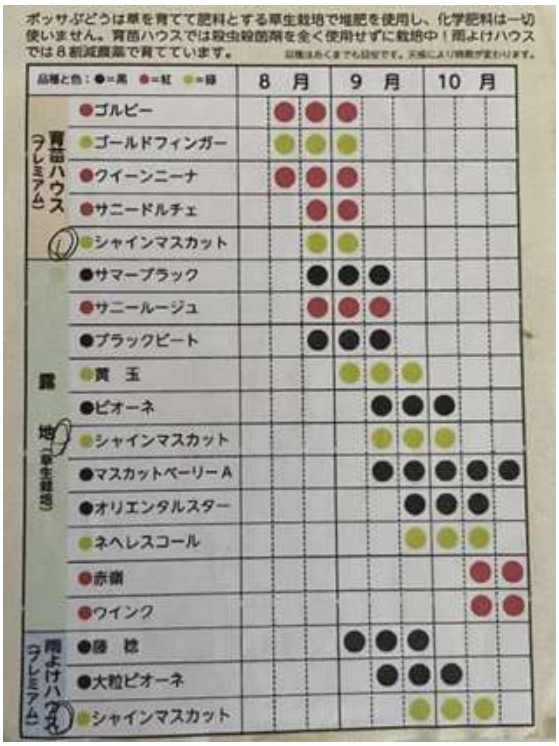
bossa farm は黒部市だけでなく、新川地区ではじめてのぶどうの観光農園であり、ぶどうの専業農家である。そのため、販売用のぶどうだけではなく、聖書にも記述がある世界最古にして最大のぶどうである「ネヘレスコール」などの、変わった品種なども栽培し、販売に利用している。

また、「富山県 SDGs 宣言」をしており、SDGs の達成に向けて環境や健康に配慮した取り組みを行っている。

3-2. ぶどう栽培について

bossa farm では、ぶどうの多品種栽培を行っている。栽培方法や品種の異なる約 20 種類を栽培しており、下記の表のようにそれぞれ収穫時期が異なる。露地と、育苗ハウス、雨よけハウスの３種類の場所でぶどうを育てており、それぞれで特徴が異なる。このように多品種を育てているのは、なるべく多くの人にぶどうの品種を一つでも多く知ってもらいたいという思いから来ている。しかし、表の全てが別品種というわけではなく、例えば「シャインマスカット」のように人気の品種は、長い期間楽しんでもらうために、複数の栽培場所で作り、収穫時期をずらすという工夫がされている。

表１　ぶどうの品目
（bossa farm のペーパーより）



bossa farm のぶどう作りの特徴として、「草生栽培」という栽培方法があげられる。草生栽培とは、ぶどうを作る際に、生えてきた雑草を肥料として活用し、その土でぶどうを育てる栽培方法だ。草生栽培は、除草剤を使わないから環境に優しい、雑草が土壌を豊かにしてくれる、土を団粒構造[120]にし、水はけを調整してくれるなどのメリットがある。bossa farm では、この一環として、ライ麦の種をあえて植えて、穂が作られる前に刈り取るという作業をしている。このライ麦のことを緑肥と言い、収穫せずに、土と一緒に耕すことで、次に育てる作物（この場合はぶどう）の肥料になると言う。ライ麦は、雑草と比べて根を深く張るので、ぶどう園の土壌改善に役立てられている。

また、bossa farm は減農薬にすることに努めており、殺虫・殺菌の農薬だけではなく、ぶどうの種なし処理の農薬も減らしている。そのため、他の農家のぶどうと比較すると種があるかも知れないとのことである。

---

[120] 団粒構造とは、土壌の構造の一つである。土壌粒子が相互にくっつき合って団粒を作っている状態で、保水性と排水性の両方の性質を併せ持つ。

「草生栽培」は主に露地栽培で行われている。露地栽培はbossa farmでの3つの栽培場所のうちの一つであり、作物を野外で育てることを言う。露地栽培の畑は写真の様になっている。作業がしやすいように一定の高さ（身長に合わせてあるそうだ）にだいたい等間隔でぶどうが並んでいる。これを新短梢栽培とよび、現在のぶどう栽培の主流となっている。ぶどうがだいたい手の位置に来て、横に並んでいるため作業効率がとても良い。木の幹は棒に沿わせ、枝を上から見たときにH型になるように伸ばしている。ぶどうの樹一本の主枝の総延長は16mほどある。露地栽培の周りには檻や青いネットが張ってあり、これは盗難や獣害対策である。とくに獣害は年々酷くなっており、ハクビシンによる被害が多いという。

写真2　露地栽培

2つめの場所として、育苗ハウスでの栽培がある。育苗ハウスでは、春期に稲の苗を置いておくハウスを活用して、ぶどうを栽培している。育苗ハウスでは、苗を置くために、ぶどうの枝の位置が高めで、また根域制限がされていた。根域制限（根の広がる範囲を制限すること）することで、枝も自然と少なくなるため、剪定作業が楽になる。また、植物にある二種類の成長（種子を残す、枝を伸ばす）の切り替えがスムーズに行えるようになると言う。

このハウスでは特に農薬による殺虫、殺菌を行わないようにしており、農薬は種なし処理のためのジベレリンだけを使っている。

写真 3　育苗ハウス

3つめの栽培場所として、雨よけハウスがある。雨よけハウスは、上部をビニールによって雨を防ぎ、横はネットで囲われているハウスである。雨よけハウスの特徴は、雨を当てず、あげる水の量を管理できるので育てやすいが、ハウス内に熱がこもりやすく温度調整が難しいという点だ。ぶどうの味で大切なのは「酸味と甘み」のバランスだという。このバランスをもっともうまくだせるのは露地栽培で、ぶどうごとの個性がだしやすいという。ハウス栽培だとどうしても酸味がぬけてしまうという。しかし、それを好む人や、管理がしやすいことからも雨よけハウスは重要だという。

写真4　雨よけハウス

露地栽培、育苗ハウス、雨よけハウスで育てられるぶどうは、どれも5月下旬頃から栽培管理が始められる。品種

ごと違いもあるが、育て方によっても収穫時期は異なる。例えば、人気の品種であるシャインマスカットは３つ全ての栽培方法で栽培されているが、育苗ハウスのシャインマスカットよりも雨よけハウスのシャインマスカットの方が収穫時期が遅くなっている（図１参照）。雨よけハウスの方が長い時間をかけているので、より熟したぶどうができるといった違いが生まれたり、収穫時期に差をつけることで、長い期間お客様に楽しんでもらうという長所にもなっている。

3-3. 水田について

御囲さんの家は元々兼業の米農家であり、現在でもぶどう作りと並行して米作りを行っており、少量ではあるが電話での直売を行っている。この直売のノウハウは濱田ファームの濱田さんから教わったという。

一部の水田はぶどう畑へと改良されて活用されている。露地栽培を行っている畑は、もともとは御囲家の水田で、水持ちが良かったそうだ。それを、水はけを良くするために暗渠（あんきょ）排水[121]などの工事を行い、水はけを良くしたという。これが、ぶどう栽培をはじめる少し前で、2010 年頃に行った。

水田に利用されている水は、黒部川から引かれている。大介さんは、「ここ（ぶどう園と水田がある場所、沓掛）は黒部の山の方じゃなくて下の方だけど、水は水力発電とかでしか利用されていない、混じり物の少ない綺麗な水を使っている」と話されていた。この水はぶどうの水やりなどでも利用されている。

しかし、御囲さんはぶどうと米の両立は難しいと感じており、ゆくゆくはぶどう一本にしていきたいと話されていた。米をやめたいもっとも大きい理由として農機具の値段の高さを挙げていた。また、稲刈りの時期とぶどう狩りの時期がちょうど被ってしまうことや、作業を手伝ってくれる家族の高齢化もあげていた。また、こどものことを考えたときに、こどもには自由に好きなことをやって欲しいし、負担になるようなことを残したくないと話されていた。なお、水田については手放すわけではなく、大規模な農家に委託するか、ぶどう畑にかえていきたいと話されていた。

3-4. 販売方法・直売について

bossa farm では、ぶどうの直売を行っている。販売方法としてはホームページ、電話、そして直売所での直接購入がある。生食用ぶどうと加工ぶどう（干しぶどう）があるが、干しぶどうに限り Amazon でのネット通販も行っている。ホームページでは注文・問い合わせフォームがあり、そこに住所などの必要事項と注文内容（ぶどうの品種と重量、ドライフル

[121] 地中に配水管を設置すること。

ーツの商品名と重量など）を記入することで注文ができる。

ぶどう畑に併設された直売所での販売は、毎年 8 月下旬から 10 月末頃までの毎週土日と祝日に行っている。直売所では、生食用ぶどう、干しぶどうの販売、配送、ぶどう狩り体験を行っている。直売所でのぶどう販売を実際に体験させていただいたので、ここでは自分の体験も交えながら直売所の様子を説明する。

写真 5　直売所の様子

私が直売所の手伝いをさせていただいたのは、2021 年 9 月 23 日（木曜・祝日）と 25 日（土曜）の二日間だ。直売所の営業が始まるのは午前 9 時 30 分からで、私は 9 時から準備に参加した。9 時時点で、直売所の前にはぶどうの販売を待つ人がすでに列を作っていた。23 日には、御囲さん、奥様の香苗さん、アルバイトの植木さん（70 代女性）、前田さん（40 代女性）、上里さん（40 代女性）の 5 名が、朝の 8 時から開店準備を行っていた。25 日は植木さんがお休みで、かわりに伊関さん（30 代女性）、山田さん（30 代女性）がいらっしゃった。奥様の香苗さんはこの時妊娠中で、動き回ることができなかったため、アルバイトの方が中心となり直売所を回していた。

写真 6　袋詰めの様子 1

写真 7 袋詰めの様子 2

写真 8　袋詰めの様子 3

写真 9 袋詰めの様子 4

開店前の主な作業には、御囲さんが摘んできたぶどうの袋詰めと値付けがある。

袋詰めは、まずぶどうを観察して、駄目になっている実やいらない枝を取り除く。そして、専用の袋に入れる。この際に、ぶどうの実は品種によってとれやすいものがあるので扱いに注意する必要がある。

値付けは、ぶどうごとに 100 g あたりの値段が決まっているので、品種を確認して値段を

設定する。ぶどうを計りに乗せると値段が表示されるので、四捨五入した値段のシールを貼る。

この 2 つの作業が、一日を通しての主な作業になった。

写真 10　値付けの様子

開店すると、店内があまり広くないこともあり、新型コロナウイルス感染防止の観点から、一度に店内に入れる人を 3 組までに限定して直売を行った。この日は「黄玉」「ピオーネ」「シャインマスカット」の 3 品種の販売だった。人気品種であるシャインマスカットは 1 組 5 房までの購入制限が設けられていた。9 時半から 13 時ごろまで留まることなくお客さんがやってきて、とても忙しく、ぶどうの供給が少し追いつかないくらいだった。

客層としては家族連れや婦人層が多い様に感じた。レジの手伝いをしているときに、レジをしている香苗さんとお客様との会話を聞いていると、地元の人がおおく、遠方から来た人であっても昔からの顔なじみや常連が多いように思えた。

レジ横の業務では、購入されたぶどうを袋やマイバックに詰めることが多かった。詰めているときに、シャインマスカットを購入制限ギリギリの 5 房で買う人が多いことに気付き、その人気の高さを感じた。たまに「発送したい」というお客様がいるので、そういった人のぶどうを箱詰めしたり、発送伝票を書いてもらったりもした。

ぶどう狩りは 10 時から 15 時までおこなっていた。予約は不要、入園料は無料で、とったぶどうの代金だけをいただく形だ。ぶどう狩りで採ったシャインマスカットも購入制限の対象だった。

ぶどう狩りを行っていたのは、主に御囲さんの息子さんたち（小 2、2 歳）の同級生とそのご家族が多い印象だった。いわゆるママ友の関係にある人たちは、香苗さんの妊娠のことや、直売が忙しいことを知っているので、前もって連絡してすいている時間帯などをきいてから来ているようだった。

写真 11　梱包作業の様子

直売所に買いに来る人の中には、配送を希望される人もおり、そのぶどうをクール宅急便で送るための梱包作業もおこなった。手順としては、段ボールに空気緩衝材を貼り、さらに緩衝材をつめる。次に、ぶどうを入れ、ぶどうの実が動いて揺れてとれないようにさらに緩衝材を詰める。最後にショップカードを入れ、封をして伝票や必要なシールを貼る。ぶどうそれぞれの形や実の付き方が異なるため、ひとつひとつ丁寧に梱包作業を行っている。

23 日は、このような様子であった。23 日と 25 日を通して感じたことをまとめる。

23 日はシャインマスカットの販売開始の日だということで特にお客さんが集中した。トータルで 800 房ほどあるのだが、予約だけで 1/6 が売れたため早期に予約受付を終了した。その後、今年はシャインマスカットが熟すのが遅く、お客さんも待ちに待ち、そこで SNS などで予告をしたためにこんなに集中したのではないかという話だった。

来店者数も、前年までは 100 人来て大喜びだったそうだが、23 日は 1 日でレジをした人だけで過去最多の 186 人いた。また、発送する物もいつもなら 10 箱前後だがこの日は 37 箱もあった。予想以上の来店数で 23 日ははやめに閉店し（15 時頃、普段は 16 時過ぎくらいまで）その後は梱包作業をしたが、すべて終わったのが 17 時頃だった。右の表が時間ごとのレジをした人数の写真である。（閉店以降も会計をしている人がいるのは、ぶどう狩りをしていた人や、御囲さんのお知り合いの方、予約分の支払いに来た人だ。）

表 2　レジの時間ごとの会計人数

時間	人数
9時	6
10時	33
11時	41
12時	22
13時	24
14時	17
15時	26
16時	16
17時	1

売り上げについても少し教えてくださった。1000～2000 円分、3000～5000 円分を購入したのがそれぞれ約 50 人、5000～7000 円、7000 円から 9000 円分を購入したのがそれぞれ約 25 人、それ以上が数名というかたちだった。売り上げの約 70%がシャインマスカットだった。

25 日も開店直後は非常に忙しかったが 12 時頃には客足も落ち着いた。土日祝日しか直売所を開いていないので、23 日木曜日に続くシャインマスカット発売 2 日目だったのだが、14 時前にはシャインマスカットは完売してしまった。元々は 4 日ほどかけて売る予定だったという。買えなかったお客様には、10 月以降に販売を開始するハウス栽培の大粒シャインマスカットをすすめていた。

二日間、直売を体験してみて、何より感じたのがシャインマスカットの人気だ。買いに来る人の大半がシャインマスカットを求めていたことや、そもそもの客足の多さからも痛感した。

3-5.HP・SNS の運用について

bossa farm でも、濱田ファームと同じく HP や SNS を活用して宣伝などを行っている。SNS は Facebook と Instagram を運用している。

具体的な投稿内容としては、ぶどう栽培の様子や、直売の様子などをアップロードしている。特に直売の様子は、Instagram のストーリー機能などを使い、リアルタイムでぶどうの販売状況などを更新していたので、購入しようと思っている人が SNS を確認することで、直売所の状況も確認できるような仕組みになっていた。

SNS の運用は、主に香苗さんによって行われている。運用目的としては、宣伝と、いち早い情報発信のためだという。香苗さんに SNS についてお話を伺ったところ、Facebook と Instagram の差について興味深いお話を伺えた。両方で同様の内容を投稿した際に、Facebook では投稿に対する反応（いいね）が 40 ほどだったのに対して、Instagram では約 10 倍の 450 ものいいねが付いたという。これは、Facebook と Instagram という 2 つの SNS のもつプラットフォームの性質の差があるからではないか、という。

Facebook という SNS は、他の SNS に比べて実名での利用が多いため、SNS 上での繋がりも現実世界の繋がりと似たようなものになりやすい。そのため、どちらかというと既存の知り合いに向けての情報発信が主となる。

一方で Instagram は匿名で利用している人も非常に多い。Twitter と比較すると拡散力は小さいが、写真に特化した SNS であることや、ハッシュタグをうまく活用することで多くの人の目にうつるという特徴を持っている。また、Facebook と比較し、Instagram の利用者層は SNS を普段から多く利用している若者が多い。そのために、現実で bossa farm を知らなかった人が、ハッシュタグや、他の人の投稿の共有といった方法を通じてみつけてくれるのではないか、ということだった。実際に、いいねをくれる人も、Facebook はほとんどが知り合いであったが、Instagram はほとんどが知らない人からだったという。

こういった各 SNS の持つ特徴を踏まえた投稿を意識して、それぞれに合った投稿を心がけている、と話していた。

3-6. パートの方からのお話

23 日、25 日に直売所の手伝いに行った際に、アルバイトの方々からお話を伺うことができた。

上里さん（40 代女性）が bossa farm で働くようになったきっかけは、こどもがみんな幼稚園生、小学生になり、時間ができたときに SNS でバイトの募集をみかけたからだという。bossa farm は御囲さん自身が子育て世代ということもあり、学校行事などに対しても理解があるため、融通を利かせてくれたり情報交換をしたりと、とても働きやすい環境であるという。実際に、bossa farm で働いているパートの方は子育て世代の方ばかりだった。

直売所は、そういった子育て世代のプラットフォームとしても機能しているように感じた。御囲さんの長男が直売所によくおり、理由をきくと、小学校に入る以前は、土日保育に預けていたが、小学校になると預けるところがなくなったからだという。御囲さんの長男は、パートの方々にもよく可愛がられていた。そこには、長男の学校の友人や、その家族が来ることもあった。直売の様子で述べたように、ママ友と呼べる関係性の人もよく訪れてきていた。子供を通じての関係性が、直売所のなかでも再現され、新たな関係性を構築しているように感じた。

ぶどうの直売に関して感じていることも伺った。共通して、年々買いに来る人が増えていると感じていた。昨年度は新型コロナウイルスの影響もあり、客足が遠のいたのではないかと尋ねると、逆にコロナ禍になってから売り上げがぐんと伸びた、と上里さんは話した。コロナの影響で出かけることができなくなった地元の人が、身近にある bossa farm をみつけて興味を持ち、来てくれるようになったのではないかということだった。買いに来る客も知り合いが多いという。

また、シャインマスカットの人気がすごい、という話も皆さんがされた。売り上げや栽培数といった数字の面からみても、パートの方達が実際に体感した様子からも、シャインマスカットの需要は増え続けているということだった。

4. おわりに

濱田ファームと bossa farm というふたつの農家から詳しくお話を伺い、それぞれの農家が農業にかけている想いを感じた。黒部市の現在の農業、とくに稲作に関しては、兼業農家が減り、専業農家は大規模化しているという事実がある。そのなかで、小規模で、個人で新たに農業を始めるという試みは、新しい動きであるように感じた。

調査を進める中でどちらの農家にも共通することが見えてきた。一つはどちらも実家が農家であったことだ。しかし、濱田さんも御囲さんもはじめから実家で農業をやろうと思っていたわけではなく、別の仕事などを経て現在に至っている。これは、幼い頃から農業が身近にあったことが関係しているのではないかと推察する。職業の選択肢として「農家」を入れるためには、幼い頃から身近に自然や農業があることが大きく影響しているだろう。前職から農家に転身したことで前職の経験を活かし、一般的な農家とは違う直売中心の新しい農家のあり方を模索しながら農業を行っている。

次に消費者への呼びかけ方法だ。直売という形式をとることで、販売側と消費者の距離が一気に近付く。一度きりではなく、継続した関係を消費者と結ぶことで、安定した販路の確保にも繋がってくる。ローカルなコミュニティの中の関係性だけでなく、SNS なども活用し、黒部市内外の人に向けて情報の発信を行っている。

農業についても、栽培方法を工夫している。米やぶどうの品種にこだわり、収穫の時期なども考えられている。農薬に関しても、なるべく使用しないようにするなど、よりよいものを届けるための試みが行われている。

また、子育てをしていくなかで、農業を仕事にして自分たちで経営を行っているという共通点もあった。このことは、大変さもあるがそれを上回るメリットがあるようにみえた。育児と仕事のバランスをとりやすいということもあるが、子世代が幼い頃から農業と関わりを持つことで、次世代の農業の発展に繋がっていくのではないだろうか。

調査を進めていく中で、20 代から 40 代にかけての若者世代によって「黒部市の農業をもっと盛り上げていこう」という意欲を感じた。すべての方からお話を伺えたわけではな

いが、若い世代でいまから黒部市で農業を始めようという人が増えていることは確かだ。

一方で、後継者不足に悩まされている農家がいることも事実である。特に、法人化をしているわけでもなく、兼業で田んぼを作っている方がどんどん稲作をやめていっているのが現状だ。そうして生まれる耕作放棄地をどうしていくかなどの課題もある。

だが、濱田ファームや bossa farm のような農家が黒部市にあることは、これからの黒部市や富山県の農業を背負っていく若者世代の農家の模範的な役割を果たすだろう。これからの黒部の農業が、こういった新たな風が吹き込むことによって、どんどん発展していくことを願いたい。

謝辞

今回の調査にあたり、ご協力いただいたすべての皆様に心より御礼申し上げます。お忙しい中、度重なる訪問にも快く応じていただいた、濱田ファームの濱田智和様、濱田律子様、bossa farm の御囲大介様、御囲香苗様には大変お世話になりました。そのほかにも、突然の訪問にもかかわらず快く聞き取りに応じてくださった皆様にこの場を借りて再度お礼申し上げます。皆様のおかげで無事に報告書を執筆することができました。本当にありがとうございました。

参考文献

田林明著、1991 年、『扇状地農村の変容と地域構造』古今書院
黒部川扇状地研究所、1991 年、『黒部川扇状地の文化地理』

参考にしたウェブサイト

農林水産省　統計情報　わがマチわがムラ「市町村の姿　グラフと統計で見る農林水産業詳細データ　黒部市」
〈http://www.machimura.maff.go.jp/machi/contents/16/207/details.html〉
(2022/01/29 閲覧)
北陸農政局　平成 27 年～28 年 農林水産統計年報 富山県「IV 耕地の部」
〈https://www.maff.go.jp/hokuriku/stat/data/nenpou27_28/toyama.html〉
(2022/01/29 閲覧)
農林水産省　「人・農地プラン」
〈https://www.maff.go.jp/j/keiei/koukai/hito_nouchi_plan.html〉
(2022/01/22 閲覧)
黒部市公式ホームページ「農業」
〈https://www.city.kurobe.toyama.jp/category/page.aspx?servno=64〉
(2022/01/22 閲覧)
濱田ファーム公式ホームページ

〈https://www.hamadafarm.com/〉
(2022/01/29 閲覧)
「食堂 nogi」公式ホームページ
〈https://www.syokudounogi.com/〉
(2022/01/10 閲覧)
「魚と日本酒 uchi」公式ホームページ
〈https://ggmc300.gorp.jp/〉
(2022/01/10 閲覧)
「kufura」濱田律子さんの記事一覧
〈https://kufura.jp/writer/%E6%BF%B1%E7%94%B0%E5%BE%8B%E5%AD%90〉
(2022/01/29 閲覧)
bossa farm 公式ホームページ
〈https://www.bossa-farm.com/〉
(2022/01/29 閲覧)
富山県 SDGs 宣言　bossa farm
〈https://www.sdgs-toyama.jp/company/detail/?company_id=169〉
(2022/02/02 閲覧)

第３部

移り変わる街とそこに暮らす人々

第 6 章　三日市商店街の変化と住民の思い

髙田　玲

はじめに

私が商店街に興味を持ったのは、自分が商店街に行くことが少ない生活をしていたからである。買い物に行くときは電車や車で行く場所にある大きなショッピングセンターやスーパーに行くことが多い。それが当たり前だと思っていたが、黒部市出身の母に、「子どもの頃は親と三日市の商店街までよく買い物に行っていた。」という話を聞いて、自分との違いを感じ、商店街について興味を持った。実際に三日市商店街に行くと、シャッターで閉まっているところもあったが、想像していたよりも広い商店街だという印象を受けた。また、母と祖母が昔買い物に来ていたと考えると、感慨深いものがあった。

三日市について文献で調べて、宿場町や市場街として歴史ある町であることを知った。現在衰退傾向にある商店街も、かつて人々の暮らしの中心だった記憶があるということに気付き、三日市商店街はどのように変遷してきたかについて知りたいと思った。また商店街の方々のお話を伺う中で、今後の商店街を今よりも活性化させたいという思いや取り組みがあることが分かった。

本章では、第 1 節に三日市商店街の概要、第 2 節に文献調査で調べた三日市の歴史、第 3 節に三日市商店街の店と組織について、第 4 節に聞き取り調査で伺った、三日市商店街で行われている取り組みと住民の思いを記述する。

1. 三日市商店街について

三日市商店街は黒部市三日市にある商店街で、あいの風とやま鉄道線黒部駅から徒歩 15 分、富山地方鉄道本線東三日市駅と電鉄黒部駅を降りてすぐのところにある。三日市と言っても実際には、栄町、三島町、新三島、椚（くぬぎ）町、大黒町、東三日市町、寺町、大町、新光寺、桜町と複数の旧町からなっている。そしてその中に、新三島商店街、三島町商店街、寺町商店街、大町商店街（写真 1）、東三日市商店街、椚町商店街、大黒町商店街の 7 つの商店街が存在する。それらの総称が「三日市商店街」である。図 1 は文献調査と地元の方々のお話を元に、旧町の位置を示したものである。また、地名「三日市」の由来は、市場街として 3 日、8 日、13 日、18 日、23 日、

写真 1　三日市大町商店街のアーチ（筆者撮影）

28 日と 3 と 8 の付く日に市場が開かれていたことにちなむ。慶長元年（1596 年）にその地名が初めて確認された。

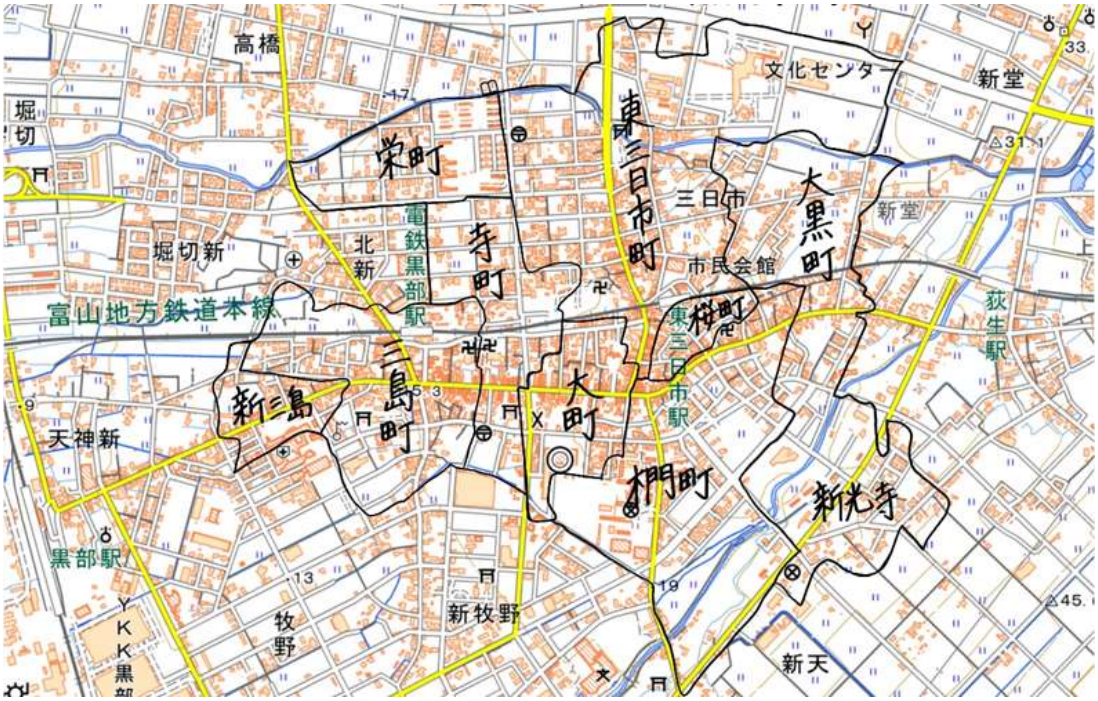


図１　三日市の旧町の分布（地理院地図より作成）

2. 三日市商店街の昔から今への変化

2-1. 三日市の歴史

三日市は 13 世紀頃の鎌倉時代から付近の集落民の物資交易の場として栄えた。俗謡に、「あまるを払ふ三日市　無きを補ふ三日市　何かの事の有る時は一も二も三日市」[122]というものもあったという。

三日市の歴史について、文献調査と黒部商工会議所の専務理事である島武夫さんの話を元に記述する。

2-1-1. 江戸時代の三日市

八木均の『三日市宿駅における加賀藩御旅屋と、本陣御宿の来歴』によると、寛永 15 年(1638 年)2 月に三日市宿駅となった[123]。歴代の加賀藩の参勤交代で北陸下街道(北陸道)を

---

[122] 八木均『三日市宿駅における加賀藩御旅屋と、本陣御宿の来歴』平成 8 年より引用。

[123] 三日市商盛会連合会『創立 20 周年 郷土の歩み』（昭和 58 年）では、寛永 16 年（1639 年）とある。

通り、三日市宿駅も 181 回ほど通ったという。本陣・旅籠（はたご）・駅馬を用意させており、駅馬が足りない時は農業馬を集めるなど、農民に大きな負担となっていた。主な大名行列は加賀藩の他に富山藩、大聖寺藩があった。市場街と宿場街がそろい、三日市は商業交易や陸上交通の要所だった。また上下街道[124]の分岐点としての役割も重要だった。分岐点には「道しるべ」の石（縦 40 ㎝、吉澤医院に現存）があり、「右愛本橋江・左黒部川江」と書いてあるように、下街道（北）へ行くと黒部川、上街道（東）へ行くと愛本橋に向かうことが出来る。江戸への参勤交代や遊行上人[125]の行列、藩の重臣や旅人が宿泊や休憩などして多くの人々が通行して、街中がその利便性に活気があふれていたという。

写真 2 「道しるべ」の石
（筆者撮影）

図 2 は、宿場町だった三日市が分かる最も古い天明 2 年（1782 年）の絵図である。図は二枚に分けており、※で繋がっている。この絵図は三日市大町の島家に現存している。島家は藩政時代加賀藩の本陣御宿だった。絵図を見ると、北陸街道沿いに家が並び、道の中央に黒く塗られた町川が引かれている。中心部に加賀藩と富山藩、大聖寺藩の本陣御宿や旅籠があり、十村（とむら）[126]や肝煎（きもいり）[127]の家もあった。図の〇は旧黒部庁舎の場所で、☆は「道しるべ」の石があったと思われる場所である。

---

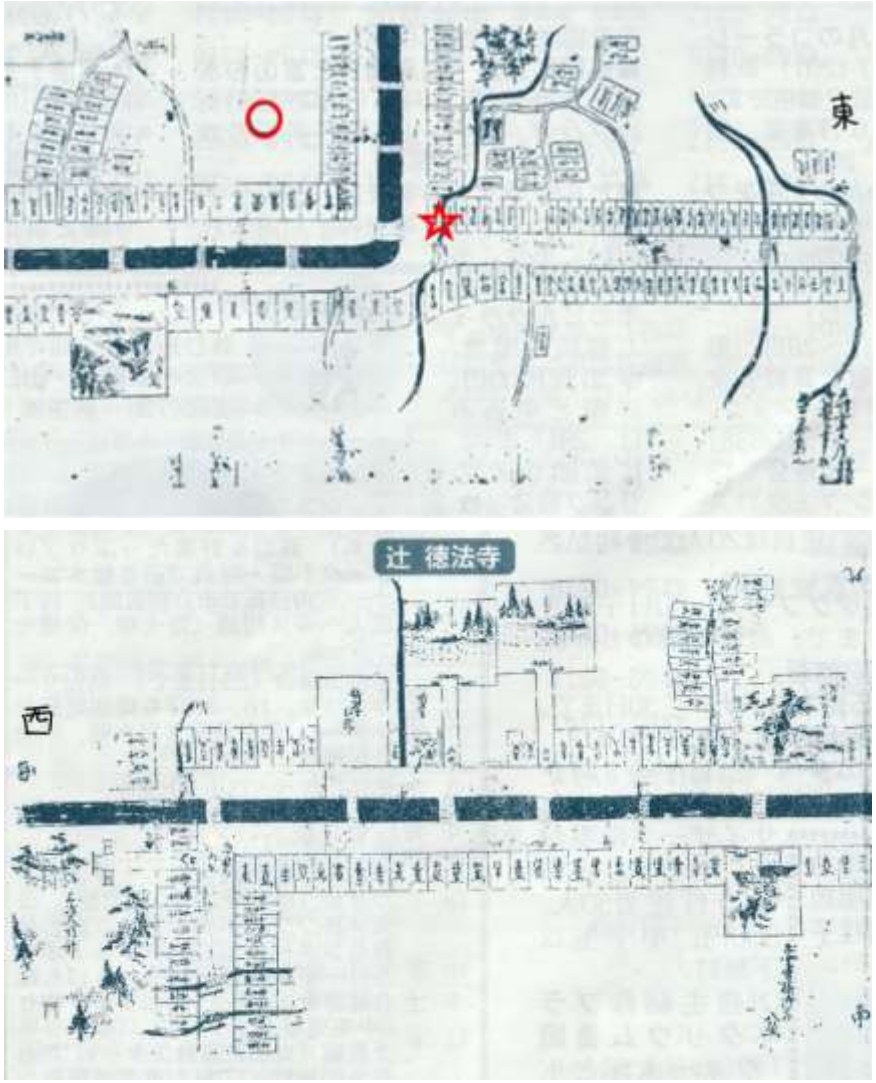
[124] 越中国を縦断した北陸街道は、加賀藩・富山藩・大聖寺藩などの参勤交代で使われた。北陸下街道と北陸上街道への分岐点が三日市に存在した。下街道は黒部川下流域を直接渡れる近道だったが、暴れ川だった黒部川は夏場に渡れないことが多かった。上街道は内陸を回るルートで、遠回りだが愛本橋を利用すれば安全に黒部川を渡ることが出来た。

[125] 時宗総本山、遊行寺の歴代の住職の称。諸国に遊行して念仏を勧め説いたところからの名。

[126] 村役人。一村支配の肝煎に対し、数十村をあわせた組の支配を担当し、農民のなかで、持高（もちだか）・家格・技量の優れた者が選ばれた。十村は加賀藩での名称で、他藩だと大庄屋（おおじょうや）と言う。

[127] 一つの村の世話役、村役人。村長。

※



※

図 2 三日市駅宿並絵図 天明 2 年（1782 年）
（『ニコニコタウン』2020 年 9 月号 vol.484 より引用）

2-1-2. 明治時代の三日市

三島町内会の『三島公民館新築記念 目で見る三島町いまむかし』によると、明治 5 年（1872 年）に三日市村が存在している。明治 22 年（1889 年）には町村制の施行により、三日市村、天池新村、牧野新村、中野道村、中野新村、中野又新村、石野村、北新村が合併して「三日市町」となる。

また、写真 3 は明治 11 年（1878 年）に撮影されたものである。『ニコニコタウン』2020 年 9 月号 vol.484 によると、現在の三日市中央通り商店街の「もりおか」付近に立ち、東方向を撮影したそうで、今日既にない町川の様子が分かる貴重な写真である。

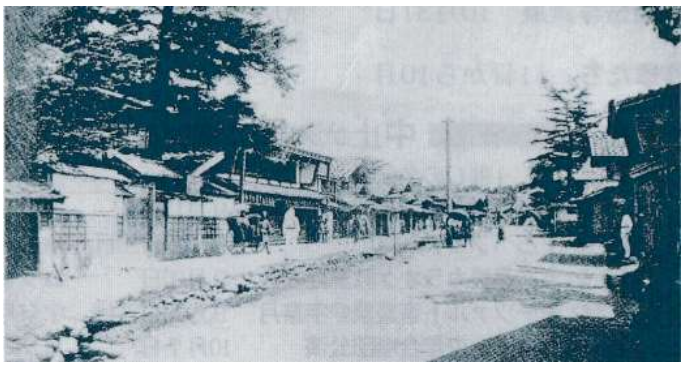


写真 3 明治 11 年（1878 年）撮影
「越中国新川郡三日市村景」
（『ニコニコタウン』2020 年 9 月号 vol.484
より引用）

写真 4 現在の「リラハウスもりおか」
から東方向を見た景色
（森丘晃之さんより提供）

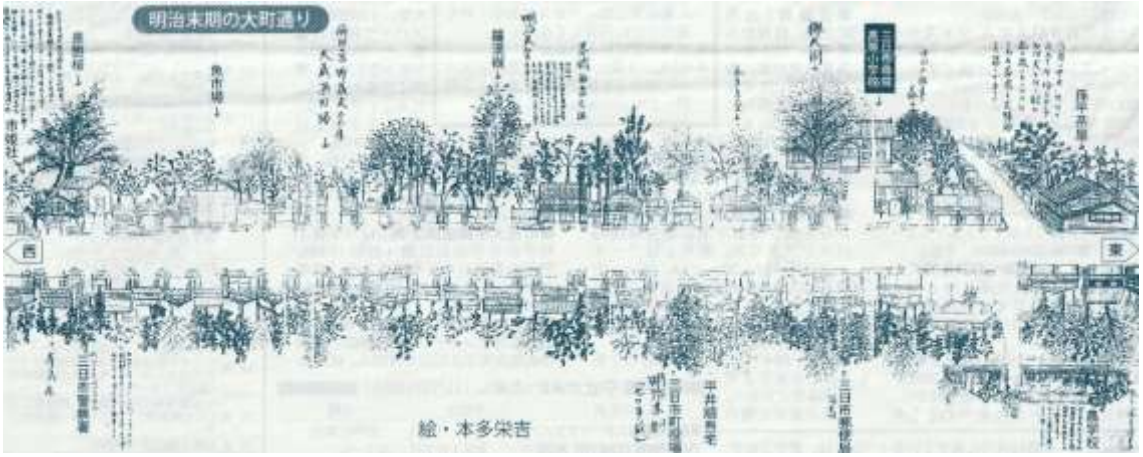


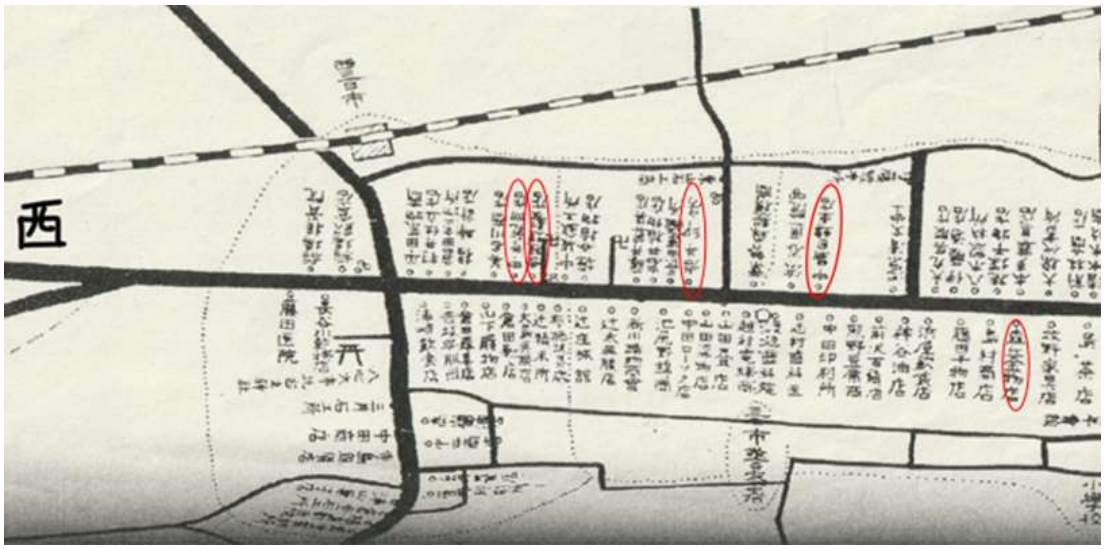
図 3　明治末期の大町通り　（『ニコニコタウン』2020 年 12 月号 vol.487 より引用）

図 3 は明治末期の大町通りで、町川は明治 29 年(1896 年)に通りの中央から両端に分離されたため、中央通りが出来ている。『ニコニコタウン』2020 年 12 月号 vol.487 では、「人力車や荷車、荷馬車、自転車などが通るようになって、町川が障害になった」のではないかと記述されている。写真を見ると、三日市尋常高等小学校、三日市警察署、三日市町役場、三日市郵便局があり、さらに北陸道の上街道と下街道の分岐点の角（写真右端）に、孫平茶屋があるのが分かる。「人の移動はほとんど徒歩に頼っていた時代、小学校周辺は多くの機能が集中する“コンパクト・シティ”だった」という。このことから、明治時代の三日市も人々が集まる利便性の高い町だったことが分かった。

2-1-3. 大正時代の三日市

次に、大正時代の三日市について、当時の地図を元に記述する。

※



※

図 4　大正 15 年(1926 年)の三日市町案内図

(『三島公民館新築記念　目で見る三島町いまむかし』より引用)

図 4 は、三日市町協賛会の発行誌「我が三日市」（大正 15 年 3 月）に折り込みされた三日市町案内図である。図は二つに分けており、※で繋がっている。この案内図には大正 15 年（1926 年）時点での三日市商店街の店の名前が書いてある。店が沢山並んでいて、中央通りと、上下街道の分岐した先まで栄えていた様子が分かった。ここに書いてある店は 200 以上あった。文字が潰れて読めないものもあったが、呉服店が約 18 店、飲食店が約 11 店と多く、病院、雑貨屋、菓子店、履物店、建具屋、乾物屋、酒店がそれぞれ 5 店以上あった[128]。他にも油屋や表具屋など現代ではあまり見覚えのない店もあり、興味深い。飲食店は多くあったが、肉や魚そのものを売る店は見当たらなかった。

また、この案内図に載っている大正 15 年（1926 年）に経営していた店の中には、現在三日市商店街に残っている店もいくつかあることが確認できた。それらは 100 年前後続いていることとなる。写真の中の丸で囲った店がそうであるが、この案内図には載っていなかったり文字が読み取れなかったりする店もあったので、これら以外にも数店存在すると思われる。

2-1-4. 昭和期の三日市

昭和 15 年（1940 年）に三日市町、田家村、石田村、村椿村、大布施村、前沢村、荻生村、若栗村が合併して桜井町となる。戦後、昭和 29 年(1954 年)桜井町と生地町が合併して黒部市となる。また昭和 23 年（1948 年）に、三日市商店街初の鈴蘭灯を銀座商盛会が設置した。鈴蘭灯は鈴蘭のような形をした防犯灯で、銀座通り（東三日市町の通り）に最初に鈴蘭灯が

写真 5　昭和 31 年（1956 年）の大町通りでの交通安全のパレード（『三島公民館新築記念目で見る三島町いまむかし』より引用）

写真 6 昭和 39 年（1964 年）の中央通り（『三島公民館新築記念目で見る三島町いまむかし』より引用）

[128] 他にあったものを挙げると、百貨店、精米所、米商、金物屋、木綿商、仕立屋、自転車屋、銀行、家具屋、葬具屋、荒物屋、指物店、理髪店、下駄屋、陶器屋、玩具屋、塗物屋、洋品店、製桶屋、製樽屋、表具屋、時計屋、代書所、傘屋、ブリキ屋、印房屋、ローソク店、お茶屋、染物店、鋳掛屋、瓦店、畳屋、油屋、干物屋、鋸店、印刷所、電球商、石工所、肥料屋などである。

設置されると、三日市の他の商店街にも広がった。

『黒部市誌』によると、戦後急激に発展したものに映画館があり、三日市にも桜井銀映、ひかり劇場、桜井中央映画劇場（桜井中劇）があったという。昭和 35 年（1960 年）の年間入場者数だけ見ても、桜井銀映は 45041 人、ひかり劇場は 68139 人、桜井中劇は 52038 人と多くの来観客で賑わっていたことが分かる。

写真 7　昭和 4～5 年（1929～1930 年）頃の大黒座（『三島公民館新築記念目で見る三島町いまむかし』より引用）

また、三島町町内会の『三島公民館新築記念　目で見る三島町いまむかし』によると、「大黒座」という大正末期に大黒町に建てられた、映画の上映やイベントのようなものが行われる建物があったそうだ。この大黒座で桜町の芸姑が踊りを披露することもあった。今は吉沢工業が所有し、一部その面影を残しているという。この「大黒座」以前には「大正座」というものが椚町にあった。用途は同じだが、「大黒座」が建てられた大正末期ごろに廃止された。このように三日市には大衆娯楽のための施設も存在していた点からも、市民が集まる賑やかな街であったことが分かった。

写真 8　昭和 25 年（1950 年）頃、椚町にあった映画館「桜井銀映」（『三島公民館新築記念目で見る三島町いまむかし』より引用）

写真 9　昭和 30 年（1955 年）、三島町にあった映画館「ひかり劇場」（『三島公民館新築記念目で見る三島町いまむかし』より引用）

昭和 47 年(1972 年)の住宅地図を見て、正確ではないがどんな店がどれくらいあるのか数えてみた。「～商店」という名前の店が一番多く 45 店以上あった。それ以外だと、美容院・

理容院が 30 店以上、洋服店が 25 店以上あった。食堂、食品店、電気屋、スナック・バーもそれぞれ 10 店以上はあった[129]。それ以外にも色々な種類の店があり[130]、400 店以上はあるようだった。大正時代から変化していない店や、同じ家だが内容が変わったと思われる店があった。

この頃の三日市商店街について、黒部商工会議所の島武夫さんは「昭和 50 年（1975 年）に魚津市に大型商業施設が 2 つ[131]出来たことで、それまでは魚津市からも買い物客が来ていた三日市が、逆に魚津市に客が流れていくようになった。そこから、黒部の商店街組織の力がだんだん削られていった。」と語った。その状況を打開するため、昭和 57 年（1982 年）に三日市商店街の有志で「黒部ショッピングセンターメルシー」を設立した。この時の方法として、ショッピングセンターに出店する人は、商店街との両立は厳しいのではないかという考えから、商店街にある店は閉めなければならない決まりだった。商店街で有力な人が集まってショッピングセンターを作ろうとしていたため、結果として「商店街は歯抜けになった」という。これらのことから、三日市商店街は昭和 50 年（1975 年）～昭和 57 年（1982 年）を境にして下降傾向になっていった。

写真 10　現在の黒部ショッピングセンターメルシー（筆者撮影）

現在の黒部ショッピングセンターメルシーには大阪屋ショップが入っており、他にも様々な種類の店[132]があり充実している。店内を訪れると沢山の人で賑わっていて、高校生が

---

[129] 5 店以上あった店は、家具屋、酒店、化粧品店、寿司屋、クリーニング店、鮮魚店、肉屋、手芸用品店、呉服店、編み物教室・学校、建具・建材屋、靴屋、菓子店、カメラ屋、金物屋、時計屋である。

[130] ホテル・旅館や銭湯、燃料店、書店、看板店、畳屋、豆腐屋、青果店、表具屋、自転車屋、飲食店、京染店、醤油屋、陶器店、文具屋、お茶屋、質店、玩具屋、造花店など。

[131] ユニー魚津店と魚津ショッピングスクエアサンプラザ。ユニー魚津店は昭和 50 年（1975 年）から平成 10 年（1998 年）まで魚津市釈迦堂に存在した。平成 11 年（1999 年）に魚津市住吉に後継としてアピタ魚津店ができ、令和 2 年（2020 年）に MEGA ドン・キホーテ UNY 魚津店としてリニューアルされたものが現在ある。魚津ショッピングスクエアサンプラザは昭和 50 年（1975 年）に開店し、現在も魚津市駅前新町に存在する。

[132]他には、花屋（②）、喫茶店（③）、総菜屋（④⑤）、弁当屋（⑥）、クリーニング店（⑧）、美容院（⑨⑯）、書籍・文具・CD 店（⑩）、服屋（⑪⑫）、携帯電話店（⑬）、靴屋（⑭）、中古品販売店（⑮）、雑貨屋（⑰）、パン屋（⑱）、フィットネス（⑲）、100 円ショップ（⑳）、

パン屋でパンを買って食べていたり、本屋で本を選んでいたり、若い人もいるようだった。キャッシュコーナーもあり、トイレはきれいで多目的トイレや授乳室もあった。ベンチが色々なところにあり、年配の方が休憩するのに利用しているようだった。駐車場は、屋外駐車場と地下駐車場で 614 台停める事ができるそうだ。多くの人が車で来て買い物をする事ができる点が商店街と違う点である。

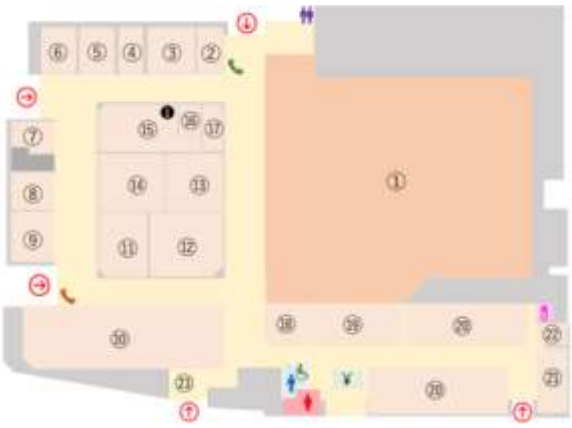


図 5 黒部ショッピングセンターメルシーの店内（ホームページを参考に作成）

2-1-5. 平成から令和の三日市

平成 9 年（1997 年）に黒部サティ（売り場面積 9000 ㎡）が三日市商店街から 1 kmほど南の黒部市前沢で開店するが、6 年後の平成 15 年（2003 年）に閉店する。黒部サティ跡地に、平成 16 年(2004 年)にアピタ黒部店が進出した。三日市では、平成 17 年(2005 年)に市姫通り開通式があり、大町と寺町の境の交差点が出来た。この市姫通りは現在、祭りやイベントの際には歩行者天国となって開催の中心となっている。そして、平成 18 年（2006 年）3 月に宇奈月町と旧黒部市が合併して新たな黒部市が誕生した。平成 26 年(2014 年)にマックスバリュ黒部コラーレ前店ができる。この店は三日市商店街の北側にあり、東三日市駅から徒歩 12 分と商店街に近い場所に存在する。

平成 29 年(2017 年)にはアピタ黒部店が閉店するが、人が集まるはずの大型ショッピングセンターのアピタが閉店してしまった理由について、三日市商店街の方はどのように考えているのか聞いてみた。大町商店街にある「自由空間かって屋」の森丘晃之さんは、「一つは地域性で、アピタは普通のスーパーよりもワンランク上の品ぞろえだが、黒部市民はどちらかというと高級志向よりもお買い得品を求める傾向にある。大型ディスカウントストアPLANT-3[133]や大阪屋ショップのような安く商品を提供する店に惹かれやすい。もう一つは、魚津のアピタも MEGA ドン・キホーテに変わったように、地方の大型ショッピングセンターという業態自体がだいぶ厳しい状態になってきた。メルシーには大阪屋があり、居心地もいい。お年寄りがパンを食べてベンチで休憩している。魚津にあるサンプラザというショッピングセンターも昔からあるが、そこも高齢者の交流の場的な役割を果たしている。そこにいけば顔見知りが居て、涼しくて、何時間いても誰にも何も言われない。」と語った。

学習塾（㉑）、衣服直し専門店（㉒）、ゲームコーナー（㉓）がある。数字はそれぞれ図に対応しており、①は総合食料品店の大阪屋ショップである。

[133] PLANT-3 は 富山県滑川市上島に滑川店があり、系列店で PLANT 黒部店が黒部市立野にある。

また、現在の商店街の様子について、昭和 47 年（1972 年）と令和 2 年（2020 年）の住宅地図を比較して変化を調べた。図は大町、東三日市町、椚町の一部が含まれた住宅地図で、丸で囲った所が店である。比較すると、昭和 47 年（1972 年）は道路沿いのほとんどが店だったが、令和 2 年（2020 年）は店が大幅に減り、普通の家の方が多くなっていることが分かる。それでも大町、寺町、三島町などの中央通りの店は多く残っているようだった。令和 2 年（2020 年）の三日市商店街全体を見ると、美容院、病院、スナック・バー、居酒屋、洋服店、呉服店が多いようだったが、昭和 47 年（1972 年）に比べると美容院などは半減していた。それ以外だと、5 店舗以上あった種類の店が 1 店舗だけになっていたり、玩具屋や靴屋はなくなっていたりした。新しく出来たものにはコンビニやカフェがあった。また、電気屋が CD ショップになっているなど、店の内容を変えて続けている所もあった。

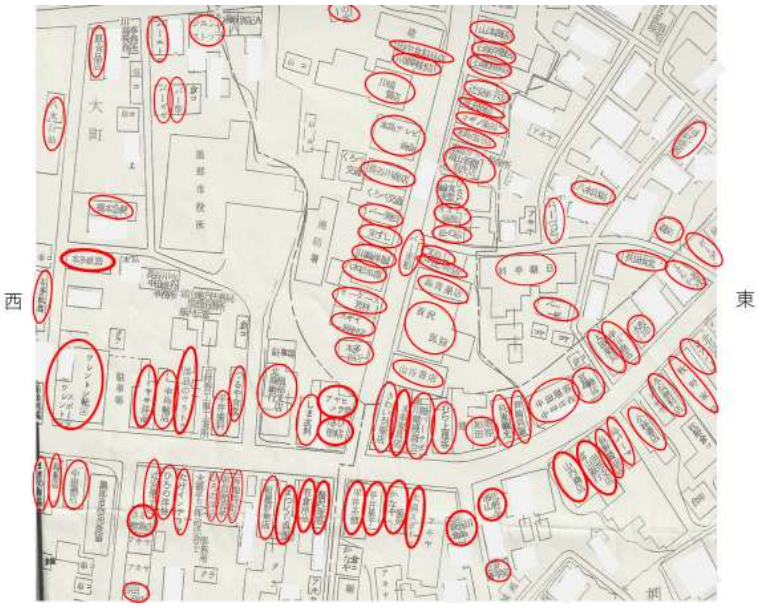


図 6 昭和 47 年（1972 年）の住宅地図

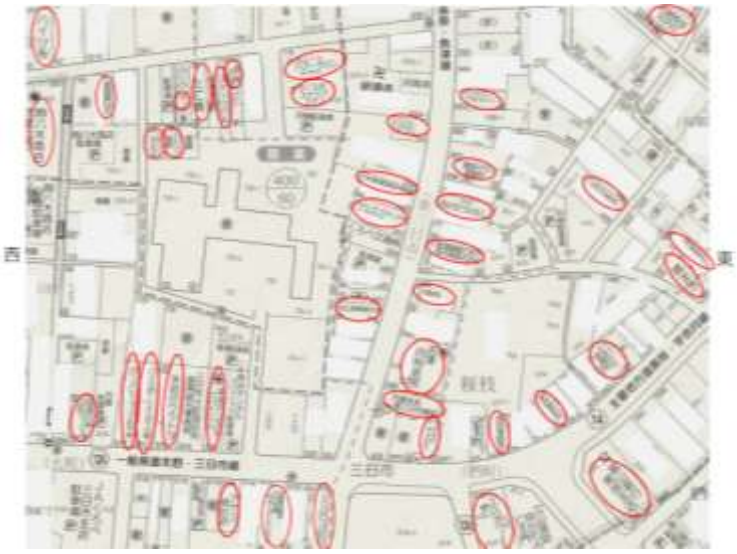


図 7 令和 2 年（2020 年）の住宅地図

3. 三日市商店街の店と組織について

3-1. 三日市商店街にある店

三日市商店街にある店の歴史と、店の方から見た昔の商店街の記憶や印象について聞き取り調査で伺ったことを記述する。

3-1-1. 中井酒店

中井酒店は三日市三島町商店街にある店で、店主の奥さんにお話を伺った。店は明治初期から続いているそうで、店の建物も 100 年以上前に建てられたものだという。その方は 50 年ほど前に富山県内の別の地域から嫁いで来た方だった。嫁いで来た当時の三日市商店街の様子について尋ねると、「50 年前はもっと賑やかで、人の活気に溢れていた。今は普通の家になっている所があるが、近所はほぼ全て店で、店をやっていない方が少なかった。果物屋、電気屋、化粧品店、呉服店、玩具屋などあった。子供が多かったから、玩具屋は付近 5 軒ほどの中に 2 か所くらいあった。嫁に来た当時は、小さい町だが賑やかだなと思った。」と語った。また、人口の規模の割には洋服屋とか美容院が多かったという。その理由は、「当時は YKK の社員が沢山買い物に来ていたから。」だという。

写真 11　中井酒店　（筆者撮影）

新型コロナウイルスの影響については、人の行き来が少なくなったため客は常連の人が大半となっているが、元々は県外から来た観光客がお土産として買っていくことがあったそうだ。

3-1-2. 吉枝茶舗

吉枝茶舗は三日市三島町商店街にある店で、店主の吉枝さんにお話を伺った。店は明治 30 年か 40 年（1897 年～1907 年）くらいから営業しており、現在は 4 代目の店主だという。

店の内容も開業当初から移り変わりがあった。明治時代に、現店主の曾祖父(江戸時代生まれ)が、明治 2 年に発明された

写真 12　吉枝茶舗　（筆者撮影）

人力車を用いて人力車夫をしており、曾祖母は髪結い床をしていた。その流れで、店主の祖父は床屋をしていたそうだ。また、その頃から「ばたばた茶[134]」を、近所のおばあさん達と集まってやっていた。それが、今の茶屋になったという。店主の子供の頃は店の半分がお茶屋で、もう半分は椅子が六台入る床屋だった。今も店の壁に床屋の名残で鏡が付いており、店の歴史が感じられた。

昔の三日市商店街について聞くと、「向かいは玩具屋や駄菓子屋など色々あったが、今はそういったお店は無くなり、シャッターの店が多い。」と語った。

3-1-3. バイクポートりんりん館

バイクポートりんりん館は三日市大町商店街にある自転車屋で、店主の中島憲一さんにお話を伺った。店は大正 11 年(1922 年)からあり、自転車屋としてずっと変わっていないそうだ。店は中島さんの祖父が創業したという。中島さんが生まれた時には祖父は居なかったため、本人から話は聞いたことはないそうだ。

写真 13　バイクポートりんりん館
（とやまサイクル WEB　より引用）

昔の三日市商店街について中島さんに伺うと、「昔は物を買うには商店街しかなかったため、賑やかだった。今はスーパーやインターネット通販があるため商店街に来る人は減った。」と語った。

3-1-4. ウラトラ洋品店

ウラトラ洋品店は三日市大町商店街にある店で、店主の浦田さんに話を伺った。店は明治 26 年（1893 年）から続いているという。名前の由来は、初代店主の名前を略して「ウラトラ」となったそうだ。昔から洋品店をしていた。現在店は朝 8 時から夜 7 時くらいまで営業しているが、以前は商店街に人が沢山来たため朝早くから夜 9 時ごろまで営業していたそうだ。昔の商店街について浦田さんは「以前は商店街に八百屋や魚屋、肉屋など生鮮食品を売る店もいくつかあったが今はもう無くなった。」と語った。

写真 14　ウラトラ洋品店（筆者撮影）

---

[134] ばたばた茶は富山県朝日町で生産される茶で、茶を点てる際に 2 本の茶筅を用いるためそれらがぶつかり合う音からその名がついた。

3-1-5. 三日市とにわとり

越中文化研究所の『碌々残生記』に、「三島さま（三島神社）の神様のお使いは“にわとり”で、三日市町生まれの人はにわとりの肉を食べない」という記述があったので、三日市における鶏肉について調べた。三島神社は八心大市比古神社のことである。三日市で、にわとりは神様の使いであるため食べると不幸が続くと信じられていた。具体的なエピソードとして、昭和 60 年（1985 年）頃の桜井中学校・三日市小学校の給食の鶏肉を「家で食べたらダメと言われた」として多くの子供が残したという事が、残飯調査で分かったという。[135]

ウラトラ洋品店の浦田さんは、「三島神社の宮司さんや家族は今でも鶏の肉を食べないと言っている」と教えて下さった。また、バイクポートりんりん館の中島さんは、子供の頃は親に言われてあまり食べなかったそうだ。商店街の店については、鶏肉を売る店自体無かったという。しかし、「今は誰も気にせず普通に食べる」と語った。

3-2. 商店街組織の移り変わり

3-2-1. 三日市商盛会連合会とくろべ祭り

三日市商店街に存在する商店街組織について、黒部商工会議所専務理事の島武夫さんと自由空間かって屋の森丘晃之さんからの聞き取り調査を元に記述する。

商店街組織は各町の商店街に自然発生的に出来たものである。現在は新三島商店会、寺町商盛会、大町商盛会、東三日市商盛会、東三日市商栄会の 5 つが存在する。

三日市大町商店街の例を述べると、自然発生した「大町商盛会」と、昭和 62 年（1987 年）に商店街振興組合法[136]に基づいて新しく出来た「三日市大町商店街振興組合」の両輪で商店街を運営している。この二つの組織の違いには、まず範囲が挙げられる。大町商盛会は自然発生的に出来たものであることから会員が広い範囲に散らばっている一方、三日市大町商店街振興組合はエリアがしっかり固まっており、だいたい中央通りに面している店の経営者と土地所有者が会員となっている。そして二つの組織の運営内容にも違いがある。大町商盛会はイベント運営が主な活動である一方、三日市大町商店街振興組合は補助金を使用して、LED 街路灯の設置など商盛会では難しい大町商店街の基盤整備を行っている。

三日市商店街全体では、昭和 37 年（1962 年）に「三日市商盛会連合会」がスタートした。それまで存在していた各町の商盛会（9 つ）をまとめたものを作ろうという形で始まった。この三日市商盛会連合会が主体となり、昭和 38 年（1963 年）に第 1 回「くろべ祭り」が開

---

[135] 『三島公民館新築記念　目で見る三島町いまむかし』（平成 7 年、三日市町内会）

[136] 商店街が形成されている地域において小売業又はサービス業に属する事業その他の事業を営む者等が協同して経済事業を行うとともに当該地域の環境の整備改善を図るための事業を行うのに必要な組織等について定めることにより、これらの事業者の事業の健全な発展に寄与し、あわせて公共の福祉の増進に資することを目的として制定された法律 。

催された。くろべ祭りの主要なイベントとして、街流しが行われた。近隣の地区の婦人会に三日市商店街で踊ってほしいと頼んで始まったという。

『ニコニコタウン』2021 年 5 月号 vol. 492 の記事によると、昭和 38 年（1963 年）の第 1 回は 10 月 4 日と 5 日の二日間実施されたが、この時は「三日市音頭」を踊って街流しが行われた。三日市音頭は、明治～昭和初期頃に三日市の桜町が飲食店街や芸姑のいる花街として栄えた時、そのお座敷唄として作られたものである。翌年の昭和 39 年（1964 年）に「黒部おどり」が発表された。歌詞は中島太一さん、作曲は椿秀雄さん、振付は有沢清子さん、唄は幅口幸吉さんで、伸びのある明るい大衆的な踊りとなったという。黒部おどり街流しは毎年恒例となり、昭和 58 年（1983 年）から黒部市全体に呼びかけ、多い時は 600 人の参加があった。

くろべ祭りは、第 1 回から第 6 回までを 10 月に開催し、第 7 回を 8 月 9 日と 10 日に開催してから以降は 8 月に開催された。街流しは最終的に平成 5、6 年（1993、1994 年）頃まで開催していたという。無くなった理由は、三日市商盛会連合会が自然消滅したため主催団体が消えたことに加え、だんだん参加者が減り商店街の力も無くなってきたことが挙げられる。街流しの踊り手などにかかる 2、3 日分の軽食費や謝礼費などの経費を出すには、商店街が耐えられなくなってきたという。

写真 15　昭和 41 年（1966 年）第 4 回くろべ祭り大町チームの街流し　（『新川の昭和』より引用）

昭和期には、三日市商盛会連合会が主催する形で大売出し等のイベントを開催していたが、平成に入り自然消滅したという。また、少し大きな商店の事業主で作られた三日市商店連盟もあり、年末大売り出しと抽選会を実施していたが、同様に自然消滅となった。三日市商盛会連合会が消滅した後も各商店街の商盛会は残ったが、商盛会自体も令和 3 年（2021 年）現在しっかりとした活動が残っているのは大町商盛会くらいであるという。商盛会が衰退した理由には、商店街メンバーの高齢化もあるという。

3-2-2. 商店街組織の減少や縮小

くろべ祭りが平成 5，6 年（1993，1994 年）頃に無くなった後に、夏の祭りが全く無いのはもったいないということで、平成 7 年（1995 年）から「くろべ納涼楽市」が始まった。これは現在も続いており、毎年 7 月の最終週もしくは 8 月の前半に開催される、納涼夜店とフリーマーケットのイベントである。主催はくろべ納涼楽市実行委員会であるが、実行委員会のメンバーも時代とともに変化があった。元々は 4 つの商盛会（大町、東三日市町、寺

町、三島町）と合同で運営していたが、途中で三島町商盛会、令和元年（2019 年）に寺町商盛会が参加をやめて、現在は大町商盛会が補助金をもらって単独で運営している所に東三日市商盛会の有志の方と、寺町商盛会の有志の方が参加している形だという。

各商店街の店が減ったことにより商盛会が維持できなくなり、商盛会自体を止めるところもあったという。また、各商盛会が費用を負担してイベントを維持していたので、「お金は出せません」という商盛会は実行委員会を辞めていってしまう。こうしてだんだんイベントや商店街組織の規模も機能も縮小していっている。大町商盛会も活動が小さくなっているが、商店街でイベントを何もしない訳にはいかないので、大町は頑張っているそうだ。

平成 23 年（2011 年）から平成 27 年（2015 年）までの 5 年間と、平成 30 年（2018 年）と令和元年（2019 年）の 2 年間で、くろべ納涼楽市で新黒部踊りの街流しも行われた。新黒部踊りは、旧黒部市と旧宇奈月町の合併 5 周年を記念して、平成 23 年（2011 年）に誕生した。作詞は「黒部民謡友の会」の寺崎博さん、振付は高山舞踊研究会の高山順子さんで、トロッコ電車や北陸新幹線などの新しい要素が歌詞や踊りに取り入れられている。

また、黒部おどりを復活しようという動きがあり、令和 3 年（2021 年）8 月に復活予定だったが、新型コロナウイルスの影響で中止になった。2021 年 8 月初頭には三日市大町商店街にある「自由空間かって屋」の店前で新黒部踊りの唄が流れていた。

写真 16 くろべ納涼楽市（2019 年）のチラシ

3-2-3. 大町商盛会について

多くの商店街組織が衰退や廃止となっていっている中で、現在大町商盛会が他の商盛会と比べて活動が続いている理由を、黒部商工会議所の専務理事の島武夫さんに伺った。

商盛会など商店街組織の勢いについては、どの年代の経営者が決定権を持って活動しているかに尽きるという。大町商店街には、一番活発であった平成 20 年（2008 年）頃に 20～30 代の経営者がいて、当時の大町商盛会会長も 40 代くらいであった。このように 30～40 代の比較的若い経営者がいるか、またその商店街が活発でお金を持っているかが商盛会の勢いにつながっているという。逆に、大町の勢いが衰退していた時期もあったそうだ。また他にも島さんは、「市役所も近くにあれば商店街でいくらかの消費が起きる。小さな商店街とすればそこそこ期待できる施設。旧黒部市役所が大町商店街の中にあったが、新黒部市役所となっても場所が大きく移転しなかったことも大町商店街の良かったところだと思う。」と語った。ただ大町商店街でも、「旦那さんが亡くなられた」ことや「ドラッグストアが商

店街の外れにできた」ことなど様々な要因で店が減っていっている問題は他の商店街と同様に存在する。

4. 三日市商店街の取り組みと今後への思い

現在三日市商店街で行われている取り組みと今後への思いを、三日市大町商店街の方々と黒部商工会議所の視点から記述する。

4-1. 自由空間かって屋

4-1-1. 自由空間かって屋について

「自由空間かって屋」は三日市大町商店街にある店で、平成 14 年（2002 年）に黒部商工会議所の空き店舗対策事業によって始まった。店の管理運営を行っている NPO 法人コミュニティサポート黒部の理事（事務局長）である森丘晃之さんに詳しくお話を伺った。森丘さんは三日市大町商店街で自身の店「リラハウスもりおか」も営業している。また、三日市大町商店街の商店街組織である大町商盛会の現会長でもある。

自由空間かって屋の建物は、元々大型靴屋である Parade ワシントン靴店の第一号店だったが、店が閉められたのを、商工会議所が事業のために借りて商店街に管理運営を任せているという形だそうだ。オープン当時は商店街にある各店の商品を集めてイベントをしてみたが、それも補助金がある間だけで、運営費を売り上げでまかなうのは不可能だった。そのため NPO 法人を立ち上げて、それが管理運営するという形で今の形を維持しているそうだ。また、「かって屋」を立ち上げた時に作られた、商店街の数名で構成されている「かって屋運営委員会」というものもある。

現在の自由空間かって屋は、手作り作家の作品の販売とハンバーガー自動販売機の設置、黒部市から委託を受けたファミリーサポートセンター事業（子育ての応援事業）などを行っている。また、店の中には図書コーナーと勉強スペースもある。ハンバーガー自動販売機は、持ち主が居て、持ち主が場所代を払って昨年（2020 年）から販売しているそうだ。このハンバーガー自動販売機は珍しいもので、県外から Twitter を見て来る客もいるという。発売日は月頭と月末に 2 回で、2 回のうち 1 回はハンバーガー販売だけで、1 回はミニ鉄道の運転会もある。これはハンバーガー自動販売機の持ち主が鉄道を好きだからだそうだ。

このように、店は「自由空間」なので、空いていて使用料を払えば誰でも好きに使える仕組みとなっている。また、勉強スペースは令和元年（2019 年）のリニューアルで新たに追加されたものである。富山県立大学の学生が授業で自由空間かって屋の活用方法を検討した際に、「近くに桜井高校があるが黒部市立図書館の席が少ないから、高校生の勉強スペースを用意すればいいのではないか」と提案したことを受けて、勉強用の机を 8 台設置したそうだ。結果として毎日ではないが、特に試験前などには利用してくれるようになったという。

商店街のメンバーが「かって屋運営委員会」にも入っているので、必然的に商店街のイベントや祭りの実行委員と運営委員会のメンバーは重複する。加えて、商店街の中心という立地のために、例えば夏のくろべ納涼楽市の時はトイレや更衣室など、イベント時はこの店が拠点となって色々な形での役割を持っているという。

自由空間かって屋が商店街にとってどのような役割を果たしているか聞いてみると、森丘さんは、「商店街各個店の立場から言うと、かって屋の集客で商店街の客が増えるということは期待していない。ただ、かって屋が開いていることによって、普段来ないような人が来る機会があるので、その人たちが商店街を回遊してくれる可能性はゼロではない。あとは個店の努力だと思う。かって屋があることでチャンスは広がっていると思う。」と語った。

また、自由空間かって屋の運営をどのような思いで行っているかを尋ねると、森丘さんは、「商盛会の会長としては、ここも一つのお店なので一つのお店もしまいたくない。商店街を維持するためには必要なお店であるとは思っている。自由に使える場所は意外と商店街内ではどこにもないので、貴重な場所だと思っているから残していきたい。多くの人に使ってもらえれば、利用価値は上がると思っている。令和 3 年（2021 年）8 月から認知症カフェ(認知症の方やその家族が来てお話できるカフェ)を黒部市福祉課が、かって屋で始めた。キッチンもあるので、もしここで食堂をしたいっていう人がいたらできるし、トイレも車椅子が通れるように設計してあるので、色々な人に使ってもらう事が出来る。活用の方法はまだまだあるので、それらをもっと形にできればなと思っている。」と語った。自由空間かって屋が活用されることで、商店街の活性化に繋がるきっかけになってほしいという、森丘さんの思いが伝わった。

4-1-2. 商店街を盛り上げるイベント

森丘さんに商店街を盛り上げる取り組みを聞いてみると、いくつかのイベントが挙げられた。

まずは春と秋に行われる「やってみっか市」である。やってみっか市は平成 10 年（1998 年）から続くイベントで、年 2 回 6 月と 10 月の最初の土曜日にそれぞれ 1 日ずつ開催され

写真 17 高所作業車からまかれるダンゴまきを待つ来場者（森丘晃之さんより提供）

写真 18 どんどん焼きを焼く様子（森丘晃之さんより提供）

ている。商店街の市姫通りが歩行者天国となってフリーマーケットが開かれて「市」の賑わいが楽しめる他、これまでに音楽ライブやチェーンソーアートの実演、大型紙芝居なども行われた。また、三日市名物「ダンゴまき」というのもある。こぶしくらいのサイズの袋に団子二つが入っており、その中に三日市の商店で使えるクーポン券が入っているそうだ。これは「餅まき」からヒントを得て、やってみっか市を始めてから出来たという。また、同じく「どんどん焼き」もある。これは、お好み焼きのようなもので、粉をといたものに干しエビと納豆昆布と鰹節を入れて焼いたものだそうだ。基本的にやってみっか市のスタッフが焼いて提供しているという。

次に、夏に 2 日間行われる「くろべ納涼楽市」である。前述の通り、平成 7 年（1995 年）から始まり、毎年 7 月の最終週もしくは 8 月の前半に行われる。納涼夜店とフリーマーケットが開かれる。またイベント内の出し物には、黒部おどり街流し、おわら街流し、よさこい、太鼓、獅子舞などがある。伝統芸能を残していきたいので、地元で踊っている人や太鼓を入れるようにしているそうだ。飾られるジャンボ火灯の絵は、三島保育所、前沢保育所、桜井中学校の児童・生徒らが製作するなど、地域と協働したイベントとなっている。

他には、森丘さん自身が 3 年前に試験的に立ち上げた、「クロベストリートマーケット」という手作り作家主体のイベントがある。アクセサリー、バック、手編み小物などの他、食べ物や飲み物の出店もある。このイベントは少し変則的で、商店街からは森丘さんだけが運営に入り、イベント出店者でイベントを企画し、商店街の方々がイベントの日に本業に従事できるようにしたそうだ。そうすれば、イベント時に自分の時間を割かれずに来た人たちを呼び込めるのではないかという試みである。平成 30 年（2018 年）10 月に行われた 1 回目は成功で、令和元年（2019 年）10 月に予定していた 2 回目は台風で、令和 2、3 年（2020、2021 年）はコロナで中止になってしまったそうだ。平成 30 年（2018 年）に開催した際には、今まで来たことのないような客が多く来たという。「クロベストリートマーケット 2018 アンケート結果報告書」を見ると、来場者は 30 代が 41.1%、20 代が 26.2%、40 代が 13.6%で、10～30 代を合わせると 76.6%と若い世代の参加が多く見られることからもその成果が分かる。森丘さんは、「イベントで初めて来てくれた人達を、商店街の客にする仕組みが出来ればいいなと思う。」と語った。

4-1-3. 新型コロナウイルスの影響

以上のようなイベントへの新型コロナウイルスの影響は、やはりイベント自体を行えないことである。これについて森丘さんに尋ねると、イベントを何年もしないことで廃れていく心配があるという。例えば、くろべ納涼楽市のジャンボ火灯は頼んで描いてもらっていたが、2 年も空くと先生たちもガラッと入れ替わるため、お祭りへの協力に消極的になる可能性があり、それが一番怖いそうだ。「地域と協働したお祭りなので、皆でつくり上げていくという形を目指しているが、2 年間も空いてしまうといい機会ということで来年開催する時に断られてしまうではないかと思っている。」と語った。

4-1-4. 地域おこし協力隊との関係

森丘さんは黒部市の地域おこし協力隊の人ともつながりがある。地域おこし協力隊 2 代目の小澤泰史さんが大町商店街に住んでいたそうで、その方が越してきてすぐの地域おこし協力隊の活動をする前に、商店街のイベントに参加してくれていたという。そこから協力関係が生まれたそうだ。令和 3 年 (2021 年) 現在は、地域おこし協力隊 4 代目の鈴木杏奈さんが大町町内に住んでいる。毎年 7 月末から 8 月初頭に「ねがい七夕」が自由空間かって屋の店前に立てられるが、七夕を立てたり降ろしたりする際も地域おこし協力隊が有志として来て手伝ってくれるという。地域おこし協力隊の人にはイベント開催の協力もしてもらっているが、この 2 年間はコロナによりしていないそうだ。しかし、事あるごとに声かけはして、協力してもらえる関係性は作っているという。

写真 19 自由空間かって屋と「ねがい七夕」
（筆者撮影）

4-1-5. 今後どのような商店街になってほしいか

今後の三日市商店街はどのような商店街になってほしいか森丘さんに尋ねると、「やはり人が沢山歩いている商店街にしたいとは思う。車で土日に大型店へ行く人が多いが、街中に住んでいる高齢の人達は、歩いて行ける場所の黒部ショッピングセンターメルシーに行く人が多い。商店街に八百屋や魚屋、肉屋があればもっとお客さんは来るだろうが、それらは商店街では維持していくのが大変。お客さんの数が少ないのと、高齢化が進んでいるので、魚一匹仕入れても高齢者には丸々1 匹は多いなど、仕入れが難しい。」と話す。また、消費者の流れに関しては、「大町商店街に隣接した場所に 4 階建てで、新しい図書館と子育て支援センターなどが入ったくろべ市民交流センター(仮)[137]が出来る予定。それで人の流れは恐

[137] くろべ市民交流センター (仮) は、三日市大町にある旧黒部市庁舎を解体して建設され、令和 5 年 (2023 年) オープン予定である。新黒部図書館を核に、市民会館、働く婦人の家、三日市公民館、黒部子育て支援センターの各機能を融合した施設となる予定である。「ひと、居場所、コンテンツの親密な関係」が基本的な考え方で、にぎわいのある施設を目指すという。建物にはアルミパイプが使用され、アルミ建材は黒部の主要な産業であることから「黒部らしさ」を感じることが出来る。周辺には駅、市役所、ショッピングセンターメルシー、三日市商店街、黒部市国際文化センターコラーレ、市民病院などがあり、無料公共自転車「ち

らく変わるだろう。交流センターと市役所を結ぶなかに商店街が通っているので、これからいかに商店街内を歩いてもらうかという手立てを市とも話し合う。」と語った。

4-2. 黒部商工会議所としての取り組み

三日市商店街について商工会議所の視点からも知りたいと思い、黒部商工会議所の専務理事である島武夫さんにお話を伺った。

4-2-1. 現在のイベントについて

島さんに黒部商工会議所が現在三日市商店街で開催しているイベントについて尋ねると、「得する街のゼミナール」（通称「まちゼミ」）を挙げて下さった。「まちゼミ」は、愛知県岡崎市が平成 14 年（2002 年）から開始して全国に広まったイベントである。黒部商工会議所では平成 28 年（2016 年）から始まった。毎年夏(7～8 月)と秋(10～11 月)の一か月程度の期間内で開催される。「まちゼミ」の内容は、商店街の店舗の店主やスタッフが講師となり、プロならではの専門的な知識を受講者に提供するものである。このイベントの目的は、受講を通じて客に「どのような店か」「どのような店主やスタッフか」などを知ってもらい、交流の中で店のファンを獲得することである。行政の商店街に対する考えも、「頑張る人を応援しましょう」という方向に変わってきているという。それに沿って、「まちゼミ」も自分で頑張ってファンを作ろうという方を集めて行うという形だそうだ。商店街のイベントに関しては前述の森丘さんに頼っている所があるという。国や県からの補助金情報はすぐ渡すようにしているようで、このように商店街の方にイベントを任せることについて、島さんは「商工会議所としては、商店街の方が自分たちで企画してイベントをするなら喜んで手伝うが、商工会議所が全て企画を用意して商店街に渡してしまっては、商店街に何も残らないと思っている。」と語った。

新型コロナウイルスの影響について尋ねると、イベントはこの 2 年間全て無くなったという。現在（2021 年 9 月）富山県の警戒レベルがステージ 2 に引き下げになったので、ようやくイベントが動かせるそうだ。商店街のイベントは人に集まってもらわないとだめなので、密を作り出してしまうという。新型コロナウイルスの感染状況が落ち着いてきている中、イベントが原因で感染者を増やしてしまってはいけないので、企画は恐る恐る進めているそうだ。現状に関して島さんは、「イベントを中止しようとすれば早いが、低下状況の商店街であるため、何か取り組みを行って初めて下がる角度が緩やかになる、あるいは水平までもっていけるかだと思う。何も行わなければそのまま落ちるだけだという思いは持っている。」と語った。

ょいのり黒部」などで様々な用事を効率的にこなせる。また、桜井高校の学生にとっても学習と交流の場とすることができる（『ニコニコタウン』2020 年 1 月号 vol. 476 より）。

4-2-2. イベントの難しさ

黒部商工会議所主催のイベントとして、「くろべ食堂」について伺った。「くろべ食堂」は、平成 26 年（2014 年）から始まったイベントで、年 1 回 11 月の初頭に三日市商店街の中央通りで開催された。黒部市の食材を集めた食のイベントで、市内の組合や団体、お店が集まり出店を開く。令和元年（2019 年）に行われた第 6 回くろべ食堂では、黒部市養豚組合など地元の組合による計 10 店の出店が開かれ、「黒部市名水ポークフランクフルト」「イノシシハム」「イノシシ肉団子スープ」「イノシシチャーシュー」などの食品が出された。また、同時に商店街のお店でセールも行われた。

島さんによると、このイベントは商店街に人が集まってほしいという思いで行っていた事業だったそうだ。商店街の方には、「商店街の通りをお借りしますが、人集めは商工会議所がしますので、イベント当日にお店の方で売り出ししてもらえませんか」という提案で始めたが、中々難しかったそうだ。協力して頂けるお店もあれば、商店街のお店の前に出店が置かれてイベントが開かれるという形に、疑問や不満の声を挙げるお店もあったそうだ。このように商工会議所と商店街の感覚には若干のずれが生じることもあるそうで、新型コロナウイルスの影響も含め令和 2 年（2020 年）以降は「くろべ食堂」を中止しているという。ただ、この「くろべ食堂」は食べ物のイベントなので、そこで色々と「実験」してもらいたいという思いもあったそうだ。例えば富山県立大学の学生に黒部に関するスイーツを考えてもらったり、六次産業化も目指していることから、農家の方に加工品を試しに売ってもらったりなどである。また、こういった人が集まるイベントでは交通安全の PR が出来ることから警察署にも喜んでもらえるそうだ。

このような様々な思いや利点があっても、商店街の方々と上手く連携をとることは必要であり、その点が上手くいかないと商店街でのイベント開催は難しいということが分かった。

4-2-3. イベントの客層

以上のような黒部商工会議所が主催するイベントの、「客層」について島さんに伺った。商店街の客は、売り出しをすると大体 40～60 代の女性の方が多いそうで、その方々がターゲットだという。現時点ではそうだが、今後の客をつくっていかなければならないので、商工会議所としては 20～30 代の方に来て頂きたいという。商店街が 40～60 代の方をターゲットとするなら、商工会議所のイベントは 20～30 代の方をターゲットとするというバランスである。普段はショッピングセンターやドラッグストアなどに行くような、商店街に縁のない人に商店街に目を向けて欲しいという思いで、前述したようなイベントを企画しているそうだ。

4-2-4. 今後どのような商店街になってほしいか

今後の三日市商店街について、商工会議所の視点からの考えを伺った。商店街はいくつか

のパターンに分かれるという。大都市にあるような専門品[138]の商店街の他に、買い回り品[139]の商店街、最寄り品[140]の商店街である。三日市商店街は、かつては下新川郡の商業の一つの集積地として、どちらかというと買い回り品プラス専門品の商店街だったという。今は、買回り品の一部と最寄り品の商店街となっているそうだ。これに関して島さんは、「食料品などを中心にして買回り品の商店街になって頂ければなと思う。専門品店はあるにはあるが、一店か二店のみで、そういった店は一定のお客さんを持っているのでそれはそれで頑張って頂ければ良い。商店街とすれば、それよりは最寄り品に買回り品が入ったような商店街として残ってもらえれば、近隣の方の生活を支えていけることになるのではないかと思う。」と語った。

4-3. その他の店の人の思い

その他の店の人の思いとして、三日市大町商店街にあるバイクポートりんりん館の中島憲一さんに、今後どのような商店街になってほしいか伺った。中島さんは、「あくまで個人の考えだが、市役所が町の近くに移転したし、今後もくろべ市民交流センター（仮）が出来る予定であるため、そこで本を読むなど暮らしの広場のような商店街になればいいなと思う。これからも高齢化社会であるが、高齢者は家の中でテレビばかり見ていてもしょうがない。商店街とその周辺が、地域の高齢者たちも足を運んで、そこで日中過ごせるような場所になってほしい。」と語った。

5. まとめ

今回調査をして、現在の三日市商店街を見るだけでは分からない歴史を知ることが出来た。近隣住民の物資交換の場から始まり、宿場町として栄え、戦後も商店街として多くの人が利用したという流れを知り、再び人で賑わう商店街を見てみたいと感じた。

三日市商店街は旧町ごとに複数の商店街が並んでいるが、黒部まつりからはそれら商店街同士の繋がりも見えた。主催の三日市商盛会連合会の存在もあり、商店街同士が力を合わせて三日市を盛り上げていた様子が感じられた。また、黒部まつりは三日市の繁栄を象徴するような祭りであったようにも思う。黒部おどりで街を流す様子は写真で見ただけでも楽しそうで、当時の賑わいを私も感じてみたいと思った。黒部おどりを復活させようという動きがあるということだったので、成功してほしいと思う。

くろべ納涼楽市は、地元の子供達で「ジャンボ火灯」を作ったり、地元の伝統芸能を出したり、「地域と協同して作る祭り」という話があったが、商店街はショッピングセンターや

---

138 知識や趣味性の高いもの。買う頻度が低く、単価が高いものが多い。

139 洋服や家電など、買うのにいくつかの店を回るもの。

140 日常品の内、最寄りの店で買うもの。買う頻度が高く、単価が安いものが多い。

ドラックストアなどと比較すると、より地域に寄り添った場所であると感じる。商店街自体が地域の人々で形成されているので当たり前のことだが、かつて行われた黒部まつりや現在のくろべ納涼楽市のような、地域の人々を繋いで盛り上げるイベントができることも商店街の魅力であると思った。

商店街の店については、明治時代や大正時代から続く店が現在もいくつも残っているということに驚いた。大正・昭和・平成と商店街を構成する店の内容に変化があり、特に大正時代には現代に見られないような内容の店が沢山あった。時代ごとに比較すると、需要が変化していることが感じられて興味深かった。聞き取り調査をする中でも一つ一つの店に歴史があることを知り、代々受け継がれてきた店が閉められていっているという現状に寂しさを感じた。

商店街が衰退傾向にある中で、大町商店街の森丘さんや黒部商工会議所の島さんのように、商店街に人を集めるために奮闘する人々がいる。お二人から話を伺う中で、祭りなどのイベントは、普段商店街を利用しない人を含め多くの人が商店街に集まる良い機会であるということが分かった。商店街でイベントを行う理由には、数々のイベントを通して商店街に興味を持って足を運んでくれる人が増えて欲しいという思いがあった。一方で、商店街組織の衰退に伴う実行委員の減少や商工会議所と商店街の連携など、イベントを運営することの難しさや大変さがあることも感じた。さらにコロナウイルスの影響でイベントが開催できないこともあり、なかなか思うようにいかない様子もあった。コロナウイルスに関しては、商店街の店自体にも影響があったと思われる。8 月にフィールドワークで三日市商店街を訪れた時に、三島町商店街と大町商店街に七夕が飾られていたが、短冊には「コロナに負けるな」と書かれたものが沢山あった。また商店街の方々のお話で、くろべ市民交流センター（仮）への期待の声がいくつか挙がっていた。この施設が出来ることで、商店街に新しい人の流れができると予想されるため、商店街に立ち寄ってくれる人が増えることが期待できる。厳しい状況の中でも、このようなきっかけや商店街の人々の取り組みが、今後の三日市商店街にとって良い結果に繋がっていってほしいと思う。

参考文献

株式会社しなのき書房編、2012 年『写真アルバム 新川の昭和』いき出版。
八木均、1996 年『三日市宿駅における加賀藩御旅屋と・本陣御宿の来歴』私家版。
三島町町内会、1995 年『三島公民館新築記念 目で見る三島町いまむかし』三島町町内会。
本田重郎、1971 年『三日市町誌：付旧三日市信用農協誌』旧三日市信用農業協同組合。
古稀耕史・野島好二、1974 年『碌々残生記』越中文化研究所。
黒部市誌編纂委員会編、1964 年『黒部市誌』黒部市役所。
地図の株式会社刊広社、1972 年、2020 年『住宅地図メーサイズ』。

参考にした新聞記事

ニコニコタウン編集部『ニコニコタウン』2020 年 9 月号 vol.484、2020 年 12 月号 vol.487、2021 年 5 月号 vol.492、2021 年 8 月号 vol.495。

第７章　入善町の今と昔
―駅前商店街と大型店の商売の形態と変遷―

栗田　夏鈴

はじめに

私が入善町に興味を持ったきっかけは、令和２年(2020 年)７月、２年次のフィールドワークで入善町に訪れた際、交流施設うるおい館の観光課の方に話を伺ったことである。入善町の観光について紹介してもらううちに海洋深層水や牡蠣などの名物があり魅力を感じた。また、観光課の方は入善町の出身ではなく黒部市から通っているという。地元ではないが入善町について仕事で知っていくうちに面白い町だと感じるようになったと話してくれた。町の方に聞いても「子育てをする上の補助制度があり住みやすい町だ」と教えてもらった。私の住んでいる地域では「車で隣町へ行かないと何もない町だ」と話すことがよくあり、地元を自虐していた。また、２年次のほかの調査候補地での聞き取りでもそのような地元にネガティブなイメージを持っている方が多かった。それに対して、入善町では地元の方もそうでない方も「ここは何もない場所だ」と自虐することなく町の魅力を紹介してくれる様子に驚いた。

町の広報を調べてみると婚活や街中のイベントが充実しており、町おこしに活発な町だと感じた。２年次でまだ調査テーマが定まっていなかったが、心惹かれた入善町で調査したいと思った。なんとなく商店街で話を伺っているとショッピングセンターと比較して話す方がおり、その違いが気になった。そこで私は入善町の駅前商店街とショッピングセンターの地域住民への働きかけや商売の仕方、考え方がどのように異なっているのか、共通点はあるのか聞き取りを行い、調べることにした。

1. 入善駅前を中心とする商店街の変遷

入善町で商売をすることが昔と今でどう違っているか、地域との関わりはどのように行われているのかについて入善駅前の商店街のいくつかの店で話を伺った。

1-1. 訪れた店舗の概要

まず、いつから店を始めたのか、どのような経緯で始めたのか、また、現在の様子について聞いてみた。

図１　入善町駅周辺の地図（★訪れた店舗、★周辺の店舗）
（ゼンリン住宅地図より作成）

写真１　紙ふうせんの外観
（筆者撮影）

喫茶・スナック「紙ふうせん」の店主の西島涼子さん(70 代)は、昭和 55 年(1980 年)にコーヒー・カレーなどの軽食を提供する店を開いたが、その頃はバブル期で何をするにも始めやすく、調理が好きだった西島さんは夫婦で店を始めた。14 人ほどしか客が入らず、すぐに店が満員になってしまう小さな店であったため、提供できる食事は限られていた。席数や食事のメニューを増やすために昭和 60 年(1985 年)4 月 5 日から現在の場所に移転した。移転前から現在まで営業時間は変わらない。朝の支度、家事が一段落した主婦が休みに来られるように朝 8 時から店を開き、夜は 2 次会、3 次会にも利用されることから夜 24 時まで営業している。初めは夫婦 2 人で店を切り盛りしていたそうだが、移転後は従業員を何人か雇い、交代しながら営業している。普段はお年寄りの方が多く利用しているが、薬の配置業や町外のトラック配達員の方がわざわざ昼食に寄って来られることもあり、客層は幅広い。

たけうち美容院の店主の竹内富美子さん(79 歳)、米原敬子さん(54 歳)は親子で店を営んでいる。竹内さんが昭和 45 年(1970 年)から始めた。米原さんは結婚してからこの店を竹内さんと一緒に切り盛りしている。客層は 50 代が多く、昔から利用している方がほとんどだ。周りで店を営む方が来ることが多いため、竹内さんたちもなるべく商店街を利用するようにしている。美容室は客と会話することが多く、新しい客は口コミで獲得している。米原さんは店について「自分の代で終わりだと思う」と話しており、まだ後継者の事は考えていないという。

写真 2　たけうち美容室の外観
（筆者撮影）

食料品・酒店「田原酒店」の田原洋平さん(43 歳)は小さい頃から両親が営む店の手伝いをしており、大学を卒業してから店を継いだ。今は母親と 2 人で営んでいる。田原さんの周りでは同じような境遇で店を継いだ同世代の方が多いという。初めは祖父が会社に勤めながら入善ジャンボスイカを仕入れ・販売・発送する店を、田原さんが生まれる前のおよそ 43 年前から営み、35 年前（1986 年）に祖父が身体を崩してしまう時までやっていた。NHK に取材され、その時の写真を役場に提供したこともあり有名だったそうだ。祖父がスイカの販売をしていた頃、祖母が始めた酒店が現在まで続いている。駅を出て正面に位置しているため、土産や電車で飲む酒を買う方がいる。客層は昔からの常連であり、６５歳以上が多い。

写真 3　田原酒店の外観
（筆者撮影）

和菓子・洋菓子「扇原清月堂」の扇原紀昭さん(84 歳)は昭和 28 年（1953 年）から菓子屋を営んでいる。親が煎餅、飴などの駄菓子を売る商売をやっており、店を継いだそうだ。客層は様々である。北陸の雑誌に取り上げてもらったことがあり、町外（高岡など）からも買いに来るそうだ。そのことがあってから入善町にちなんだ「黒部川」「海洋

↑写真 4　入善町ならでの菓子
←写真 5　扇原清月堂の外観
（共に筆者撮影）

深層水」という名前のお菓子を多く作るようになり、今では土産物として好まれている。

ジュエリー・時計・メガネ「リールミチイチ」の井田俊博さん(72 歳)は、入善町出身で大学に通うため富山県から一度出たが帰郷し、昭和 20 年（1945 年）から続く親の店を継いだという。リールミチイチ以外にも電気屋ミチイチなど似ている店が何軒か連なっていたため聞いてみると、親戚でまとめて土地を借り敷地を分けて営業しているからだそうだ。そのため隣店と深く関わり合っているのではと思ったが昔からそのように営業しており、それぞれで店をしてきたため、特に関わりはないという。

写真 6　リールミチイチの外観
（筆者撮影）

1-2. 駅前、商店街の昔と今

駅前商店街の様子が商売をする上で、また生活をする上で、いつ頃からどのように変わっていったのかについても聞いてみた。

まず、「紙ふうせん」の西島さんによると、昔は車通りが激しく、歩道にも人がたくさん歩いていたためすれ違うのも大変だった。町に買い物や飲みに出ている人はみな顔見知りで関係性が深かったため、誰がどこの飲み屋に行くのかも分かり合っていた。また、昔は徒歩や自転車で買い物に出かけることが多かったが、車を持つ人が増えたため昭和 51 年(1976 年)に県営中央駐車場が建設され、車を止めて買い物に出かける人が多くなった。警備員が見回るようになり、無料の 2 時間を超えて駐車している車があれば注意のシールが貼られるなどの取り締まりがあった。

車が普及しても活発だった商店街が大きく変わり始めたのが今から 30 年前の大型ショッピングセンターの設置である。駅から東西に２つのショッピングセンターができ、周りの店がどんどん吸収されていった。駅前にあったスーパー、八百屋や農協の販売店が何軒も無くなってしまい、駅前・商店街の空洞化を感じたという。

「たけうち美容室」の竹内さんによると、入善町は昔、駅が主体となる町だった。駅の北側にある呉羽紡績の工場に若い女性の多くが働いており、北海道や山形など遠い場所からも人が集まっていた。昭和 11 年(1936 年)に呉羽紡績の入善工場ができ、その頃は職員が 2000 人ほどいた。また、働きながら通うことができる夜間の高校もあったことからその頃の入善町には多くの女性がおり嫁不足もなかった。この頃は人口増加、町の発展を感じていたが、段々と大型店などで栄える魚津市や黒部市に人が流出していった。呉羽紡績の職員も減り、昭和 41 年(1966 年)に東洋紡(旧東洋紡績)と合併した。令和４年(2022 年)には入善工場は廃止される。駅前には病院や銀行があるためまだ人通りはあると感じるが、これが無くなってしまったらもっと人通りが減るのではないかと心配している。

生活面では、昔は人通りも多くみな顔見知りだったため知らない人、町外の人が歩いていたらすぐに気づいたという。子供が道路で絵を描くなど自由に家の外で遊んでいても危険に感じなかった。食材は毎日商店街へカゴを 1 つ持って買い物に出かければ全て揃うため便利だった。婦人服は「トーカマート」という衣料品のスーパーがあり、個人店へ入りにくい人でも買い物に行くことができた。今では買い物は土日や時間のある時に商店街へ、足りない食材、衣料品は大型店へ出かけてまとめて買うそうだ。

「田原酒店」の田原さんは、周辺の店の方達のほとんどが古くからの知り合いである。田原さんが小さい頃からよく挨拶を交わし、店や家の中に勝手に入っても怒られなかった。町の変化を感じたのは田原さんが中学生になった 30 年ほど前、車の普及により商店街のメインストリートだった路地の隣に車幅の広い道路、一般県道 117 号線ができた時だ。駅前にあった八百屋や魚屋が減っていき、駅横にあったホテルは駐車場に建て替えられた。また、同じ頃にショッピングセンター（コスモ 21）が国道 8 号線沿いに建設され周辺の道路や住宅などが作られ栄えていった。

商売についての考え方も変化した。働き始めた 20 年ほど前は「売れば買ってもらえる」という考え方で、何か商品を置けば客が買いに来るため、店の商売の仕方に少し傲慢さ、慣れがあった。また、みな顔見知りで関わりがあることからツケ払いも多かった。酒店では店で酒を置いて売るだけでなく配達でも営業する。昔は会社だけでなく、個人宅にも酒をよく配達していたが、今では会社のバーベキューなどのイベントの際にお茶やお酒を届けることが多い。現在の町について、値段が安いものは商店街よりもコンビニやスーパーにあり、またネット通販も広まっていることから商店街の衰退を感じるという。酒屋は他の業種に比べて客が安定しているため衰退するのが遅く、人の流れの変化を売上で感じたのはここ 10 年くらいだそうである。

「扇原清月堂」の扇原さんは昔の商店街は活気があったと話しており、今衰退しているのは大型店の出店が大きいと感じている。周りの商店街の店も大型店に入ることがあったが、大型店の営業をしていく中で魚津市から出している店に客を取られること、客層の違いなどにより撤退してしまったそうだ。

「リールミチイチ」の井田さんは、昔の商店街は店が連なっており、歩いて買い物ができたと話す。生活必需品は商店街で全て揃うため遠くへ行って買う必要がなかった。今は店が少なくなり、必需品が揃わないため町外へ出ざるを得ない。流行品を置く店が少なくなっていったことから、昔と今の商店街の商品の品揃いに格の違いを感じるそうだ。また、昔は人通りが多く、商店街に店が建ち並び、店同士で仲間、地域意識をもって協力していた。七夕祭りの時には祭りを行う 3 日間は商店街の道路に人がぎゅっと集まって楽しかったという。昭和 38 年（1963 年）に国道 8 号線が通ったこと、その後、マイカーが広がったことで町が変化し、段々と人口が減っていったと考えているそうだ。

1-3. 大切にしていること、大変だったこと

家族で経営しながら長く続いている店が多いため、商店街で店を続けていく上で大切にしていること、大変だったことを伺った。

「紙ふうせん」の西島さんは、店を始めた当初から客の要望に応えることを大切にしている。それを表しているのが食事のメニューの多さである(図 8)。同じ食材でもバター焼きや塩焼き、刺身、唐揚げなど様々な調理法で提供している。客から「親子丼の上(カツの卵とじ)だけ食べたい」、「エビフライのエビをただ茹でて出して欲しい」などの要望に応えているうちに段々とメニュー数が増えていったそうだ。しかし、ただ注文された食事を増やしていくのではなく、メニューに追加した食事は常に品切れしないように材料を揃えて準備している。余った食材は廃棄し費用もかかるが、それよりも注文した客をがっかりさせたくないそうだ。

写真 7　紙ふうせんのメニュー
(筆者撮影)

商売が大変だと感じた出来事について伺った。入善町で 20 年ほど前に町長選挙が行われた際、前町長と新町長で支援する人で町が二分した。西島さんは前町長に不満を感じていたため、公に新しい町長を支援していた。ところが新しい町長が当選した後、今まで贔屓にしてくれていた客や企業の方達が店に来なくなった。小さな町では選挙などで意見や思想が偏るとそれが広まり店の信頼を失ってしまう。商売をしている身であるということを自覚し気をつけなければいけないと思ったそうだ。

「たけうち美容室」の竹内さんは、店を信用してもらうことが大切だという。口コミで評価される店だからこそ、態度や会話が店の信用につながる。例えば客と話をする際、カット・カラーというような頼まれたことだけではなく、地域の情報交換をしたり相談を引き受けたりする。「近くに新しいお店ができたらしいですよ」「あそこの〇〇が美味しかったですよ」などの情報やお客さんから「野菜を育てているんだけど、この時期は何を植えようかしら」というような相談にも客に合わせて柔軟に対応する。また、米原さんは店の信用は親子で大切にしていることであるが、それだけでなく時代に合わせて新しい技術を取り入れることも店を維持することに繋がっていると話した。

「田原酒店」の田原さんは低姿勢で優しく接客するのを大切にしている。両親から教わったことであり心がけている。また、姿勢も大切にするが、客は顔見知りが多いため、特に対応の悪い嫌な客はいないという。同じく酒、タバコを売るコンビニやドラッグストアでは店員が代わる代わる不特定の人数で接客しているが、それよりも知り合いが営んでいる店の

ほうが喋ったり気軽に酒について尋ねたりできる。また、昔の「売れば買ってもらえる」という考えから「アピールしなければ買ってもらえない」という考えに変わった。商品の酒を実際に飲んでみてどんな味か説明できるようにしたり、酒についての知識をつけたりして広告を作ったり客に聞かれたときにアピールできるようにしている。

「扇原清月堂」の扇原さんは、商店街で店を経営する上で大変なことについて話してくれた。商店街の店は昔から家族など同じ人が長く務めていることが多いため、少ない従業員で経営することが多い。そのため十分な休みがないことが大変であるという。扇原さんは昔から現在まで身を粉にして休まず働いている。昔の日本は農業や会社でも休みなく働くことが当たり前であった。昭和 60 年代(1985 年～)から人々の仕事に対する感覚も変化したと感じるそうだ。そのように身を粉にして働くことが大切でありそれを周りの人達が応援してくれた、客が贔屓にしてくれたことが今まで店を続けてこられた理由だ。

「リールミチイチ」の井田さんは、人口が減ると商売力も減り、時代に合わせた変化が必要だと話された。井田さんは商工会の副会長を務めており、町の人口減少や後継者不足を懸念し対策を行っている。町や後継者がいない店に新しい人を呼び込むため、商店街の仲間と共同出資し、空き地にコンビニエンスストアを誘致するなどの取り組みを行っている。

このような聞き取りから、入善駅前の商店街には多く共通点があることが分かった。まず、店に来る客は顔見知りであり、店主と親しい関係性がある。店は客に信用してもらうために、ひとりひとりの客の需要に応じて柔軟に対応する。客はそのような態度に好感を持ち、店を長く利用している。また、交通や人口などの時代の変化に対応するためにそれぞれの店で少しずつ商売の仕方を変容させている。

1-4. 現在の課題と取り組み

私が話を伺った商店街の方達はどこも家族で店を営んでおり、子供が同じ場所で店を継いでいる場合がほとんどであった。また、周りにあった店は後継者がいないことで廃業してしまったといった話を聞いた。後継者の確保は商店街で店を継続する上で重要な課題となっている。

話を伺った方達からは入善町は特に地域おこしに力を入れており地域住民も町外の人も訪れやすいイベントが多く活動的だという話を聞いた。

昭和 58 年（1983 年）から町の花に指定されたチューリップを PR するために入善町役場の入善町フラワーロード実行委員会が、平成 9 年（1997 年）から「にゅうぜんフラワーロード」を開催している。毎年 4 月上旬から下旬まで行われており、会場は毎年変わる。令和 3 年(2021 年)は入善町下飯野の園家山キャンプ場であり、約 7.3 ヘクタールの広大な土地に 300 万本のチューリップが咲き並んだ。開催中にウェルカムイベントとしてはしご車からのチューリップ畑の空中観覧や花のワークショップなど無料で催しを楽しむことができる。イベント当日は無料のシャトルバスが運行している。

入善町では水深 364m から汲み上げる海洋深層水により浄化するため全国の旬な牡蠣が一

年中食べることができる。その「深層水仕込み牡蠣」をPRするために、牡蠣が食べられるお店をMAPにして紹介している「にゅうぜん街中オイスターロード」(図9)や2月・3月に前売り券を販売し当日に牡蠣10個と引き換えて炭火焼きを楽しむことができる「かき祭り」が行われる。「田原酒店」の田原さんによると牡蠣自体は幼い頃から食べていたが名物とまでは思っていなかった。2015 年に富山湾沿いにある海洋深層水パーク内の「牡蠣の星」がオープンした時から牡蠣を食べに県外からも客が集まるようになり町民の間でも名物と言われるようになったという。

図2 「にゅうぜん街中オイスターロード」MAP
(「入善町観光物産協会」より引用)

他にも入善町商工会主催で地域おこしのイベントを行なっている。場所は主に入善町まちなか交流施設であるうるおい館内や町営駐車場である。うるおい館は入善駅から徒歩5分の場所にある。入善駅観光物産協会や女性センター、講演会・ミニライブが出来るホールや会議室、カフェが施設内にあり、平成20年(2008年)にまちなかに「うるおい」を与える目的で、中心市街地活性化の拠点施設として建設された。出展者を募集・誘致して催しを行い、七夕やハロウィン、クリスマスなどの四季の行事ごとにも親子で楽しむことのできるワークショップイベントやマルシェ、縁日、ステージショーを行っている。話を伺った方達からうるおい館で行われる「入善ラーメンまつり」は県外からも人が集まり大盛況だったという話を聞いた。平成13年(1999年)に始まりその後毎年行われ、平成25年(2013年)に行われた「入善ラーメンまつり」は集客が30,000人を突破し大勢の人で賑わった。

写真 8　平成 25 年(2013 年)の「入善ラーメンまつり」の様子
（『入善町商工会設立 60 周年記念誌』より引用）

令和 2 年(2020 年)の第 20 回「入善ラーメンまつり」は 2 月 22 日(土)・23 日(日)に行われた。北陸自動車道入善 IC 近くに駐車場が用意され会場までシャトルバスで移動することが出来た。北海道や東京、大阪など他県から 22 店舗、入善町から 11 店舗集まった。同日に「にゅうぜんパン祭り」「全国スイーツ祭り」、うるおい館に設置されたメインステージで「にゅうぜんアイドルフェスティバル」が行われ多くの来場者で賑わったという。

地域おこしの取り組みとして、商店街の店で利用することができるキラキラカードというポイントカードがある。経緯や活動内容について、キラキラカードが使える加盟店の組織の代表である「リールミチイチ」の井田さんに話を伺った。井田さんは平成 8 年(1996 年)に商店街の仲間と「キラキラカード会」を立ち上げ、現在まで 25 年続けている。その頃ポイントカードが流行っており、ハンコの機械を作る店に提案されたそうだ。近くの店同士で関わりはあるものの客層や売り上げはバラバラであった商店街が、全体で協力し相乗効果で活性化することがねらいだ。立ち上げ当初はおよそ 50 店が参加し、現在では 33 店が参加している。

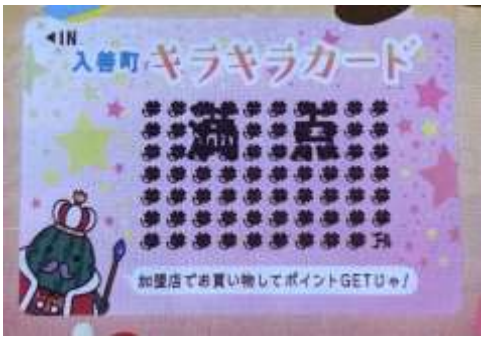


写真 9　キラキラカード
（筆者撮影）

100 円につき 1 ポイントの花びらのスタンプが押され、合計で 350 ポイント集めると「満点カード」となる。それはキラキラカード加盟店で４００円分の買い物券として利用できる。「満点カード」の 350 ポイント、35000 円分のうち店の負担は 2%で 700 円である。そのうち 400 円は商品券になり、残りの 300 円は運営費になる。現在、商品券と運営費の割合は 4：3 である。昔は 5：2 であったが、商店街全体の売り上げが下がってきたことで変更したそうだ。

普段の活動は月 1 回、20 日、21 日のポイント 5 倍セールだ。また、春・夏・クリスマスなど、時期は様々だが年に 2 回抽選会が行われる。去年はコロナの影響で 1 回だけ行ったそうだ。「満点カード」1 枚で 1 回ガラポンが回せて 1 万円の商品券や銭湯の入浴券、季節のお楽しみ商品が当たる。また、満点カードを集めると温泉旅行に行ける行事がある。愛知、静岡などの温泉地に日帰り、宿泊でツアーを行う。多い時はバス 3 台で 130 人、少ない時でも 40 人が参加した。主に平日の火・水・木曜に行われるため、参加者のほとんどはお年寄りである。平成 27 年（2015 年）から、商店街の若年層の利用が少ないためすごろくクイズラリーが行われた。始めに 500 円分の商品券を買い、すごろくで出た店に行きクイズをして店を回ってもらう。まずは店に入ってもらうことで店に良いイメージを持ってもらうことが狙いである。「入ったことある」と覚えてもらうことが大切であり、また次に立ち寄ってもらうきっかけになるという。ポイントカードが出来た当初は盛り上がっていたが、売り上げが下がっていくことで運営費が足りなくなり、コロナの影響も受けて催し物は段々と減っている。

加盟店の売り上げは共有され、加盟店対象の運営に対するアンケートも行われる。キラキラカードの加盟店の「紙ふうせん」の西島さん、「田原酒店」の田原さん、「扇原清月堂」の扇原さんにカードを導入した影響について話を伺った。３倍デーの時は利用客がポイントを多く得るために、化粧品などの値段の高いものを売っている店に客が集まり、繁盛する。「田原酒店」では、他のカードではポイント対象になりにくいタバコ、酒にもポイントがつくためわざわざ利用する客がいるという。キラキラカードを取り入れた当初は商店街や売り上げが盛り上がっていたが、だんだんと落ち着いて現在ではカードを取り入れていない店と大して変わらないそうだ。

入善町は、このように町に何が足りていないか地域町民への調査により定期的に分析して、町が抱える問題を理解し取り組みを行うことで次の世代へ繋いでいく暮らしやすい町を目指している。

2. 大型店の出店について

調査を行う中で、商店街の衰退が進んだ理由として大型店の出店が多く挙げられた。入善町にはコスモ 21、きららの里という２つの大型店がある。平成 2～3 年(1990～1991 年)に 2 つの大型店を建設する事業計画が同時に進められ、どちらも国道 8 号線沿いに位置している。椚山地内にあるコスモ 21 は専門店が多く 35 店舗からなり、上原地内にあるきららの里はアル

図 3　入善町の 2 つの大型店の位置関係
（ゼンリン住宅地図より作成）

ビス入善店に隣接し 2 店舗からなるショッピングセンターである。その中で私は大型店であるコスモ 21 の事務局長である金澤正道さんに話を伺った。

2-1. 出店から現在まで、周辺の様子

百貨店、量販店などの大型店は企業によって運営される場合が多い。しかし、コスモ 21 は商店街の人々によって建てられ、運営されている。朝日町と入善町には大型店がないため近隣の黒部市や魚津市へ購買客が流出するのを問題視していた商工会は、昭和 62 年(1987 年)に入善ショッピングセンター準備組合を設立した。コスモ 21 は、その 5 年後の平成 4 年(1992 年)12 月 3 日に開店し、平成 18 年(2006 年)のリニューアルを経て今に至る。

図 3　入善町の 2 つの大型店の位置関係
（ゼンリン住宅地図より作成）

写真 10　コスモ 21 の外観
（筆者撮影）

準備組合を設立した後に加入希望者を募集したところ、ほとんどが入善町の店だったが、当初からやっている店は、今は少ない。後継者がいなくなって続けられなくなるというケースもある。コスモ 21 が営業を始めた当初は、婦人服が 3 分の 2 を占めていたが、流行品はファボーレやイオンなどの大型店にあるためどうしても購買客が流出してしまい、客数・店舗数が少なくなっていったそうだ。入善町の中心部から約 6km の範囲内に入善町のほとんどと朝日町の中心街が含まれる。隣接する黒部市中心部との距離は約 9km、魚津市の中心部との距離は 18km であり、入善町・朝日町の購買客は、より大型で店舗数が多い商業施設があり、商品が豊富で気楽に買い物が出来る黒部市や魚津市へ流出する傾向がある。常に何が求められているのか、どうしたら支持されるのか、どの店でも考えている。インターネットの普及や交通状況の変化を受けて、お客さんは色々な理由で買い物をする場所を使い分けるようになったという。流行品はネットや別の大手大型店で買うことができるようになったため、現在では主に近所で買う方が便利な生活必需品や実用品が売れている。

コスモ 21 の周辺は田んぼや住宅街だが、道路が広く、敷地内には自動車用品店、ホームセンター、コインランドリー、塾などがある。これらはコスモ 21 が貸し出している土地を利用している。金澤さんによると、コスモ 21 ができる前は周りは田んぼに囲まれており、コスモ 21 ができてから周りに学校や住宅ができたのだという。新しい住宅がほとんどであり、住民の利便性のためにショッピングセンターができたというよりは、ショッピングセンターが出来たことで周りの開発が進んでいった。

2-2. コスモ 21 内店舗での営業について

入善町の大型店で商売をするにあたってどのような点に特徴があるのか、商店街とどの

ような違い・共通点があるのかについて知るため、コスモ 21 内で店を営んでいる「いずみ魚津鮮魚店」の魚津敏明さん(60 代)に話を伺った。

2-2-1. 鮮魚店について

魚津さんは生産から配送まで関わることのできる仕事をやりたいと思い探していたところ、競りをして得た商品を提供できてお客さんがすぐ反応してくれる鮮魚店に魅力を感じ選んだそうだ。地元である入善町の鮮魚店で働き、その後富山市呉羽のスーパーで鮮魚店のオーナーをしていた。20 年近く前にコスモ 21 でやってみないかと格安で場所を与えてもらい今の場所で店を始めた。

写真 11　いずみ魚津鮮魚店の様子
(筆者撮影)

昔から変わらず感じている鮮魚店の魅力はやはり製造直売ができるところだそうだ。現場を直接自分で見ることができ、仲買がいないのも良さだ。魚の加工は調べたり人に聞いたりすれば作れないものはなく、工夫をして商売すれば自分の力でお店を大きくできる。普段の買い物や調査で他の鮮魚店を見ることはあるが、その際には値段は見ずに魚の切り方や量を見るそう。

今感じている鮮魚店の魅力として挙げられていたのは魚は海の恵みであり、品種改良など人の手がかかっていない食べ物であること。入善町、魚津では女性が子供を産むと、栄養を蓄えてもらうために周りの人が魚を贈る習慣がある。そのような文化は氷見が発祥で東部へ伝わっていったそうだ。また、魚津港、富山湾ではとれる魚は他と比べても種類が多く、四季によって色々な魚が見られる。そのような文化、特徴があることから、魚は入善町の人々にとって重要なものであり、魚は小さくても加工して大切に利用しているそうだ。利用している客は年配の方がほとんどであるが、魚津さんは店が特に若い女性に好まれていると感じるという。若い人は魚は扱いが難しいと魚料理を避けてしまうことが多い。魚津さんは捌(さば)かれた魚を丸ごと売ったり切り身にしたり刺身にしたりと、捌くことのできない若い方でも手に取ってもらいやすいようにいつでも 2 つ以上の形で販売するようにしている。また、どうやって食べたら良いかとよく従業員に質問している姿を見るという。いずみ魚津鮮魚店では従業員が捌いている姿が売り場からよく見える。また、魚を熟知している従業員がすぐそばにいて話しかけやすく、「鍋にしたら美味しいよ！」や「～にして食べられ！」と教えてくれる。調理が難しく感じてしまう魚を多くの形態で販売し、分からなくても気軽に質問できる環境があることで若い世代にも受け入れられやすくなっているようだ。

2-2-2. 商売をする上で大切なこと、大変なこと

普段から気を遣っていることは地域の経済水準、お客さんの家計を考えることだという。

お客さんにとって「良い魚」とは、「手の出せる魚」だ。どれだけ美味しい金目鯛のような魚でも、高くてお客さんが手を出せなければ良い魚とは言えない。平日はお肉、惣菜などの他のおかずと戦う気持ちで比較的手を出しやすい魚を出し、週末、土日は少し贅沢な魚を出すようにしている。新鮮で安いものを提供するように主婦の立場に立って努力しているそうだ。コスモ 21 内で使うことの出来るポイントカードのデータは事務局から 1 年に 4 回ほど報告され、主にどの価格帯が売れているかを知ることができる。直感も使いながらデータも利用してお客さんの需要を考えている。

写真 12　いずみ魚津鮮魚店の店頭の様子
（筆者撮影）

写真 13　加工品（揚げ物、蒲焼きなど）
（筆者撮影）

大変なことは従業員の問題だという。鮮魚店はきついし汚い職業と言われており、若い人が入ってこない。ほとんどの従業員は地元に住み昔から働いている方であり、老齢化が進み大変だという。コスモ 21 は大型店であるが店は区画を借りてそれぞれが営業している個人店であるため、従業員が確保されているわけではない。昔からあった店も後継者がおらず廃業してコスモ 21 を抜けていった。

2-3. コスモ 21 の取り組みについて

コスモ 21 には、「ナイスカード」というポイントカードがある。コスモ 21 内の店舗で買い物をして会計の際に提示してポイントを貯め、1 ポイント 1 円で利用できる。ポイントカードの情報はコスモ 21 事務局でポイント会員の年齢･性別･住所を集計して管理している。何が売れ行きなのか何が求められているのかを分析することが目的であり、それぞれの店舗に情報を公開して経営に生かしている。また、ポイントカードの集計で客層の年齢が上がっていることを受けて高齢者とその家族に向けた取り組みを行っている。

店舗で買い物をした履歴がポイントカードで残るため、高齢者がコスモ 21 で買い物をしてカードを利用したという情報を家族にメールで伝える「高齢者見守りお手伝いサービス　安否確認メール」を行っている。

また、毎月 15 日に購入時のポイントが 5 倍になる「シルバーデー」が行われている。また、一階にある広場で趣味や習い事の発表、作品展示ができる。ステージや客席があり、歌の発表なども行うことができる。これは、事務局にやりたいことを申請して認められると費用をコスモ21が負担するというものである。これにも、お客さん同士の交流や仲間探しを応援するという目的がある。

写真 14　安否確認メール
（筆者撮影）

店を始めたい、独立したいが不安だという方が加入できるように、チャレンジショップ制度を行なっている。1 年から 2 年の間、半額の家賃でコスモ 21 内にお店を出せるという制度である。お客さんからの評判や出店者の協調性、売り上げによっては、チャレンジ期間後も正規で続けていくことをコスモ 21 の方から依頼することもあるそうだ。ここ 5〜6 年は毎年 1 店舗ずつやっているそうで、現在は旅館で板前をやっていた方が惣菜屋を営業されている。

写真 15　お年寄り向けのシルバーデー
（筆者撮影）

コスモ 21 は、当初は小さな子供から大人まで幅広い年代が楽しめる場所というふうに考えられていたが、少子高齢化を受けて、最近は公民館のような、交流、イベントができる場所を目指すようになってきているという。また、コスモ 21 のような田舎のショッピングセンターでも商店街のように顔見知りの人間関係が見られるそうだ。あの人がやっているお店だから行く、この人に勧められたから買うというようなやりとりが行われており、店と客の距離は商店街と変わらないようだ。入善町社会福祉協議会と入善町ファミリーサポートセンターが協力して、福祉の充実を図るまちカフェ「ほっと」という試みも、コスモ 21 内の一画で行っている。その試みのひとつに、毎週水曜日に会員登録をし、利用料金 1 時間 500 円を払うと子どもの一時預かりをしてもらえるというサービスがある。当日でも空きがあればコスモ 21 に連絡すると利用できるが、基本的には事前予約が必要になる。ただし、スタッフがコロナ禍で集まらないため、本格的に活動するのは 2021 年 11 月の予定だそうだ。他にも親子が一緒に楽しめるイベントとして「まま

写真 16　まちカフェ「ほっと」
（筆者撮影）

ほっと」企画というものが行われている。7 月と 8 月にはアロマ石鹸、植物を使った部屋の飾りなどを作る体験があった。普段はスタッフはおらずドリンクバー1 杯 50 円で休憩場所として開放されている。

3. 入善町の取り組み

商店街、コスモ 21 以外にも入善町で行われている取り組みがある。将来どんな町にしていくのか、そのためにどのようなことをしていくのかについて福祉・都市整備・環境のそれぞれの面での取り組み内容をまとめた入善町総合計画を入善町の公式ホームページで公開している。以下その内容を紹介する。

入善町の人口は平成 2 年（1990 年）の約 30000 人を境に減少しており、平成 30 年（2018 年）には 25000 人を切り、人口減少の傾向は年々加速している。また、同じく平成 2 年（1990 年）から老年人口が年少人口を上回り少子高齢化が進んでいる。10 年後の令和 13 年（2031 年）には高齢者の人口が 4 割を超え、このうち 75 歳以上の後期高齢者の割合が 6 割を超えると予想されている。入善町は 10 年後の目標人口を 23000 人として「ストップ人口減少」の取り組みを強化している。

結婚について、平成 12 年（2000 年）以降婚姻数が減少傾向にある。しかし、入善町役場が地域住民に行った意識調査によると若年層の 9 割が結婚したいという意向を持っており、7 割以上は 2 人以上の子供を持ちたいという意向を持っている。近年の人口減少、出生数減少の推移から若年層の理想と現実に差がある理由として考えられているのが現在子供を持つ親の 8 割以上が子育てや教育にお金がかかりすぎると感じていることである。

結婚の支援事業として出会いの場の創出と結婚生活の支援を行っている。具体的には「入善お見合い会」という婚活パーティーなど結婚につながるイベントを開催、「入善世話やき隊」という結婚をサポートする団体を結成した。入善町は平成 27 年（2015 年）に結婚を後押しする「それ行け！結婚プロジェクト」（愛称：それ婚）を立ち上げた。「入善世話やき隊」は昔のように地域の世話焼きなおばさんが「結婚せんが？」と関わってくれる、気軽に相談ができる人が必要であると結成された。それ婚プロジェクトの一環として婚活イベントの参加者を募集、結婚相談を受けるなどの活動を行なっている。現在は第 4 期目であり、20 人で構成される。地元町民は入善町の婚活の取り組みについて実際に効果があったわけではないが、「入善町は婚活に力を入れている」と PR することは良いことだと感じていた。

子育ての支援事業は「子育て世代包括支援センター」を拠点として保健師や助産師に相談できる体制をつくり、「児童センター」では親子が安心して訪れることができる憩いの場として子育てアドバイザーによる相談や体験教室などの子育て家族の交流を促している。

入善町は平成 20 年（2008 年）以降、転出数が転入数を上回り、人口減少の大きな要因となっている。若年層の意識調査では「入善町に住み続けたい、戻りたい」と答えた若者が約 4 割であり、入善町に住みたくない、出ていきたいと感じる理由として多く回答されたのは

「交通・買い物が不便だから」「働く場の選択肢が少ない」という意見である。

公共交通機関を改善するために行っている事業は道路環境の整備や町営バス運行事業である。バスが少ないため車で移動することの多い町民の利便性・安全性を確保するための道路整備を行い、高齢により免許を返納しても生活しやすいよう町中心部へのアクセスの向上、降雪時のライフラインの確保を推進している。交通の便が悪いという意見は話を伺った方からも聞くことが出来た。町中の交流施設であるうるおい館の観光案内所で「レンタサイクル」という自転車の貸し出しを行っているが利用客は観光目的がほとんどで地元町民は利用していないそうだ。

働く場を増やすために行っている事業として地域資源を生かした仕事づくり、企業誘致による雇用の創出が行われている。持続可能な農業・漁業の推進を図り、農地の保全活動や新たな販路の開拓、町の特産品である「入善ジャンボスイカ」「チューリップ」の後継者の育成や「深層水仕込み牡蠣」など町特有の資源である海洋深層水を活かした水産業を振興するなどの活動がある。企業を誘致するための立地環境の整備、新規立地への支援も行っており、本社・本部から離れた場所に設置される小規模なオフィスであるサテライトオフィスを体験できる施設の設置など、多様な働き方に対応できるよう取り組んでいる。また、起業や創業に対して補助金を出し、空き店舗の坪数や立地の特徴を商工会のホームページに掲載するなど支援している。

4. 考察

商店街とコスモ 21 の様子や課題、取り組みについていくつか共通すること、異なっていることがあった。ここでは、どのように似ているのか、どう違っているのかをまとめる。

まず、共通していることは客層である。どちらも高齢者が客層のほとんどを占めており、昔から利用しているような馴染みのある客である。そのため客との距離感が近く、店主や従業員と仲が良いために店を利用することが多い。

また、商店街とコスモ 21 には座って訪れる客が交流し休むことができる憩いの場がある。商店街には交流施設であるうるおい館がある。うるおい館ではイベントが行われる以外にもフリースペースが開放されており幅広い世代が利用している。机と椅子がいくつか置かれていて高校生が学校帰りに勉強をしたり休日に新聞を読みに年配の方が訪れたりと自由に過ごすことができる。コスモ 21 には一階に広場があり椅子に座って休息をとった

写真 17　コスモ 21 の広場（センターステージ）（筆者撮影）

り、シルバーデーには発表会を行ったりと買い物のついでに休息するだけではない役割がある。金澤さんが「公民館のような場所になりたい」と話したように、広場は人々が交流できる空間にするための場所である。

客の年齢層が高まっているために、商店街、コスモ 21 ともに従業員や後継者継承に課題を抱えている。商店街では家族経営がほとんどであるため、子供が家業を継がない、継いでくれる従業員が見つからないと店を存続することができない。たけうち美容室の米原さんは自分の代でこの店は閉じるつもりだと話していた。コスモ 21 で店を経営しているいずみ魚津鮮魚店の魚津さんは従業員が高齢化しており、新しい人が入ってこないことを懸念していた。

また、両者は客の購買行動が変化していることに懸念を感じている。商店街では大型店やコンビニなど様々な商品が一カ所で手に入る場所に客が流出してしまったという話が多く聞かれた。さらにネットショッピングなども利用されるようになり、商店街でしか買い物が出来ないということがなくなり、人々が自由に購買する形態を選択するようになった。そのような変化に対応するために商店街は駐車場を設置して車で買い物をする客が商店街を利用しやすいようにした。さらに、ほかとは違う、商店街にしかない名物をアピールし、今利用してくれる客のニーズに応えるなどの接客態度を工夫している。コスモ 21 では様々な商品が揃う大型店であるが、より大型の施設やネットへの購買流出を懸念している。入善町から近い場所に豊富な商品が揃う大型店や専門店があるため客が流出してしまうという。商店街と同じように駐車場を拡張し、利用する客のニーズに応えるためポイントカードの情報を活用して、売り上げに応じた商品をそろえている。

商店街と大型店のコスモ 21 では経営形態が異なり客層にも違いがあると考えていたが、入善町では商工会により大型店の事業が進められたため共通点が多かった。初めは客層や店舗に違いがあったが、時代の変化により両者は入善町のニーズに合わせて変化し、共通点が多くなっていた。

5. まとめ

入善町では昔からある文化や伝統を繋いでいくだけでなく、近年の新しい取り組みが特に行われている。しかし、新しい事業に挑戦し変化していくことは町民を置き去りにしてしまう可能性がある。

入善町は人口の流出、町民の高齢化が地域の高齢化に大きな影響を与えている。役場は町の魅力、特徴や、課題である人口減少・流出を止める具体的な計画を町民に公開し、商工会は町おこしのための多くのイベントを企画している。それによって町民が自身の住む町の魅力を再確認し課題を考えることができる。地域町民が課題を把握することで意識も高まり町おこしのイベントに活発に参加する。また、町おこしのイベントは町内の店舗だけではない。県内、県外の店舗を呼び込むことで町民を飽きさせないだけでなく、町外からも客を

集めることができる。商店街の人々の話からは昔の賑わう商店街から変わってしまった現在の商店街に物足りなさ・寂しさが感じられていたが、入善町に対して希望を持っており前向きであった。

町内のショッピングセンターは町民の購買流出を防ぎ周辺の土地を発展させた。時代が流れるとともにショッピングセンターの従業員、訪れる客も変化していく。客の求めるものを徹底して分析し、流行品を求めて子供から大人まで幅広い世代が集まる場所から利用客が生活する上で必要とするものを求める娯楽と交流の場所へと変化した。

入善町は交通・人口の変化に対応しようと役場・商工会・商店街は町民と魅力・課題を共有し団結して取り組んでおり、ショッピングセンターは町民に寄り添い、求めるものを模索している。それぞれの方向から町を盛り上げようとする試みが町民に伝わり愛される町となっている。

おわりに

調査をしてみて入善町は時代の変化によって生まれた様々な課題に果敢に取り組んでおり、やはり活発な町だと感じた。また、人々のつながり、町おこしの大切さについて知ることができた。駅前商店街で話を聞いている際、客が来店し接客している様子を見ることができた。どの店でも買い物の「いらっしゃいませ」「〇〇円です」というような単純なやりとりだけでなく、「今日は寒いね」「最近旦那が入院したんだけれどね」などの踏み込んだ会話をしており距離の近さを感じることができた。仕事での会話であっても自分の生活もさらけ出して会話をしており、仕事と生活が混ざっているように感じた。近年では仕事の人間関係と日常生活の人間関係を分けている人が多いように感じる。実際私も終業後や休日まで職場の人に会いたくない、仕事に侵食されたくないと感じてしまう。昔も今も商店街では店同士で買い物のやりとりがあり、つながりが感じられた。

また、町おこしの大切さを商工会、コスモ 21 の事業によって感じることができた。県外の人達に来てもらうイベント、利用の少ない若年層に来てもらうイベントを多く行うことが町おこしだと考えていたが、今利用している客のニーズを知り、それに合わせることもこれからの町づくりに大切なことであると気付かされた。子供向けのイベント、中学生・高校生向けのイベントは今の商店街に魅力を感じていない世代を取り込むために必要な要素である。しかしそれと共に、今後の商店街・町に残って生活していく世代に向けたイベントを行うことが町全体の活気につながるのだと思う。私の地元ではやる気のある若い人たちが多く、子供向けのイベントを企画し活動している。しかし、私はそれだけでなく入善町のように住民の求めているイベントや情報を理解し、今いる人々も大切にしていきたいと思った。

謝辞

今回の調査に当たって、ご協力いただいたすべての方々に厚くお礼申し上げます。入善町駅前商店街の方々、コスモ 21 の事務局長の金澤正道様をはじめとするコスモ 21 職員の方々には大変お世話になりました。そのほか突然の訪問にも関わらずご協力いただいた方々など、皆様のご厚意により無事調査を終えることが出来ました。この場を借りましてお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

参考文献

入善町商工会設立 60 周年記念誌編集部会編、2020 年『入善町商工会設立 60 周年記念誌』入善町商工会。

参考にしたウェブサイト

入善町商工会青年部　「2020 入善ラーメンまつり」
〈http://www.nyuzen.jp/ramen2020.shtml〉
(2021 年 12 月 6 日閲覧)
入善町公式ホームページ　「第 7 次入善町総合計画」
〈https://www.town.nyuzen.toyama.jp/gyousei/soshiki/kikaku-zaisei〉
(2021 年 12 月 7 日閲覧)
入善町商工会ホームページ
〈https://www.shokoren-toyama.or.jp〉
(2021 年 12 月 7 日閲覧)
入善町観光物産協会
〈https://www.nyuzen-kanko.jp〉
(2021 年 12 月 7 日閲覧)

第 8 章　黒部市老人クラブ連合会の現状

大坪　咲月

はじめに

この章では、黒部市老人クラブ連合会の活動と現在抱えている課題について記述する。

調査のきっかけは、高齢者福祉施設で調理の仕事をしている父の話を聞くうちに高齢者福祉に興味を持ち、それに関連するテーマを探したところ、インターネットで「認知症カフェ」と「老人クラブ」が目に留まった。まず「認知症カフェ」について情報を集めたが、コロナ禍ということもあり開催が中止されているところが多く、思うような調査が行えそうになかった。一方、老人クラブでは日常的な見回りや体操といった活動が見られたこと、また、高齢者が集まって楽しくおしゃべりする会であるという印象を持っていたため、地域のための事業を行っているというギャップに一層興味を引かれ、黒部市にある黒部市老人クラブ連合会をテーマに調査することにした。

1. 老人クラブとは[141]

老人クラブとは地域を基盤とする高齢者の自主的な組織である。組織された目的は大きく 3 つある。1 つ目は仲間作りを通して生きがいと健康をつくり、生活を豊かにする楽しい活動を行うこと。2 つ目は知識や経験を生かし、地域の諸団体と共同しながら地域を豊かにする社会活動に取り組むこと。3 つ目は明るい長寿社会づくりと保険福祉の向上に努めることである。小地域ごとの老人クラブである単位クラブを核とし、市区町村、都道府県、指定都市、全国の各段階に老人クラブ連合会を組織している。

単位クラブは日常で声を掛け合うことや歩いて集まることができる小範囲で組織し、1 つのクラブはおよそ 30 人～100 人である。高齢者の生きがいや健康づくり促進に向けて国や地方自治体から支援を受けているが運営は自主的かつ民主的であり、財源は会員から集めた会費が基本となっている。60 歳以上であれば誰でも参加でき、60 歳未満であっても準会員や協力会員として参加することができる制度を設けているクラブもある。高齢者の福祉に関する原理を明らかにすること、また高齢者の心身の健康保持や生活の安定のために必要な措置を講じ、高齢者の福祉を図ることを目的として昭和 38（1963）年 8 月に施行された老人福祉法において、老人クラブは老人福祉増進のための事業を定めた第 13 条[142]におい

---

[141] 全国老人クラブ連合会ホームページ参照。

[142] 老人福祉の増進のための事業。

第 13 条　地方公共団体は、老人の身心の健康の保持に資するための教養講座、レクリエー

て老人福祉を増進するための事業を行う者として位置づけられている。

表１　都道府県別老人クラブ会員数と加入率の目安

都道府県	クラブ数	会員数	60歳以上人口	加入率		都道府県	クラブ数	会員数	60歳以上人口	加入率
北海道	3,274	134,316	2,007,470	6.7%		滋賀県	1,170	72,772	450,662	16.1%
青森県	1,412	41,815	512,338	8.2%		京都府	1,172	55,602	879,230	6.3%
岩手県	1,633	63,310	493,882	12.8%		大阪府	3,551	231,162	2,845,139	8.1%
宮城県	1,081	38,789	789,606	4.9%		兵庫県	4,202	245,928	1,896,657	13.0%
秋田県	1,530	55,042	435,251	12.6%		奈良県	1,544	81,818	501,473	16.3%
山形県	1,012	39,473	435,780	9.1%		和歌山県	1,533	71,815	370,661	19.4%
福島県	1,566	74,347	715,377	10.4%		鳥取県	702	33,145	215,298	15.4%
茨城県	2,228	95,615	1,031,112	9.3%		島根県	969	44,486	273,368	16.3%
栃木県	1,528	60,816	687,203	8.8%		岡山県	1,965	105,510	679,718	15.5%
群馬県	1,692	104,247	699,537	14.9%		広島県	1,762	85,362	983,727	8.7%
埼玉県	2,891	153,257	2,363,476	6.5%		山口県	1,282	45,481	550,763	8.3%
千葉県	2,578	108,114	2,070,552	5.2%		徳島県	756	34,367	293,547	11.7%
東京都	3,555	263,001	3,839,039	6.9%		香川県	1,238	62,192	362,074	17.2%
神奈川県	1,628	84,975	2,822,561	3.0%		愛媛県	1,427	73,762	531,222	13.9%
新潟県	1,672	81,905	865,952	9.5%		高知県	708	25,762	292,038	8.8%
富山県	**1,880**	**147,290**	**398,474**	**37.0%**		福岡県	2,713	144,371	1,712,602	8.4%
石川県	1,380	100,375	402,236	25.0%		佐賀県	1,068	57,721	301,761	19.1%
福井県	1,019	51,310	282,723	18.1%		長崎県	1,700	86,001	530,840	16.2%
山梨県	1,062	55,090	304,315	18.1%		熊本県	2,278	108,938	665,779	16.4%
長野県	1,587	95,664	781,694	12.2%		大分県	1,442	58,850	449,471	13.1%
岐阜県	2,293	152,919	725,623	21.1%		宮崎県	998	38,387	425,447	9.0%
静岡県	1,591	83,204	1,321,661	6.3%		鹿児島県	1,936	93,641	634,385	14.8%
愛知県	3,888	286,913	2,285,024	12.6%		沖縄県	679	53,954	423,228	12.7%
三重県	1,478	110,428	640,127	17.3%		全国	92,836	4,988,999	43,180,947	11.6%

（全国老人クラブ連合会ホームページの「令和元（2019）年度都道府県・指定都市別老人クラブ数・会員数」と、政府統計「令和２（2020）年国勢調査人口速報集計」を参考に作成）

上の表は、全国老人クラブ連合会ホームページに記載されている「令和元（2019）年度都道府県・指定都市別老人クラブ数・会員数」と、政府統計の「令和２（2020）年度国勢調査人口速報集計」を参考に作成した、都道府県別老人クラブ会員数と加入率の目安を表わして

ションその他広く老人が自主的かつ積極的に参加することができる事業を実施するよう努めなければならない。

2　地方公共団体は、老人福祉を増進することを目的とする事業の振興を図るとともに、老人クラブその他当該事業を行う者に対して、適度な援助をするように努めなければならない。

いる（表 1）。現在の老人クラブの加入率を都道府県別に比較すると、最も高い都道府県は富山県で 37%、最も低い都道府県は神奈川県で 3%と大きく差が開いており、都市部になるほど加入率は下がる傾向がある。その理由として、都市部は老人クラブに代わる民間のスポーツクラブや趣味教室が多くあることや、老人クラブを組織する際の基本となる地域コミュニティが地方に比べて希薄であることなどが考えられる。

2. 老人クラブの歴史[143]

老人クラブの起源は、老人を尊敬し、その高齢を祝うための宴である「尚歯会」や、仏教伝来とともに日本に伝わったとされ信仰や経済、職業上の目的を達成するために結ばれた集団である「講」にまで遡ることができる。その後、明治 6（1873）年に博多高砂会（福岡県福岡市）、明治 40（1965）年に楽寿老人会（京都府亀岡市）、大正 14（1925）年に上田地区老人会（熊本県小国町）が設立され、現在の老人クラブの基礎が築かれた。戦後になると、荒廃した社会において老後の幸せを自らの手で開こうとする人々が、老後に不安を感じている老友や老後の課題に関心を寄せる人々に呼びかけて全国各地で次々に老人クラブを結成していったという。初の老人クラブ数調査が行われた昭和 29（1954）年時点では 112 のクラブが存在していた。

昭和 37（1962）年には全国老人クラブ連合会が設立され、翌年から老人クラブに対する国の助成も開始された。「老人クラブ」という名称は、クラブづくりを広げてきた人たちの間でテキストとして読まれていた英国老人福祉委員会発行の『老人クラブ－新設と経営の手引き』に由来しており、実際には「みどりクラブ」「喜楽会」など、様々な名称や愛称が付けられている。

老人クラブにはメインテーマがあり、現在は「のばそう！健康寿命、担おう！地域づくりを」というテーマが掲げられている。前半部分では、健康寿命をのばして自立した生活や生きがいある生活の実現を目指すとともに、仲間や地域の高齢者と継続的な健康活動に取り組むこと、後半部分では、他世代や関係団体と連携して安全・安心の住みよい地域づくりを目指し、元気高齢者の知識や経験・活力を生かす機会づくりを広げることを表わしている。現在のメインテーマは平成 26（2014 年）から採用されており、それ以前も何度か更新されてきた。

3. 全国三大運動[144]

老人クラブは発足当時から「健康」「友愛」「奉仕」の活動に取り組んでいる。昭和 55（1980）

---

[143] 全国老人クラブ連合会ホームページ参照。

[144] 全国老人クラブ連合会ホームページ参照。

年、老人クラブで初となる全国運動「病にかからぬ運動」が開始し、昭和 59（1984）年に第 1 次「健康をすすめる運動」へと改称された。同年、神奈川県横浜市川崎市老人クラブ連合会が 9 月 20 日を敬老の日に対して感謝する「社会奉仕の日」と設定して一斉奉仕活動を実施すると、翌 60（1985）年には全国 10 数県へと広がった。昭和 61（1986）年、「健康をすすめる運動」に友愛活動と一斉奉仕活動を加え、現在の「健康・友愛・奉仕『全国三大運動』」が開始された。

次の表は、全国三大運動の推進要綱に基づいた活動内容の一覧（表 2）である。

表 2　全国三大運動の活動内容

健康活動	友愛活動	奉仕活動
・日頃の健康管理、正しい生活習慣の学習・実践 ・いきいきクラブ体操、健康ウォーキング、シニアスポーツの実施 ・趣味・サークル活動の拡充、おしゃべり会、食事会の開催 ・家庭内外での転倒しない環境づくり、ヒヤリ地図の作成 ・健康診断・歯（口腔）の定期検診の受診促進、体力測定会の開催 ・高齢者医療や介護保険など制度・施策の学習	・サロン、ふれあい喫茶など関係機関と連携した集いの場づくり ・電球交換、ゴミ出し、買い物等、日常生活の困りごと支援 ・クラブや町内情報、福祉・防犯・災害・避難などの情報の伝達・提供 ・ひとり暮らしや高齢者世帯への安否確認・声掛け・友愛訪問・話し相手・行事等への参加呼び掛け ・認知症への正しい理解、権利擁護などの学習活動	・全国一斉「社会奉仕の日」（9 月 20 日）の取り組み ・公共施設や道路の清掃・美化・緑化・花づくり、資源回収・リサイクル活動 ・高齢者施設におけるボランティア ・伝承や他世代交流地域、子どもの見守りパトロール活動 ・高齢者や地域から期待される活動への支援

4. 富山県老人クラブ連合会[145]

富山県老人クラブ連合会は昭和 34（1959）年に設立された。老人クラブでは会員の話し合いによって地域ごとに多種多様な活動を行っているが、これらを分類すると「生活を豊かにする楽しい活動」と「地域を豊かにする社会活動」に大別される。「生活を豊かにする楽しい活動」では、シニアスポーツの普及や体力測定、ウォーキングや健康学習などの「健康づくり活動」と、趣味・文化・芸能などのサークル活動や旅行、学習講座などの「仲間づく

[145] 富山県老人クラブ連合会ホームページ参照。

り活動」が行われる。「地域を豊かにする活動」では、一人暮らしや病弱、寝たきりの状態にある高齢者を支援する「友愛活動」、地域の文化や伝統芸能の伝承、子どもや青壮年との交流といった「世代交流活動」、ボランティアや子どもの登下校を見守る「奉仕活動」が行われる。

次の表は、富山県の市町村別老人クラブ加入率の目安を表している（表 3）。これによると、最も加入率が高いのは南砺市の 73.5%であり、富山県の中でも群を抜いて高い加入率となっている。加入率が最も低いのは舟橋村の 16.8%であり、南砺市と大きな差があることが分かる。都道府県別に老人クラブ加入率を比較したときと同様、富山県内でも比較的経済活動の盛んな市町村では加入率が低くなっており、富山市を中心としてその周辺に行くほど加入率が低くなる傾向も見られる。黒部市老人クラブの加入率は 30%であり、富山県の中では平均に近い。

表 3　富山県老人クラブの加入率の目安

市町村名	クラブ数	会員数	60歳以上人口	加入率
富山市	565	41,378	146,842	28.2%
高岡市	345	22,055	66,344	33.2%
魚津市	66	4,069	16,361	24.9%
氷見市	78	8,454	20,898	40.5%
滑川市	58	4,534	11,710	38.7%
黒部市	**93**	**4,617**	**15,368**	**30.0%**
砺波市	84	11,291	17,176	65.7%
小矢部市	33	6,109	12,713	48.1%
南砺市	201	16,411	22,322	73.5%
射水市	152	12,062	33,172	36.4%
舟橋村	2	123	731	16.8%
上市町	29	1,551	8,539	18.2%
立山町	51	2,889	10,112	28.6%
入善町	44	3,858	10,350	37.3%
朝日町	26	2,090	5,836	35.8%
全体	1,827	141,491	398,474	35.5%

（富山県老人クラブ連合会ホームページの「令和 3（2021）年度クラブ数・会員数一覧」と、政府統計「令和 3（2021）年 1 月 1 日住民基本台帳年齢階級別人口（市区町村別）」を参考に作成）

5. 黒部市老人クラブ連合会

黒部市老人クラブ連合会は平成 18（2006）年、旧黒部市と旧宇奈月町の合併に伴い旧黒部市老人クラブ連合会と旧宇奈月町老人クラブ連合会が合併して誕生した。どちらのクラブにも事務局がなかったため、合併以前の運営の様子は詳しく分からないそうだ。黒部市の 16 地区のうち、田家を除く 15 の地区老人クラブから構成されている。現在は 93 単位クラブがあり、1 つの単位クラブに 40 人程度が加入している。単位クラブの区切りと町内会の区切りは必ずしも同じではなく、例として愛本には町内会が 4 つあるが単位クラブは 6 つある。その理由は、旧黒部市老人クラブ連合会と旧宇奈月町老人クラブ連合会が合併した後、単位クラブは 50 人（現在は 30 人）単位でいくつでも作ることができるようになったが、人数の多かった単位クラブは町内会の区切りに沿ってではなく、人数が平等になるように 2 つや 3 つに分けたためである。単位クラブはそれぞれ市から 51,000 円の補助金をもらうことができるため、1 つの単位クラブに大勢が所属するよりも、基準の人数を確保した上でたくさんの単位クラブを作る方が潤沢な予算での運営が可能になる。ただし、うまく分けられないため大人数のままでいる単位クラブもある。

会費は 1 人 200 円／年、そのうち 180 円は黒部市老人クラブ連合会、20 円は富山県老人クラブ連合会の予算となる。会費の他に、93 単位クラブから出される 6,500 円ずつの負担金のうち、3,000 円が黒部市老人クラブ連合会、3,500 円が富山県老人クラブ連合会の予算となり、それに加えて市からの補助金や事業委託費なども財源となっている。

5-1. 黒部市老人クラブの事業

黒部市老人クラブ連合会の事業について、事務局長の立野作治さんからお話を伺った。以下では事業の一部として順に、スポーツ大会、高齢者バス教室、カローリング、パークゴルフを取り上げる。

5-1-1. スポーツ大会

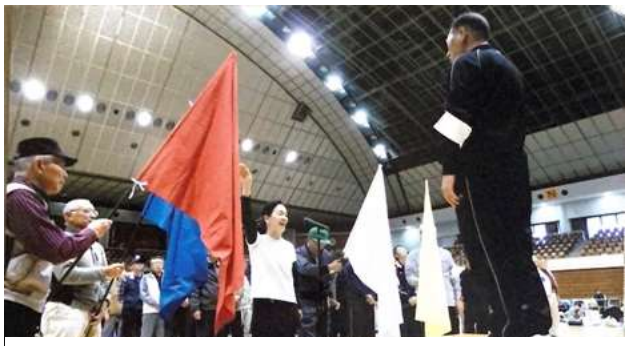


写真 1　開会式の様子（立野さん提供）

スポーツ大会は、赤組・白組・黄組・青組の 4 つに分かれて競技を行う行事である。かつては、桜井中学校・宇奈月中学校・高志野中学校・鷹施中学校[146]の 4 つの出身中学校ごとに組分けがなされていたが、現在は黒部市内の 15 地区を 2～4 つごと、地区の老人クラブ加入者数の合計が各組でおよそ同じになる

[146] いずれも令和 2（2020）年に閉校し、桜井中学校と宇奈月中学校は新設名峰中学校へ、高

ように組分けされている。各組の出場者数も同じであるが、各地区からの参加者数は同じ組内での老人クラブ加入者数比によって決定される。例えば、1 組 210 人ずつでスポーツ大会を行う場合、赤組である三日市・荻生・若栗・前沢の 4 地区の加入者数比が 3：2：1：1 であるとき、三日市から 90 人、荻生から 60 人、若栗から 30 人、前沢から 30 人が参加することになる。誰が参加するかを決める方法は地区によって異なるそうで、愛本では組から割り振られた人数をさらに 4 つの単位クラブの加入者数比で分け、単位クラブ内で参加したい人を優先しつつ足りなかったら役員が埋めるという形をとっている。誰がどの競技に出場するかを決める方法も地域で異なるが、やりたい競技に出場するのではなく保健体育部の委員によって割り振られる地域が多い。男女ペアで行う競技もあるため組の中での男女比は同じにするのが理想であるがなかなか難しく、同じ人がいくつかの競技に出ることもあるという。

令和元（2019）年 10 月 25 日に行われたスポーツ大会は 1 組 210 人、合わせて約 840 人が参加し、ボーリング、玉入れなどお馴染みの競技から「100 点満点」、「共同作戦」といった珍しい競技も行われた。「100 点満点」では、まずスタート地点から 4m進み、後ろ向きにサイコロを振って出た目の数を得点とする。得点が合計で 100 点になるまでチーム内で順番に繰り返す競技である。100 点に到達した時点で競技は終了し、2 位以降の順位は終了した時点の得点によって決まる。

写真 2　令和元（2019）年に行われた競技とその結果（立野さん提供）

100 点になるのにはかなり時間がかかるのだという。「ナイスキャッチ」とは、まず男女ペアで 9m進み、男性のみが 3m先に進んでバケツを構え、そのバケツに目掛けて女性がボールを投げ入れるという競技であり、男女が同時に進む 9mの間はペアで手を繋ぐというルールがある。「共同作戦」とは、バトンを持ちながら男女ペアで大きなボールを転がし、2 カ所の中継点をジグザグに通って行うリレーである。ペア同士の呼吸が合わないと勝負に大きく影響する競技であるため、この種目が 1 番盛り上がるのだという。そして、「最後の勝負」では、スタート地点から 20m先にいる代表者のところまで走っていってジャンケンをし、勝ったらお手玉を持って元の場所に戻る。最初にお手玉を 10 個持って帰ったチームの勝利となる。いずれも聞き馴染みのない競技であるがペアで協力して行うものが多く、スポーツ大会が高齢者同士の親睦を深める場となっていることが窺える。

志野中学校と鷹施中学校は新設清明中学校へ統合した。

朝 9 時頃開始されたスポーツ大会は夕方まで行われ、会場である黒部市総合体育センターの周辺地域からは出場者以外で見学に来る方もいらっしゃったそうだ。

令和 2（2020）年度は新型コロナウイルス感染症の影響で中止を余儀なくされた。令和 3（2021）年度はコロナ禍であることに配慮したプログラムが組まれた。参加人数を 840 人から 480 人に減らして密集を避けることや、9 つあった種目のうち、比較的競技時間の長い「100 点満点」「玉入れ」「最後の勝負」を除いた 6 つにすることで時間を短縮し、大人数が同じ場所で昼食を取ることを避けること等の対策を講じながら開催する計画であったが、感染状況の悪化により結局は中止となった。

黒部市老人クラブは合併当時より朝に開始して夕方に終わるというスポーツ大会を行ってきたが、最近、一日中かかるスポーツ大会を行っていたのは富山県の中でも黒部市と魚津市と上市町だけであり、他の市はお昼過ぎから夕方にかけて行っていたことが判明した。朝に開始するには前日から準備を行うが、前日に行える作業は体育館の床に目印のテープを貼ることくらいであり、当日の朝早くから開始時刻までの限られた時間で道具の搬入等を行う必要がある。お昼に開始すれば前日から準備する必要はなく、当日の準備にも余裕ができて負担が軽くなるため、令和 4（2022）年度は感染状況が落ち着いていたとしてもお昼から開催する方向で検討しているという。

5-1-2. 高齢者バス教室

高齢者バス教室は、バスに乗って美術館や寺院といった施設を訪れる研修である。過去に訪れた場所には福井県の永平寺や金沢市の兼六園、富山市の富山県美術館などがあり、新しくできた施設や催し物がある場所、博覧会やサーカスなどに合わせて場所や日程を決定している。富山県美術館は平成 29（2017）年に全面開館し、せっかく美術館ができたのだからとその年にバス教室で訪れたが、できたばかりで何も展示されておらず屋上まで上って帰ったのだという。美術館を訪れたのに美術品でなく建物自体を見に行ったようなものだったというユニークなエピソードを聞かせていただいた。

バス代は黒部市老人クラブ連合会の予算から出され、施設の見学料や食事代等は個人で負担する。合併当時は 3 台のバスを使って 120 人ほどで行っていたが、5，6 年するとバス代が値上がりしたため補助金では賄えなくなり、その後令和元（2019）年度までは 2 台のバスを使って 90 人ほどで行っていた。令和 2（2020）年度は新型コロナウイルスの影響で中止になり、令和 3（2021）年度は人数を 50 人に減らし、同年に修復を終えたばかりである高岡市の勝興寺を訪れる計画が立てられていたが、令和 2（2020）年度と同様に新型コロナウイルスの影響で中止になった。

5-1-3. カローリング、パークゴルフ

カローリングは、氷上で行うカーリングを室内でも楽しめるようにと開発されたスポーツである。1 チーム 3 人で行い、ストーンの代わりに 6 つのジェットローラを用いる。ジェ

ットローラをチームで交互に直径 90㎝のポイントゾーンへと走行させて得点を競うゲームで、黒部市老人クラブではスポーツセンターや体育館、公民館で楽しまれている。子どもから高齢者まで年齢や性別、体力に関係なくできるスポーツであることから内山では高齢者と小学生との交流の機会にもなっており、浦山では毎週水曜日に練習をするなど活発に行われている。富山県老人クラブ連合会の大会も開かれていたが令和３（2021）年度は中止になり、代わりとして 11 月 9 日には呉東のみの大会が滑川市で開催された。

パークゴルフは、専用のクラブ、ボール、ボールを載せる台であるティーがあれば誰でも楽しむことのできるスポーツで、クラブでボールを打ち、カップインするまでの打数を競い合う。基本的なルールは通常のゴルフと同様である。黒部市老人クラブで行われるパークゴルフ大会は会員同士のふれあいや練習の成果を出す機会のほかに新規会員を増やす目的でも行われ、120 人ほどの参加者は様々な地区の人が同じチームになるように 4 人ずつに分けられる。新規会員向けにチラシを出して宣伝をするが、パークゴルフがきっかけで加入する人は少ない。

5-2. 部会活動・委員会

黒部市老人クラブ連合会には 5 つの部会と 2 つの委員会がある。

1 つ目の部会は総務運営部である。単位クラブの指導や育成・強化に関することや、黒部市老人クラブ連合会の事業の企画や運営、他団体との連携、老人クラブ会員以外の参加促進などのために活動を行っている。2 つ目は教養文化部である。老人クラブ会員の教養文化向上を目指し、囲碁や将棋といった趣味教養講座の開催や、『くろべ』の編集・発行、老人クラブの作品展開催といった活動を行っている。『くろべ』とは老人クラブ会員が詠んだ短歌や執筆した文章が掲載されるお便りで、年度に 2 回、7 月と翌年 2 月に発行される。3 つ目は保健体育部である。保健体育部はカローリングやパークゴルフといった高齢者スポーツやスポーツ大会の企画・実施に関わる活動を行っている。4 つ目は女性部である。女性部は高齢者の厚生福祉に関わっており、高齢者の栄養指導や健康チェック、転倒予防教室などを開催している。最後はさわやかクラブである。若手の老人クラブ未加入者向けのパークゴルフ大会や若手リーダーの育成に関する活動を行っている。さわやかクラブは 73 才委員会とも呼ばれ、部員は 73 才でなければならないが、なぜ 73 才なのかは不明である。

次に委員会である。1 つ目の委員会は高齢者交通委員会である。高齢者の事故防止対策を推進する委員会であり、反射材の配布や交通安全教室の開催、パトロールなどを行っている。以前は黒部市内で事故が起こった場所をバスで見て回るということを 3 月に行っていたが、3 月が忙しい時期であることやコロナの影響によってここ 5 年ほどは行われていない。2 つ目の委員会は高齢者訪問支援活動推進委員会である。活動内容については次の節で記述する。

6. 高齢者訪問支援活動

以下では、黒部市老人クラブ連合会の事業の 1 つである高齢者訪問支援活動について述べる。

6-1. 高齢者訪問支援活動とは

高齢者訪問支援活動とは、全国老人クラブ連合会の全国三大運動のうち「奉仕」に属する活動であり、一人暮らしの高齢者に声をかけ元気に暮らしているかを地域全体で見守る活動である。黒部市では、住民が地域社会から孤立することを防止し異変を早期発見することを目的とした事業「くろべネット」とも通じている。「くろべネット」では高齢者のほかに障がいのある方や介護・子育てに悩んでいる方、健康や生活に不安のある方なども対象としているが、老人クラブでは一人暮らしの高齢者を対象として活動を行っている。

黒部市老人クラブでは令和 3（2021）年度時点で男性 21 人女性 46 人が訪問支援員として活動しており、70 代の方が最も多い。訪問支援員は自分の家から近い場所や買い物のついでに寄ることができる場所等、見守りが可能な範囲の中で対象者を決めて見守りを行う。訪問支援員 1 人が抱える対象者の数は人によって異なり、1 人の方もいれば 10 人近くの方もいる。買い物の代行や雪かきの手伝いまで行うことが理想であるが、訪問支援員も高齢であるため重労働は体力的に難しく、また、支援される一人暮らしの高齢者の中には家に訪問されることを嫌がる人もいるそうで、理想とされるような活動までは行われていないのが現状である。実際は散歩している姿を遠目から見ることや、仲の良い人から間接的に話を伺うことによって様子を確認しているという。

6-2. 実際の見守りの様子

ここでは、愛本で訪問支援員として活動する K さんから伺ったお話を紹介する。

Kさんが訪問支援員をやることになったきっかけは、地域で回している役員が回ってきた際に、いくつかある役の中からたまたま訪問支援員が当たったため活動を行っている。初めは何をするのか分からなかったが、前任者に話を聞いたり県で開かれる講習会に出席したりして徐々にやり方を理解していったという。普段は、地区の中で日頃の生活を見ることができる方や近所に住んでいて顔を合わせる方の中から一人暮らしをしている方の名前を対象者として挙げ、見守りを行っている。わざわざお宅に訪問するのではなく、対象の方が散歩や草むしりをする姿を見かけたり、お宅を通りがかったときに電気がついているのを確認したりして安否を確認する。Kさんはこのような距離感を「近からず遠からずの関係」と表わしており、老人クラブの訪問支援は対象者の生活にそこまで深く入り込むことはしないという。訪問支援員を煙たがる方もいるそうだが、Kさんはそのようなことを感じたことはないそうだ。むしろ、散歩しながら世間話をするというような交流があったときは喜んだり楽しんだりしてもらえるという。訪問支援の活動だから声をかけるというよりは顔見

知りだから声をかけるのであり、対象者の中にはＫさんが老人クラブの訪問支援員であることを知らない人もいるのではないかと語った。

高齢者訪問支援で行われている一人暮らしの高齢者を見守るという活動は、老人クラブだけでなく民生委員会や社会福祉協議会でも行われている。民生委員会は高齢者に限らずひとり親家庭や障がいを持つ方がいる家庭なども対象に、社会福祉協議会は 75 歳以上の一人暮らしの方を対象に支援を行っており、老人クラブも含めこれらの組織が同じ人を違う視点から見守っている。Ｋさんは民生委員としても仕事をしているが民生委員会と社会福祉協議会には守秘義務があり、訪問支援に関して異なる組織の支援員同士では対象者の個人的な情報は共有できない。そこで、「あの人ゴミ出し間違えてるよ。」「あの人認知入ってるんじゃない？」といった、日常生活を見守る上で気付いたことを共有し支援に役立てている。また、一人暮らしの高齢者同士が繋がって互いに安否確認をしたり、新聞や牛乳の配達員が異変に気付いたりといったこともある。老人クラブの訪問支援は積極的な支援ではないが、地域全体で行われている高齢者支援に組み込まれて一定の機能を果たしている。

7. 地区ごとの活動

以下では黒部市内の 15 地区のうち、愛本と内山の事業について取り上げる。

7-1. 愛本地区老人クラブ

愛本地区老人クラブは昭和 30（1955）年前後に設立され、愛本新第 1・第 2、明日（あけび）オールド第 1・第 2、中ノ口の 5 つの単位クラブで構成されている。明日の「オールド」は「SUNTORY OLD　WHISKY」のオールドからとったそうで、単位クラブの名称の自由さが窺える。

写真 3　巣箱作りの様子
（立野さん提供）

愛本地区老人クラブでは、世代交流活動や文化伝承活動の一環として巣箱作りが行われている。農薬がなかった頃、田んぼの苗につく虫を食べてくれる小鳥は農家にとってありがたい存在だったため、恩恵を受けたお礼の意味も込めて小鳥のために巣箱を作るようになり、今年で 93 年目と歴史のある行事である。元々は小学校で行われていた行事であったが、平成 18（2006）年に宇奈月小学校・下立小学校・浦山小学校・愛本小学校が併合して現在の宇奈月小学校が設立されたときから公民館で行われるようになった。5、6 年ほど前から青少年育成会議、公民館、振興会、そして老人クラブが合同で開催するようになり、それまでは大工に用意してもらった板とのこぎりを用いて作っていたが、現在はインターネットで取り寄せたキットを使って釘を打つだけで出来上がる。3 月中旬になると小学生が 15 人ほどとその保護者、老人クラブ会員が公

民館に集まって巣箱作りを行い、作った巣箱は 4 月下旬に林の中へ掛けに行く。巣箱には直径 25～30ｍｍの穴が開いており、種類は不明であるが小さな鳥が入るのだという。

また、合併 10 年ほどは竹馬作りや竹とんぼ作りが行われていた。竹馬は毎年 20 脚ほど作られ、運動場を歩いて遊んだ。まだ竹馬で遊ぶには危険な小さい子どもは竹とんぼを作って遊んだ。竹馬作りや竹とんぼ作りも高齢者と子どもとの交流の場になっていたが、作り方を教えられる人がいなくなってしまったため廃れていった。

7-2. 内山老人会

内山老人会は昭和 40（1965）年に設立された。会費はとっておらず、日帰り研修や総会（後述）の際に参加者からお金を集めている。第一老人クラブ～第四老人クラブの 4 つの単位クラブで構成されている。令和 2（2020）年度はコロナ禍でほとんど何も活動ができなかったため、令和元（2019）年度の活動を元に内山老人会の事業を取り上げる。

老人クラブだけで行っている活動は少なく、内山自治振興会や公民館と共催しているものが多い。毎年 6 月には日帰り研修というものが行われる。これは黒部市老人クラブ連合会のバス教室と内容は同じであり、令和元（2019）年度は高岡・新湊方面へ研修に行ったが、令和 2（2020）年度はコロナの影響で中止になった。10 月に行われる内山公民館祭りは、歌や踊りを披露したり写真や絵画などの作品を展示したりと普段サークルや趣味で活動していることを発表する場にもなっており、盛り上がる行事[147]だという。3 月には総会が行われる。総会とはお楽しみ会のようなもので、ビンゴ大会やゲームを行い、30 名ほどが参加する行事である。商品を用意しているため、普段は活動にあまり参加しない人も来てくれるという。普段から活動に参加するのはほとんどが役員で、役員以外の人を集めることは特に行っていない。

8. 黒部市老人クラブが抱える課題

8-1. 加入の様子

老人クラブへの勧誘方法は地区によって異なる。下立では、高齢者訪問支援活動と同じ要領で 60 歳になった人の家を訪ねて直接勧誘を行う。愛本では、60 歳になった人へ老人クラブ加入の案内を持って行くついでに会費を払ってもらい、会費を払った人を加入したと見なすという方法をとっている。地域の中で誰が 60 歳になったか知る方法について、男性は 61 歳の本厄を神社でお祓いする際に分かり、女性はそういった指標がないため周りの人から聞くなどして知り、60 歳になった人のもとへ勧誘に行く。一度断られてもまた次の年に勧誘に行くが、3、4 回断られた人のところへは行かなくなるという。

下記の図 1 は黒部市の地区の位置を、表 4 は、「統計黒部令和 2（2020）年版の年齢別地

---

[147] 詳しくは第 3 章参照。

区人口」と、立野さんから頂いた「地区別単位クラブ数・クラブ会員数」を参考に作成した 15 地区ごとの老人クラブ加入率の目安を示すものである。以下では、この表を元に黒部市老人クラブへの加入の様子について述べる。

表４　地区別老人クラブ加入率の目安

地区	性別	60歳以上人口	男女計	クラブ会員数	クラブ会員計	クラブ加入率	加入率(全体)
生地	男	685	1,597	167	447	24.4%	28.0%
	女	912		280		30.7%	
石田	男	877	2,011	208	484	23.7%	24.1%
	女	1,134		276		24.3%	
村椿	男	499	1,130	147	324	29.5%	28.7%
	女	631		177		28.1%	
大布施	男	720	1,617	159	327	22.1%	20.2%
	女	897		168		18.7%	
三日市	男	854	1,966	168	423	19.7%	21.5%
	女	1,112		255		22.9%	
前沢	男	346	757	72	121	20.8%	16.0%
	女	411		49		11.9%	
荻生	男	556	1,306	131	285	23.6%	21.8%
	女	750		154		20.5%	
若栗	男	330	793	128	278	38.8%	35.1%
	女	463		150		32.4%	
東布施	男	207	477	115	285	55.6%	59.7%
	女	270		170		63.0%	
宇奈月	男	81	197	30	71	37.0%	36.0%
	女	116		41		35.3%	
内山	男	111	277	75	167	67.6%	60.3%
	女	166		92		55.4%	
音沢	男	46	116	16	44	34.8%	37.9%
	女	70		28		40.0%	
愛本	男	164	386	130	311	79.3%	80.6%
	女	222		181		81.5%	
下立	男	247	585	179	417	72.5%	71.3%
	女	338		238		70.4%	
浦山	男	337	793	153	374	45.4%	47.2%
	女	456		221		48.5%	
全地区	男	6,457	14,982	1,878	4,358	29.1%	29.1%
	女	8,525		2,480		29.1%	

｛統計黒部令和 2（2020）年版の年齢別地区人口と、立野さんからいただいた「地区別単位クラブ数・クラブ会員数」を元に作成｝

普段の活動に参加するのは女性ばかりだそうで、会員数も全ての地域で女性の方が多く、黒部市老人クラブ全体で見ると男性が 1,878 人、女性が 2,480 人と女性が男性を大きく上回っている。しかし、表 4 によると 15 地区のうち 8 地区の加入率では男性の方が女性より高く、全体では男女に差がないことがわかる。かつて老人クラブは男性が入るものと思われていたそうで、老人クラブへの参加は女性より男性の方が早かった。女性は婦人会に参加し活動を行っていたが、婦人会がなくなってしまう地区が増え、次第に女性も老人クラブに加入するようになったという。現在加入率では男女に差がないものの、実際に活動に参加するのは女性ばかりである。これは、女性の方が若い頃から近所付き合いや行事への参加などによって地域と積極的に関わっており、歳をとってからも老人クラブのような地域の集まりに参加しやすいからであると考えられる。老人クラブの活動への参加だけでなく、地域で料理教室や趣味サークルが開かれたときにも女性の集まりは良いのだという。

図 1　黒部市の地区

次に、地区ごとの加入率を比べると、海側である旧黒部市の地区と山側である旧宇奈月町の地区で大きく差があることが分かる。海側の黒部市の中でも経済活動の盛んな地区では歳をとるまで会社に勤めることが当たり前になっていることや 1 人でも楽しむことができる娯楽がたくさんあることなどから、75 歳になっても老人クラブに加入しない人が多い。一方、山側の地区は地域の人と集まって楽しむことが多く、老人クラブにも加入することが当たり前だという考えを持った人が多い。立野さんによると旧黒部市は合併前から加入率が低かったそうで、そこには高齢者に対する意識の違いがあるのかもしれないという。地域には、一定の歳を超えた高齢者が集まってお酒を飲んだり食事をしたりして楽しい時間を過ごす敬老会というものがある。合併当時、旧宇奈月町の敬老会への参加年齢が 65 歳であったのに対して旧黒部市は 75 歳であり、10 歳差があった。このことから、旧宇奈月町の地区の人は旧黒部市の地区の人に比べ、早い段階から高齢者であるという意識を持ち始めることが考えられる。老人クラブに加入しない理由の 1 つに「まだ老人ではないから」ということがあるようで、この意識が老人クラブの加入率にも影響を与えているのだろう。

8-2. 人数の減少

60 歳を過ぎても老人クラブに加入しない人、また加入していても活動に参加しない人がいる。そこには、仕事をしているから、まだ老人ではないから、地域の人と交わることが嫌

だから、集団にならなくても 1 人で過ごすことができるから、など様々な理由がある。以下では、黒部市老人クラブが直面している課題の 1 つである参加人数の減少について取り上げる。

黒部市老人クラブは合併当時 107 単位クラブおよそ 7000 人が参加していた。しかし、亡くなる方も多く、また近年は 70 歳まで働く流れによって新しい人がなかなか入らなくなったため、現在は 93 単位クラブおよそ 4300 人にまで減っている。単位クラブの減少は人数の減少に大きく影響する。以前は 1 つの単位クラブに人数が 50 人を切ると単位クラブとして認められなかったが、現在は人数が減って 50 人を維持することは困難になり、単位クラブの基準も 50 人以上から 30 人以上に変更された。30 人を切り、例えば 28 人になったとしても他の単位クラブから 2 人移動して 30 人を確保することは認められている。しかし、他の地域の人が自分の地域に参加することを嫌がる人もいるそうで、最終的に人数が確保できず解散に陥ってしまう。単位クラブが解散するとそこに加入していた人たちは一斉に黒部市老人クラブから抜けてしまうため、全体で見ると一度に人数が減ることになる。これまで、およそ生地 4 つ、浦山 1 つ、前沢・三日市・荻生・石田 2 つずつの単位クラブが解散した。これらの地域は老人クラブへの加入率も低いことから、老人クラブに加入しようとしてもその地域に単位クラブがすでになく、それによって老人クラブに加入することが当たり前ではなくなった地域であることが窺える。

解散によって人数が減った例は他にもある。田家には現在 1 つも単位クラブがなく、黒部市老人クラブを構成する地区の中にも入っていないが、かつては 7 つの単位クラブが存在した。その当時、田家地区の老人クラブの会長に若い方が就任し、2 年の任期を終えて次の人に交代しようとしたが、周囲の人はさらに何年か続けて務めることを望んでいた。しかし会長としてうまく回せなかったそうで続けることが難しく、また次の人を探すのも困難だった。まず、うまく回せなかったことを考えて再び若い人にはお願いできず、また年が上の人はすでに役員をやったことがあったため嫌だと断られたという。そのため、次に会長になる人が結局見つからず、会議で話し合った結果、平成 26（2014）年に田家地区の老人クラブごと解散した。その際 7 つあった単位クラブも同時に解散し、現在田家には単位クラブが 1 つもないという状況になっている。

さらに、近年は 70 歳まで働く人が増えてきている。働いているうちは忙しく、老人クラブに参加することができない・しないという考えの人は昔もいたそうだが、より長く働くようになったことによって老人クラブへの加入も後ろへと延び、新しく入る人が大幅に減り、人数は減る一方なのだという。

8-3. 老人クラブの役員

令和 3（2021）年度黒部市老人クラブ連合会の役員は、会長、副会長 4 人、理事 29 人、監事 2 人、常任諮問員、会計、事務局長で構成されている。理事は 15 地区から 1～3 人ずつ出され、そのうちの 1 人は地区会長である。さらに黒部市老人クラブには委員会があるが、

黒部市老人クラブ連合会の役員や委員は地区の役員から出されている。以下では、なり手不足が課題となっている地区老人クラブの役員について述べる。

8-3-1. 地区の役員と回し方

立野作治さんは合併当時から黒部市老人クラブ連合会の事務局長を務めている。当時、60歳以上でパソコンを扱うことができる人は数少なかったそうで、パソコンを扱うことができた立野さんは事務局長をやってくれないかと毎日のように頼みに来られ、それを承諾したという。現在82歳｛令和3（2021）年時点｝の立野さんはちょうど60歳になったくらいの時期に老人クラブに加入し、平成 18（2006）年から現在まで黒部市老人クラブ連合会の事務局長を務めている。他にも、平成14（2002）年から令和元（2019）年まで愛本地区老人クラブの会長を、平成10（1998）年から現在まで明日（あけび）オールドクラブの会長を務めている。明日オールドクラブは第1・第2のクラブがあり、役員は明日上区1〜5班、明日中区1〜5班、明日下区1〜5班あるそれぞれの班から1人ずつ出て、地区の会長や会計、訪問支援や交通安全などの黒部市老人クラブ連合会の委員として活動する。持ち回りの形をとっており、単位クラブの中で順番に役員を回している。

愛本で高齢者訪問支援員として活動するKさんは、60歳になってからも2〜3年は黒部市老人クラブに加入していなかったが、夫に役員が回ってきたことをきっかけに加入することを決めた。愛本新3区は4班に分かれており、1班5〜6軒で役員を回さなければならないため入らないわけにはいかなかったという。役員の中でも高齢者訪問支援員を務めているが、選んだわけではなくたまたま高齢者訪問支援が当たったそうだ。愛本新老人クラブも明日オールドクラブと同じく持ち回りの形をとっている。単位クラブの役員の中から愛本新老人クラブの役員を決める際にも、例えば、「今年度、会長は1区」「会計は2区」というように順番に回している。

内山老人会の会長を務める山本秀治さんは 65 歳になったときに老人クラブに加入した。会長を務めて令和2（2020）年度で5年目になり、内山老人会会長の前には内山振興会会長を務めていた。山本さんの前任の方は公民館長を務めたのちに老人会会長に就任しており、山本さんは振興会会長を辞める際に前任の方から「振興会会長を辞めたら次は老人会の会長だよ」と言われ、嫌だとも言えず老人会会長に就任することになったという。

内山老人会には第一老人クラブ〜第四老人クラブの 4 つの単位クラブがあり、それぞれに会長、副会長、役員合わせて3〜4人ずつの役員がいる。計15人の中から10人が黒部市老人クラブ連合会の委員として訪問支援員や交通安全委員などを担う。愛本のような持ち回りの形はとっていない。なるべく長く継続できそうな人が役員になるようにと各単位クラブにお願いをし、役員になった本人にも身体の不調がない限り続けて欲しいと伝えるという。

8-3-2. 役員のなり手がいない

役員のなり手がいないことは老人クラブにとって大きな課題になっている。この課題は最近になって出てきた話であるが、以前と比べて役員の仕事の負担が大きくなったわけではない。単位クラブや地区の役員としての仕事はほとんどないため、名前だけの役員もいるのだという。ところが、地区の役員になると黒部市老人クラブ連合会の役員や委員もやらなくてはならないため、率先してやりたがる人はいないという。また、公民館事業や盆踊りなど老人クラブ以外の行事をまとめたり手伝ったりすることを求められる場合もある。地区の役員自体は大変なことではないが、役員になったことによってやらなければならないことが増えるため大きな負担になり、みんなやりたがらず押しつけ合う形になっている。役員のなり手確保に困り始めたのには仕事が大変だということの他に、新しく若い人が入ってこなくなったことが関係している。役員の任期は通常２年であり、次の人が見つからずに再任することもしばしばあるが、一度役員をやって次の人に回してしまえば 2 回目をやる人はほとんどいない。そこで、持ち回りの場合、老人クラブに入ったばかりの人に役員が当てられるが、最近では新しい人が入ってこなくなったため次に回せる人がより見つかりづらくなってしまった。入ってすぐ役員に当たるのが嫌だということは新しい人が老人クラブに加入しない理由の１つにもなっている。

次の人が見つからないことに対して、明日オールドクラブではなるべくゆっくりと役員を回していけるようにと役員を２期ずつ（4 年）にする工夫を行っている。内山老人会では、持ち回りにするとすぐに役員が当たってしまい嫌がられるため、新しく入った人にすぐ当てるのではなく様々な活動に参加してもらってから役員を当てるようにしている。さらに、持ち回りの形をとっていると、高齢だから・女性だから・身体が悪いからなどの理由で人を飛ばした際、次に当たった人から反発されるという。「あなたがだめだったら次の人にお願いする」という姿勢ではなく、「あなたしかいない」でないと受けてもらえないため、持ち回りをやめ、なるべく長く務められる人にお願いするようになったのだという。このように、役員のなり手がいない課題に対して地区によって様々な対策がとられている。

9. まとめと考察

これまで黒部市老人クラブ連合会の活動と現状について記述してきた。今回、コロナ禍ということもあり黒部市老人クラブの皆さんが実際に活動している様子を調査できず、行事などは過去の活動を参考にすることしかできなかったのがとても残念である。

老人クラブは高齢化社会において行政や地域からその活躍が期待され、様々な活動を通して社会に貢献している。しかしその加入者は全国的に減少傾向にあり、黒部市老人クラブ連合会も例外ではない。それは、老人クラブに加入する 60 歳という年齢は今日において現役の労働者として活躍している人が多いこと、またインターネットの普及によって老人クラブを介さなくても趣味サークル活動や教養講座の情報を得ることができるようになったことなどが考えられる。「老人クラブ」というネーミングにより、現役で活躍する人は自身

のことをまだ老人ではないと捉えていれば老人クラブに加入する気にはならないだろう。老人クラブの加入者数減少には高齢化社会における働き方や、人付き合いの仕方の変化などが表れている。そして、黒部市老人クラブ連合会が抱える、役員になる人がなかなかいないという課題も加入者数が減ったことと大きく関わっているため、このまま高齢化が進めばますます役員を回すのが困難になりそうな印象を受けた。

そこで、インタビューの際に事務局長の立野さんがおっしゃっていた「前と同じことをやるばかりではだめ」という言葉が思い出された。現在黒部市老人クラブが抱えている課題は時代の変化とともに生まれてきたものであり、旧来の方法をずっと続けていては解決しないだろう。しかし、ずっと続いてきたものを守るだけではなく変化に合わせて方法を変えていくことで課題が解消される可能性を感じた。

謝辞

今回の調査にご協力いただいた皆様にお礼申し上げます。特に事務局長の立野さんには度重なる訪問にも快くお応え頂き、とても感謝しております。皆様のおかげでこの報告書を執筆することが出来ました。誠にありがとうございました。

参考ウェブサイト

政府統計の総合窓口
〈https://www.e-stat.go.jp〉
(2022/1/30 閲覧)
全国老人クラブ連合会
〈http://zenrouren.com〉
(2022/1/30 閲覧)
富山県老人クラブ連合会
〈http://tymrouren.jp〉
(2022/01/30 閲覧)

第 9 章 パッシブタウンの今
―うちのつながり、そとの広がり―

臼木　悠也

はじめに

2020 年、2021 年は新型コロナウイルスの感染拡大防止のために行動制限が設けられ、外出そのものが避けられる年であった。そのため TV 等のメディアでは「おうち時間」という言葉が多用され、家の中でどう過ごすかを多くの人が考えるようになった。私も対面での授業が限られ、家にいる時間が長くなった。そんな状況下で家での過ごし方を考えるうちに住空間と生活への関心を抱くようになった。

こうした関心は黒部市での調査テーマへとつながった。黒部市での調査テーマ探しをしている中で黒部駅前の「K-TOWN」（後述）を見つけたことから黒部市三日市に「パッシブタウン」という集合住宅があることを知った。パッシブタウンは快適な住空間のための仕組みやデザインや敷地でのイベントなど、これまでにない特徴を持つと紹介されていた。私はこのパッシブタウンとそこに住む人たちの生活の関係に、期待とともに疑問を抱いた。「パッシブタウンがこれまでにない特徴を持つ住空間であるならば、そこに住む人たちの生活様式もこれまでになかったものになりえるのではないか」と。

こうした関心から約 8 ヶ月間、パッシブタウンに関わる人たちからの聞き取りやアンケート、イベントへの参加を通して調査を行った。聞き取り調査ではパッシブタウンを開発、運営している「YKK 不動産」や敷地内の植栽管理およびイベントに関わっている「野上緑化」の方々、パッシブタウンの入居者やイベント参加者の方達から話を聞かせていただいた。

本章では第 1 節で、パッシブタウンの理念や敷地内の施設、定期的に開催されるイベントの概要を述べる。第 2 節では住宅の運営や機能について記述し、第 3 節では商業施設や敷地内の植物について記述する。第 4 節では入居者の生活や交流について、第 5 節ではイベントの具体的な内容について記述する。第 6 節ではこれまでの調査をまとめ、パッシブタウンにおける人の交流と住宅の関係について考察を述べる。

写真 1 「センターコモン」より撮影した
パッシブタウンの住宅棟（筆者撮影）

1. パッシブタウンの概要

1-1. 「パッシブデザイン」とは

「パッシブタウン」(passive town)とは黒部市三日市に位置する集合住宅である。YKK による社宅利用もされているが、一般向けの賃貸

集合住宅でもあり、誰でも入居することができる。

パッシブタウンという名前は住宅や敷地内に取り入れられている「パッシブデザイン」に由来する。パッシブデザインとは環境や自然を有効活用することで、エアコン等によるエネルギー消費を抑えながら温湿度を整え、快適に生活することを目指した建築設計手法である。パッシブタウンでは、「パッシブ」すなわち「受け身」が意味するように、太陽光や日本海側で吹く「あいの風」[148]の効果を最大限受容するための建築や敷地内の環境整備がなされている。パッシブタウンの住居におけるパッシブデザインの実例は 4 節にて述べる。

1-2. パッシブタウン内の住居・施設

パッシブタウンは 2015 年から建設が始まり 2021 年時点で第 1 街区～第 3 街区が完成している。敷地内には 3 名の設計代表者[149]により、それぞれ大きさや形状の異なる 3 タイプの住宅棟が建てられた。敷地内は中央に広がる「センターコモン」や住棟間の緑地に植えられている植物に彩られた景観となっている（写真 1)。また敷地南側の「ストリートモール」には飲食店等の施設が立ち並ぶ。各施設の概要は表 1 の通りである。施設それぞれの特徴は 5 節にて記述する。また敷地の一角には三日市にある八心大市比古神社[150]の跡地がある。

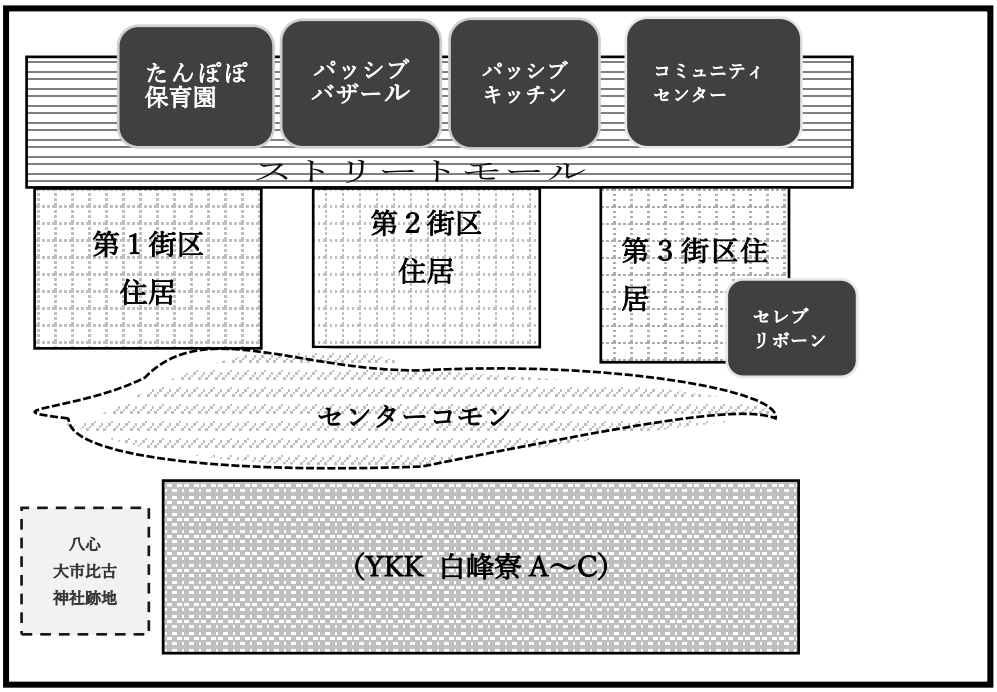


図 1　パッシブタウン敷地内地図

---

[148] 日本海沿岸で、沖から吹く夏のそよ風。あい。あゆ。あえのかぜ。

[149] ランドスケープ設計：宮城秀作、第 1 期区設計：小玉裕一郎、第 2 期区設計：槇文彦、第 3 街区：森みわ

[150] 詳しくは第 2 章を参照

表 1　パッシブタウン内の施設一覧

施設名	概要　※（）内は営業時間
たんぽぽ保育園	YKK 従業員の 2 歳児以下を対象とした保育所。
パッシブキッチン	ハラール・エスニック料理を提供するレストラン。 （17 時 30 分～21 時）
パッシブバザール	カフェと食品販売コーナーの複合施設。 （9 時～18 時、19 時／カフェは 9 時～17 時、18 時）
パッシブタウンコミュニティセンター（PTCC）	災害時の避難所としての機能を有しており、イベントの会場としても利用される（後述）。
セレブリボーン	第三期街区住居内にあるエステサロン。 （月～日/ 9 時～18 時）

1-3. パッシブタウンの開発、運営管理

パッシブタウンの開発、運営管理を行っているのは、ファスナーや窓・ドアの製造で有名な企業「YKK」グループである。YKK は黒部市に生産拠点と本社機能の一部を置いており、黒部においては大きな存在感をもつ企業である。パッシブタウンの整備事業は 2013 年に発表され、2025 年までに 6 期に分けた街区の完成を目指すとした。2016 年にはランドスケープ（景観）と第 1 、2 街区、2017 年には第 3 街区が竣工した。2021 年現在も整備が進められており、第 4 街区計画における新しい「たんぽぽ保育園」が建設中である（写真 2）。新しいたんぽぽ保育園は木造建築という特徴を持ち、2022 年 3 月に完成し開所する予定となっている。第 1～3 街区となる以前は YKK の社宅である「茅堂社宅」があった。近くに住んでいる方によると茅堂社宅敷地内には公園があり、白峰寮の側面につけられた ABC の文字

写真 2　建設途中の新しいたんぽぽ保育園（筆者撮影）

が見えることから「ABC 公園」と呼んでいたそうだ。2021 年の段階ではまだパッシブタウン敷地内の西側には「YKK 白峰寮」が残っており、現時点では白峰寮にも約 120 名の入居者が残っている。第 5、6 街区計画ではこの白峰寮を取り壊し、その跡地に新たな住宅や施設が建設される予定となっている。

写真 3　YKK 白峰寮（筆者撮影）

1-4. パッシブタウンでのイベント

パッシブタウンでは敷地を会場としたイベントが定期的に開催されている。イベントの中で最も規模が大きいのは「KAYA DO! フリー」である。KAYA DO! フリーでは、ストリートモールで多様なジャンルの出店者が集まりマルシェを行う「ふらっとマルシェ」の他、開催される季節に即したイベントが行われる。2021 年は 5 月から 11 月まで毎月第 2 日曜日に開催された。来場者は毎年増加傾向であり、多い月では 1600 人ほどが来場している。2021 年からは「PTCC（パッシブタウンコミュニティセンター）倶楽部」というイベントも開催されている。こちらは一回の参加者が 10 名ほどの比較的小規模なイベントであり、PTCC 内において植物を用いたワークショップや写真の撮影会が行われる。イベントの具体的な内容についてはさらに 6 節で詳しく述べる。

2. YKK がパッシブタウンを黒部市につくった経緯

本節では黒部市三日市にパッシブタウンがつくられた経緯を『コンパクトシティと公共交通――富山県黒部市のまちづくりを事例として――』[151]を基に記述する。

パッシブタウンの事業の契機となったのは 2011 年に起こった東日本大震災である。震災により YKK は 2 つの課題と向き合うこととなった。

1 つは「本社機能移転」である。YKK の本社は東京にあり、震災以前から老朽化による建て替えが検討されていた。そんな折に東日本大震災が発生した。宮城県では事業所が一部損壊し、東京においてもライフライン、交通、経済面で損失を受けた。こうした被害から首都直下型地震などの大型の震災が予想されている東京に本社機能が集中していることへの懸念が生じた。災害発生時のリスク分散のため本社機能の地方への移転が考えられた結果、北陸新幹線の開通により東京と近くなった生産の本拠地である黒部に本社機能の一部を移転

[151] 長谷川豊『コンパクトシティと公共交通――富山県黒部市のまちづくりを事例として――』、富山大学人文学部平成 30 年度卒業論文、2019 年　p. 10-12、p. 16-19

することが決まった[152]。移転について言及されたのは 2011 年の 6 月であり、2014 年には移転に向けて黒部事業所内の YKK50 のビルが改修された。2015 年から社員の異動が始まり、2016 年までにのべ約 230 名が異動した。

写真 4　黒部駅前にある「K-TOWN」の外観（筆者撮影）

以上からパッシブタウンの建設理由の一つは震災による本社機能移転を契機として黒部に異動した社員のために住居が必要となったからだといえる。また黒部市内の社員増加に応じた住宅整備はパッシブタウンだけでなく、2017 年には黒部駅前に単身寮「K-TOWN」も建設されている。

震災により YKK が取り組むこととなったもう一つの課題は「エネルギー問題」である。東日本大震災により特に被害を受けた福島県などでは原子力発電所が稼働停止となった。震災以前は日本の電力の約四分の一を占めていた原子力発電による供給激減し、今後の電力供給が問題となった。その中で再生可能エネルギーや省エネルギーへの関心が高まった。こうした背景から YKK グループは家庭内での消費電力の削減が容易ではないことに注目し、『窓事業』等で住宅に関わる YKKAP を中心として次世代のエコハウス建築へ挑戦することとなった。パッシブタウンの住宅は家庭での消費電力の削減のためにエアコン等の冷暖房による消費電力を抑えることに注力された設計である。

パッシブタウン事業は YKK グループが本社機能を東京から移転させ、今後災害が発生した際のリスク分散を図ったことを発端とするものである。そこにエネルギー問題への挑戦という要素が加わったことにより、従来の住宅にはない機能を持つパッシブタウンの理念が成立した。結果として東日本大震災後に注目されるようになった「企業の東京一極集中の危険性」、「エネルギーの供給・消費」という社会問題に対する解決策を考える中での実験的な事例の一つとなった。

3. パッシブタウンの住宅と環境

3-1. パッシブタウンの住宅

2021 年 10 月の段階で、パッシブタウン内には三つの街区が完成している。それぞれの概要は表 2 のようになっている。

第 1 街区と第 2 街区の住宅棟は 1LDK から 3LDK（85 ㎡）まで居室を有している。この二つ

[152] YKK からは法務・知財部、人事部、財務部・経理部・監査室、YKKAP からは購買部・国際部・人事部・経理部・監査室らの機能・役割が一部黒部に移った。（長谷川. 2019. p16）

は主にファミリー層を対象としている住宅棟である。第 3 街区は 1R（ワンルーム）と 1DK の居室から成る単身者向けの住宅棟である。第一、2 街区の賃料は 177000～197000 円、第 1 街区の賃料は 98000 円～102000 円であり、黒部市内の中では相当高価である。

現在までに完成している 3 つの街区はそれぞれ設計者が異なっており、それに応じて住居も違った特徴を持っている。これは住居ごとで異なる設備やデザインを試し、黒部に適した住居像を探るためである。パッシブタウンそのものが黒部市に適したデザインを探す実験的な試みであるため、住居にもこうした工夫がなされている。

表 2　パッシブタウン内住宅の概要

街区	完成時期	戸数	敷地面積	居室の大きさ
第 1 街区棟	2016 年 3 月	36 戸	5788 ㎡	1 LDK（55 ㎡） 2LDK（77 ㎡） 3LDK（85 ㎡）
第 2 街区棟	2016 年 10 月	44 戸	5521 ㎡	1 LDK（48 ㎡） 2 LDK（73 ㎡） 3 LDK（85 ㎡）
第 3 街区棟	2017 年 6 月	37 戸	4871 ㎡	1R（42 ㎡） 1DK（44 ㎡）

3-1-1. 異なる 3 つの住宅棟

第 1 街区と第 2 街区は以前あった茅堂社宅を解体した跡地に建てられた。

第 1 街区の住宅は建物全体が太陽光の入射角度に合わせて階段状になっており、日光をどの階でも採り込めるように工夫されている。室内と自然をつなげるようなガラス張りのバルコニーも特徴的である。

写真 1　第 1 街区住宅棟（筆者撮影）

第 2 街区は現在までに完成している 3 つの街区の中央に位置している。ストリートモールの施設と一体の二つの棟の他、四つの独立した住宅棟が第 2 街区内の住宅である。第 2 街区の住居はすべての部屋が外部へとつながる窓を持っている。そのため光や風を積極性に受けること

ができる。

第 2 街区の中央にはお年寄りの散歩や子どもの遊び場として考えられた小さな広場「コモンスペース」が設けられている。平日の午後に訪れた際にはコモンスペースで運動着姿の子供が遊んでいる姿が見られた。ボール遊びや携帯ゲーム機で遊んでいた。7 月に訪れた際には、あずまや内にタウン入居者世帯が記入した短冊が置かれていた。私が観察した中ではコモンスペースは子どもの利用が多いと考える。またイベントの際には来場者が座って食事するスペースとなっていた。

写真 6　第 2 街区住宅棟（筆者撮影）

第 3 街区棟は茅堂社宅跡地に建てられた第 1, 2 街区と異なり、以前の茅堂社宅をリノベーションして作られている。茅堂社宅は元々ファミリー向けであったが、リノベーションされることで単身者向けの住宅となった。元がファミリー向けであったため、単身寮としては室内が広いという特徴がある。

写真 7 第 3 街区住宅棟（筆者撮影）

パッシブタウンでのイベント「PTCC 倶楽部」（後述）に参加した女性（30～40 代）は、改装前の茅堂社宅に友達が住んでいたため室内に訪れたことがあったという。当時その友達は一室に家族で住んでいたので、室内は狭く感じたという。後にリノベーションされた住宅をモデルルーム見学会で見た際には、同じ建物なのに雰囲気が変わっておしゃれになったことに驚いたという。

写真 8　第 3 街区の住宅内（筆者撮影）

私も調査の中で第 3 街区のモデルルームルーム内を見学させてもらった。室内は単身者向けとは思えないほど広く、3 人掛けのソファーやダイニングテーブルを置いても窮屈に感じないゆとりが室内にはあった（写真 8）。単身者に広い居室が好まれる理由の一つとして、「好きな家具を置いてインテリアを楽しみたい」という志望があるそうだ。

3-2. 室内のパッシブデザイン

室内のベランダへつながる窓などには断熱性の高いトリプルガラス[153]が採用されている。これは窓やサッシを扱う YKKAP が自社で開発・製造しているものである。高断熱のガラスは、夏は外からの熱気を防ぎ、冬は室内の熱気を逃すことなく一定の温度を保てるため、冷暖房によるエネルギーの消費が抑制できる。また、ベランダのような外に突き出ている部分が外部から熱気や冷気を取り込んでしまわないように、部屋と地続きにはせず 2 cmほど切り離されている。

写真 9 トリプルガラスを採用した窓（筆者撮影）

高い気密性のために、一旦取り込んでしまった湿度が抜けにくく、高温多湿の際には外から空気や風を取り入れる必要がある。その際はエアコンの冷房利用や除湿機の利用することで効率的に除湿が行える。こうした正しい利用法を入居者が理解していないとパッシブデザインで想定している快適な室内環境にならない。そのため YKK 不動産では適切な使用方法を説明する機会を設けている。しかし利用方法が認知されていないゆえの問い合わせも時にはあるという。パッシブデザインという新しい試みに対しては、入居者もそれに応じた生活スタイルを学ぶ必要があるようだ。利用における「ひと手間」を通じて入居者は生活の中で実践的にパッシブデザインを学んでいくことができるだろう。

また、キッチンのシンク下には排水口に流した生ゴミ（有機物）を粉砕してくれる設備であるディスポーザーが設置されている。粉砕された生ゴミからはバイオマスエネルギーを生成できるため、ゴミを利用しエネルギーを生むという点でパッシブデザインの思想に沿った設備といえる。モデルルームについて説明していただいた YKK 不動産の鈴木修一郎さんによると、黒部市では下水処理場でこれらの有機物を集積し発酵させることでバイオマス発電をおこなっている。またディスポーザーの運用設置には黒部市の助成金が支給されている。黒部市が行っているバイオマス発電の推進にパッシブタウンも協力している。

3-3. パッシブタウン内の植物

パッシブタウンの敷地内のいたるところには多様な植物が植えられている。景観のためでもあるが、落葉樹はパッシブデザインの一部としての機能も有している。落葉樹の葉が夏は日差しを遮り、敷地内に緑陰[154]を作り、暑い日差しを遮る。そして日光が必要な冬になれ

---

[153] トリプルガラスは一組の窓ガラスに 3 層のガラスと間にアルゴンガスが入っており、高い断熱性能を発揮する。

[154] 青葉の茂った木立の影。

ば葉は落ちて室内に日が届くとようになり、室内が暖められるため暖房にかかるエネルギーが減る。つまり落葉樹が季節に応じて敷地内に取り込む日光を調整しながらローエネルギーに一役買っているのである。この夏と冬のサイクルを実現するために、施工段階から予め大きな落葉樹が植林されている。

富山県砺波地方にある伝統的な屋敷林「かいにょ」（写真 11）というものがある。砺波地方の散村では家の周囲にスギなどの樹木を配置することで、南～南東の風に備えた。また燃料や用材としての利用価値もあった。この「かいにょ」を参考として家の周りに植えられた樹木は、敷地内に向かう日差しや風を防ぐ役割を果たしている[155]。

写真 10　木々に囲まれる住宅棟（筆者撮影）

写真 11　砺波平野の屋敷林「かいにょ」（『砺波平野の屋敷林』より引用）

パッシブタウン内の多種多様な植物を紹介するパンフレットも作成されており、これによればパッシブタウン内の高木、低木、草花は合計 102 種類となっている。植栽を行った株式会社「野上緑化」の社長を務める野上一志さんによれば、植える植物は「富山の多様な在来種」と「四季を通した植物」がテーマとなっている。このテーマはランドスケープの設計を担当した株式会社プレイスメディアの宮城俊作氏がデザインを提案したものであり、これに応じて野上緑化が実現できるように植物を調達して植栽したという。

100 種類以上ある植物のうちすべてが在来種ではなく、県外から取り寄せたものも混在している。常緑樹であるユズやヤマボウシは富山県より暖かい九州地方から取り寄せたものであり、富山の気候で育つか不安でもあったという。パッシブタウンの敷地の地下には駐車場が設けられているが、その上の地面にも植物が植えられている。駐車場の上の地面は完全な人工地盤であり、植物が育つ環境を一から準備するため苦労したという。地面の下が空洞であり耐荷重が小さいことを考慮して、柔らかく軽く水はけのよい土を使用しているそうだ。植えたばかりの時に植物に不調が出た場合には別の植物に変更することもあるという。パッシブタウンに植物で満ち、四季を通した植物の変化を楽しむことができる背景にはこ

[155] 砺波郷土資料館　平成 8 年　『砺波平野の屋敷林』。

ういった野上緑化の臨機応変な尽力があった。

3-4. 植物が身近にあるということ

写真 12　敷地内のアジサイ（筆者撮影）

幼稚園児の子どもをもつ入居者からの聞き取りを行った際には、パッシブタウンの自然が子育てに良い影響を与えているという話を伺えた。その方によれば、子どもと敷地内の植物やセンターコモンの水辺を見て回ることで、植物や昆虫などに親しむ機会を与えられているという。実際の動植物と触れ合うことで名前を覚えるなど成長においても良い影響が出ているそうだ。またパッシブタウンで開催される「野あそび」や「PTCC 倶楽部」では敷地内の植物を対象として、観察ツアーや写真撮影、敷地内の植物をドライフラワーとしたものを利用したクラフト作りなどが行われている。こうしたイベントも入居者が植物と親しむ機会となっている。

野上さんによると、パッシブタウンの植物は「入居者に利用してもらえるかどうか」を考えて選ばれたものでもあるという。たとえばユズやキンカンの果実は、入居者が自由にとっても構わない。しかし入居者といえども、自分ものではない土地の果実を採ることには抵抗があるだろうということで、現在は野上緑化が植栽管理の際に収穫し、イベントで活用するという形になっているそうだ。

また野上さんからの聞き取りの中で興味深い話を伺った。それは庭師と家主の関係についてである。庭師という職業は家主から信頼される数少ない立場であったという。庭師が必要なほど広い庭を持つ家は裕福で近所とあまり交流がなく、家に人が訪れることも少なかった。その中で庭師は家を定期的に訪れる例外的な存在であり、植物を介した会話も生まれていたため、家主が少し家を空けるようなときは留守番を任され、ときにはお昼ご飯をご馳走になるなどの関係があったという。現在でも野上緑化が手入れを任され、家主の不在中に庭に入って作業することはたまにあるという。

庭師と家主のような定期的な訪問と植物を介した交流は現在のパッシブタウンにも当てはまっている。パッシブタウンの入居者も、植栽管理に訪れる野上緑化のスタッフに話しかけてくれるという。現在、KAYA DO! フリー等のイベント運営が、野上緑化に委託されているのは、野上緑化のスタッフが植栽管理のためパッシブタウンに頻繁に訪れる存在であり、イベントなどで植物を介したコミュニケーションを入居者と取ることができるからではないかと考えられる。

また、YKK 不動産の鈴木修一郎さんによると、パッシブタウンの入居者は住居だけでなく建物の周辺環境を重要視しているという。他より家賃が高額なパッシブタウンを選ぶ入居者は住居の設備や利便性だけでなく、敷地内の豊かな自然環境や景観にも価値を見出していると考えられる。

4. パッシブタウン内の施設

4-1. たんぽぽ保育園

たんぽぽ保育園はストリートモール内にあるYKK 事業所内保育所である。建物は二階建てで屋上には芝生園庭も備わっている。働き方改革の一環として働く意欲のある女性の早い職場復帰を目指して 2016 年の 3 月 30 日に開所し、4 月 1 日には 7 人が入園した。受け入れ対象となっているのは YKK グループで働く従業員の 2 歳以下の児童であり、定員は 15 名程度である。運営は黒部市内の社会福祉法人あいじ保育園が行っている。

写真 13　たんぽぽ保育園屋上の園庭
（筆者撮影）

たんぽぽ保育園を利用している入居者は子どもを保育園から迎えにきたあとで、パッシブタウン内や周囲の道を散歩してから帰っていた。住居と保育園が近いことは便利であるという。たんぽぽ保育園の利用者はパッシブタウン内の入居者に限られていない。平日の 15、16 時頃はパッシブタウン前の駐車場に車を停めて子どもを迎えにきている親の姿を見ることができた。普段たんぽぽ保育園を利用している子どもが休日に敷地内で遊んでいることもあるという。聞き取りやアンケートを行った子どものいるパッシブタウン入居者でたんぽぽ保育園を利用している人は少なかった。これはパッシブタウンに移り住む前に子どもがすでに 3 歳を迎えていたため、受け入れ対象から外れてしまっていたためと考えられる。現在 3 歳以上小学生以下の子どもを持つ利用者は愛児保育園や他の保育園を利用しているという。

4-2. パッシブキッチン

パッシブキッチンはアジア系の海外料理やハラルフード[156]、ベジタリアンフードを提供しているレストランである。現地の味を再現するためスパイスにもこだわっている。カラフルなロゴマークは香辛料をイメージしたものである。17 時半から 21 時の営業であり、基本的には夕食のみ提供している。

エスニック料理をメインとしているのは、黒部市に勤めている外国人の YKK 社員も対象としているからである。黒部市内には YKK の新入社員が多く住んでおり、その大半は社員寮

[156]イスラム教の教義に則した食事。 パッシブキッチンでは「日本イスラーム文化タ―」よりハラール認証を取得。

で生活している。中には海外からの社員も少なくないが、海外からの社員の味覚や宗教等に配慮した料理を提供できる飲食店は多くない。そのため YKK は社員寮内の食堂とパッシブキッチンでハラルフードやベジタリアンフードの提供を行っている。寮内の食堂は昼しか営業していないため、黒部市内の社員寮に住む海外社員が夕食を食べる際にはパッシブキッチンが利用される。パッシブキッチンはパッシブタウン内の入居者よりも、周辺の社員寮に住む海外出身の社員や、珍しい料理を提供するレストランに行ってみたいという市中の一般の方のためという意味合いが大きいといえるだろう。

海外の社員を意識したパッシブキッチンであるが、提供される料理は日本人の口に合うようにも調整されているという。「KAYA DO! フリー」の際には、パッシブキッチンでランチメニューの提供が行われており、普段はパッシブキッチンを利用していない人も料理を食べることができる。

私がイベントでスタッフとして参加した際、このランチメニューを昼食としていただくことができた。実際に私が食べたのは以下の料理である。ランチプレートは辛味が強かったが、二食目のきまぐれ弁当は辛くなく食べやすかった。

写真 14　ランチプレート（筆者撮影）
（ほうれん草とひよこ豆のカレー、チキンの甘酢炒め、もやしのレモンサラダ、ジャスミンライス、エビせんべい）

写真 15　シェフのきまぐれ弁当（筆者撮影）
（ガーリックバターライス、チキンのレモングラス炒め、アチャール）

4-3. パッシブバザールとカフェボンフィーノ

パッシブバザールはカフェと食品セレクトショップが複合した施設である。カフェボンフィーノでは、コーヒーやサンドイッチ、オムライスなどのカフェメニューを提供している。YKK は 1985 年からコーヒー事業に取り組んでおり、ブラジルにある自社農園での栽培からコーヒー豆の販売等を行っている。カフェもコーヒー事業の一環であり、メニューには YKK の農園のコーヒー豆を利用している。

店員の方ら利用者について伺ったところ、パッシブタウンの入居者、近辺の入居者だけでなく、少し離れた入善町からの利用者もいるという。またイベントの際に初めて利用した方

がリピーターになってくれる場合もあるそうだ。女性、男性どちらも利用しており、女性はこどもや友人との来店、男性は同僚と仕事の話をする場として使っているそうだ。たんぽぽ保育園が近くにあるため、子どもの迎えに来た待ち時間での利用も多い。私が訪れた平日の午後は女性客の二人組、休日の昼頃では夫婦での来店が多く見られた。パッシブタウンの近くにはカフェやコーヒーチェーン店が無い為、周辺の入居者にとっては身近な話の場なのかもしれない。

話を伺った店員さんとお客さんは軽く会話を交わすほど親しげであり、お客さんが日頃から利用している雰囲気があった。お客様として YKK の取締役やコーヒー事業の役員が訪れることもあるそうだ。社内では重役であるが、店員さんは「カフェの店員としては取締役のような方でもお客さんとして来ると親しみやすい」と話していた。

バザール内の食品販売コーナーでは、さまざまなメーカーの食品が並べられている。この一部は黒部市や魚津市で営業をしている店のものである。黒部市民病院近くの「パパぱんの店」（パン）、宇奈月温泉駅近くの「ふくる」（デザート）、石田地区の農家「濱田ファーム[157]」、魚津の水だんご専門店「藤吉」、生地地区の仕出し屋の魚谷商店の総菜などの商品がバザールへ直接届けられているそうだ。それぞれの店には距離があるため、それらの食品を一度に見て回ることができるのは便利である。また「濱田ファーム」の商品は一般的なスーパーには出ないものなので、そうした商品を買えることもバザールの存在意義となっていると考えられる。カフェを訪れた際には、パンを求めにきた人なども見られ、周囲の人たちにも好評であるように感じられた。

バザールでの食品販売は、県外からの移住者の多いタウン入居者が黒部市の店や名産品を知るきっかけとなるとともに、パッシブタウンの周辺に住んでいる人たちが、日常生活におけるパッシブタウンを身近に感じるきっかけとなっているのではないだろうか。

5. パッシブタウンの入居者とその生活

5-1. パッシブタウンの利用者層

YKK 不動産の鈴木さんにパッシブタウンの入居者について伺ったところ、入居者における YKK 社員や関係者の割合はおよそ 7 割から 8 割であり、YKK 社員でないその他の入居者は 2 割から 3 割だという。入居している YKK 社員の中には海外からの技術者など短期滞在者もいるため、割合はその時々で変化するという。

その他の入居者には YKK と取引を行っている会社が役員のための住居として法人契約している部屋もあるという。また、黒部市内の病院に赴任してくる医師のために、市が一フロア分借りる場合、東京に住んでいる方が別荘として借りる場合があるという話も聞けた。

また、最近は東京に住んでいる方から定年退職後の「終のすみか」として転居を考えてい

[157] 「第 5 章を参照」

るとの問い合わせも受けているという。こうした話から現在のパッシブタウンは YKK 社員による利用だけでなく、企業や行政による短期滞在や「終のすみか」としての利用といった一般的な賃貸住宅では珍しい利用がされているといえる。

5-2. なぜパッシブタウンに引っ越すのか

聞き取り調査やアンケートの結果では、パッシブタウンに引っ越してくるのは県外からの利用者が多かった。県外からの移住者がパッシブタウンに引っ越してきた理由として多かったのは「転勤・転職」であった。これはパッシブタウンが建設された理由に東京から黒部への本社機能移転とそれに伴う社員の移動があることから納得できる。

ある入居者の方によると転勤・転職で初めて黒部市に住むことになり土地勘がなかったが、パッシブタウンは YKK を通じた知り合いがすでに住んでおり、パッシブタウンの話を聞くことができ、安心して入居を決められたという。

このようにパッシブタウンは YKK 関係者であれば、既にいる入居している人からの情報が得やすいため転勤後の住居として選ばれやすいのではないかと考えられる。

写真 16　YKK 黒部寮（筆者撮影）

鈴木さんからは黒部市にある社員寮とパッシブタウンの関係について聞くことができた。黒部市には黒部寮（写真 9）や白峰寮、黒部堀切寮、光志寮といった大型の社員寮と、単身寮である K-TOWN がある。黒部寮や白峰寮では入居している社員の教育が目的となっており、そのため管理人による指導がある。建物の入り口が一つであるため、外部の人間を招くことができない。

黒部寮大型の寮で 2 年以上生活した社員は、K-TOWN に住む許可をもらえる。K-TOWN は寮生の自立支援を目的とした寮である。独身寮が「教育」を目的としている一方で身寮では利用者の「自立」を促している。そのため K-TOWN は各部屋が独立しているため人を招くことや一時宿泊といった自由度の高い利用も可能となっている。しかし K-TOWN は単身寮であるために同居ができないという制限がある。こうした制限から K-TOWN に住んでいた社員が結婚を機にパッシブタウンへ移り住むという。つまり黒部市に長期間勤める YKK 社員は黒部寮・白峰寮などの大型独身寮から K-TOWN、そしてパッシブタウンと生活の変化に応じて住居を変えていると考えられる。パッシブタウンへは転勤だけでなく結婚といった大きな節目を機に移り住む人が多いのではないかと考える。現在 YKK 社員の間ではパッシブタウンに住むことが一つのステータスとなり希望者も増加しているという。

5-3. 利用者同士の交流

5-3-1. 2021 年の大雪と入居者内での交流

降雪量の多い富山県の雪に対応するためにパッシブタウン内には融雪装置が設けられている。また雪が降った際には、建物管理者が小型除雪機を用いて住宅棟の入り口から駐車場や道路まで人が通れるだけの幅で除雪を行っている。こうした雪への対応があるため、パッシブタウンの入居者の雪に対する負担は周囲の家と比べると軽減されている。しかし 2021 年 1 月の冬の大雪は設備だけでは対応できず、入居者も今までにない苦労をしたという。

パッシブタウンには冬季の駐車利便のために地下駐車場が設けられている。しかし大雪の際には入り口の坂を登りきったあとの市道との接道部が黒部市の管理のため未除雪であり駐車場から車を出せないこともあったそうだ。土、日曜日は建物管理者がいないため入居者が水をかけるなど、手分けして除雪して対応したという。

雪により住宅の外にあるパイプが凍結し水漏れが起こった部屋もあったという。この時、聞き取りを行った方の棟の入居者同士は LINE で情報共有を行い、その結果同様の水漏れをしている別の部屋でも見つけることができたそうだ。

また、パッシブタウンには地下駐車場があるが、一戸一台分というスペースの制限があり、二台目からは敷地内やパッシブタウン近くにある屋外平面駐車場に車を置いている。そのため車を二台持つ家族の入居者は自身の車を動かすために雪かきが必要になった。実際に雪かきを行った方は、このとき初めて自分の手で雪かきをしたという。雪かきは入居者同士が協力して行われたそうだ。入居者の誰かが雪かきをしてくれたことにとても助かったと感じた入居者もいれば、申し訳なく感じたという入居者もいた。家族での入居者が多い棟の入居者たちが協力して雪かきをする一方で、他の棟の入居者が雪かきをすることは少なかったそうだ。

単身世帯の入居者は地下駐車場だけで車が管理でき、必要最低限の除雪は管理者や設備で対応できるのに対して、家族での入居者は外の駐車場も必要となる場合がある。この違いから生じる雪かきの必要性の違いは入居者同士の交流の必要性にもつながっているのではないかと考えられる。

5-3-2. 町内会とパッシブタウンの入居者の交流

パッシブタウンは三日市栄町にある。以前は栄町の町内会で行う子ども会や運動会にパッシブタウンの入居者も一部参加していた。しかし台風と新型コロナウイルスの影響から 2019 年から 2021 年まで 3 年連続で中止となったため、パッシブタウンの入居者とその他の栄町の入居者との交流の機会は乏しくなったという。パッシブタウンの入居者の中には町内会の役員となっている方もいた。

町内会はパッシブタウンの入居者との交流ができる機会を喜んでいる。一方でパッシブタウンの入居者の多くは一部を除き町内会との交流に消極的であるそうだ。YKK 不動産の鈴

木さんのよると、東京などの都会から移住した入居者の間では、「集合住宅では近所づきあいをしなくても良い」という不文律があるという。近所づきあいを極力避けたいということで集合住宅を選ぶ人もいるだろうという話も入居者からの聞き取りの中で伺えた。また現在子育てをしている方が多く住んでいるため、町内会の役員と学校の役員が被ってしまうと大変という理由もあるそうだ。パッシブタウンの入居者中でも積極的に地域的な活動と関わりたい人、すでに学校等で地域の人とのつながりができている人が町内会に取り組んでいる傾向があると考えられる。

6.パッシブタウンでのイベント

6-1.緑化会社によるイベント運営

パッシブタウンではさまざまなイベントが行われる。最も規模の大きいイベントはいくつかのイベントが複合した「KAYA DO! フリー」であり、2021 年は 5 月から 11 月の第 2 日曜日に開催された（9 月は新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止）。表 3 のイベントの他、開催日の季節に合わせたイベントやワークショップが行われる。

表 3　KAYA DO! フリーで開催される主なイベント

イベント名	イベント内容
ふらっとマルシェ	食品、雑貨の販売。30 店ほどが出店。
モルック体験会	センターコモンにてモルックを体験できる
まちかど音楽会	音楽やダンス等の披露
リユースマルシェ	リユース品の販売（後述）

イベントは「KAYA DO! フリー実行委員会」により運営されている。実行委員会はパッシブタウンの運営者の「YKK 不動産」、タウン内の植栽管理を行っている会社「野上緑化」と黒部市内在住の地域メンバーで構成されている。2021 年時点の地域メンバーは入居者 2 名、マルシェ出店者 2 名、撮影や地元との関わりを担当する方 1 名、黒部地域おこし協力隊の方 1 名であった。

野上緑化が請け負っているのはイベントの企画調整やふらっとマルシェ出店者への依頼、連絡、会場の設営等のイベントの中心となる業務である。イベントの企画やふらっとマルシェ出店者への依頼や連絡、会場設営といったイベントの中心となる業務は野上緑化が行っており、野上緑化の数名の社員が中心となりこうした業務を行っている。

2018 年からパッシブタウンのイベントは行われているが、実行委員会の方によると当初イベントの企画や運営を監修していたのはパッシブタウンのランドスケープ設計を担当し

たプレイスメディアの下請会社であった。野上緑化もこの頃から企画に関わっていた。

同ランドスケープの下請会社が企画したイベントは先進的でインパクトがあったために人を惹きつける効果があったという。KAYA DO! フリーの中心となっている「ふらっとマルシェ」は 2018 年から開催されているイベントである。販売されている食品や雑貨は出店者、生産者のこだわりを反映したものが多く、市販の商品に比べると値段は高い。普段見かけることのない商品を見ることができる一方で、学生などには手が届きにくいといえる。

こうした対象の絞られたイベントから、より地域に広がったイベントにしたいという YKK の思いとイベントの開催から数年が経ち、来場者の拡大やブランド化といった次の段階に移るタイミングを迎えたことからイベントの企画・運営が野上緑化に変更されたという。野上緑化に任すことになった理由は、イベント業務は専門外の会社であるからこその素朴で柔軟な企画ができ、幅広い人に来てもらえることに加え、富山県の地元の会社やスタッフによる地域の振興に意義を見出しているからだという。

写真 17　植物を利用した「落ち葉プール」
（筆者撮影）

また、野上緑化が持つ長所として植物を使ったイベントができる点があげられる。植物というテーマ、素材は幅広い人にとって親しみやすく、また費用も高額でないため子どもから大人までを対象とするイベント作りには適していると考えられる。

2021 年 11 月の KAYA DO! フリーでは、誰でも出店者として参加できるフリーマーケットが開催された。こうしたフリーマーケットは今回が初めての試みであり、この時は約 1600 名というこれまでで最大の来場者数を記録している。この他にも 2021 年には近隣の保育園で児童が描いた絵を展示、入居者の子どもが中心となった謎解きゲーム、富山大学都市デザイン学都の学生らによるライトアップ企画など、パッシブタウンと関わることの少ない子どもや学生が中心となる試みも行われた。

イベント運営が変更されたという話や、2021 年に開催されたイベント内容からはパッシブタウンの外観や名前から想起される洗練されたおしゃれな雰囲気を保ちつつも、地域の幅広い人々が参加できる場所、憩いの場所となれるような場所へと変化させようとする YKK 不動産の思いが見受けられた。

6-2. リユースマルシェ—7 月の様子

KAYA DO! フリー当日のイベントの一つに「リユースマルシェ」がある。PTCC（パッシブタウンコミュニティセンター）にて、パッシブタウン内入居者やタウン近隣の入居者から募った不用品を陳列し、ほとんどを 50 円で販売する。2021 年は 5、7、10 月に開催された。

商品として並べられていたものの多くは子どもに関するもので、子どもの服や靴、おもちゃやゲームソフト、学校で使うような文房具や水泳ゴーグル、ランドセルもあった。その他には本や食器が並べられていた。また商品にならないような小さなおもちゃなどは、「ご自由にお取りください」という箱に入れられていた。

写真 18　商品の子ども服（筆者撮影）

写真 19　商品の子ども服とランドセル（筆者撮影）

リユースマルシェの運営は KAYA DO! フリー実行委員会のメンバーとなっているパッシブタウン入居者の女性 I さん、S さんの 2 名で行っており、不用品の回収日をいつにするか、どのように陳列するかは 2 人の裁量に任されている。当日会場に立ち、代金を受け取るのも I さん、S さんである。7 月の開催の際、私は KAYA DO! フリー！のサポーターとして、「リユースマルシェ」のスタッフを担当した。この日は子どもを連れた方の来場が多く、売れた商品もおもちゃや子ども服が多かった。スタッフの 2 人は来場した知り合いの方や子どもを連れた方と話しており和気あいあいとした交流の場となっていた。

7 月の開催では会場内にテントが置かれ、近くには商品であるおもちゃの入った箱が置かれていた。会場に訪れた幼児がテントに入ったりおもちゃで遊んだりしており、マルシェとは違った遊び場となっていた。また無料で入れる屋内施設であるためイベントスタッフの家族が休憩する場所としても利用されていた。

リユースマルシェの目的は利益を目的としたものではなく、ある人には必要のなくなったものを別の誰かに使ってもらうこととなっている。スタッフの２人の間では「購入して不要になればまたマルシェの商品に出してもらってもいい」と冗談が交わされていた。そのため I さんも S さんもおもちゃが商品として売れなくても、子どもの手で遊ばれることを喜んでいる様子が感じられた。

商品の一つであったランドセルに関してはＩさんから「私が海外からパッシブタウンに移り住んだとき、子どもは小学 6 年生だった。海外ではランドセルを使っていなかったため、1 年しかない日本の学校のために新しくランドセルを買うのがもったいないと思っていたら譲ってくれる人がいて助かった。パッシブタウンには自分と同じように海外から来てランドセルが必要になる人が出てくるかもしれないので、そうした人の手に渡ってもらえたらいいなと思う」という話を聞くことができた。

写真 20　リユースマルシェ会場内のテント
（筆者撮影）

お客さんが購入した商品がお客さんとスタッフの会話のきっかけなることもある。私が購入した本の一冊が Ｉ さんの家にあったものであり、その本を買った経緯を教えてもらえた。

リユースマルシェは子育て世代が主な対象となっており、商品を販売、購入するだけでなく親同士や子ども同士の交流の場となっている印象を受けた。

パッシブタウン内から集めたものがパッシブタウンの入居者の手に渡るのは、「おさがり」に近い形であった。自分の子どもが着られなくなった服を、同じ敷地内の子どもが着ている様子を見ることができるのも近い範囲内でのリサイクルの特徴ではないかと考えられる。

7. まとめ・考察

今回の調査から、パッシブタウンという住宅のもつさまざまな側面について知ることができた。

第 1 節から第 3 節ではパッシブタウンの成立過程、住居や敷地内の特徴について述べた。パッシブタウンは東日本大震災による今後の震災やエネルギー問題から成立した。建物や周辺環境を工夫することによって、自然からの恩恵を最大限に受けることを理想としたデザインであり、小エネルギーへのモデルケースとなっている。住居内には YKK の製品であるトリプルガラスを採用するなど、小エネルギーでも快適に過ごすための工夫に富んでいる。またディスポーザーによるゴミの減量にも貢献している。敷地内の「パッシブバザール」や「パッシブキッチン」は入居者だけでなく、パッシブタウン周辺の入居者や黒部市内の寮で生活する YKK の社員にも利用されている。パッシブタウンには YKK によるコーヒー事業やハラルフードの提供といった食への取り組みと、近隣地域で作られている食が集まり、利用

者がそれらを知ることのできる場所である。タウン内の植物は野上緑化の尽力により複雑な条件のもと整備されたものである。植物は居心地のよい景観をつくっているだけでなく、人々の交流、イベントでの活用などさまざまな役割を果たしており、小エネルギーと敷地内でのイベントというパッシブタウンの特徴をとって欠かすことのできない要素であるといえる。

第4節では、パッシブタウンに住む人々の生活や交流について述べた。現時点でのパッシブタウンの入居者はYKK関係者の割合が大きく、YKKグループでの社員利用のほうが目立つ形となっている。入居者は広い住居や敷地内の自然環境に惹かれている。パッシブタウンは自治会が必要と思っている人が多いようで、入居者の多くは率先した地域的な活動を望んではいないという。こうした傾向はYKK社員がパッシブタウンを「集合住宅」として捉えている傾向によるものであると考えられる。第5節では、パッシブタウンで開催されるイベントについて述べた。KAYA DO! フリーは季節により異なった試みをすることで、より多くのがパッシブタウンを訪れるきっかけをつくっている。また2021年は学生や子ども、周囲の入居者が中心となるようなイベントが試みられた。

調査する以前から私が関心を寄せていたのは、パッシブタウンに関わる人々の交流である。交流についてはパッシブタウンの入居者同士による「うちの交流」とイベントやお店を目的としてパッシブタウンに訪れる入居者以外の利用者による「そととの交流」の二つの交流に分けてそれぞれについてあらためて述べる。

7-1.「うちの交流」

パッシブタウンにおける入居者同士の交流にはパッシブタウンの成立や設備が関係している。

現時点でパッシブタウンに住んでいるのは転勤・転職によって黒部に移りすんだ YKK の社員やその家族が多くを占めている。周りの入居者に同じ境遇の人が多いことは、相談することのできるという安心感になっているのではないだろうか。またパッシブタウン内に子どもが遊べるだけの敷地があるために、入居者同士が遊んでいる姿を見ることができお互いの子どもについて知っている。年齢が離れた子ども同士の間でも兄弟のような交流がある。イベントにおいては特にリユースマルシェが「うちの交流」を生んでいる。リユースマルシェでは不要品の提供や購入を通して間接的に入居者同士が交流していると考えられる。

このようにパッシブタウンの成立過程、設備、イベントが入居者同士の交流のきっかけになっている。一方で、パッシブタウンの整った環境から人同士の交流が不必要になっている側面もある。敷地内の清掃は管理会社が担当しており、地域活動のような清掃をする必要がない。また富山では降雪量の多さとそれの伴う雪かきが冬の問題であるが、パッシブタウンでは敷地内の融雪装置の存在や管理会社による除雪が行われることから、大雪でない限りは雪かきを行う必要がない。しかし2021年の大雪の際には入居者で協力して除雪し、トラブルについては情報共有をするなどの必要に応じた交流が行われた。

また、PTCC 倶楽部の今後の課題として「若い世代や独身の人を対象とするテーマ」が挙げられていたことにも表れているように、独身の利用者による交流の機会とはなっていないと考えられる。

7-2.「そとの交流」

イベントや商業施設をもつパッシブタウンは、入居者していない人も訪れ、利用できるという特徴を持つ。「パッシブバザール」や KAYA DO! フリーでの「ふらっとマルシェ」は黒部や魚津の店や生産者が、自身の活動をアピールできる場として機能している。店側が販売できる場であり、一つの場所に集まることによって客側の利用者も普段足の届かない場所の品を見ることができるため、双方にとってメリットがある。

また施設の一つである「たんぽぽ保育園」は対象となるのが 2 歳までの児童ということで、入居者の中でも利用している人は多くなかった。たんぽぽ保育園は入園の期間が短いゆえに利用者の入れ替わりが多くなり、結果として多くの人が利用できると考えられる。そのため、たんぽぽ保育園もまたパッシブタウンの外に住む人を内側へと招く施設であるといえる。

また 2021 年は富山大学都市デザイン学部によるライトアップや、誰でも出店可能なフリーマーケットなども開催された。パッシブタウンは地域の人々が主体的に活動する場となっているのだと考えられる。

7-3. うちとそとに関わる野上緑化

パッシブタウン入居者間では同じ YKK 関係者という共通点や比較的小規模なイベントといった機会により交流が生まれていると考えられる。またパッシブタウンに住んでいない人にも大規模なイベントや敷地内の施設の利用のためにパッシブタウンを訪れる機会が生まれている。しかし入居者とイベント等での利用者が直接交流することは難しいだろう。

こうした中で入居者とそれ以外の利用者の両方とも関わりを持つのが野上緑化の中のイベント運営に携わる社員である。野上緑化としては普段の植栽管理による出入りで入居者との継続的な関わりをもち、イベントでは運営スタッフとして「ふらっとマルシェ」の出店者や来場者、また学生などの活動発表のための利用者とも関わることもできる。パッシブタウンに関係する多くの人に接する立場だからこそ、入居者とそれ以外の利用者のどちらの要望にも対応するようなイベント運営へとつながっていくのではないだろうか。

おわりに

私が調査を行った 2021 年時点ではパッシブタウンは整備途中の段階であり、2025 年までには新たな住居や施設が整備される予定となっている。そのためパッシブタウンを取り巻く状況はこれからも変化していくであろう。だからこそパッシブタウンをテーマとしたの

には整備途中である 2021 年のパッシブタウンの「今」を記述したいという思いもあった。

調査を通して私が感じたのは、パッシブタウンという前例の無い住居の在り方を、そこに関わる人たちが手探りの状態でありながら模索しているのだということだ。YKK 不動産の鈴木さんは、パッシブデザインが何か分からない段階から整備に取り組み、何もかもが分からないことで苦労したという。野上緑化の野上さんもこれまでやったことのないような植栽工事を行ったと語っていた。2021 年のイベントに関してはおおまかな年間スケジュールをもとに毎月の実行委員会の定例会でアイデアを出して実現させていた。この試行錯誤な段階がいつまで続くかは分からない。しかし 2021 年はこうした段階であったからこそ、多様なイベントを開催することができ、結果として入居者以外の人もパッシブタウンへの親近感をもつような機会の創造へとつながったのではないだろうか。

調査ではパッシブタウンの存在を知っていても、入っていい場所なのか分からないという声を聞くこともあった。周囲にパッシブタウンを理解してもらうためにも、より幅広い人々が主体的に関われるような機会がこれからも必要になっていくだろう。

謝辞

今回の調査にあたってご協力いただいた全ての皆様に厚くお祈り申し上げます。YKK 不動産の鈴木修一郎様、野上緑化の野上一志様、飛世裕香様をはじめとする従業員の方々、またパッシブタウンに住む入居者の方々、イベント関係者の方々、皆様のおかげでこの報告書を執筆することができました。誠にありがとうございました。

参考文献

長谷川豊、2019 年『コンパクトシティと公共交通――富山県黒部市のまちづくりを事例として――』(富山大学人文学部平成 30 年度卒業論文)。

砺波郷土資料館、1996 年『砺波平野の屋敷林』。

参考にしたウェブサイト

パッシブタウン 「パッシブタウン PASSIVETOWN」

〈https://www.passivetown.jp/〉

(2022 年 2 月 2 日　閲覧)

（2021 年 12 月 14 日　人文棟屋上にて撮影）

黒部市と入善町の皆様、

調査にご協力いただきありがとうございました！！

地域社会の文化人類学的調査 31
扇状地に広がる人々の営み−黒部市と入善町の調査記録−
（電子改訂版）

発行日：　2022 年 2 月 28 日
編　集：　藤本　武・野澤豊一
発　行：　富山大学人文学部文化人類学研究室
〒930-8555　富山市五福 3190
Tel.　：　076-445-6185
E-mail：　anthro@hmt.u-toyama.ac.jp
印　刷：　（株）グラフ
〒931-8453　富山市中田 45-63